九州横断自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

—14—

甘木市所在宮原遺跡の調査　Ⅰ
（Ｂ・Ｃ地区）

１９８８

福岡県教育委員会

九州横断自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

—14—

甘木市所在宮原遺跡の調査　Ⅰ
（B・C地区）

1988

福岡県教育委員会

序

本書は，福岡県教育委員会が日本道路公団から委託を受けて，昭和54年度から実施している九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書であります。

今回の報告書は昭和56～58年度に調査を行った甘木市宮原遺跡の１冊目のものです。今後も，その調査結果を順次報告していく予定であります。文化財保護活動や地域の歴史を知る上で活用して頂ければ幸甚に存じます。尚，発掘調査に際し，尊い汗を流して頂いた地元の方々をはじめ，種々御協力頂いた関係者の皆様方に深く感謝致します。

昭和63年３月31日

福岡県教育委員会

教育長　竹井　宏

例　言

1．本書は，九州横断自動車道建設に伴い破壊される遺跡について，日本道路公団から委託を受け，福岡県教育委員会が発掘調査を実施した甘木市宮原遺跡の一冊目の報告書であり，九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書の14冊目にあたる。

2．遺構の写真撮影，実測図作成は調査担当者が行い，調査補助員および池田和博・吉橋秀美氏の多大な助力を得た。

3．出土遺物の整理は，岩瀬正信氏の指導のもとに九州歴史資料館・福岡県文化課甘木発掘事務所で行った。出土遺物は福岡県文化課甘木発掘事務所に保管している。

4．出土遺物の写真撮影は，九州歴史資料館石丸洋氏の指導のもと矢野明美・須原悦子氏にお願いした。実測は九州歴史資料館製図室若松三枝子・鬼木つや子・原富子氏および福岡県文化課甘木発掘事務所松島邦子・原田和枝・高瀬照美氏の多大の協力を得，児玉真一・武田光正が担当した。

5．製図は福岡県文化課甘木発掘事務所塩足里美・原田和枝氏，九州歴史資料館製図室豊福弥生・鶴田佳子氏の助力を得た。

6．校中・第3表に記載した遺構の面積計測値はプラニメーターによる測定値である。その際縮尺1/20の原図を使用した。

7．挿図で使用した方位はすべて真北である。

8．本書の執筆は，井上裕弘・石山勲・児玉真一・武田光正が分担し，各文末に明記した。

9．本書の編集は児玉が担当した。

本文目次

第１章　はじめに …… 1

第１節　昭和62年度の調査の経過 …… 1

第２節　昭和56・58年度の調査の経過 …… 8

第３節　遺構の説明の前に …… 13

第２章　位置と環境 …… 15

第３章　宮原遺跡の調査 …… 17

第１節　遺跡と遺構の概要 …… 17

第２節　遺構と遺物 …… 17

1　竪穴住居跡 …… 17

2　掘立柱建物跡 …… 70

3　方形竪穴 …… 81

4　土　壙 …… 83

5　溝 …… 89

6　その他の出土遺物 …… 91

第４章　おわりに …… 96

1　方形竪穴について …… 96

2　カマド祭祀 …… 98

3　むすび …… 99

図版目次

本文対照頁

図　版　1　第11地点(立野・宮原遺跡)周辺航空写真 …… 8
図　版　2　第11地点(立野・宮原遺跡)周辺航空写真 …… 8
図　版　3　第11地点(立野・宮原遺跡)周辺航空写真 …… 8
図　版　4　第11地点(立野・宮原遺跡)航空写真 …… 8
図　版　5　宮原遺跡航空写真 ……17
図　版　6　宮原遺跡Ｂ・Ｃ地区全景 ……17
図　版　7　宮原遺跡Ｂ地区西半部全景 ……17
図　版　8　(上)　１号竪穴住居跡全景 ……17
　　(下)　１号竪穴住居跡貼床下層の状況 ……19
図　版　9　(上)　１号竪穴住居跡床面の状況と土器出土状態 ……19
　　(下)　１号竪穴住居跡床下の遺物出土状態 ……19
図　版　10　(上)　３号竪穴住居跡全景 ……22
　　(中・下)　２・３号竪穴住居跡全景 ……22
図　版　11　(上)　２号竪穴住居跡の屋内土壙 ……22
　　(下)　３号竪穴住居跡の屋内土壙Ａと土器出土状態 ……23
図　版　12　(上)　３号竪穴住居跡の屋内土壙Ａ土器取り上げ後の状態 ……23
　　(下)　３号竪穴住居跡の屋内土壙Ａと間仕切溝Ａ～Ｄ ……23
図　版　13　(上)　３号竪穴住居跡の屋内土壙Ａ横の粘土流入状態 ……23
　　(下)　３号竪穴住居跡の屋内土壙Ａ周辺の貼床と２号竪穴住居跡 ……23
図　版　14　(上)　３号竪穴住居跡の石組状遺構と周辺の土器出土状態 ……23
　　(下)　３号竪穴住居跡の石組状遺構 ……23
図　版　15　(上)　３号竪穴住居跡の屋内土壙Ｂ西側の土器出土状態 ……23
　　(中・下)　３号竪穴住居跡床面の間仕切溝 ……23
図　版　16　(右)　３号竪穴住居跡床面の間仕切溝と屋内土壙Ａ ……23
　　(左)　３号竪穴住居跡の間仕切溝と屋内土壙Ｂ ……23
図　版　17　(上)　３号竪穴住居跡間仕切溝Ｈの断面 ……23
　　(右)　３号竪穴住居跡床面間仕切溝Ｃ・Ｄの状態 ……23
図　版　18　(上)　４号竪穴住居跡と１号方形竪穴 ……33
　　(下)　10号竪穴住居跡 ……39

本文対照頁

図　版　19　(上)　11～16号竪穴住居跡 ……42～47
　　(下)　17～20号竪穴住居跡と３号方形竪穴・５号土壙 ……49・54・83・89
図　版　20　(上)　17号竪穴住居跡カマド ……49
　　(中)　19号竪穴住居跡壁面下杭状痕 ……50
　　(下)　21・22号竪穴住居跡 ……55・56
図　版　21　(上)　23号竪穴住居跡 ……57
　　(下)　24号竪穴住居跡 ……60
図　版　22　(上)　25号竪穴住居跡 ……61
　　(下)　26号竪穴住居跡 ……63
図　版　23　(上)　26号竪穴住居跡カマド ……63
　　(中)　26号竪穴住居跡カマド対面の土器 ……64
　　(下)　27～29号竪穴住居跡 ……65～69
図　版　24　(上)　27号竪穴住居跡カマド ……65
　　(中)　28・29号竪穴住居跡 ……68
　　(下)　29号竪穴住居跡カマド ……69
図　版　25　(上)　１号方形竪穴 ……81
　　(右)　３号土壙 ……86
図　版　26　(上)　４号土壙全景 ……86
　　(中)　４号土壙鉢出土状態 ……87
　　(下)　４号土壙完掘後全景 ……87
図　版　27　(上)　４号土壙古銭出土状態 ……87
図　版　28　１号竪穴住居跡出土土器 ……19～21
図　版　29　１・３号竪穴住居跡出土土器 ……19～33
図　版　30　３号竪穴住居跡出土土器 ……25～33
図　版　31　３号竪穴住居跡出土土器 ……25～33
図　版　32　３号竪穴住居跡出土土器 ……25～33
図　版　33　３・７号竪穴住居跡出土土器 ……25～33
図　版　34　７・13・17・21・23号竪穴住居跡出土土器 ……35～57
図　版　35　25・26号竪穴住居跡出土土器 ……59～65
図　版　36　26・28・29号竪穴住居跡，４号土壙出土土器 ……64～89
図　版　37　４号土壙・溝１出土土器 ……89～90
図　版　38　１・３号竪穴住居跡出土土器・石器，溝１・表採土器 ……21・90・94
図　版　39　宮原遺跡Ｂ・Ｃ地区出土鉄製品・土製品 ……21他

挿図目次

本文対照頁

第１図　九州横断自動車道路線図 …… 8
第２図　竪穴住居跡模式図と各部の名称 …… 13
第３図　宮原遺跡と周辺遺跡分布図(1/50,000) …… 折込み
第４図　１号竪穴住居跡実測図(1/60) …… 18
第５図　１号竪穴住居跡出土土器実測図①(1/4) …… 20
第６図　１号竪穴住居跡出土土器実測図②(1/2) …… 21
第７図　１号竪穴住居跡出土砥石実測図(1/2) …… 21
第８図　１・３・27号竪穴住居跡出土鉄製品実測図(1/2) …… 21
第９図　２号竪穴住居跡実測図(1/60) …… 22
第10図　３号竪穴住居跡実測図(1/60) …… 折込み
第11図　３号竪穴住居跡屋内土壙Ａ土層図(1/60) …… 23
第12図　３号竪穴住居跡屋内土壙Ｂ実測図(1/20) …… 24
第13図　３号竪穴住居跡石組実測図(1/20) …… 24
第14図　３号竪穴住居跡屋内土壙Ａ実測図(1/15) …… 折込み
第15図　３号竪穴住居跡出土土器実測図①(1/4) …… 26
第16図　３号竪穴住居跡出土土器実測図②(1/4) …… 27
第17図　３号竪穴住居跡出土土器実測図③(1/4) …… 28
第18図　３号竪穴住居跡出土土器実測図④(1/4) …… 30
第19図　３号竪穴住居跡出土土器実測図⑤(1/4) …… 31
第20図　３号竪穴住居跡出土土器実測図⑥(1/2) …… 33
第21図　４号竪穴住居跡実測図(1/60) …… 34
第22図　４・７・10～12号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4) …… 35
第23図　５～７号竪穴住居跡実測図(1/60) …… 36
第24図　宮原Ｂ・Ｃ地区出土土製品実測図(1/2) …… 38
第25図　８号竪穴住居跡実測図(1/60) …… 38
第26図　９号竪穴住居跡実測図(1/60) …… 39
第27図　10号竪穴住居跡実測図(1/60) …… 40
第28図　11・12号竪穴住居跡実測図(1/60) …… 41
第29図　13号竪穴住居跡カマド対面土壙実測図(1/30) …… 43
第30図　13号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4) …… 44

本文対照頁

第31図　13・14号竪穴住居跡実測図(1/60) …… 45
第32図　14～20号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4) …… 46
第33図　15・16号竪穴住居跡実測図(1/60) …… 47
第34図　17号竪穴住居跡実測図(1/60) …… 49
第35図　17号竪穴住居跡カマド実測図(1/30) …… 50
第36図　17・19号竪穴住居跡カマド対面土壙実測図(1/30) …… 51
第37図　18・19号竪穴住居跡実測図(1/60) …… 53
第38図　20号竪穴住居跡・3号方形竪穴実測図(1/60) …… 54
第39図　21・22号竪穴住居跡実測図(1/60) …… 56
第40図　21・22・26号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4) …… 57
第41図　23号竪穴住居跡実測図(1/60) …… 58
第42図　23～25号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4) …… 59
第43図　24号竪穴住居跡実測図(1/60) …… 60
第44図　25号竪穴住居跡実測図(1/60) …… 61
第45図　25号竪穴住居跡カマド実測図(1/30) …… 62
第46図　25号竪穴住居跡カマド支脚実測図(1/4) …… 62
第47図　26号竪穴住居跡実測図(1/60) …… 64
第48図　26号竪穴住居跡カマド実測図(1/30) …… 64
第49図　26号竪穴住居跡カマド支脚実測図(1/4) …… 65
第50図　27・30号竪穴住居跡実測図(1/60) …… 66
第51図　27～30号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4) …… 67
第52図　28・29号竪穴住居跡実測図(1/60) …… 68
第53図　1～4号掘立柱建物跡実測図(1/100) …… 71
第54図　5～7号掘立柱建物跡実測図(1/100) …… 72
第55図　8～10号掘立柱建物跡実測図(1/100) …… 74
第56図　11～14号掘立柱建物跡実測図(1/100) …… 75
第57図　15～18号掘立柱建物跡実測図(1/100) …… 76
第58図　19～23号掘立柱建物跡実測図(1/100) …… 78
第59図　26号掘立柱建物柱穴実測図(1/30) …… 79
第60図　24～28号掘立柱建物跡実測図(1/100) …… 80
第61図　29・30号掘立柱建物跡実測図(1/100) …… 81
第62図　1・2号方形竪穴実測図(1/60) …… 82
第63図　2号方形竪穴出土土器実測図(1/4) …… 83

本文対照頁

第64図　1・2・5号土壙実測図(1/60) ……84
第65図　1・2・5号土壙出土土器実測図(1/4) ……85
第66図　3号土壙実測図(1/60) ……86
第67図　4号土壙実測図(1/30) ……87
第68図　4号竪穴住居跡土壙出土土器実測図(1/3・1/4) ……88
第69図　溝1土層図(1/60) ……89
第70図　溝1出土土器実測図(1/4) ……90
第71図　ピット出土土器実測図(1/4) ……92
第72図　その他の出土土器実測図(1/4) ……93
第73図　表採土器実測図(1/4) ……94

表目次

第1表　九州横断自動車道関係遺跡一覧表 ……折込
第2表　第11地点調査工程表 ……10
第3表　竪穴住居跡・方形竪穴計測表 ……折込

付図目次

付図1　宮原遺跡遺構配置図，立野・宮原遺跡路線図（1／600，1／2,000）
付図2　宮原遺跡B・C地区全体図
付図3　宮原遺跡B・C地区遺構配置図

第１章　はじめに

第１節　昭和62年度の調査経過

62年度の発掘調査は，後半には全ての工事区の工事が発注され，一部工事と調査が錯綜する年度となった。しかし，その大半は昨年と同様，工事があまり進行していないため，工事用道路もなく，調査地点への進入路の確保に苦慮した。また，夏場の長雨による泥水の流出や土砂崩壊に悩まされた年でもあった。

調査は４～５班体制で年間を通じて従事した。杷木町９地点，朝倉町12地点の本調査と杷木，朝倉両町12箇所の試掘調査を行い，調査面積は82,710㎡となった。

調査は杷木町２班，朝倉町３班の体制で開始し，年明けには未買収地との関係で朝倉町４班体制をとらざるを得なくなった。

長島遺跡（第27地点）の調査は，昭和57，58年度に調査した地区の続きで，調査面積16,000㎡におよぶ広大なものとなった。従って，４月下旬から10月末にわたる長期間の調査となった。弥生時代終末の住居跡９軒，石棺墓，土壙墓，甕棺墓など12基からなる墓地群，特に４号石棺墓からは日本最少ともいえる径４㎝の小型仿製鏡が出土した。この遺跡の主体は奈良時代の40軒の竪穴住居跡と掘立柱建物５棟以上からなる大集落の発見である。57・58年度調査分とあわせると110軒にもおよぶ大集落として注目される。他に，古墳時代後期の住居跡２軒をはじめ，中世の掘立柱建物，土壙，土壙墓群，北側の谷におりる道路状遺構３本の発見も興味深い。

原の東遺跡（第29－Ａ地点）の調査は，６月上旬から３月までの９ケ月にもわたる長期間の調査となった。調査の結果は，旧石器から縄文，弥生，古墳時代と連綿と続く大複合遺跡であることが判明した。縄文時代早期の石組炉36基，集石遺構９基をはじめ，多くの押型文土器や石器多数が出土した。縄文晩期の貯蔵穴４基と，少量ではあるが後期の土器も出土している。弥生時代の遺構としては，前期の方形プランの住居跡１軒と貯蔵穴３基，中期初頭から前葉の時期の円形住居跡６軒が検出された。古墳時代のものとしては方墳や円墳からなる５世紀代の16基の古墳群が注目される。主体部は竪穴式石室14基と竪穴系横口式石室２基で，大半は盗掘されていたものの鉄刀，鉄剣等多くの遺物が出土した。調査は昭和63年度も継続となった。

妙見古墳群（第29－Ｂ地点）は昭和39年に朝倉高校が柿園造成に伴って調査した遺跡で，一部，古墳時代後期の古墳群の痕跡を確認したものの，その下層より４世紀前半代の38基の方形周溝墓群が発見された。主体部は箱式石棺が17基と多く，他には石蓋土壙８基，木蓋土壙墓９基，木棺墓１基などがある。副葬品としては大刀，刀子，鉄鏃，鉄斧などの鉄器が数点と副葬品の少ない集団墓であった。人骨の遺存が良好なものが９体検出され，その内の１体には腹部

に鉄鏃が嵌入した珍しい人骨もあった。恐らく戦死者の墓であろう。調査は９月上旬から１月中旬にかけて実施した。

鎌塚遺跡（第30地点）も長島遺跡と同様，奈良時代の大集落で，竪穴住居跡76軒，掘立柱建３棟が発見された。住居群は中央に広場を有し，五群をなし弧状に配置されていた。古代の集落構造を知る上で興味深い遺跡であった。また，集落形成以前のものである畑の畝を思わせる数条の浅い溝と用排水路を思わせる溝状遺構の発見も面白い。他に，縄文時代晩期の貯蔵穴群，弥生時代前期の貯蔵穴群や円形住居跡等と多く，重層的な調査となった。従って６月から11月におよぶ長期間の調査となった。

山の神遺跡（第31地点）の調査は，一部鎌塚遺跡の調査と併行して，11月から１月上旬の間で実施した。調査の結果は，縄文時代晩期の土壙16基と，大形の複室式の横穴式石室を有す古墳一基が発見された。古墳は削平が著しく，周溝も不明瞭であったが北側に残存する同時期の溝が周溝の一部だとすれば径30ｍを越す古墳となる。石室の規模からして可能性はあろう。他にナイフ形石器や三稜尖頭器等旧石器時代の遺物も出土しているが，包含層は遺存していなかった。

長田遺跡（第33地点）の調査はＡ・Ｂ地区の二地区に別れ，Ｂ地区が溜池建設予定地ということもあって先行して調査することになった。調査の結果は，全体として希薄であったものの縄文時代晩期の不整形な土壙36基が検出された。Ａ地区からは弥生時代前期前葉の貯蔵穴群17基以上と竪穴住居跡と思われるもの数軒，古墳時代後期の住居跡12軒，時期は不明瞭だが，製鉄炉１基と砂鉄貯蔵庫１基が発見された。隣接する34地点が製鉄と関連する『金場』という字名が残っているのもその関係で興味深い点である。調査は11月下旬から３月の厳寒期の調査となった。

恵蘇山遺跡（第35－Ｂ地点）は７世紀後半の住居跡２軒と１条の柱列が発見された程度の希薄な遺跡であった。調査も稗畑遺跡の調査と併行して１月上旬から末までの短期間で終了した。

稗畑遺跡（第36地点）の調査は，10月下旬から２月下旬の間で，一部恵蘇山遺跡の調査と併行して実施された。調査の結果は，遺跡の北半部から縄文時代晩期中葉の包含層が検出され，多数の土器，石器が出土した。遺構としては７世紀代の竪穴住居跡９軒と掘立柱建物２棟が発見された。南半部は後世の攪乱で遺構は消失していた。

外之隈遺跡（第38地点）は，昭和31年，柿畑の造成時に発見され，県立朝倉高校史学部が調査した遺跡である。その時箱式石棺墓，土壙墓等４基を発掘し，仿製連孤文鏡や鉄器が出土し注目された。当初，調査の対象地はこの土地125㎡と極めて小範囲ものであったが，５月に実施した周辺の試掘調査結果では，16,400㎡にもおよぶ広大な大複合遺跡であることが判ったため，急拠，杷木地区を担当していた一班を投入することとした。調査は11月中旬からはじまり63年度に継続する調査となった。調査地区は大きく五区に分れる。Ⅰ区は朝倉高校が調査した

地区の再調査であり，その結果，丘陵頂部を10×16m程の長方形に削り出した古墳時代初頭の長方形台状墓1基が発見され，その中央部からは箱形木棺が検出された。頭部付近から良質な画文帯神獣鏡片と勾玉1点が出土し注目された。また，東側裾部からは小型の石棺1基も検出された。この箱形木棺は，かつて朝倉高校の調査時に鉄剣1口が出土した4号無蓋土壙にあたることが判った。頭部側は町境のため調査しなかったと記されている。この台状墓の発見は，今後この地域の発生期の古墳を解明する上で重要な遺跡といえるだろう。Ⅱ区は北側の標高100mの頂部突端で，Ⅰ区とほぼ同じ時期の石棺群が発見された。Ⅲ区は西側の緩やかな斜面で，縄文時代早期の竪穴住居跡をはじめ，古墳時代の住居跡14軒が検出されている。Ⅴ区はⅠ区の西側斜面で，横穴式石室の古墳や，古墳時代の住居跡群，享保11年（1726）の銘がある近世墓等が発見された。

大谷遺跡（第43地点）の調査は，傾斜地に形成された古墳群ということもあって，梅雨時を避け，9月下旬から11月にかけて実施した。しかし，流出土防止用の土止めをしていたものの調査中の数度の雨で，隣接地の土砂崩壊をまねき，事後処理に苦慮した。調査の結果は，当初予想していたより少なく古墳2基と，縄文時代晩期の住居跡3軒と貯蔵穴1基，土壙12基等であった。

笹隈遺跡（第45地点）は柿畑の造成によりかなり削平されていたものの，縄文，弥生，古墳，中世にわたる大複合遺跡であった。縄文時代早期の包含層，晩期の竪穴住居跡30数軒の発見は注目され，土器，石器多数が出土した。また4世紀から5世紀にかけての8基の古墳は主体部が竪穴式石室4基，竪穴系横口式石室3基からなる古墳群であり，この地域では初めての発見であり重要な遺跡である。いずれも盗掘を受けていたものの，6号石室からは鉄刀，鉄斧，鉄鎌等多くの副葬品が検出された。調査は6月上旬から9月下旬の最も暑い時期の調査となった。

夕月・天園遺跡（第46地点）は笹隈遺跡の東側で狭い谷を挟んで隣接した遺跡である。縄文早期，前期，後期，晩期にわたる多くの土器，石器は貴重であり，特に，前期の楕円形プランを呈す竪穴住居の発見や後期の甕棺2基，埋甕1基の発見は注目されよう。畑の開削で半壊していたものの，横穴式石室を有す円墳3基も検出された。また，中世の火葬墓や土壙墓等も発見された。調査は未買収地の一部を残し，11月から2月下旬の間で終了した。一部工事と錯綜し，工事に追われる調査であった。

クリナラ遺跡（杷木インターC地点）の調査は5月末から11月中旬にわたる長期間の調査であった。調査地点が狭長な谷部であったため蒸し暑さに悩まされた調査となった。また，長雨による泥水や流出土にも苦慮した。試掘時には谷部に堆積した単純な包含層と考えていた。しかし，調査の結果は，我々の予想とは異なり，地形的には考え難い谷底から縄文時代晩期中葉の竪穴住居跡9軒と古墳時代後期の竪穴住居址2軒が発見され，我々の常識を越す極めて異例な調査結果となった。周辺の丘陵上には遺構らしいものはなにも存在しないのに，居住環境と

しては極めて悪い谷部になぜ住居を作ったのかなど今後に残された問題は多く，その検討は重要な課題でもある。また，多量に出土した縄文晩期の土器，石器類も今後この時期の研究の貴重な資料となろう。

西ノ迫遺跡（杷木インターC地点）の調査も，我々を驚かす九州では初めての高地性集落の発見となった。頂部に存在していた古墳の調査中に，その下層に弥生時代後期後半の竪穴住居が存在することが判明したため，周辺部を拡張したら，さらに2軒の住居跡とその裾部斜面に幅1.3～4m，深さ1～1.5mの環濠が発見された。南側の環濠の一部を埋め戻し，通路とし，さらにその内側はがっちりした門柱が立てられていた。標高131mとさほど高くはないが筑後平野東半部を一望できる極めて見晴らしの良い場所である。まさに『物見やぐら』的性格と『のろし台』的性格を強く示している。残念ながらここでは環濠や住居跡群と同時期とははっきりわかる焼けた土壙は見つかっていない。しかし，裾部には奈良時代ののろし跡と考えられる土壙が存在し，その深さが20～30cmと浅いことからして，住居跡周辺の高い所に弥生後期ののろし跡があったとしたら，住居跡の現状も上半が大きく削平されていることからして，すでにのろし跡は削平されてしまった可能性が強いだろう。『九州には高地性集落は存在しない』という説をくつがえしたことはもとより，後漢書にみる『恒霊の間』（A．D．147～188）に起きた『倭国大乱』が，従来，高地性集落の集中する畿内や瀬戸内海沿岸あたりだけの騒乱であったという解釈ではなく，九州をも含めた汎西日本的な大乱であった可能性が強いことに，今回の調査結果の重要な意義があるといえよう。また，この遺跡の南西400mの丘陵下沖積地には，西ノ迫高地性集落に対する本集落である前田遺跡が存在することも重要であり，今後の調査が期待される。調査は4月下旬から5月末の間で実施した。

小覚原遺跡（第52－A地点）の調査は，61年度の継続として実施し，6月中旬で終了した。調査の結果は，縄文時代晩期の竪穴住居跡12軒をはじめ，貯蔵穴，落とし穴，土壙等20数基が発見された。

二十谷遺跡（第52－B地点）は縄文時代晩期と中世の複合遺跡である。特に，総数33軒にも及ぶ住居跡群や50数基の土壙群からなる縄文時代晩期の大集落の発見は貴重であり，今後，この時期の重要な遺跡として注目されよう。中世のものとしては掘立柱建物3棟があり，製鉄関連の遺跡であったらしく鉄滓やフイゴの羽口等も出土している。

大迫遺跡（第37地点）の調査は2月下旬から，上ノ宿遺跡（第35－A地点）の調査は3月から実施したもので，来年度に継続する調査である。

他に，朝倉町内11地点，杷木町内2地点の試掘調査を前年度から継続して4月～5月，11月，2月の3回に分けて実施した。その結果，第44地点と一部杷木インター土取り予定地については遺構が存在しないことが判った。しかし，他の地点はいずれも広大な複合遺跡で，かつ重層的な発掘調査が必要な地点が多く，今年度終了する予定であった発掘調査を63年度に持ちこさ

ざるを得ない事態となった。

また，各地点の調査にあたっては下記の関連諸科学の先生方をはじめ，考古学専門の先生方の御指導，御協力を得た。記して謝意を表します。

一方，文化財保護思想の普及活動の一環として，６月13日には西ノ迫遺跡の現地説明会を８月30日には『倭国大乱』－西ノ迫高地性集落の謎－というテーマの文化講演会を奈良大学文学部水野正好教授を招いて開催した。その結果は県内，外から500名を越す参加者を得て好評を博した。10月24日には，杷木町教育委員会，文化協会共催の文化講演会にも職員を派遣した。また，11月には鎌塚遺跡の現地に，我々の手により古代住居を再現し，一般に公開したところ多くの見学者を得たことも貴重であった。現在，この住居は朝倉町民グランドの一角に移築し，一般に公開されている。今後は，学校教育や社会教育の学習教材として有効に活用いただきたいと考えている。さらに，学習教材の資料として，妙見古墳群から発見された石棺を朝倉町，杷木町公民館，杷木町立志波小学校等に，それぞれ移築する作業も実施した。

整理作業は，調査と併行して甘木事務所と九州歴史資料館で行った。調査報告書は前伏遺跡（11集），柿原古墳群（12集），薬師堂東遺跡（13集），宮原遺跡（14集），大板井遺跡（15集）の５冊を刊行した。その内の15集は小郡市教育委員会に委託した第３，４地点の報告である。

なお，発掘調査にあったっては，朝倉町，杷木町両教育委員会，両建設課には多大な御援助，御協力を得た。並びに作業員として参加していただいた地元の方々，第３，４地点の報告書作業を受託された小郡市教育委員会に対し，心より感謝いたします。

昭和62年度の調査関係者は下記のとおりである。　（井上裕弘）

日本道路公団福岡建設局

局長	杉田美昭	
次長	菱刈庄二（前任）	吉岡康行
総務部長	安元富次	
管理課長	森　宏之（前任）	副島紀昭
管理課長代理	三野徳博	

日本道路公団福岡建設局甘木工事事務所

所長	風間　徹	
副所長	西田　功	
副所長（技術担当）	友田義則	
庶務課長	徳永　登（前任）	大河尋光
用地課長	松尾伸男	
工務課長	後藤二郎彦（前任）	豊里栄吉
朝倉工事区工事長	上野　満	

杷木工事区工事長　　小沢公共

小郡市教育委員会

教育長　　福田大助

教育部長　　安永茂歳

社会教育課長　平山　稔（前任）　松尾友喜

社会教育係長　永田真二

庶務　　米倉百合子

技師　　速水信也　柏原孝俊

調査補助員　　山田あや子

福岡県教育委員会

総括

教育長　　竹井　宏

教育次長　　大鶴英雄

指導第二部長　　大平岩男

指導第二部参事　　窪田康徳

文化課長　　窪田康徳（兼任）

文化課長補佐　　平　聖峰

文化課長技術補佐　宮小路賀宏

文化課参事補佐　　中矢真人

文化課参事補佐　　加藤俊一

文化課参事補佐　　栗原和彦

文化課参事補佐　　大塚　健

文化課参事補佐　　柳田康雄

庶務

文化課庶務係長　　加藤俊一（兼任）

文化課事務主査　　竹内洋征

調査

人骨調査　　九州大学医学部教授　永井昌文

〃　〃　講師　中橋孝博

〃　〃　助手　土井直美　田中良之

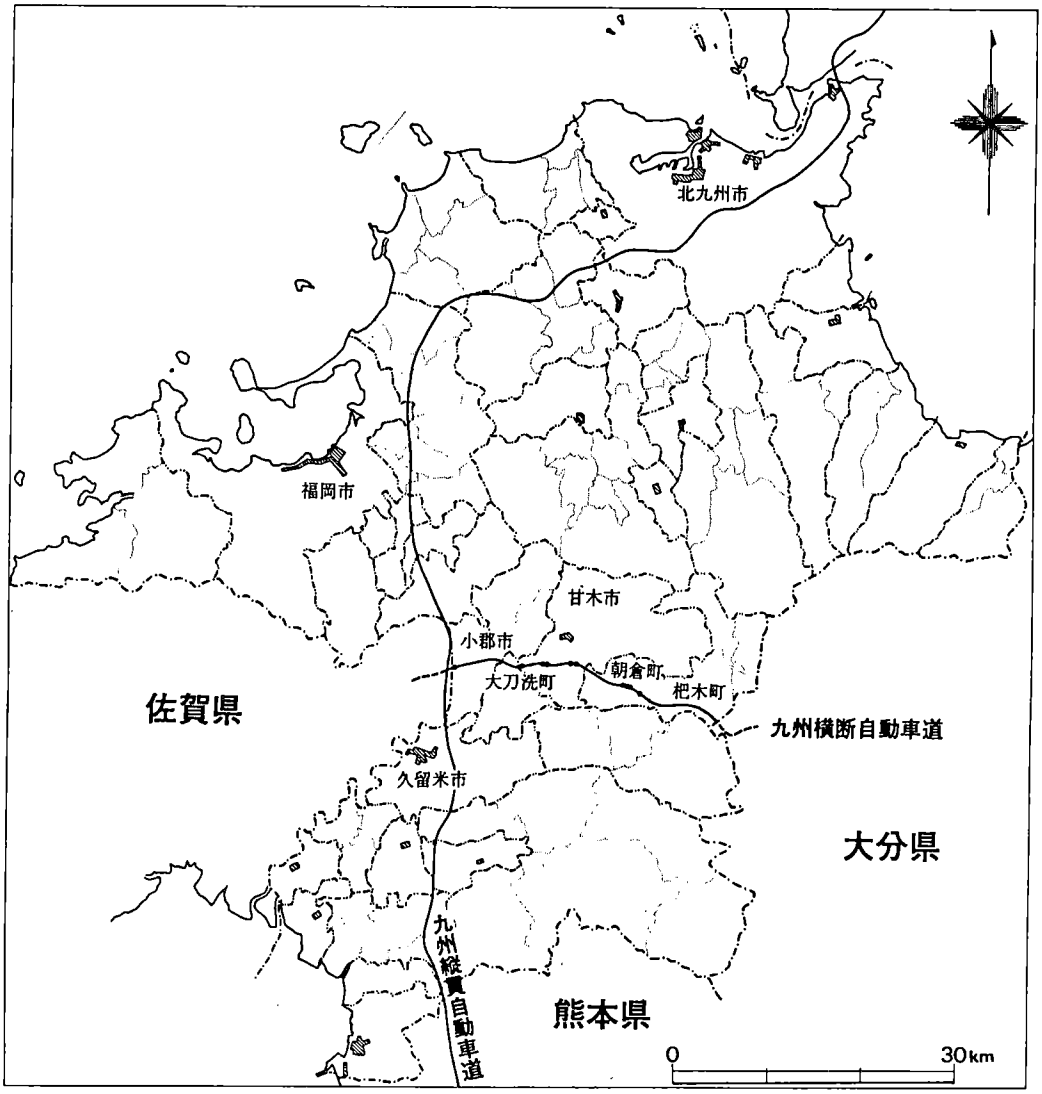
花粉分析調査　　北九州大学教授　畑中健一

熱残留磁気調査　島根大学理学部教授　伊藤晴明

〃　〃　助教授　時枝克安

地質・岩石調査	福岡県立大川高校教諭	木戸道男
	朝羽高校教諭	平田昌之
考古学	別府大学学長	賀川光夫
	奈良大学文学部教授	水野正好
	九州大学文学部教授	西谷　正
	奈良国立文化財研究所埋蔵文化センター部長	佐原　真
	福岡県立文化財保護審議会専門委員	渡辺正気
	北九州市立考古博物館長	小田富士雄
	福岡県立朝羽高校教頭	高山　明
	〃	佐藤尚隆

文化課調査班総括		柳田康雄（兼任）
同	技術主査	井上裕弘
同	技術主査	木下　修
同	主任技師	中間研志
同	主任技師	佐々木隆彦
同	主任技師	伊崎俊秋
同	技師	小田和利
同	文化財専門員	木村幾多郎
同	臨時職員	日高正幸
調査補助員	高田一弘	武田光正
	佐土原逸男	向田雅彦
	田中康信	



第１図　九州横断自動車道路線図

第２節　昭和56・58年度の調査経過

ここに報告する甘木市宮原（みやばる）遺跡は，報告済みの立野（たての）遺跡ともに土取り場および九州横断自動車道路線内の調査地点（第１～56地点，小郡市～朝倉郡杷木町）のうち，第11地点として登録された部分である。第11地点のほぼ中央に溜池があり，その東側を宮原遺跡，西側を立野遺跡とした。両遺跡とも小字名をとって遺跡名とし，路線内を走る農道で分割された部分にアルファ

第1表　九州横断自動車道関係遺跡一覧表

地点	遺跡名	所在地	内容	面積	調査地区と面積									備考	報告書
					54年度	55	56	57	58	59	60	61	62		
1	小郡正尻遺跡	小郡市大字小郡	弥生集落歴史溝	11,200					5,000		560			完了	7集
2	前状遺跡	〃　〃	弥生，古墳散布地	10,400						330	6,000			完了	11集
3	大板井遺跡	〃　大板井	弥生，古墳	5,400							3,000			小郡市委託完了	15集
4	〃	〃　〃	大板井城跡	9,200						3,500	5,000			小郡市委託完了	15集
5	井上薬師堂遺跡	〃　井上	弥生，中世集落	8,800						4,500	3,700			完了	10集
6	薬師堂東遺跡	〃　薬師町	弥生，古墳散布地（首切塚）	32,000					500	7,300	10,100			完了	13集
7	〃	〃　今隈	弥生散布地	7,200					200		100			完了	
8	宮巡遺跡	大刀洗町大字山隈	中世散布地	4,000					3,600					完了	
9	春園遺跡	〃　〃	先土器，弥生，古墳，近世墓	10,800					100	6,700				完了	
10		〃　中条本郷		34,400			700		300					遺構なし完了	
11	立野・宮原遺跡	甘木市大字下浦	弥生末～平安集落，方形周溝墓，円墳，土壙墓等	33,800			13,860	13,500	10,000	3,000				完了	2・5・8 14集
12	小石原川西条里	〃　上浦	中世	48,000			810							遺構なし完了	
13	〃　東条里	〃　上浦馬田	〃	56,000	200	7,600								完了	1集
14	上々浦遺跡	〃　上浦	弥生・古墳集落	18,400	200									完了	1集
15	西原，下原遺跡	〃　一ツ木屋永	〃　〃	54,800	A，B地点 3,850		下原 4,200	C地点 1,400						完了	1・2・3集
16	高原遺跡	〃　屋永	縄文・弥生・古墳集落	7,800					1,400	5,400				完了	
17	口ノ坪遺跡	〃　牛鶏		100						100				完了	
18		〃　〃	散布地	2,550					300					遺構なし完了	
19-A	塔の上遺跡	〃　〃	古墳集落	30,000					700	8,200				完了	9集
19-B	大環端遺跡	朝倉町大字石成	古墳集落，奈良墓地	20,000							8,400			完了	
19-C D	石成久保遺跡	〃　〃	古墳集落	20,000							6,100			完了	
20	中道遺跡	〃　大庭	縄文，弥生・奈良集落	15,400					300		11,400			完了	
21-A	西法寺遺跡	〃　〃	奈良集落．中世								8,400			完了	
21-B	経塚遺跡	〃　〃	散布地	46,900				800	600		2,300			完了	
21-C	大庭久保遺跡	〃　〃	弥生墓地，奈良集落								9,650			完了	
21-D	上の原遺跡	〃　〃	弥生集落・墓地，古墳集落								12,300			完了	
22-A B	治部ノ上遺跡	〃　入池	縄文，弥生・古墳集落	5,400					300	4,800				完了	
22-C	狐塚南遺跡	〃　〃	弥生，中世集落，墓地	5,000							3,420			完了	
23	座禅寺遺跡	〃　〃	弥生集落，古墳	2,600						2,600				完了	
24	才田遺跡	〃　〃	中世散布地　歳田廃寺	5,400						1,050	6,650			完了	
25	東才田遺跡	〃　〃	〃　〃	4,000						1,300	4,400			完了	
26		〃　須川	散布地	1,600				70						遺構なし完了	
27	長島遺跡	〃　〃	縄文，弥生・古墳・奈良集落	16,000				C地点 5,000	C地点 6,640			500	16,000	完了	
28	中妙見遺跡	〃　〃	縄文．歴史集落	2,400				200	458					完了	
29-A	原の東遺跡	〃　菱野	縄文，弥生集落，墓地	16,800					600				5,240	完了	
29-B	妙見古墳群	〃　〃	方形同溝墓										4,660	完了	
30	鎌塚遺跡	〃　菱野,山田	縄文，弥生・集落	4,000									6,550	完了	
31	山の神遺跡	〃　山田	縄文，古墳	2,000									1,980	完了	
32		〃　〃		2,400				300						遺構なし完了	
33	長田遺跡	〃　〃	縄文，弥生，古墳集落	2,000									5,500	完了	
34	金場遺跡	〃　〃	縄文，古墳	3,600									680		
35-A	上ノ原・上ノ宿遺跡	〃　〃	弥生，散布地	2,600									880		
35-B	恵蘇山遺跡	〃　〃											2,400	完了	
36	稗畑遺跡	〃　〃	古墳散布地	2,000									3,980	完了	
37	大迫遺跡	〃　〃	〃	2,400									5,410		
38	外之隈遺跡	〃　〃	弥生，中世，箱式石棺	125									5,150		
39-A	杷木宮原遺跡	杷木町大字志波	弥生，古墳，中世散布地	22,000							320	3,400		完了	
39-B C	中町裏遺跡	〃　〃	〃　〃　〃									11,000		完了	
40	志波桑ノ本遺跡	〃　〃	中世，散布地	2,500							300	7,700		完了	
41	志波岡本遺跡	〃　〃	〃　〃	18,000							300	9,400		完了	
42	江栗遺跡	〃　〃	中世一字一石経	8,000							300	9,700		完了	
43	大谷遺跡	〃　若市	古墳群	12,000								500	7,560	完了	
44		〃　久喜宮	古墳4～5基	1,800									150	遺構なし完了	
45	笹隈遺跡	〃　〃	散布地	2,400								400	3,710	完了	
46	夕月・天園遺跡	〃　古賀	〃	1,800								300	2,210		
47	上池田遺跡	〃　池田	弥生，古墳，中世散布地	4,000								3,200		完了	
48	畑田遺跡	〃　〃	縄文，弥生，中世集落，墓地	1,800								6,800		完了	
49		〃　林田	〃	3,200								150		遺構なし完了	
50		〃　〃	〃	2,400								200		遺構なし完了	
51	楠田遺跡	〃　〃	縄文集落	5,200								6,500		完了	
52-A	小覚原遺跡	〃　〃	〃	2,000								1,000	1,250	完了	
52-B	二十谷遺跡	〃　〃	縄文集落										1,550	完了	
53	陣内遺跡	〃　穂坂	中世	3,500								5,700		完了	
54	上野原遺跡	〃　〃	弥生，中世	1,800								2,700		完了	
55		〃　〃	古墳	1,600								100		遺構なし完了	
56		〃　〃	散布地	2,400								800		遺構なし完了	
57	柿原古墳群	甘木市大字柿原	古墳群・縄文・弥生集落	200,000		測量 14,700	900	8,300	15,000	18,500	4,400			土取場完了	4・6・12集
58	山田古墳群	朝倉町大字山田	〃	40,000	測量 4,435				2,500	2,500	8,710			土取場完了	
杷木インター A	鞍掛遺跡	杷木町大字寒永	弥生，古墳集落									6,450		完了	
杷木インター B	前田遺跡	〃　〃	弥生集落									2,600		完了	
杷木インター C	西ノ迫遺跡	〃　〃	弥生高地性集落・古墳	100,000								1,240	1,270	完了	
〃	クリナラ遺跡	〃　〃	縄文・古墳集落										4,180	完了	
〃		〃　〃	古墳										2,400		
			計		8,685	22,300	20,470	29,570	48,498	69,780	115,810	80,340	82,710		

ベットを用いて小区分し，宮原遺跡Ａ～Ｄ地区，立野遺跡Ａ～Ｆ地区とし，宮原遺跡Ａ地区だけを調査の便宜上ＡⅠ地区（Ａ区東半部），ＡⅡ地区（Ａ区西半部）とした。

第11地点の調査は昭和56年５月18日に宮原遺跡ＡⅠ地区の西半部（1700㎡）について発掘調査を開始した。以降，３年間にわたり，工事工程の都合上，両遺跡を往復しながら断続的に調査をすることとなり，第11地点の調査が終了したのは昭和59年４月30日であった。この間，路線幅約60ｍ，長さ約800ｍ，全面積約40000㎡に及ぶ範囲を調査し，検出した主な遺構は竪穴住居跡約450軒，掘立柱建物跡200棟以上，多数の土壙，方形周溝基16基，円墳９基，土壙墓約80基，およびピットの数はおびただしい量にのぼり，筒形銅器・鏡・帯金具・円面硯・墨書土器・刻印土器・製塩土器・土馬・瓦や祭祀用の土器・土製品等を含め出土遺物も莫大な量となり，６～８世紀代の村落問題や方形周溝墓の出現・在り方などを考える上で貴重な資料を追加した。

次に，宮原遺跡の各調査地区別に簡単に調査の経緯と内容を振り返ってみよう（第２表）。

宮原Ａ地区　先述のように昭和56年５月18日から調査を開始し，途中に３度の中断があり，昭和58年12月中旬に調査を完了した。７～８世紀の竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土壙が主体を占め，土馬や金銅製耳環・鉄鎌・鉄鏃などが出土した。竪穴住居跡の貼床・カマドや貼床の下層遺構について認識が不充分であったため，調査・図化において不充分な部分があった。

宮原Ｂ地区　昭和57年１月初旬から調査を開始し，５月初旬に完了した。東側の１号竪穴住居跡は北側路線外を拡張し，完掘した。５世紀の竪穴住居跡３軒・溝１条，７～８世紀の竪穴住居跡27軒，７～８世紀から中世におよぶであろうと思われる掘立柱建物跡30棟，土壙５基，方形竪穴３基を検出し，古銭が出土した。ここでも竪穴住居跡の貼床・カマドや貼床の下層遺構について認識が不充分であったため，調査・図化において不充分な部分が多く残った。

宮原Ｃ地区　昭和57年２月初旬から調査を開始し，４～９号住居跡・１号土壙を調査し終えたのは５月初旬であった。６ケ月の間，他の地区の調査にまわり，立野Ａ地区・宮原Ａ地区と並行して２・３号竪穴住居跡の調査を実施し，12月20日に完了した。ここでも竪穴住居跡の貼床・カマドや貼床の下層遺構について認識が不充分であったため調査・図化において不充分な部分が多く残った。

宮原Ｄ地区　宮原Ａ地区とともに遺構の切りあい関係が複雑で頭を悩ませた地区である。宮原遺跡の中で最も遺構が多く検出された部分である。現在，遺構の検討を行っており，正確な遺構数は出ない。昭和57年２月から調査にはいり，９月から昭和58年９月まで１年間調査を中断し，その間，宮原Ａ・Ｃ地区および立野Ａ・Ｃ地区の調査を完了した。この地区は横断道11地点のなかで最後の調査地区となり，昭和59年4月30日に第11地点の調査が完了した。

宮原Ｂ・Ｃ地区の詳細については本報告書に掲載している。

立野・宮原遺跡の調査期間を通じて調査補助員として調査を手助けしてくれた仲間の人々に

は，非常に困難な状況のなかで持てる力を精一杯発揮して頂き，感謝の念に絶えない。報告書をまがりなりにも刊行できるのは彼らの遺跡に対する思い入れと尽力の賜物である。

第２表　第11地点調査工程表

56年度

		4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	担当者
立野遺跡	A													
	B									完了				石山
	C													石山・児玉・佐々木
	D								完	了				石山・新原・児玉
	E						完了							石山・新原
宮原遺跡	A													石山・児玉・新原・馬田・佐々木・池辺
	B													石山・新原・児玉
	C													石山・池辺
	D													石山

57年度

		4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	担当者
立野遺跡	A													児玉・佐々木
	B													
	C													
	D													
	E													
宮原遺跡	A													石山・浜田・児玉・新原・中間・佐々木・池辺
	B	完	了											
	C									完了				石山・池辺・児玉
	D													石山・児玉・小池・池辺

56年度　　59年度

		4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	担当者	報告書
立野遺跡	A		完	了											児玉・伊崎	第５集
	B															第２集
	C						完了								児玉・伊崎	第８集
	D															第２・５集
	E															第２集
宮原遺跡	A								完	了					児玉・伊崎	
	B															第14集
	C															第14集
	D													完了	児玉・伊崎	

宮原Ｂ・Ｃ地区の調査関係者は以下の如くである。　（児玉真一）

昭和56年度

日本道路公団福岡建設局

局　　長	持永竜一郎
総務部長	田代　勝重
管理課長	布川　　堯

日本道路公団福岡建設局甘木工事事務所

所　　長	江口　正一
副所長	矢野　浩司
庶務課長	森本　太助
用地課長	溝口　萩男
工務課長	深町　貞光
甘木工事区工事長	瀬戸山邦雄

福岡県教育委員会

総　括

教育長	友野　隆
教育次長	守屋　尚
管理部長	森　英俊
文化課長	藤井　功
文化課長補佐	蓮生謙吉

庶　務

文化課庶務係長	内山　孝
庶務係事務主査	平尾敏映　三島洋輝

調　査

文化課調査第２係長	栗原和彦
主任技師	石山　勲
主任技師	児玉真一
主任技師	池辺元明
調査補助員	高田一弘
調査補助員	武田光正
調査補助員	日高正幸

（肩書は昭和56年度現在）

昭和58年度

日本道路公団福岡建設局

局　　長	今村浩三
総務部長	落合一彦
管理課長	梅田道人

日本道路公団福岡建設局甘木工事事務所

所　　長	乗松紀三
副所長	西田　功
庶務課長	松下幸男
用地課長	岩下　剛
甘木工事区工事長	猪狩宗雄

福岡県教育委員会

総　括

教育長	友野　隆
教育次長	阿部　徹
管理部長	伊藤博之
文化課長	藤井　功
文化課長補佐	中村一世

庶　務

文化課庶務係長	松尾　満
主任主事	長谷川紳弘

調　査

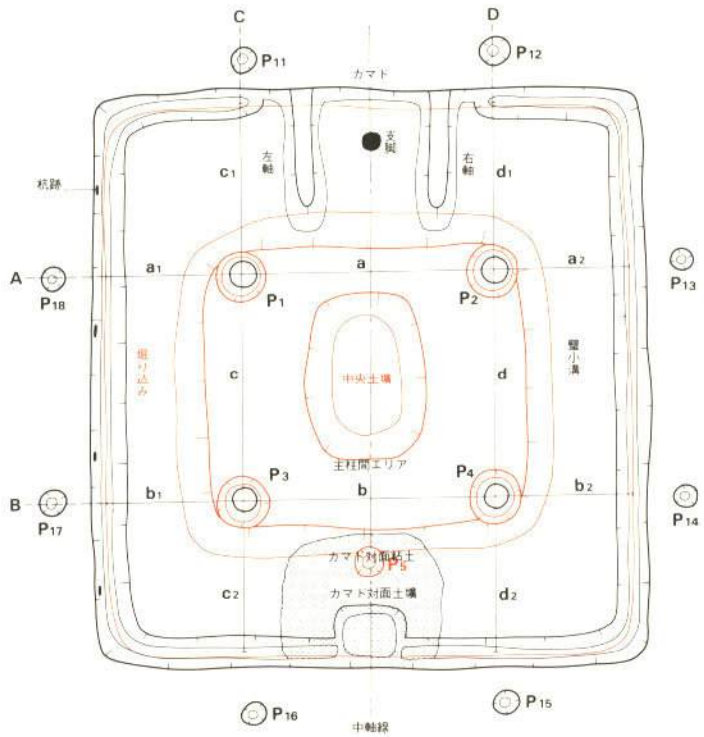
文化課調査第２係長	栗原和彦
主任技師	児玉真一
技　師	伊崎俊秋
調査補助員	武田光正
調査補助員	佐土原逸男
調査補助員	日高正幸

（肩書は昭和58年度現在）

第３節　遺構の説明の前に

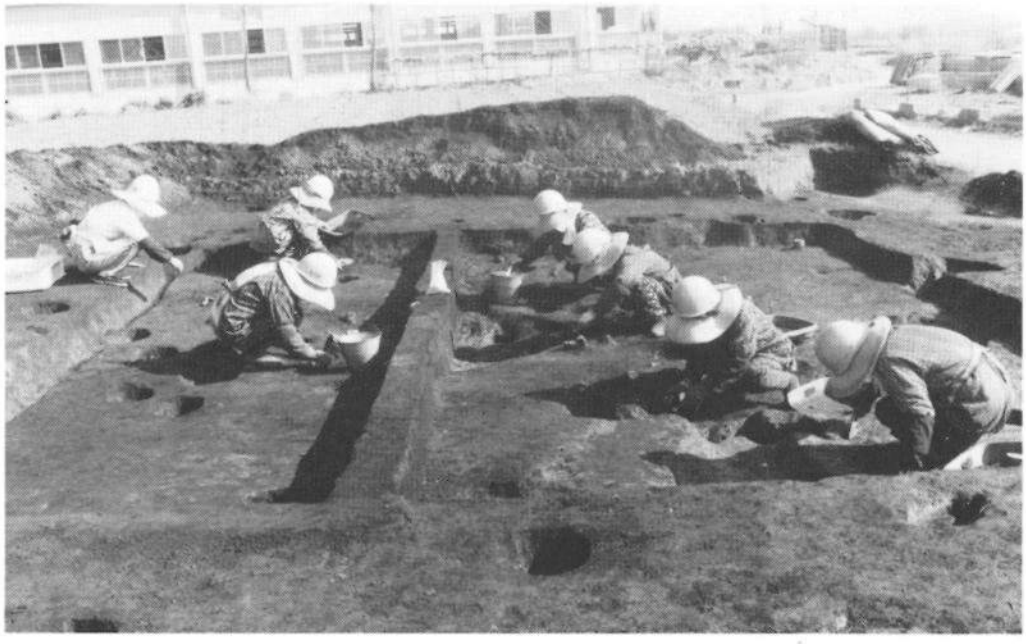
第11地点では，立野遺跡の報告（註１）で詳述されたように特に竪穴住居跡の説明，計測で必要な部分の呼称名やピット番号等について簡単に説明しておく（第２図）。赤線は貼床をはずした床面下の遺構を示す。Ｐ１～Ｐ４が主柱穴でその他は支柱穴を示すが，１軒の竪穴住居跡で必ずしもすべてのピットを揃えてはいない。主柱穴４本を結んだ内部を主柱間エリアという。カマド対面には，すべてではないが，土壙・粘土がある。壁小溝はかなり多くの竪穴住居跡で検出され，貼床をはがすとこの部分に小ピットの痕跡がある例がほとんどで，竪穴住居跡の壁に対する処置と何らかの関係があろう。また貼床下の地山面に中央土壙・掘り込みがあり，その機能は不明な部分を残すが，弥生時代以来の竪穴住居跡の貼床下層と通じる所がある。上記はカマドを持つ歴史時代の竪穴住居跡の説明であるが，それ以前の竪穴住居跡の説明についても準用する。

註１　福岡県教育委員会　『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告』－２－　1983
福岡県教育委員会　『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告』－５－　1984
福岡県教育委員会　『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告』－８－　1986



第２図　竪穴住居跡模式図と各部の名称

B地区の調査風景



1号竪穴住居跡の調査風景

第2章　位置と環境

宮原遺跡は福岡県甘木市大字下溝字宮原に所在する。すでに報告済みの立野遺跡（註1）とともに，6世紀～8世紀を中心とした多くの生活関連遺構を検出している。両遺跡は接近して存在し，立野遺跡の報告で本遺跡周辺の関連遺跡については詳述されている。よってここでは重複をできるだけ避けて宮原遺跡を考える上で重要な遺跡について簡単に触れておく。

九州横断自動車道関係の遺跡もさることながらこの数年，大規模開発行為により，筑後平野北縁部の集落跡・村落跡の重要な資料が逐次明らかになりつつある。それは特に小郡市・朝倉郡夜須町において顕著である。

夜須町では県営圃場整備事業が大規模に行われており，なかでも，弥生時代の例ではあるが峯遺跡の資料は注目に価する。1985年から1988年の足かけ4年に及ぶ調査で竪穴住居跡約550軒，甕棺墓約600基を検出し，弥生時代の社会を考える上できわめて重要な資料が続出している。まだ，調査を終えたばかりであり，報告書の刊行が待たれるが，この地域の拠点集落跡であろう。6世紀以降の村落跡としていくつかの遺跡が調査されている。柿ノ上遺跡では竪穴住居跡70軒以上，掘立柱建物跡（倉庫が多い）数棟を検出している。なかには5世紀代のカマドを持った竪穴住居跡もあり，その資料価値はきわめて高い。そのすぐ東に，間に清流を挟んで行司田遺跡があり，竪穴住居跡6軒，掘立柱建物跡11棟等を検出している。ここの建物は倉庫と居屋的なもので2間×4間のしっかりとした掘立柱建物跡も存在する。両遺跡の北方約500mに梶原遺跡があり，5世紀代の群集墳とともに竪穴住居跡50軒以上，掘立柱建物跡7棟以上が検出されている。この遺跡は谷頭近くに立地する5世紀代の群集墳もさることながら，方形に近いしっかりとした掘り方を持つ建物（倉庫と居屋的なもの）と竪穴住居跡群の存在は行司田遺跡以上に注目されるところである。峯遺跡を除いて先述の3遺跡は夜須町では北側の山寄りに立地し，宝満川とその支流域の平野部では弥生時代～古墳時代の遺跡が多く検出されている。それは当時の土地利用のあり方と密接に結びついたものであろうと思われる。すべて未報告であり，報告書の刊行が待たれる（註2）。

小郡市では大規模開発の中九州ニュータウン関係の調査が継続されている。開発行為の対象地のうち遺跡の存在が確認され，発掘調査を実施している部分が丘陵上の場合が多く，弥生時代の遺跡が多い（註3）。中九州ニュータウン関係以外の市内の遺跡では，九州横断自動車道関係の遺跡を除けば，まず，干潟遺跡がある。干潟地区では福岡県，小郡市が地点を別にして調査をしているが，ここで問題にするのは県で調査した「干潟遺跡」（註4）である。干潟遺跡は7～8世紀代に中心をおく村落跡で竪穴住居跡の構造は宮原遺跡と酷似する。貼床面のとらえ方が宮原遺跡と異なる部分を残すが，貼床下の状況はまったく同じである。また，カマド

の支脚も小型のカメを使い，カマド周辺の土器のあり方も良く似ている。30号竪穴住居跡から井上廃寺の方形棰木先瓦の完形品が出土し，宮原遺跡では，破片ではあるが古い平・丸瓦片が出土しており，そこには井上廃寺を媒体とした関係を伺うことができそうである。小郡市内では，宮原遺跡と直接比較し得る調査例は九州横断自動車道関係の調査を除いて他にない。

甘木市の調査例では，中島田遺跡（註５）・小隈松山遺跡（註６）がある。中島田遺跡は竪穴住居跡29＋α軒，掘立柱建物跡２棟等が検出されている。竪穴住居跡の貼床下層の調査がなされていないので，宮原遺跡と住居の細部についての比較はできないが，カマドは煙道が残る例もあり，遺存状態は良い。布掘りの掘り方を持つ掘立柱建物跡もあり，注目される遺跡ではある。小隈松山遺跡では竪穴住居跡26軒，掘立柱建物跡９棟，土壙７基等が検出されている。弥生時代から奈良時代に及ぶ遺跡で報告者の小田和利氏によれば，調査面積の狭さにためらいつつも，「弥生後期から奈良時代にかけての住居跡が連綿と営まれ，途中，神蔵古墳との関連があり『一ツ木―小田』台地において主体となる遺跡であったと言えよう。」とされている。

第11地点（立野遺跡・宮原遺跡）周辺の顕著な遺跡は以上に述べた通りである。未報告遺跡を多くかかえる夜須町の遺跡に６～８世紀代の村落跡を考える上できわめて重要な遺跡が集中するのは一考に価いし，報告書の刊行が待たれる。　　（児玉）

註

1　福岡県教育委員会　『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告』―２―　1983
　　福岡県教育委員会　『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告』―５―　1984
　　福岡県教育委員会　『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告』―８―　1986
2　夜須町教育委員会の佐藤正義，石井扶微美子，谷沢仁氏の御教示による。一部は筆者が実見した。
3　小郡市教育委員会の速見信也，片岡宏二氏等の御教示による。
4　福岡県教育委員会　『干潟遺跡』１　1980
5　甘木市教育委員会　『金川・中島田遺跡』　1987
6　甘木市教育委員会　『小隈出口遺跡・小隈松山遺跡』　1987

第3図　宮原遺跡と周辺遺跡分布図(1/50,000)

1　小郡正尻遺跡
2　小郡前伏遺跡
3　大板井遺跡
4　大板井遺跡
5　薬師堂遺跡
6　薬師東堂遺跡
8　宮追遺跡
9　春園遺跡
10　10地点
11(西)　立野遺跡
11(東)　宮原遺跡
14　上々浦遺跡
15(西)　下原遺跡
15(東)　西原遺跡
16　高原遺跡
17　口ノ坪遺跡
19－A　塔ノ上遺跡
19－B　大還端遺跡
19-C･D　石成久保遺跡
20　中道遺跡
21－A　西法寺遺跡
21－C　大庭久保遺跡
21－D　上の原遺跡
22(西)　狐塚南遺跡
22(東)　治部ノ上遺跡
23　座禅寺遺跡
24　才田遺跡
25　東才田遺跡
26　東小田峯遺跡
27　東小田七板遺跡
28　隈遺跡群
29　津古古墳群
30　三国の鼻古墳
31　横隈山古墳
32　横隈狐塚遺跡
33　伊勢山遺跡
34　西中隈遺跡
35　小郡官衛遺跡
36　向築地遺跡
37　大崎小園遺跡
38　井上廃寺
39　干潟遺跡
40　焼ノ峠古墳
41　日の子神社古墳群
42　花立南麓窯跡群
43　大師堂1号墳
　　西下野1号墳
44　宮原古墳
45　馬田りんりん石古墳
46　持丸古墳群
47　鬼の枕古墳
48　古寺古墳墓群
　　池ノ上墳墓群
49　柿原古墳群
50　柿原野田遺跡
51　大願寺遺跡
52　小田集落遺跡
53　小田道遺跡
54　神蔵古墳
55　小隈出口遺跡
56　小田小塚古墳
57　小田茶臼塚古墳
58　石成古墳
59　狐塚古墳
60　堂ヶ尾廃寺
61　宮ノ上遺跡
62　秋野遺跡
63　中原前遺跡
64　出口遺跡
65　犬木遺跡
66　江藤遺跡
67　琴ノ宮遺跡
68　柿ノ上遺跡
69　行司田遺跡
70　梶原遺跡

※　1～25は九州横断道自動車道の調査地点名と対応す。

第３章　宮原遺跡の調査

第１節　遺跡と遺構の概要

宮原遺跡Ｂ・Ｃ地区では竪穴住居跡30軒，掘立柱建物跡30棟を主体に方形竪穴や土壙・溝等が出土している。一部，５世紀に含まれるものもあるが，多くは６世紀後半～８世紀に含まれ，中世に下ると思われるものも存在する。一つは，この遺跡の東隅の問題である。宮原遺跡は６世紀後半～８世紀の村落遺構が主体を占めるが，この時期の遺構は竪穴住居跡では10号竪穴住居跡，掘立柱建物跡では１号掘立柱建物跡より東への拡がりを認めることはできず，調査区内での６世紀後半～８世紀の村落遺構の東限はこのあたりに求められる。二つ目は，５世紀代の遺構である。この時期の遺構は１～３号竪穴住居跡・溝１であるが，この溝の西側に１号竪穴住居跡が，東側に２・３号竪穴住居跡が存在する。よって，溝１はこの時期の集落を限る溝ではない可能性をはらんでいる。また，この３軒の竪穴住居跡は低台地の縁辺部近くにあり，宮原遺跡Ｄ地区市道部分でもこの時期の竪穴住居跡は台地の縁辺部近くに検出した。このことから，５世紀代の遺構は本調査区の南東に拡がるものと思われる。三つ目は，遺跡の下限の問題である。宮原遺跡は先述のように６～８世紀代のものが主体を占めるがＢ地区で中世に下ると思われる遺構（土壙４等）が存在し，本遺跡の下限はこの時期に求められそうである。

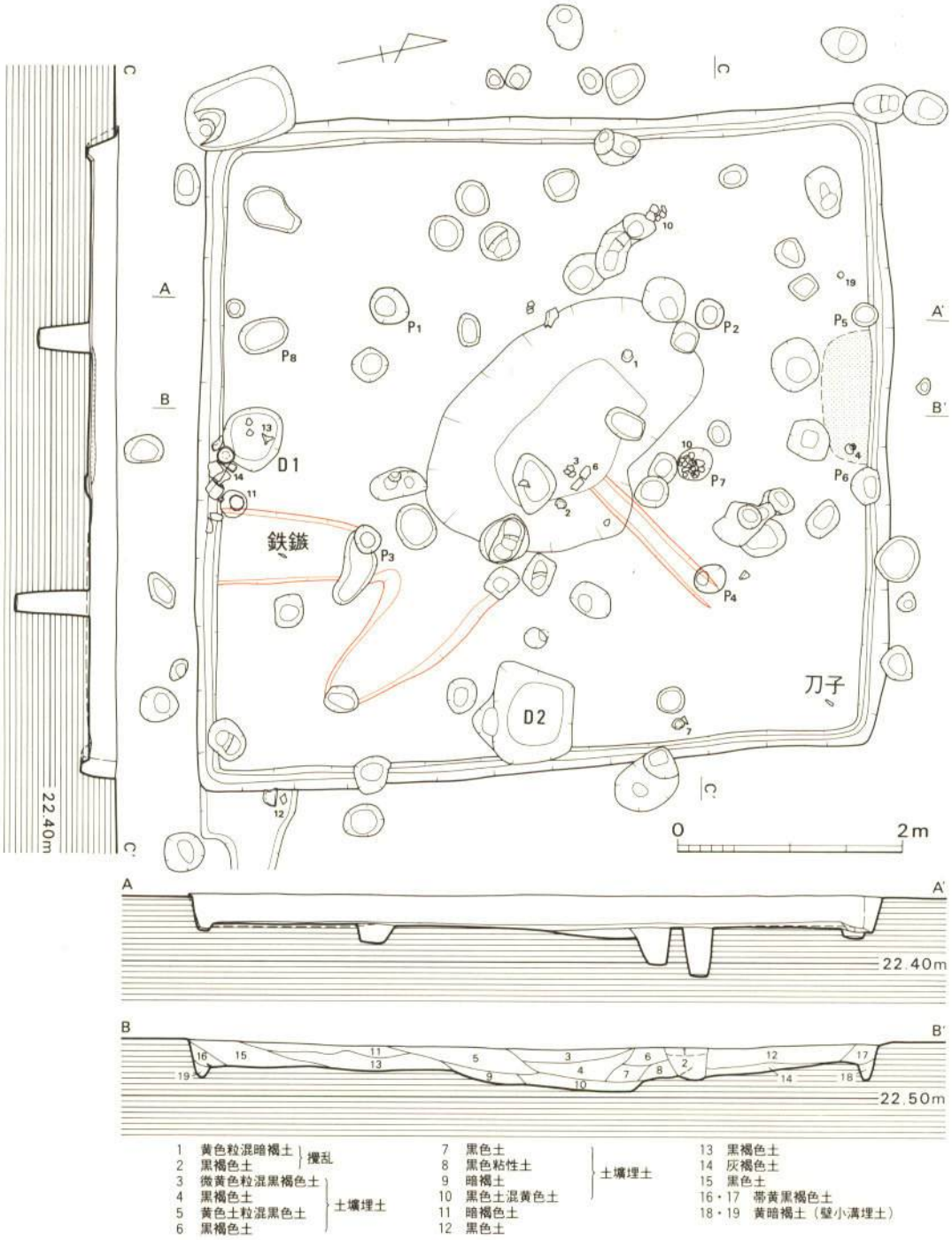
この地区は，宮原遺跡の拡がりと時期の問題についてその一部ではあるが明らかにできるところである。以下，各遺構について記述する。

第２節　遺構と遺物

１　竪穴住居跡

１号竪穴住居跡　（図版８・９，第４図）

Ｂ区東北端で検出し，本遺跡の最東端に位置する。南北辺６ｍ，東西辺5.8～６ｍの菱形に近い方形を呈する。ほぼ中央に，奈良時代に土壙が掘り込まれ，壙底は住居の床面下に及んでいる。竪穴住居跡の壁高は平均25cm程で遺存状態は割と良い。覆土は自然に埋没した状況を示している。床は貼床を行い，その厚さは約２cm程で直下は地山である。周壁に沿って壁小溝を巡らす。その深さは10cm前後で断面は逆台形を呈する。主柱穴はＰ１～Ｐ４を想定しているが，Ｐ３については不明な部分がある。宮原遺跡では主柱穴は壁に並行するが，この竪穴住居跡ではＰ３の位置がやや内側にあり，また，浅く，主柱穴としてふさわしくない。よって主柱穴Ｐ３は他の主柱穴とくらべて疑問な部分が多く残る。主柱穴として確定できるのはＰ３を除くＰ１・２・４だけである。つぎに，屋内土壙は東壁際のＤ２か南壁際のＤ１か苦慮するが，土器



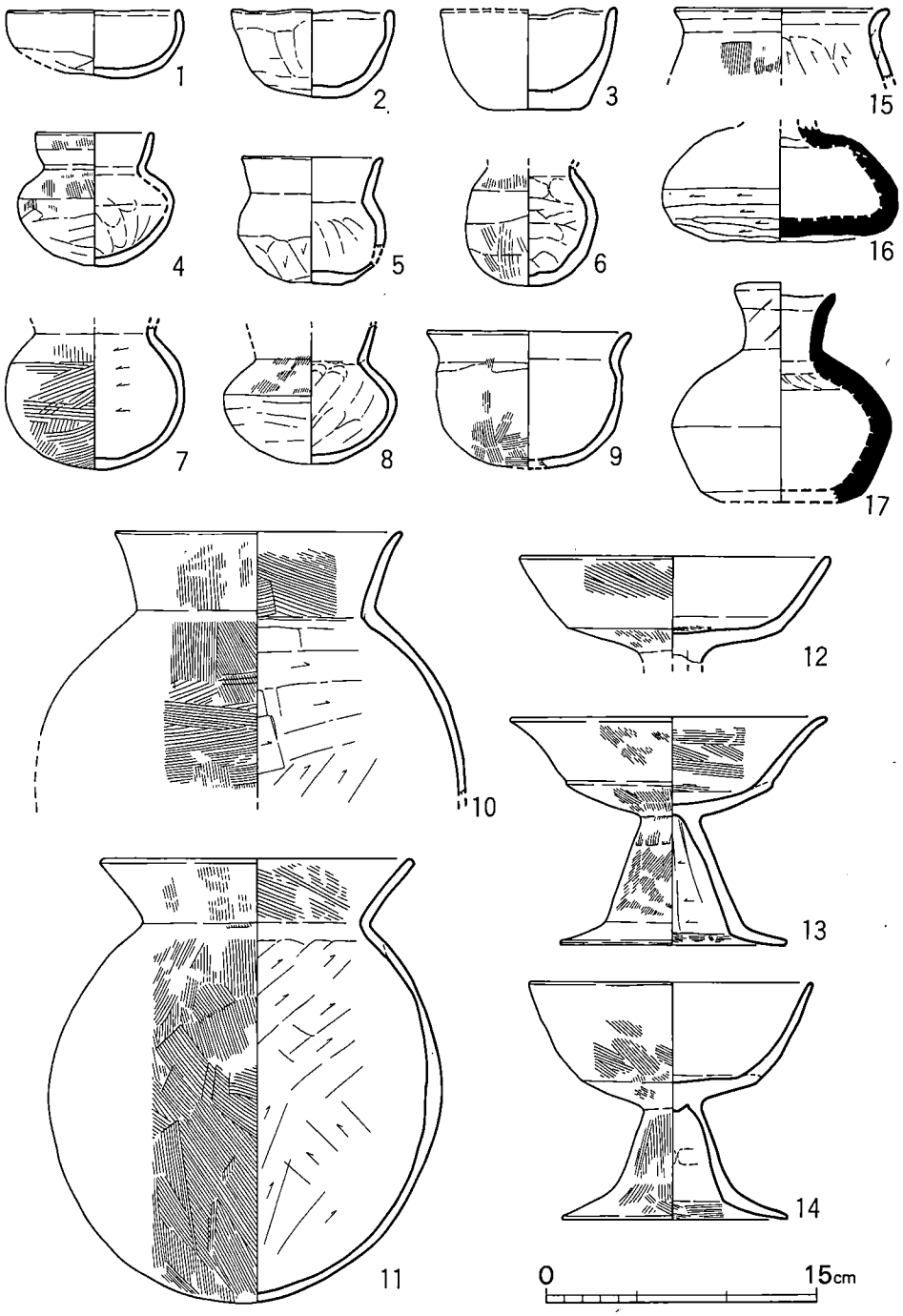
第４図　１号竪穴住居跡実測図(1/60)

の出土状態からＤ１を屋内土壙と想定する。また，北壁中央に沿って東西幅1.2m，南北0.5m程の部分がわずかに高くなっている(第４図アミの部分)。その両脇に柱穴状のピットが一対(Ｐ５・Ｐ６）あり，入口かと思われる（Ｐ５－深さ10cm，Ｐ６－深さ30cm)。

出土遺物　(図版29・38・39，第５～８図)

土師器・須恵器・鉄刀子・鉄鏃・砥石が出土している。１～３・６・15～17は奈良時代に掘り込まれた土壙から，他は本竪穴住居跡からの出土品である。このうち，屋内土壙と考えるＤ１周辺で出土した11・13・14，Ｐ７埋土真上で検出した10，北壁寄りの床面真上に置かれた状態で検出した４，19は本竪穴住居跡に伴うと考えている。鉄器では，床面真上で検出した刀子（Ｔ２）は伴うと考えるが，鉄鏃（Ｔ１）は床面下層から出土し，他の鉄鏃とともに本竪穴住居跡に直接伴うものではないと考える。

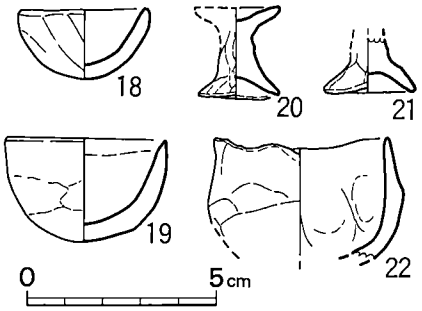
土師器（１～15，18～22)　１は径９cmの坏で，底部付近はヘラ削りされた精良品である。２・３は手捏風の小型の椀で，径は10cm弱である。ともに細砂を多く含み，焼成は良い。４～８は小型の坩で，体部外面の調整はハケ目・ヘラ削りを行い，内面はナデている。４の胎土は精良だが５～８は砂粒を多く含む。焼成は良い。９は小型の甕で復原口径11cm強を計る。胎土・焼成とも良好で，外底面に黒斑が残る。10・11の甕は図の状態でほぼ完形である。10は口径16cm，現存高15cmで口縁部内外面と体部外面をハケ目調整し，体部内面はヘラ削りを行う。胎土は砂粒を多く含み，焼成良好で褐色を呈する。11は口径17.5cm，器高24.5cmで内外面にススが付着している。調整・胎土・焼成は10と同様である。12～14の高坏は各々異なった形状を呈する。12は脚部を欠くが，坏部の口縁はほぼ直線的に外傾し，底部は平坦である。外面はハケ目調整をするが内面はナデ・ヨコナデを行う。13は口径17.5cm，底径・器高とも12.6cmを計るほぼ完形品である。坏部の口縁は外反し，底部はやや内彎しており12とその形状を異にする。ハケ目を多用し，脚部内面はヘラ削りを行う。坏部の内外面にはススが付着している。14は口径15.8cm，底径12.6cm，器高13.2cmを計るほぼ完形品である。坏部の口縁はやや内彎し，底部は平坦で椀状を呈し，12・13と比べ坏部の全体に占める割合が大きい。外面はハケ目を多用し，坏部の内外面はナデ・ヨコナデ，脚部内面はヘラ削りを行う。また坏部と脚部の接合はソケット状に行い，その部分は出ベソ状を呈する。12もこのような接合法をとるかと思われるが，13は坏部と脚部を単に貼り合せただけである。３固体とも，胎土は砂粒を含み，焼成良好で茶褐色～黄茶褐色を呈する。15～17は先述した本竪穴住居跡が埋没した後に掘りこまれた土壙から出土したものである。15は小型の甕で通常カマドの支脚として使われるものである。18～22は手捏の土器である。20・21は器台，18・19・22は鉢状のもので18・19を除いて作りは粗い。５個体とも胎土は緻密であり，焼成良好で茶褐色～黄茶褐色を呈する。祭祀の土器と思われるが，18を除いて埋土中からの出土であり，また，18も確実に本竪穴住居跡に伴うとは言い切れず，これらは廃棄された可能性が強いと思われる。



第5図　1号竪穴住居跡出土土器実測図①(1/4)

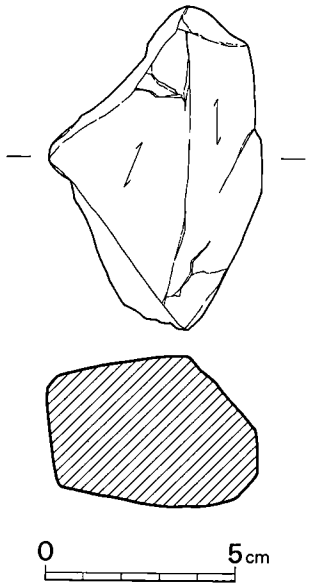
須恵器（16・17）　器壁は厚手で，焼成良好で茶褐色～黄茶褐色を呈する。

鉄製品（1・2・6）　1は刀子で，木柄の部分を除いて完存する。現存長10cmで，鉄の部分は全長9cmと推定する。2は鉄鏃で完形品である。全長9.2cmである。貼床面下より出土した。6は鉄鏃の茎で覆土中より出土した。

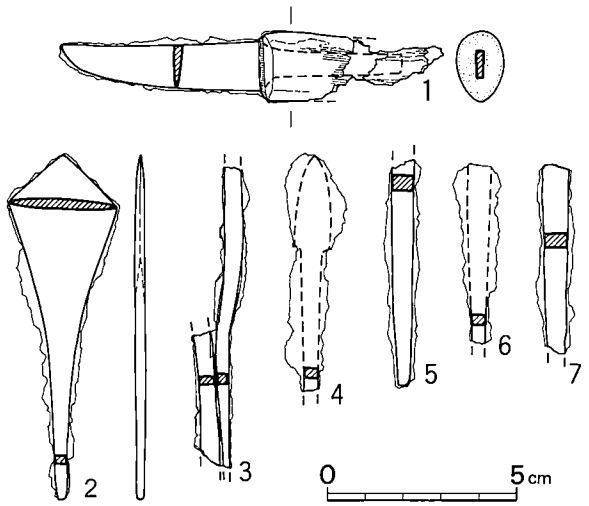


第6図　1号竪穴住居跡出土土器実測図②(1/2)

砥石（図版38，第7図）　P8と壁小溝の間の床面近くから出土した砂岩製の荒砥である。図の面と裏面の計3面が使用されている。割れた面を見ると，火を受けた後に割れたようである。本住居に伴わず，住居を廃棄後，直ちに土砂と共に埋没したようである。



第7図　1号竪穴住居跡出土砥石実測図(1/2)



第8図　1・3・27号竪穴住居跡出土鉄製品実測図(1/2)

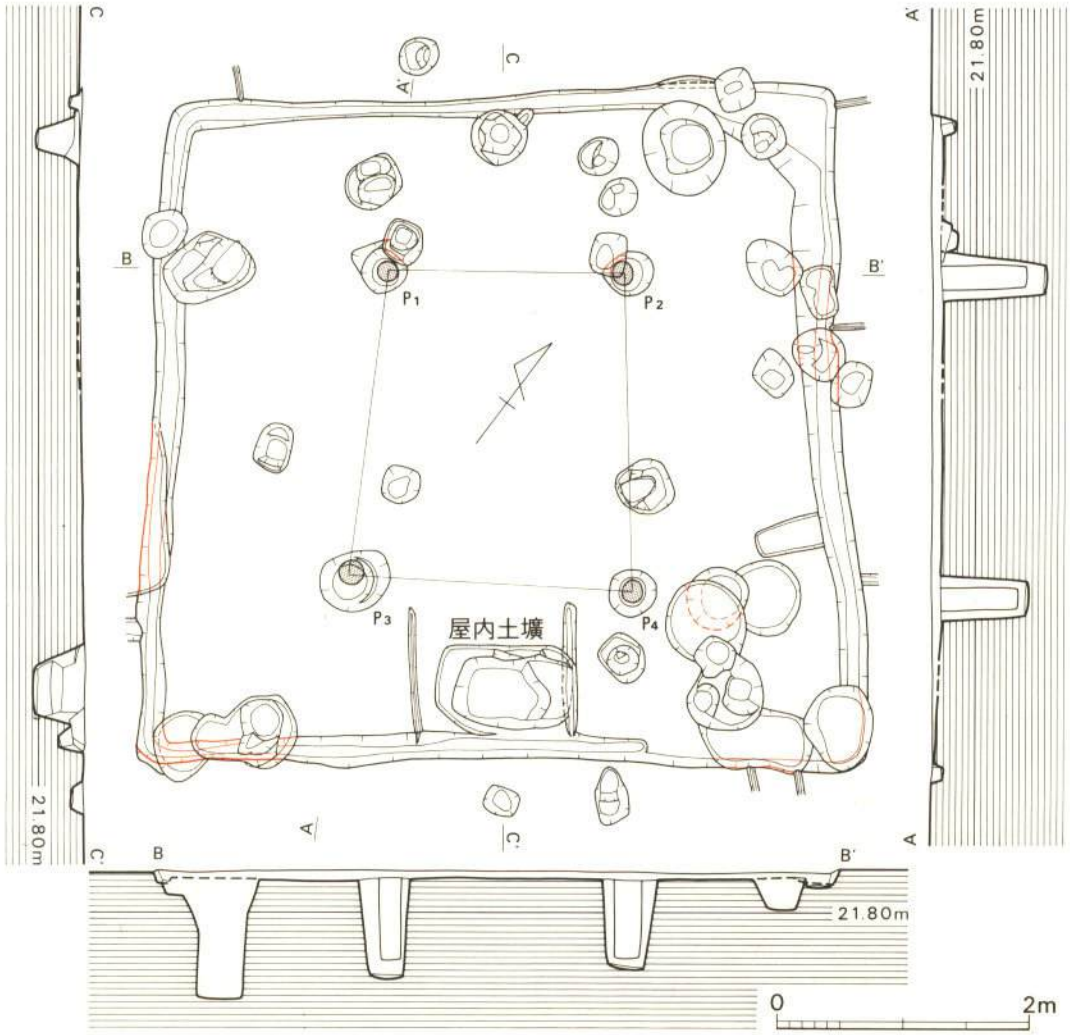
2号竪穴住居跡　（図版10～11，第9図）

C区東端で検出した。3号竪穴住居跡を建てる時に削平され，壁はほとんど残らない。屋内土壙がある南東壁は長さ5.8m，他の三壁は5.2～5.3mを測り，平面プランは略台形を呈する。主柱穴はP1～P4で，各主柱穴を結んだラインは壁とほぼ平行であるが，P1だけP2寄りに位置し，P1～P3ラインだけは壁と平行ではない。支柱穴については不明である。南東壁の中央に屋内土壙があり，をの両側に幅5cm，長さ1mの小溝を検出した。屋内土壙は2段掘

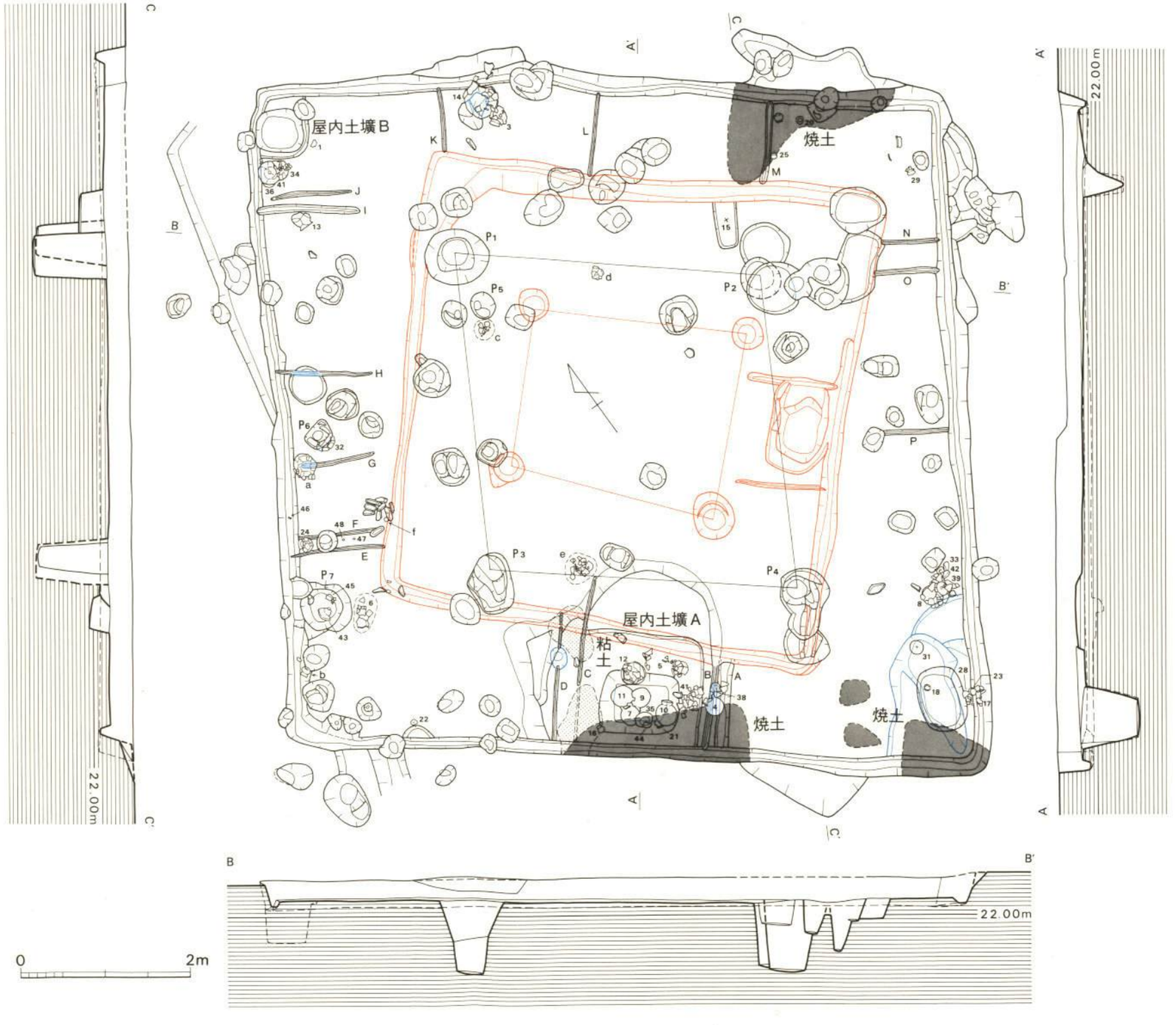
りになっており，住居床面下５～８㎝に不整形のテラスがあり，木等で蓋をしたものと思われる。先述の小溝のうち北側のものは幅広く図示しているが，これは掘り間違えたもので本来は細い。入口の施設の一部ではないかと考えている。本竪穴住居跡に伴う遺物はない。

３号竪穴住居跡　（図版10～17，第10～14図）

２号竪穴住居跡の向きを90度西側に振って，拡張して建て替えたものと思われる。屋内土壙のある西南壁が一番長く8.3ｍを測り，他の三壁は長さ８ｍでほぼ菱形を呈する。主柱穴はＰ１～Ｐ４で，各主柱穴を結んだラインと壁は平行で平面形は住居と同様に菱形である。周壁に沿って壁小溝を巡らし，壁際は周壁に直角方向に多数の間仕切溝を配して区画している。屋内土壙は西南壁中央（Ａ）と北隅部（Ｂ）の計２ケ所にある。壁際の覆土下層や土壙Ａ埋土下層



第９図　２号竪穴住居跡実測図(1/60)



第10図　3号竪穴住居跡実測図(1/60)

に多量の焼土が検出されたが，焼土や炭化材は壁際付近にしか存在せず，床面で検出した土器等も焼けておらず，本竪穴住居跡は炎災に遭ったのではなく，焼土や炭化材は投棄されたものである。

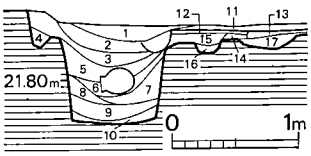
屋内土壙Aの存在する部分は土を貼って床面より10cm程高くして掘り込んでいる。その掘り方は二段掘りで，一段目は長辺1.4m，短辺1.2～1.3mの長方形プランで，深さは6～8cmである。これは木蓋を設置するためのものであろう。二段目が土壙本体で長軸93cm，短軸72cm，深さ約70cmを測る。この中に甕・高坏が転落した状況で出土し，壙底との間には焼土を含む埋土以外は何も検出していない。この事から，これらの土器は土壙Aの木蓋が腐食して転落したものと考えてよかろう。その際，これらの土器がほぼ完形を保っていることは，土器を中心とした他の生活用具の住居内部における保管のあり方と密接に関わってくる。転落したこれらの土器と土壙Aのすぐ東側及び北側の土器等の出土状態から，ほぼ完形の5・7・9～12・16・21・41・44は木蓋の上に置かれたものと推測され，割れて散乱したものは床面よりも高い所，すなわち，棚状のものに置いていたのではなかろうかと思われる。次に，土壙Aの両側に細い間仕切溝が2条ずつ計4条存在する。これらは粘土・焼土を除去した後に検出した。2号竪穴住居跡例と在り方が同様であり，その機能も似たものであったろう。

屋内土壙Bは北隅近くの北西壁に接して存在する。屋内土壙Aと同様に木蓋をかぶせていたと思われる。土壙本体は上端で長辺1.1m，短辺1m程の丸味を持った方形を呈し，深さは46cmである。この上に蓋をしたようで長辺1.4m，短辺1.2m，深さ5cm程の掘りこみがある。その掘りこみに接するように，高坏の脚部をはずして坏部のみにしたものを3点伏せて置いている。この土壙の南側に2条の間仕切溝があり，屋内土壙Bの一隅を区画していたものと思われる。

屋内土壙A・Bとも，後にはいり込んだ出土品以外に何も検出していない。

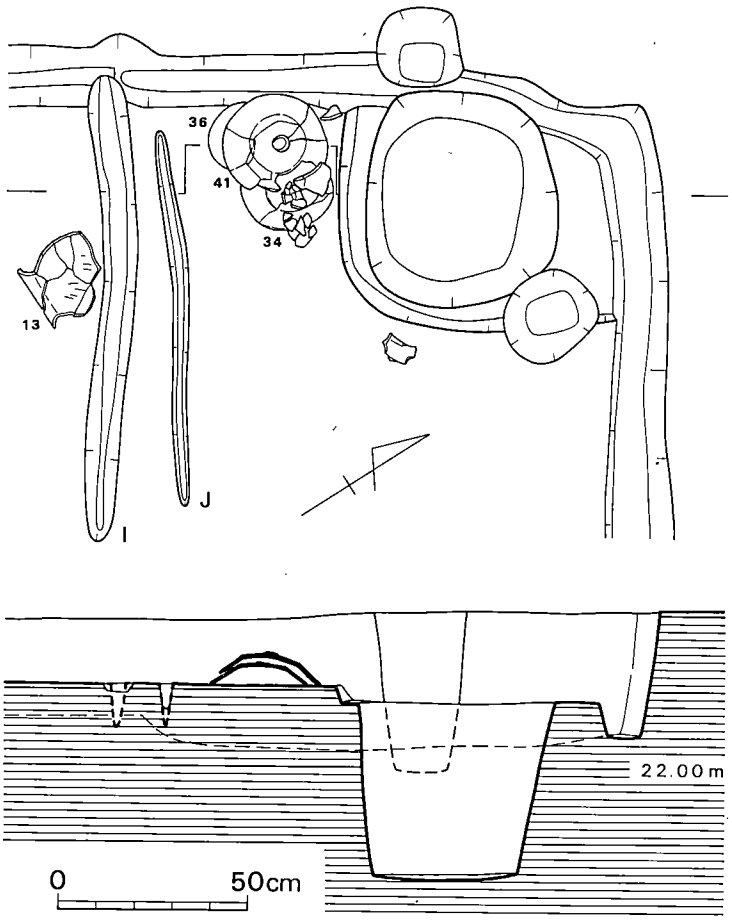
次に本竪穴住居跡では壁に直行して床面に幅5cm弱（中には掘りすぎて幅広く図示したものもある），長さ1m，深さ10cm程の細い間仕切溝（A～P）16条を検出した。この断面は鋭い逆V字形をし，板状の物を打ち込んだような状況である。（図版17）その板状の物が一枚物であったのか否かについては遺構の遺存状況から即断は難しい。が，間仕切溝の平面プランは直線的であることから一枚の板状のものであった可能性は低くないと考える。次に，間仕切溝の機能・性格についてであるが，それは後日に期するのでここでは触れない。

さて次に，北西壁寄りに検出した石組状遺構がある。それは長さ20cm弱の両端の丸い方柱状の自然石を無造作に置いた状況

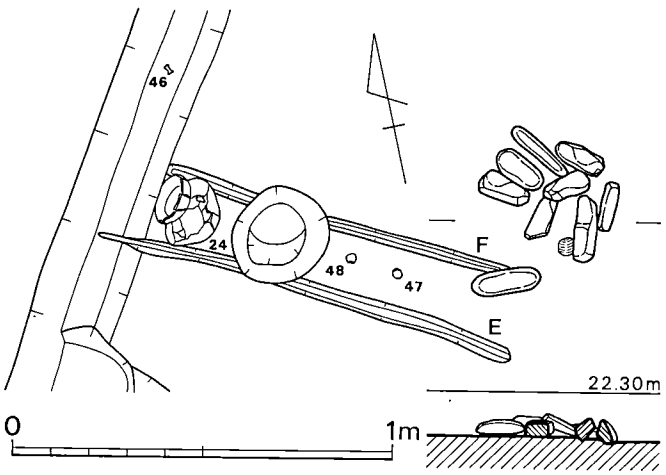


1 黒褐土
2 暗褐土（焼土を含む）
3 黒色土
4 黄色微粒子混暗褐土（3号住周溝埋土）
5 灰黒砂質土（粘土を含む）
6 黒色土（灰を含む）
7 焼土・黒褐色土
8 焼土・粘土
9 暗褐土
10 黄褐砂質土
11 黄褐土
12 暗褐粘質土
13 黒褐土
14 黄褐砂質土
15 暗褐土
16 黄褐砂質土混黒褐土
17 濁横褐土

第11図　3号竪穴住居跡屋内土壙A土層図(1/60)



第12図　3号竪穴住居跡屋内土壙B実測図(1/20)



第13図　3号竪穴住居跡石組実測図(1/20)

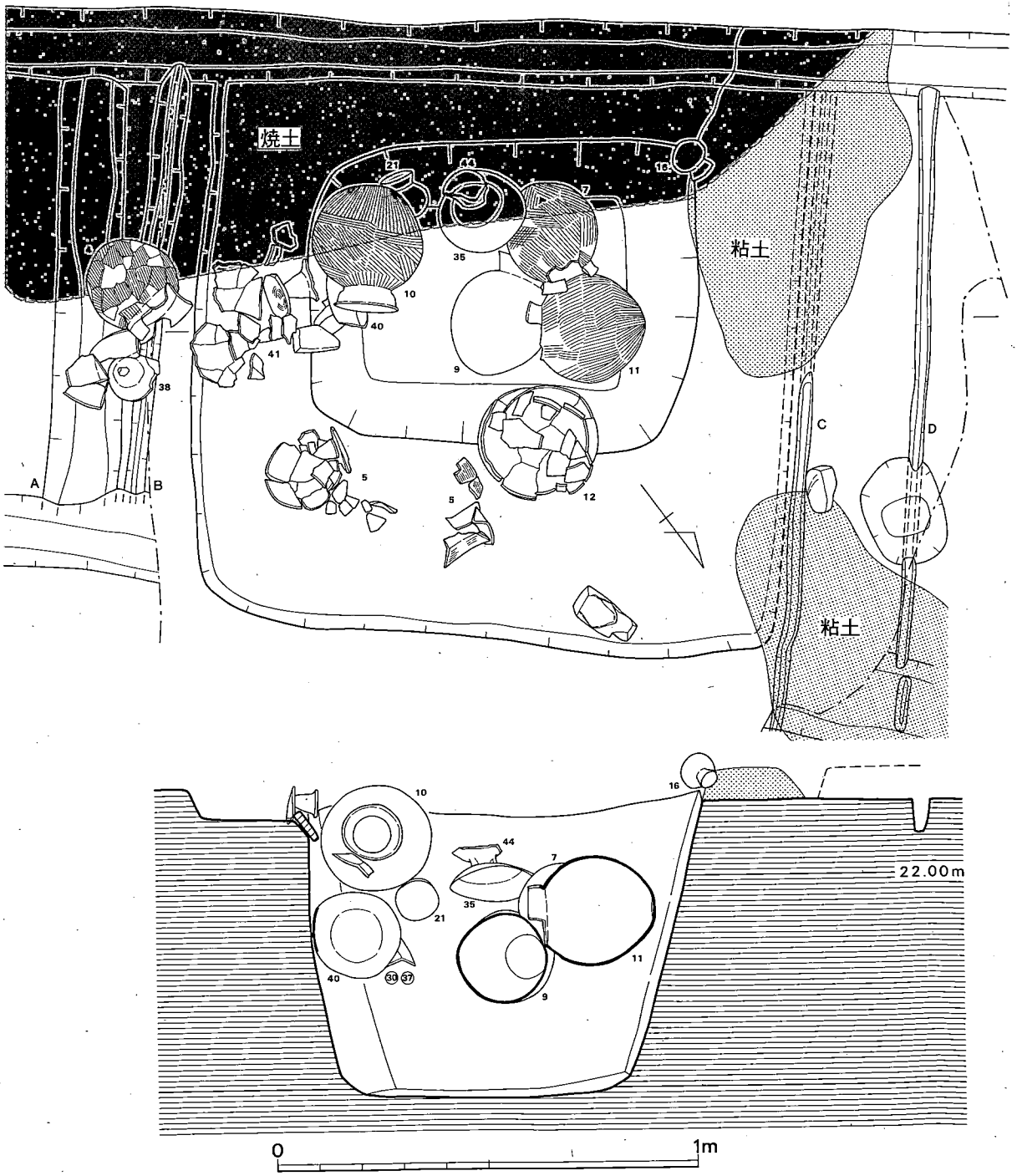
で検出した。8個の石はまとまっているが，他に間仕切溝F先端に1個，下層の2号竪穴住居跡の西隅上に2個と散乱している。この石組状遺構の付近には祭祀に関係すると思われるミニチュア土器が4個体出土している。この遺構は祭祀行為に関するものと考えられる。

出土遺物　(図版29～33・38・39，第8・15～20図)

床面から多量の土師器と須恵器が1個体出土している。図示できるのは48個体で甕・高杯・坩が主体を占める。西・南側の壁際付近で検出したものが多く，なかでも，屋内土壙Aのまわりに集中している。

土師器　(1～12，14～48)

甕（1～12）　1は屋内土壙Bのすぐ西側床面で検出した破片資料で，本住居に直接伴うものではない。図は反転図で復原口径14.8cmを測る。2・7・9～11は屋内土

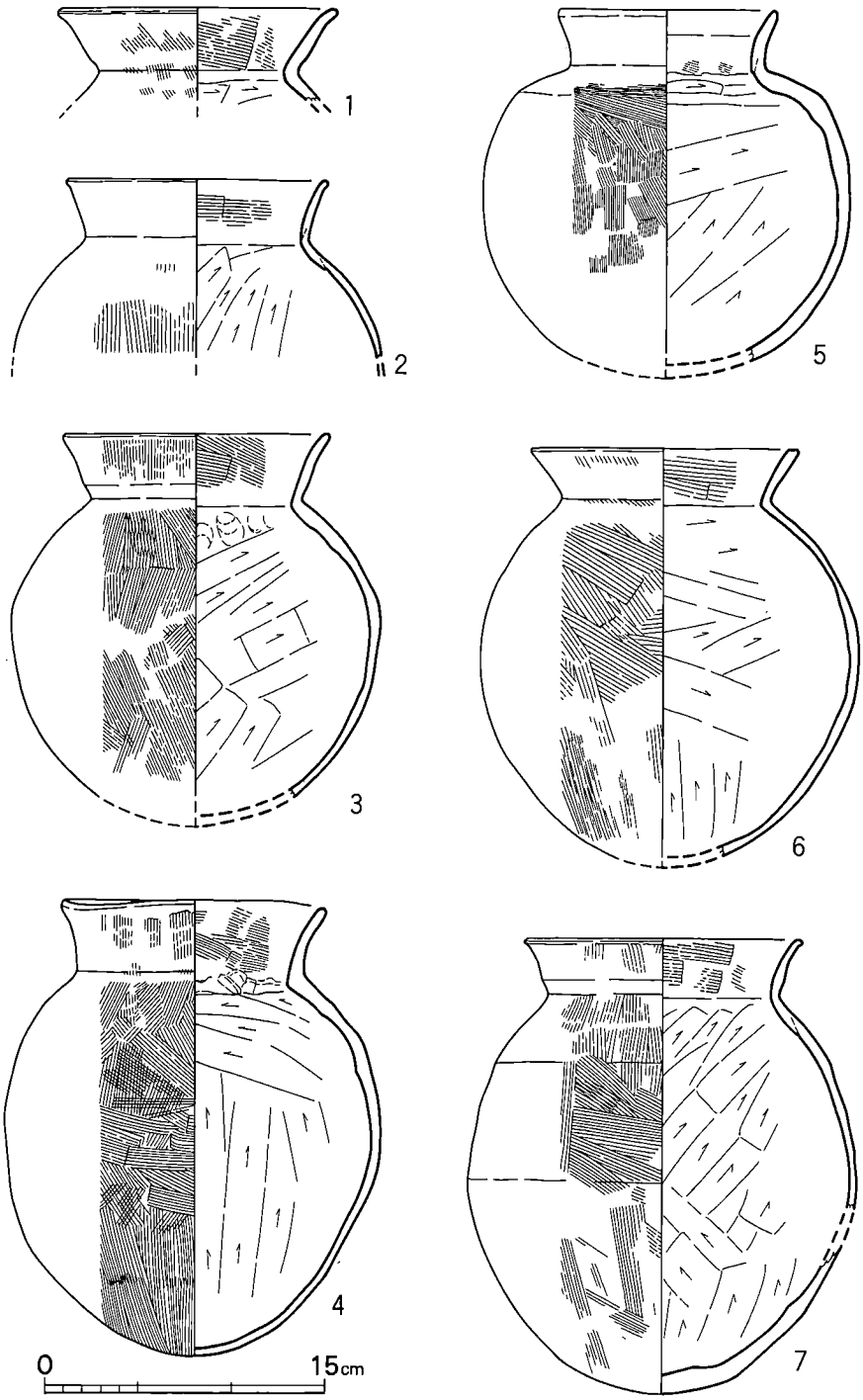


第14図　3号竪穴住居跡屋内土壙A実測図(1/15)

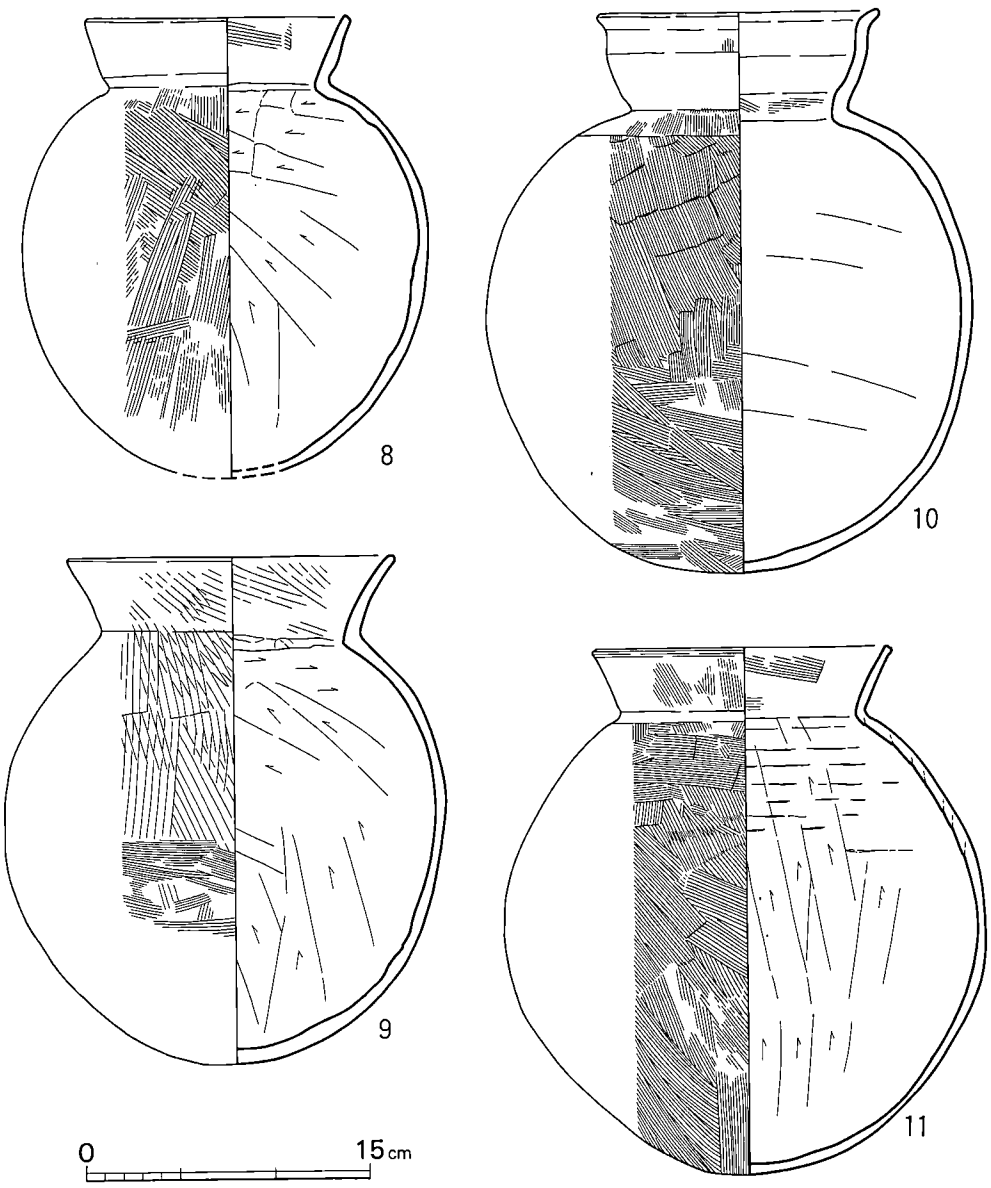
壙A埋土中から，5・12は木蓋上から，4は屋内土壙A東の床面で検出した。屋内土壙Aは土層図（第11図）を見れば明らかのように，粘土・焼土の層の上に9の甕があり，もともと土壙内に置かれたものではない（粘土・焼土層より下層では何も出土していない）。2は反転図で復原口径14cmである。7はほぼ完形で胴部内面はヘラケズリ，他の部分はハケ目調整を行っている。口径15cm，器高24.3cmである。9はほぼ完形で胴部内面はヘラケズリ，他の部分はハケ目調整を行い，さらに，口辺部は強いヨコナデを行っている。そのため，口辺部は中位が内彎する。11は口辺部の過半を欠失するが，胴部はほぼ残る。胴部内面に粘土の継ぎ目を残し，縦位にヘラケズリを行っている。他の部分はハケ目調整を行う。復原口径16cm，器高28.3cmを測る。屋内土壙A内出土の甕はすべてススが付着している。4は口辺部の過半を欠失するが，胴部はほぼ残る。復原口径14cm，器高24.6cmである。他の甕と異なって器形に歪がひどい。5は反転図で復原口径11.6cm，復原高19.5cmである。他の甕の胴部は倒卵形を呈するのに対して，ほぼ球形を呈する。全体に作りが厚手で，口辺部の状況も“く”字状を呈する等，他の甕と違いが見られる。12は図上でほぼ完形に復原でき，復原口径18cm，同器高29.4cmを測る。作りはしっかりしており，丁寧な仕上げである。胴部下半の内面に指頭痕が残る。4・5・12ともススが多量に付着している。屋内土壙A内および周辺で出土した甕は総じて焼成は良好で，胎土は金雲母や細砂を多量に含む。3は間仕切溝Kのすぐ見側壁際で検出した。床面に密着し，土圧で割れた状況で出土した。底部をのぞきほぼ完形に復原でき，口径14.4cm，器高22cm程である。焼成は良好で，胎土に多量の細砂を含み，内外面にススが付着する。6は住居の西隅近くの床面で検出した。底部を欠失するがほぼ完形に復原でき口径14.5cm，器高24cm程である。肩部はヘラケズリにより薄くなっている。胎土・焼成とも3と同様で，ススが全面に付着している。8は南東壁の南側で33・39・42とともに出土した。底部を欠失するがほぼ完形に復原できる。口径14.2cm，復原器高24cmである。内外面にススが多量に付着する。

壺（14）　間仕切溝Kの東側の壁際で，覆土中から出土したが，一部の破片は床面に密着していた。全体の6割程を欠失しているが，口径17cm，器高38.5cmに復原できる。二重口縁の名残が見られ，肩はナデ肩で，胴部最大径が胴部下位にあたるため安定感がある。胴部上半部に竹管文を付す。胎土に多量の砂粒を含み，焼成良好で，外面にススが付着する。出土状態から，この壺は本住居に伴わない。

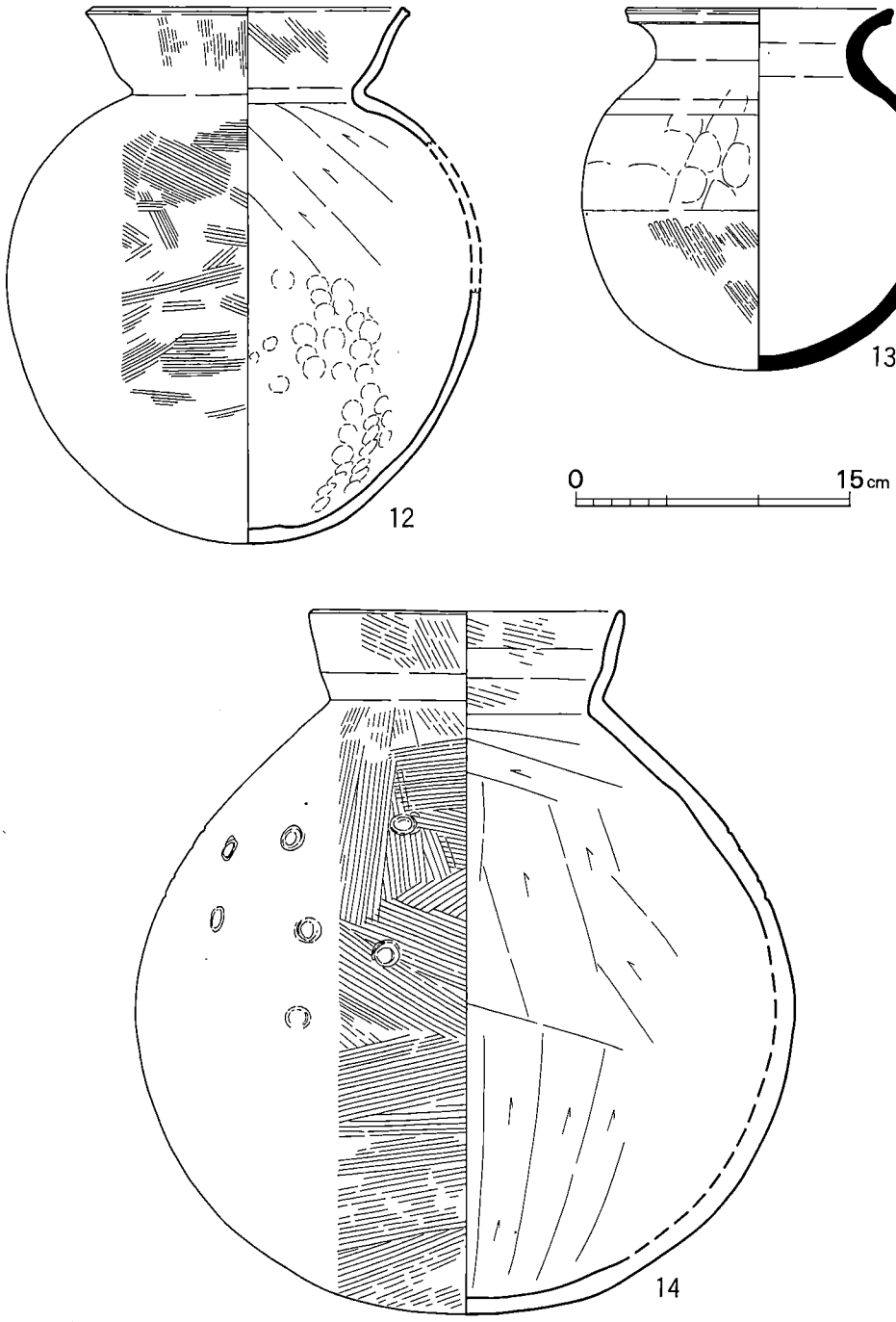
坩（15～24）　15は主柱穴P2の北側の小さな掘り込みから出土した小破片である。口径・器高は不明である。16・19・21は屋内土壙Aからの出土である。16は屋内土壙Aの西隅肩部で検出した。略完形品で口径7cm，器高8cm測る。胴部中位付近はハケ目調整をし，底部・口縁部はヨコナデを行う。19は甕10の下から出土したので，出土状態は図示していない。胴部の小破片で図は反転図で，復原の胴部最大径は12cm弱である。21は甕10の下で検出した。完形品で口径8.5cm，器高11.5cmを測る。胴部外面は粗いハケ目調整を行う。21は甕10の下に検出した。



第15図　3号竪穴住居跡出土土器実測図①(1/4)



第16図　3号竪穴住居跡出土土器実測図②(1/4)



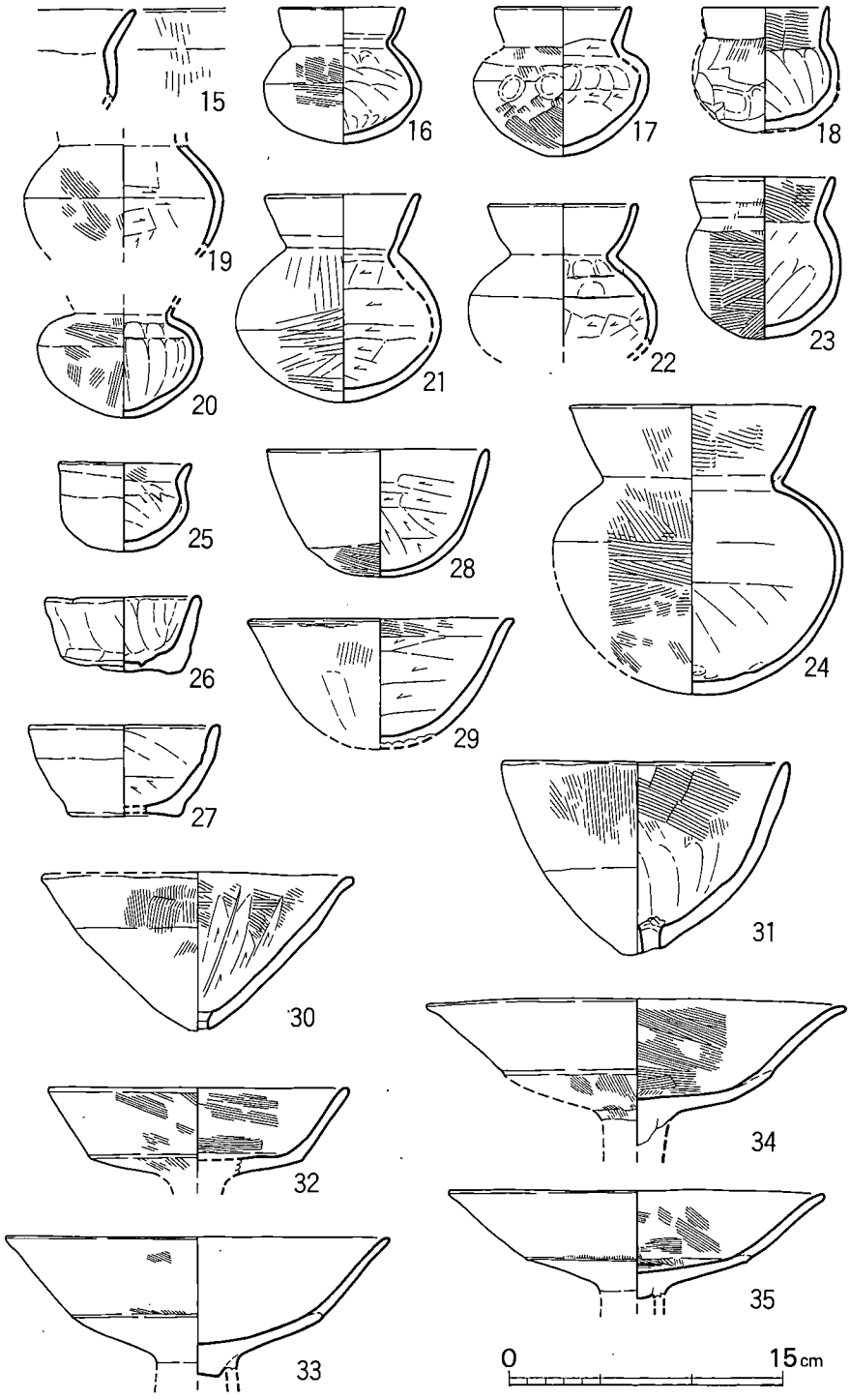
第17図　3号竪穴住居跡出土土器実測図③(1/4)

略完形品で口径8.5cm，器高11.4cmを測る。胴部外面に粗いハケ目を残す。17は住居南隅付近の壁小溝で検出した。略完形品で口径7.5cm，器高８cmを測る。口縁部は若干内彎し，端部は薄く仕上げられ，底部は尖底気味である。18は17のすぐ西で検出した。器面の剝落が著しい。口縁部は直立気味で頸部の締りは弱い。20は間仕切溝Ｍの東で検出した。口縁部を欠くが，胴部の形態は17に似ている。22は屋内土壙Ａと住居の西隅との中間の床面で検出した。底部を欠失するが，ほぼ，器形を知りうる。口縁部は内彎し，胴部はタマネギ形を呈する。ハケ目は全く認められない。23は17の横で検出した。略完形品で口径８cm，器高8.8cmを測る。器面にハケ目がよく残る。24は間仕切溝Ｅ・Ｆの間の床面で検出した。胴部の一部を除き略完形品で大型品である。作りは丁寧で器壁は薄く優品である。これらの土器は，おおむね，胴部内面はヘラケズリを行い，その他の部分はハケ目調整を行う。総じて，焼成は良好で，胎土に砂粒を多く含み，黒褐色～明茶褐色を呈する。

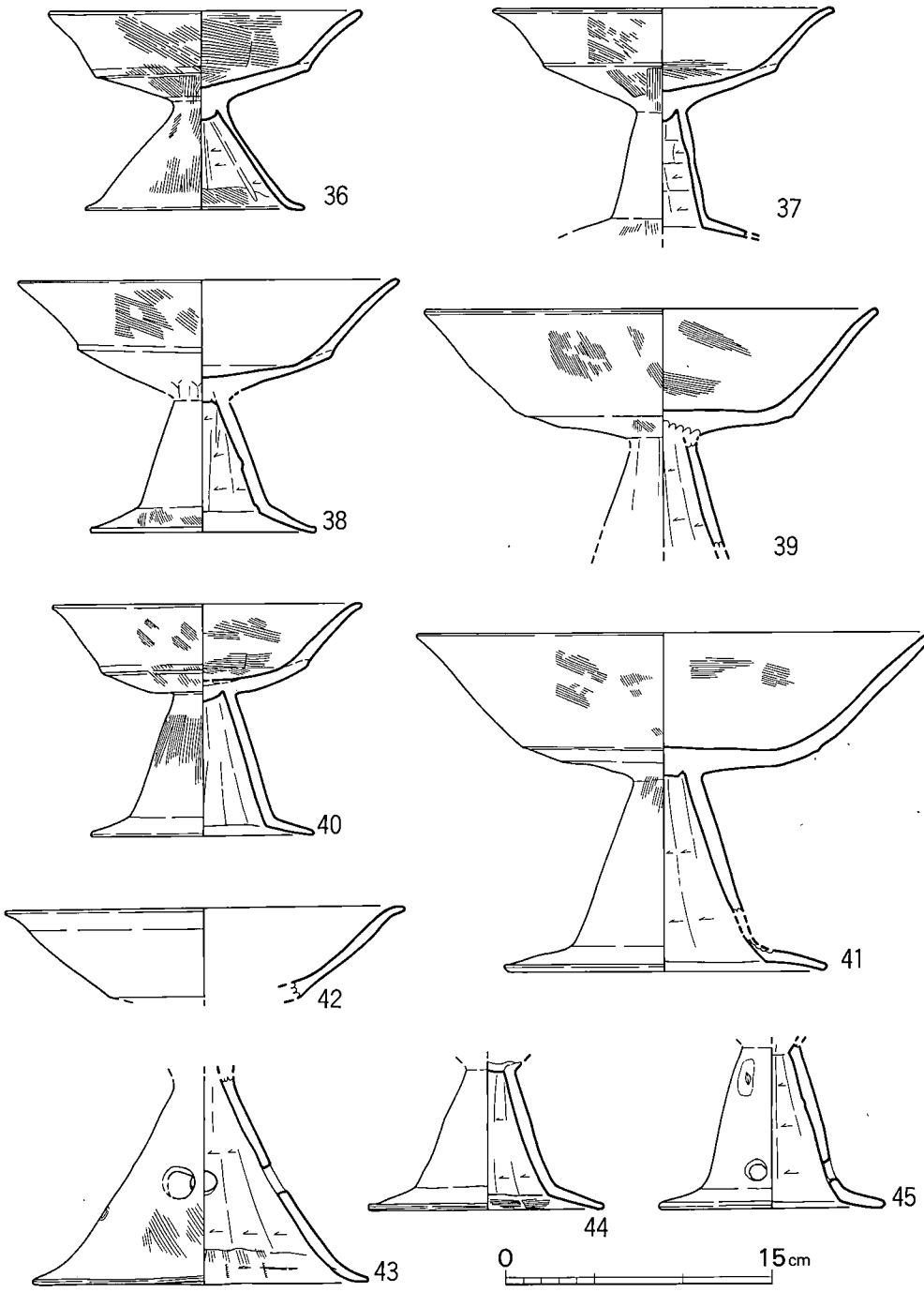
鉢（25～29）　鉢として良いかと思うものもあるが，器形的に３種ある。25は“く”字状口縁を有する丸底のもので，間仕切溝Ｍの東側で検出した。略完形品で口径7.3cm，器高５cmを測る。胎土に砂粒を多く含み，焼成良好で，明茶褐色を呈する。26は覆土中からの出土で略完形品である。手捏土器で底部を除いて器肉が厚い。胎土に細砂粒を少し含み，焼成は良好で黄灰褐色ををを呈する。27はＰ５から出土した小破片である。手捏的な土器で作りは粗い。胎土・焼成等は26と同様である。28は屋内土壙Ａの埋土中から出土した。過半を欠失するが，口径12cm，器高７cmに復原される。底部は丸底でハケ目調整を行う。内面の底部から口縁部下の範囲はヘラケズリ，他はナデ，ヨコナデ調整を施している。胎土は細砂粒を少し含む程度で，焼成良好にして黄褐色～暗褐色を呈する。29は住居の東隅の床面で検出した。小破片であるが，口径14.5cm，器高７cm程に復原できる。調整はヘラケヅリ・ハケ目により行う。胎土・焼成等は28と同様である。

甕（30・31）　ともに，鉢形土器の底部に一孔をうがったものである。30は屋内土壙Ａ埋土中より出土した口縁部を外側に少し折り曲げるが，体部から底部にかけては直線的で二等辺三角形を呈する。口径17cm，器高９cmである。底部付近を除いて内外面はハケ目調整を行う。31は住居の南隅近くの床面に検出した。完形品で，口径16cm，器高10.5cmを測る。30と比べて全体に丸味を帯び，口縁部も端部を丸くおさめるだけで，外に折り返すことはしない。上半部はハケ目調整を行い，下半部はナデている。両者とも，胎土の砂粒を多く含み，焼成は良好で，明茶褐色～灰褐色を呈する。

高坏（32～45）　34・36・41は屋内土壙Ｂの側の床面で検出した。脚部を外し，坏部を裏返しにして上記３枚を重ねていた。その状況から判断して，これらは確実に本住居に伴うものである。34は上記３枚のうち一番下に置かれたもので，脚部は無い。弥生時代終末頃の高坏の形態に似ており，古い様相を残している。口縁部外面をヨコナデする以外，ハケ目調整を行う。



第18図　3号竪穴住居跡出土土器実測図④(1/4)



第19図　3号竪穴住居跡出土土器実測図⑤(1/4)

胎土に砂粒を少し含み，焼成は良好で明茶褐色を呈する。36は上記３枚の真ん中に置かれていたものである。外されていた脚部はラッパ状に大きく開き，端部をわずかに折り曲げる。調整にハケ目を多用する。胎土に砂粒を多く含み，焼成は良好で薄い褐色を呈する。41は上記３枚のうち一番上に置かれていたものである。外されていた脚部を接合すれば略完形品になる。大型の高坏で口径29cm，器高18cmを測る。脚部内面はヘラケズリを行い，その他の部分は，ハケ目の上をナデている。細砂粒を多く含み，焼成は良好で明茶褐色を呈し，内外面に黒斑が認められる。35・37・38・40・44は屋内土壙Ａ埋土および周辺から出土した。脚部を欠失する35は，ハケ目調整の上をナデている。37は甕10の下で検出した。脚裾端部を欠失する。口縁部の外反具合を除いて坏部の作りは36に良く似ている。38は間仕切溝Ａ・Ｂ上で検出した。口径21.8cm，器高14cmに復原できる。細砂粒を多く含み，焼成は良好で明茶褐色を呈する。40は37とともに出土した。略完形品で口径17.8cm，器高13cmを測る。しっかりとした作りの高坏で，調整にハケ目を多用する。細砂粒を若干含み，焼成は良好で明茶褐色を呈する。44は35の上に検出した。脚裾部径13cm，現存高8.4cmを測る。32はＰ６埋土上で検出した。小破片で復原口径16.6cmである。ハケ目を多用する。33は南東壁南半部に検出した。坏部は略完形品で口径21cm弱である。細砂粒を多く含み，焼成は良好で明茶褐色をつる。39は33のすぐ南で出土した。坏部の形状は41に似る。口径は26cm程に復原される。細砂粒を多く含み，焼成は良好で明茶褐色を呈し，外面にススが付着する。42は33・39とともに出土した小破片で口径も正確にしがたい。43・45はＰ７の埋土上層から出土した。43の脚部はラッパ状に開き，４ケ所に円形の透し孔がある。45はエンタシス状の脚部で３ケ所に円形の透し孔がある。両者とも，胎土に細砂粒を多く含み，焼成は良好で明茶褐色を呈する。

手捏土器（46～48）　46は北西の壁小溝底で検出した。上端部径2.2cm，下端部径は２cm程，器高は３cmを測る。器台であろう。作りは粗いが焼きはしっかりしている。47・48とも間仕切溝Ｅ・Ｆの間の床面で検出した。器面が磨滅し，指頭痕は不明瞭である。47は口径3.8cm，器高3.7cm程，48はそれぞれ3.6cm，2.6cmを測る。

須恵器　(13)

間仕切溝Ｉの南床面で検出した。口径14.5cm，器高19.8cmに復原される。胴部下半にタタキ目が残るが，他の部分は磨り消している。細砂粒を少し含み，胎土は緻密である。焼成は極めて良好で，灰褐色を呈する。初期須恵器か，舶載品であろう。

以上，48個体の土器を図示した。出土状態図を作成して土器を取り上げたが，整理の途中で行方不明のものがあり，図示し得なかった。それは第10図中のａ～ｆの６個体で甕（ａ・ｄ・ｅ），坩（ｂ・ｃ・ｆ）の各３個体ずつである。さがし出して再報告する予定である。

鉄製品　（図版39，第８図―３～５）

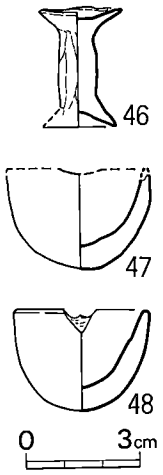
３点とも鉄製片で覆土中から出土した。４は鏃身かも知れない。　（児玉）

4号竪穴住居跡　（図版18，第21図）

2号住居の南方2mに位置する。切り合いつつも4～9号住居と1，2号方形竪穴が密集し，本住居はその中で最も東端にあたる。1号方形竪穴と5号住居に切られるが8号住居を切っている。中型規模で平面形態が隅円方形になると推定される。

残存状況は極めて悪く床面迄の埋土が1cm程であった。床面は一般的であり主柱間エリアが特に踏み固められている。主柱穴は床面でP_2，P_3，P_4の柱痕を確認したが，P_1は1号竪穴内の南側柱穴が妥当な位置と考えられる。本住居には壁小溝を巡らしていない。

カマドは北西壁略中央に付設しているが，両袖共削平され火床面の焼土範囲を確認したにすぎない。焼土が僅かに突出していることより，壁より若干突出したカマドであったろうか。



第20図　3号竪穴住居跡出土土器実測図⑥（1／2）

床面下層は主柱穴と堀り込みの有無を確認するに止まり，床面下層遺構は図示していない。

出土遺物　（第22図）

総出土量は皆無に等しい。本住居の時期を判断する資料としては1のみであり，床面下層より出土した。須恵器は何ら出土していない。

土師器（1）　坏か埦となろう小破片である。調整は内面底部より体部中程までと外面底部をヘラ削り，口縁部をヨコナデ，外面体部がナデを施す。細砂粒を多く含む胎土で，橙褐色を呈す。やや精良な作りである。

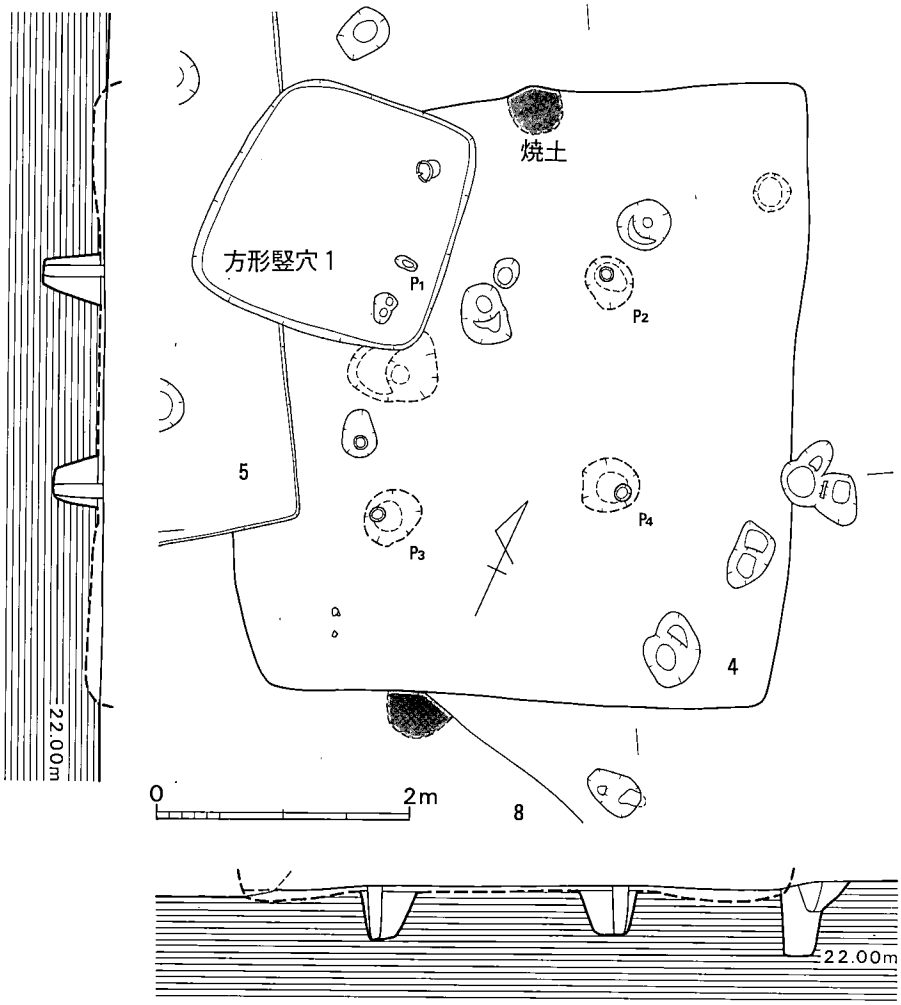
出土品では本住居の時期を決定出来ないが，切り合い関係を考慮すれば7号住居よりも若干古くなる7世紀後半以前となろう。しかし7号住居と略同方位をなすことから僅かな時期差と考えられよう。

5号竪穴住居跡　（第23図）

4号住居の西壁を切り，1号方形竪穴と6・7号住居に大半を切られているものの約半分程は農道下に伸展する。

残存状況は4号住居と同様不良で，埋土は3～4cm程であった。床面上では主柱穴P_4の柱痕を確認したにすぎず，壁小溝は検出し得なかった。なお主柱穴P_2は床面下層より掘り方を検出した。主柱穴間の距離と北東辺長より中型規模となろう。

出土遺物は皆無に等しく，図示可能な遺物はない。本住居の時期は断定し難いが，4号住居を切っていることと同住居と略同方位の壁面を有していることから4号住居より僅かに後出する時期が考えられる。

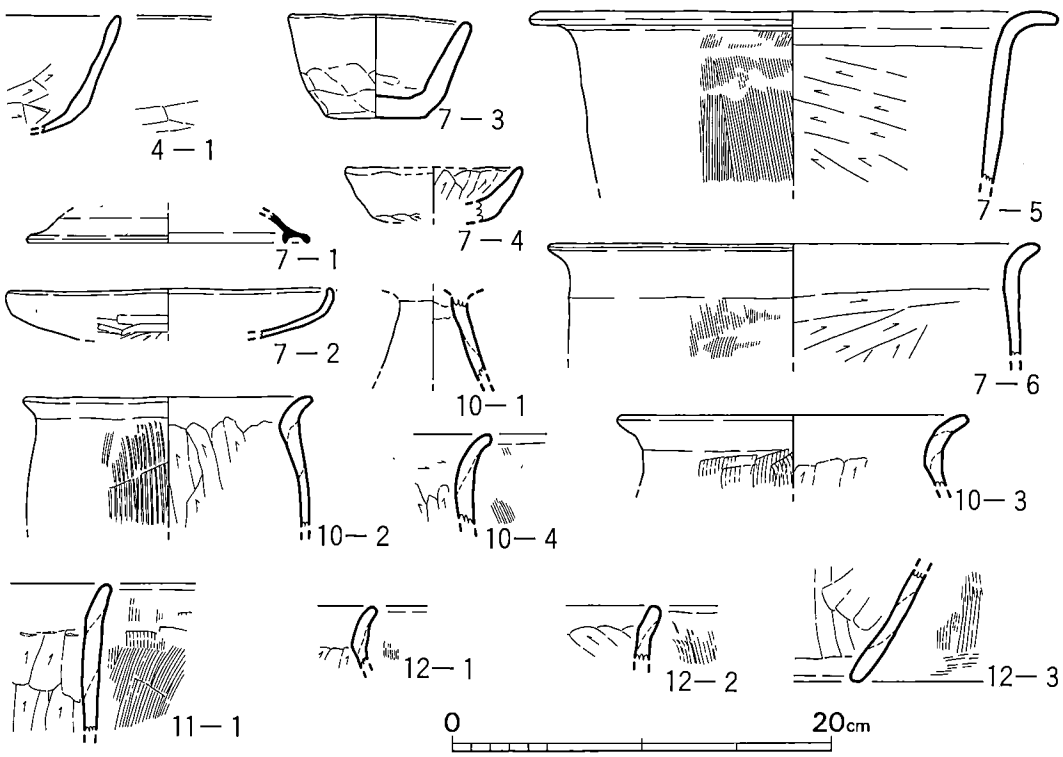


第21図　4号竪穴住居跡実測図(1/60)

6号竪穴住居跡　(第23図)

5・7号住居を切っているが，殆どが農道下に伸展し概略不明な住居跡である。埋土は黒色土で，約4㎝程で床面となる。床面上では壁小溝も検出できず，何ら付属施設等は認められなかった。床は貼床であることを確認したが，主柱穴の掘り方も調査区内には在しなかった。

出土遺物は土師器の小破片が僅少であり，図化に絶えうる品は一点も在しない。本住居の時期は切り合い関係から7号住居より新しくなる7世紀後半かそれ以後となろう。



第22図　4・7・10～12号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)

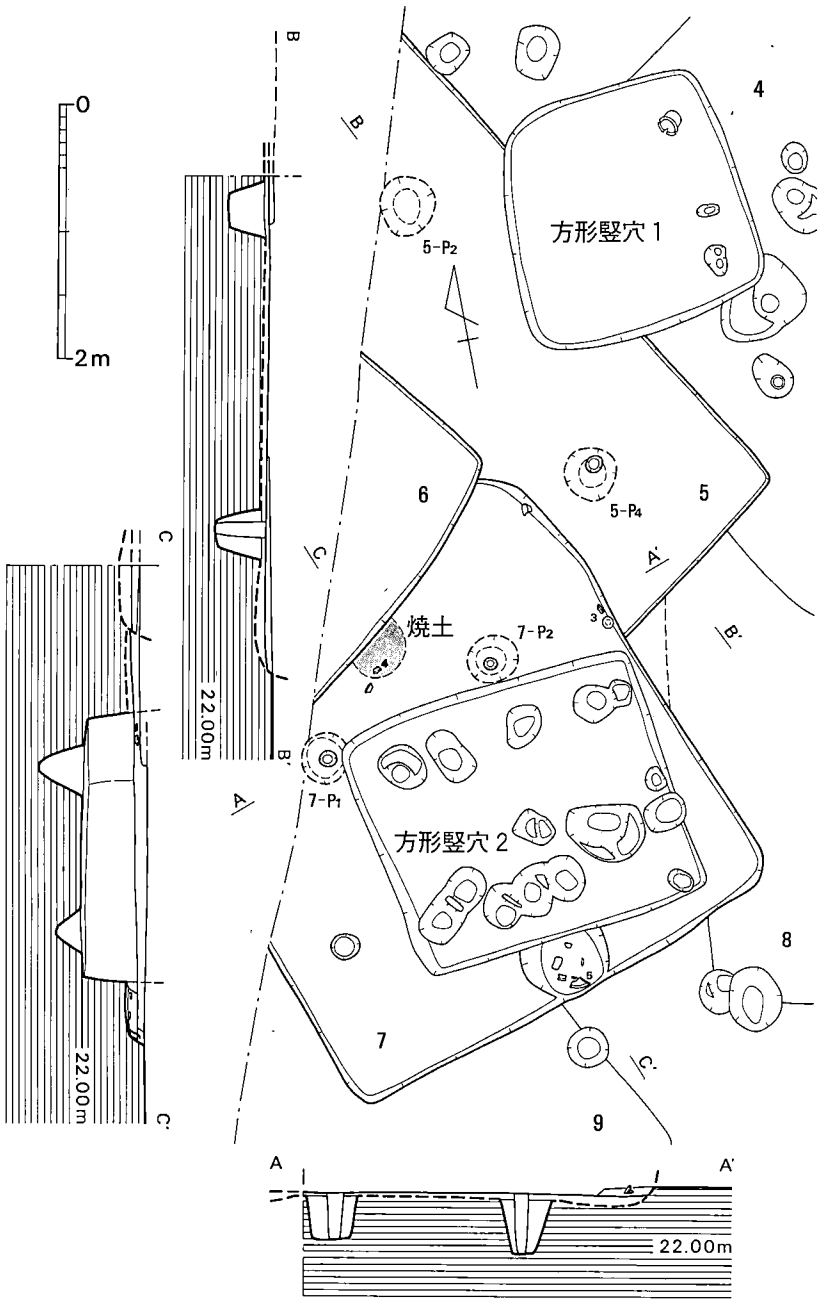
7号竪穴住居跡　(第23図)

6号住居にカマドを含む北壁を，主柱間エリアを2号方形竪穴に切られている。また北西部側は農道下に伸展し，5・9号住居を切っている。残存状況は隣接する住居と同じく不良であり，埋土は約5㎝程であった。規模は小型に属すると考えられ，平面形態は隅円方形となろう。壁小溝は検出し得なかった。主柱穴はP_1とP_2の柱痕を検出したが，P_3とP_4は2号竪穴で削平されたと考えられる。カマドは6号住居に一部切られており，両袖は在せず火床面の焼土範囲のみを確認したにすぎない。

カマド対面土壙　2号方形竪穴に一部切削されているが上端で東西0.68㎝と南北0.5＋α㎝を測り，平面形態が円形もしくは楕円形を呈するであろう。最深部が9㎝と浅く，壙内には5の甕が底面の僅か上方より出土した。壙内及び周辺に粘土は在しない。本土壙の性格については今回判断することを差し控えたい。

出土遺物　(図版34・39，第22・24図)

4～9号住居中では最も多く出土したが,相対的には僅少の部類に属する。4がカマド内火床面より，2が北東隅の壁際床面上より，3と8が東辺壁際床面上より，5がカマド対面土壙内



第23図　5～7号竪穴住居跡実測図(1/60)

より出土し，他は埋土中品である。2～4や7と8の手捏ねが出土しているので，何らかの祭祀行為がなされたと推測出来るが解明するまでに至らなかった。

須恵器（1）坏蓋の小破片で，復原基部径14.9cmを測る。調整はナデを施す。細砂粒を多く含む胎土で，くすんだ紫灰色を呈す。焼成は軟質である。

土師器（2～6）　2は復原口径17.3cmを測る皿の小破片である。口縁部は内彎気味となる。調整は外面底部をヘラ削り，口縁部をヨコナデ，内面はナデを施す。微砂粒を僅かに含む精良な胎土で，淡赤褐色を呈す。焼成は普通である。3はやや粗雑な作りで埦の完形品。口径9.7cm，器高5.5cm，底径5.4cmを測る。調整はナデとナデ上

げを施す。細砂粒を少し含む胎土で，橙褐色を呈すが外面に黒斑が認められる。焼成は良好である。4は復原口径11.2cmを測る坏の小破片で，底部は分厚くなる。調整は口唇部をヨコナデ，外面底部と内面をヘラ削り，外面体部はナデを施す。胎土は微砂粒と雲母を若干含む。明茶灰色を呈し，焼成は良好である。5は口縁部が大きく外反し，胴部は脹らまず底部にかけてすぼまる。復原口径28.0cmを測る甕片であろう。調整は内面が斜位のヘラ削り，口縁部がヨコナデ，外面が刷毛目を施す。胎土は細砂粒を多く，赤褐色粒を少し含む。橙色を呈し，焼成は良好である。6は復原口径26.0cmを測る甕片である。口縁は外反するが，胴部は僅かに脹らむタイプである。調整は5と略同となる。胎土は細砂粒を多く含む。橙色を呈し，焼成は良好である。

手捏土器（第24図7-7・8）　7は北東隅床面真上より出土した。口径4.3cmを測る椀形の精良品である。ナデ調整を施し，細砂粒を少し含む胎土である。暗茶褐色を呈し，良好な焼成である。8は復原口径4.9cmを測り，壺形となる小破片である。ナデ調整を施し，微砂粒を含むが精良な胎土である。赤褐色を呈し，良好な焼成である。小壺とも考えたが一応手捏土器として報告しておく。

本住居は7世紀中頃以降に比定出来るが，8世紀代までは下るまい。

8号竪穴住居跡　（第25図）

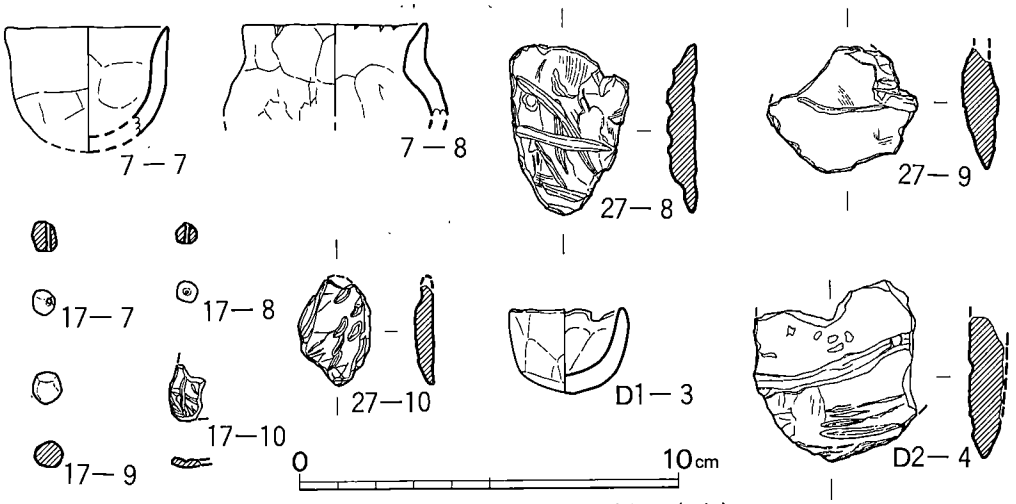
4・5・7号住居に切られ，検出時に床面の大半が露呈し，残存状況極めて不良な住居跡である。竪穴部と主柱穴の平面形態は逆台形状を呈し，中～小型の規模となろう。床面は一般的で主柱間エリアが特に硬化していた。カマドは北壁側略中央部に付設されているが，火床面の焼土範囲を確認したにすぎない。貼床下には主柱穴P_2，P_4と東壁間に土壙が在す。東西径1.5m，南北径1.18m，深さ19cmを測り，平面形態は隅円長方形となる。埋土は他の住居に付属する中央土壙と同じく，黄褐色粘質土に黒色土がブロック状に混入する。

出土遺物は土師器の小破片が僅少であった。本住居の時期は切り合い関係より7世紀後半が下限となろう。

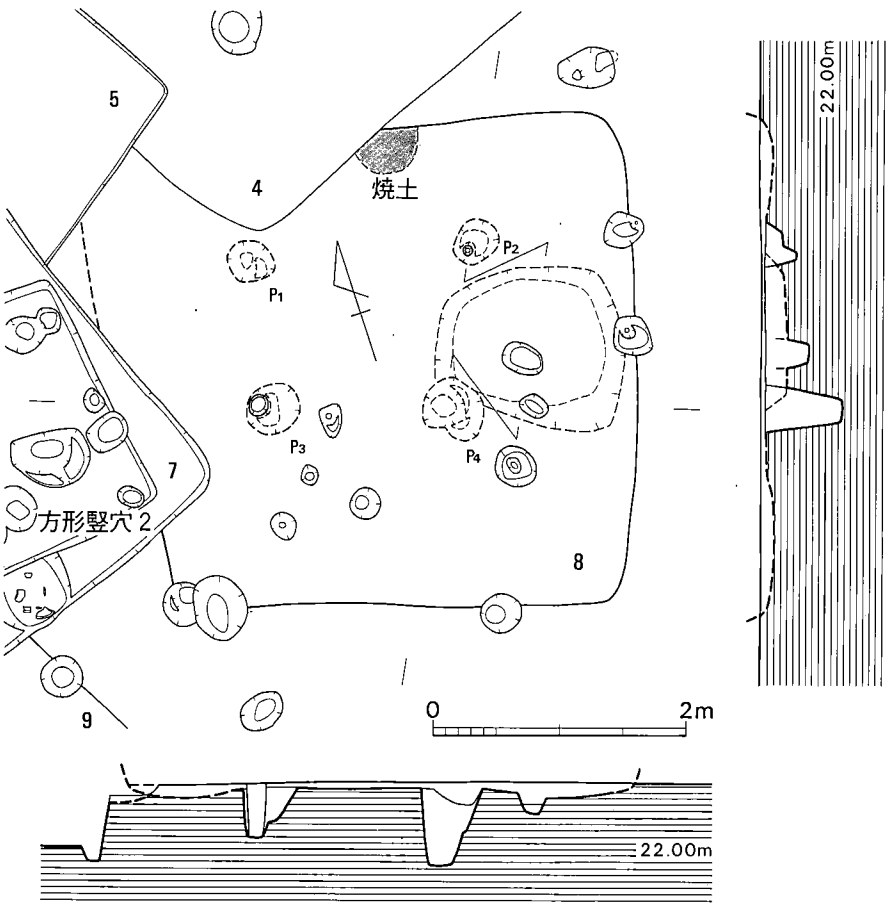
9号竪穴住居跡　（第26図）

7号住居に北東部を切られ，約半分程が農道下に伸展する住居跡である。本住居も検出時に床面が露呈し，残存状況極めて不良であった。主柱穴は床面上より2本の柱痕と7号竪穴住居内より柱穴1個の計3個を検出した。これら柱穴と南東辺長より中型規模の住居が推定される。壁小溝と他の付属施設は検出できなかった。

出土遺物は皆無に等しく，土師器の小片が僅かに出土したのみである。本住居もC地区の他の住居と同じく時期決定は出来ないが，7世紀後半が下限となろう。



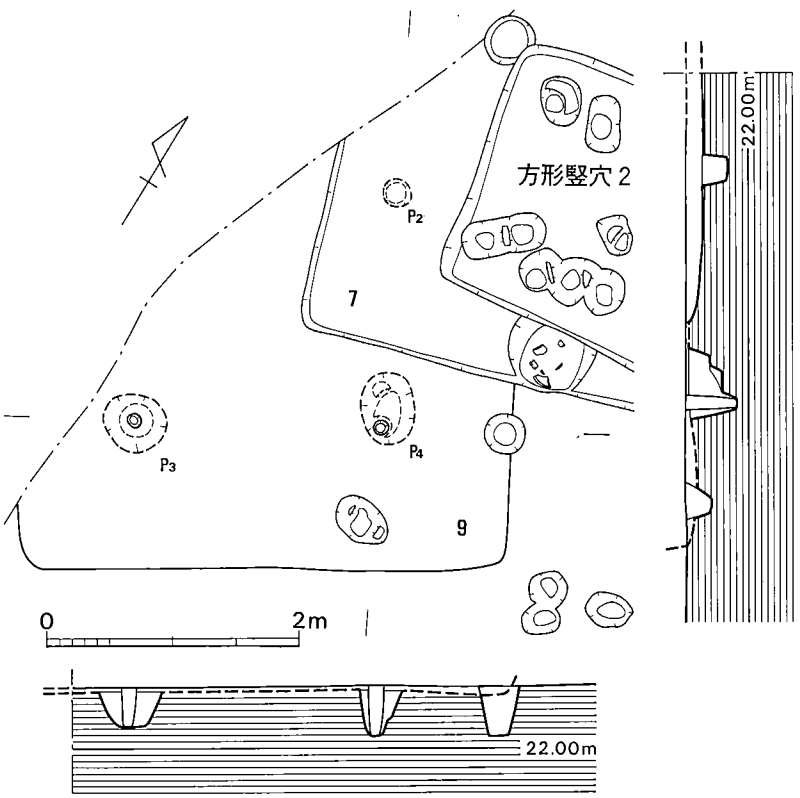
第24図　宮原Ｂ・Ｃ地区出土土製品実測図(1/2)



第25図　８号竪穴住居跡実測図(1/60)

10号竪穴住居跡　（図版18，第27図）

宮原遺跡における６世紀代以後の住居で最も東端に位置し，他の住居と切り合わずかつ隣接しない住居は本住居跡のみで特異な有様を呈す。後世の数多い柱穴で切られ，埋土が５㎝程であり残存状況はあまり良くない。平面形態は逆台形状を呈し，小型の規模に属す。床面は主柱間エリアが特に硬化していた。床面上で主柱穴の柱痕３本を検出したが，１本は不明であった。壁小溝とカマド対面粘土は検出できなかった。北西壁略中央部に掘られた後世の柱穴やその周辺部で焼土が認められたので，カマドはこの付近に付設されたと考えられるが壁体等も柱穴で破壊されたのであろう。床面は貼床であり，床面下層には柱穴Ｐ３の掘り方と不明瞭な掘り込みが在した。

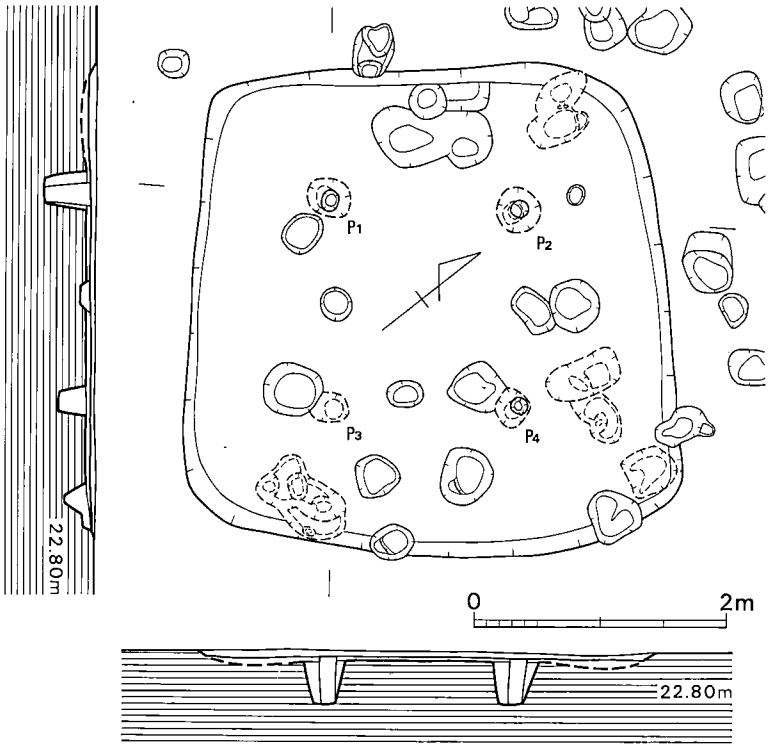


第26図　９号竪穴住居跡実測図(1/60)

出土遺物　（第22図）

出土量は少量であり，土師器の小破片であった。図示した４点は床面上より出土した品である。

土師器（１～４）　１は精良な高坏の柱部である。内外面共にナデ調整である。胎土は砂粒を含まない。内面が黄灰色を，外面が赤褐色を呈す。焼成は普通である。２は口縁部が外反し，胴部があまり張らない中型の甕である。復原口径15.3㎝を測る。内外口縁部をヨコナデ，内面



第27図　10号竪穴住居跡実測図(1/60)

を縦位のヘラ削り，外面はやや粗い刷毛目調整となる。砂粒をわずかに含み，茶褐色を呈す。焼成は良好である。3も2と略同じ甕で，復原口径18.6cmを測る。調整と胎土は略同じである。淡茶灰色を呈し，焼成は良好である。4は甑の小破片である。調整と胎土は2と略同じである。橙褐色を呈し，焼成は良好である。

本住居の時期は7世紀後半まで下らない頃に比定されよう。

11号竪穴住居跡　(図版19，第28図)

B地区の北側略中央に位置する。南側が12号住居に切られ，北西部の約半分程が調査区外に伸展する住居跡である。突出型カマドを有する隅円方形のプランとなり，規模は中型に属すと推定される。埋土は他の住居と同じ黒色土で，検出面より15～16cmで床面に至る。床面は一般的な硬化をなし，貼床をなしていた。主柱穴は全貌が不明となるもののP_2が伴うと考えられる。壁小溝は北東部隅に「コ」字状を呈す比較的短い1条を検出した。カマドは突出型であるが，右袖の一部を除き掘り方のみ検出した。壁体を破壊したか自然崩落したかは不明であり，支脚も遺存していなかった。床面下層には，不明瞭な掘り込みが在す。

出土遺物　(第22図)

出土量は僅少であり，本住居に伴うと断定出来る明確な遺物は皆無である。須恵器は坏蓋とおぼしき小破片が1点埋土より出土した。

土師器(1)　1は甑の小破片であり，埋土中品である。内外口縁部がヨコナデ，内面が縦位のヘラ削り，外面は刷毛目調整となる。胎土は粗砂粒を多く含む。内面が淡茶褐色を，外面

が暗灰褐色を呈す。焼成は良好である。内面口縁部下には明瞭な接合痕が認められた。

出土遺物より本住居の時期は比定出来ないが，図示不可能な須恵器より概ね７世紀中頃か，それ以後と考えられる。

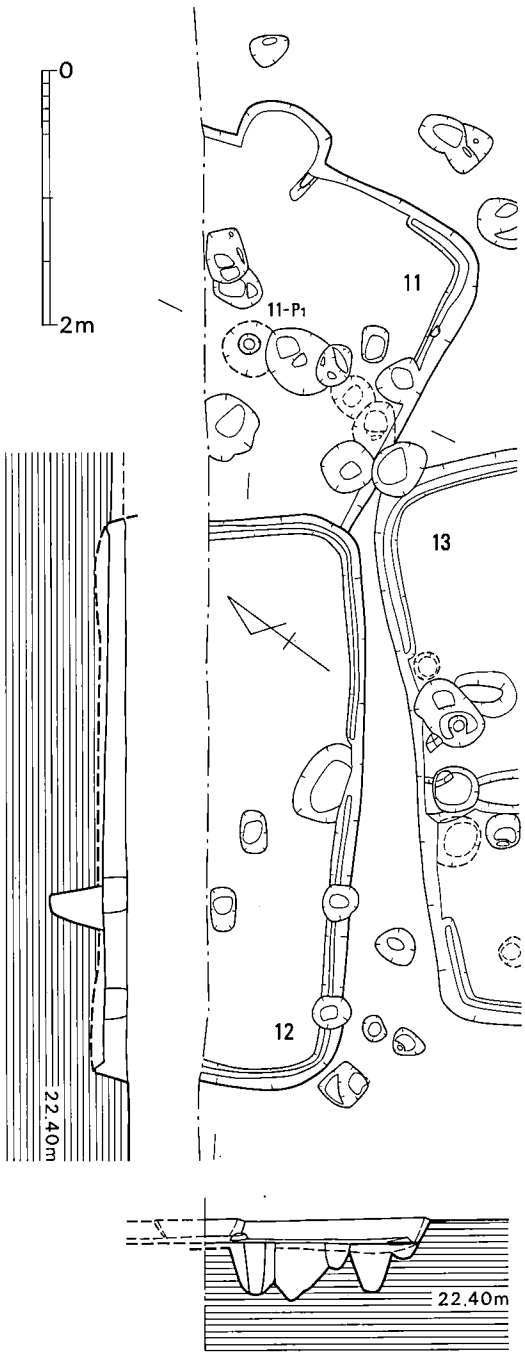
12号竪穴住居跡　（図版19，第28図）

11号住居を切って営まれている。13号住居とは最短距離13cmと隣接し，大半以上が調査区外に伸展する住居跡である。平面形態は隅円方形で，一辺最大長4.33ｍを測るので中型規模になると推定される。埋土は黒色土が充塡し，検出面より18cm程で床面に至る。床面は一般的な硬化をなしている。調査区内には主柱穴が在しないが，北東辺中央の壁下に小土壙が在した。平面形態は隋円形を呈し，長軸62cm・短軸45cm・最大深13cmを測る。カマド対面土壙の可能性大となる形状を呈しているが，断定する迄には至らない。壁小溝はこの小土壙で途切れているが，深さ３～７cmで壁下に２条巡っている。床面は貼床であり，床面下層には不明瞭な掘り込みが在した。

出土遺物　（第22図）

小破片の土器が僅かに出土したが，須恵器は全く出土しなかった。ほとんどが埋土中品である。

土師器（１～３）　１は胴部があまり張らない甕であろう。調整は前述した例と略同である。胎土は細砂粒を若干含む。淡茶灰色を呈し，焼成は良好である。２は口縁部がわずかに外反する甑片であろう。調整



第28図　11・12号竪穴住居跡実測図(1/60)

と胎土は1と略同である。内面は橙茶灰色を呈す。焼成は良好である。3は甑底部片である。底部の内外面はヨコナデで，他は2と略同である。胎土は粗砂粒を多く含む。赤褐色を呈し，焼成は良好である。

出土遺物と切り合い関係より，11号住居より僅かに後続する時期に比定されよう。

13号竪穴住居跡　(図版19，第31図)

11・12・15号住居とは僅か10cm程離れて隣接し，14・16号住居を切る住居跡である。今回報告分中では残存状況良好な部類であり，検出面から床面迄は15cm程を測る。埋土は黒色土であった。平面形態は南西辺が若干長くなるものの隅円方形を呈し，中型規模に属す。床面は主柱間エリアが特に硬化する貼床であった。主柱穴の柱痕4本を床面上で検出した。主柱穴配置は竪穴部と略平行をなしているものの，平面形態は逆台形状を呈す。壁小溝は北東辺と南西辺に「コ」字状に2条巡っている。北東側の壁小溝にはカマド対面粘土の一部が被覆していた。床面下層には掘り込みが認められたが，P_1～P_3に在する土壙は本住居の中央土壙と考えられる。しかし，14号住居下床層の掘り込みとは大差ない埋土であった。

カマド　北西辺中央部に付設している。両袖共に後世の柱穴に切削されていたが，袖の最大長は91cmを測る。火床面は焼土化し，最大幅46cmを測る。支脚は残存していなかったが，廃棄時か後世の柱穴で除去されたかは不明である。

カマド対面粘土・土壙（第29図）　南東壁下中央に黄褐色粘土が10cm程の高まりでテラス状に在した。上端の平面形態は隅円長方形を呈し，長軸106cm・短軸47cmを測る。粘土の北東側は壁小溝を被覆しているが，当初より斯る状況であったか粘土が崩れ落ちたのかは判然としなかった。この粘土の位置や有様は立野遺跡で多く見受けられたのと類似し，投棄されたものではないと言えよう。この粘土を除去すると二段堀りの土壙を検出した。上端の平面形態は楕円形を呈し，長軸78cm・短軸60cm・最深部で20cmを測る。粘土内より土師器片が出土したが，土壙内よりは何ら出土しなかった。今回は報告だけに止め後日詳細に検討したい。

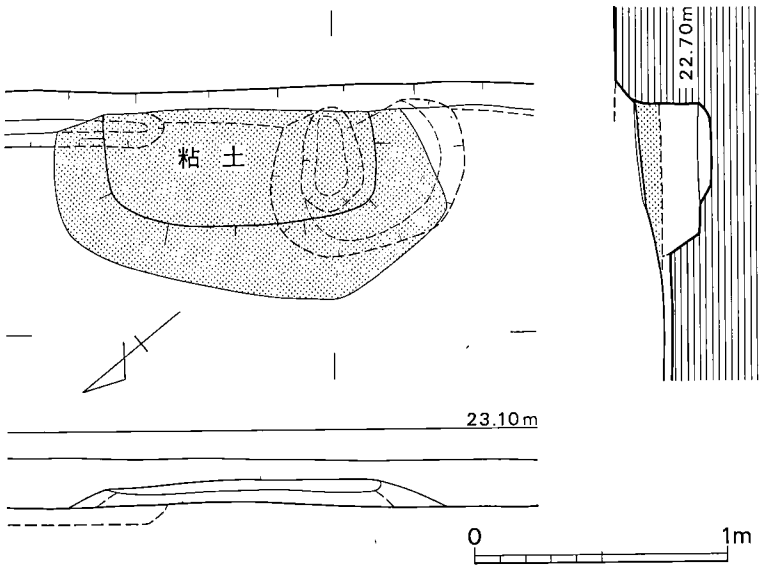
出土遺物　(図版34，第30図)

今回報告中では多い部類に属す。坏・埦類の占有率は他の住居よりも相当高いのが特徴的である。2と3がカマド周辺より，4がカマド対面粘土内より，9が床面上より出土した。他は埋土中品である。須恵器は小片ながら4個体出土している。

須恵器（1）　つまみが付くと考えられる坏蓋であろう。天井部は回転ヘラ削りをなす。胎土は微砂粒を少し含む。青灰色を呈し，焼成は良好である。

土師器（2～9）　2～6は坏・埦類である。調整は口縁部をヨコナデ，内面をナデと共通する。2は復原口径16.8cmを測る精良品である。外面底部にヘラ削りが認められる。淡橙褐色を呈し，焼成は普通である。3は復原口径12.0cm・復原器高6.2cmを測る。口縁部が僅かに外

反し，外面に黒斑が認められるやや粗雑品である。細砂粒を少し含み，橙褐色を呈す。焼成は良好。4は口縁部が大きく外反し，復原口径13.3cmを測る。細砂粒・雲母を少し含み，淡橙灰色を呈す。焼成は良好。5は復原口径10.5cmを測る。外面底体部はヘラ削りをなし，外面口縁部下に指頭痕が残る。胎土は精良で，焼成は普通である。内面が褐灰色，外面が淡茶灰色を呈す。6は口縁部が内彎気味となる。復原口径5.8cm，器高4.65cm，復原底径3.1cmを測る。精良は胎土で，焼成は良好である。外面に黒斑が認められ，橙褐色を呈す。7は口縁部が大きく外面し，若干胴部が張る大型甕である。内外口縁部をヨコナデ，内面を縦位のヘラ削り，外面は刷毛目調整となる。粗砂粒を含み，赤褐色を呈す。焼成は良好。復原口径17.1cmを測る。8は復原口径13.1cmを測る。僅かに外反する口縁部で，胴部は略直となる中型甕である。調整は7と略同じ。胎土は細砂粒を多く含む。橙褐色を呈し，焼成は良好である。9は復原口径28.0cmを測る甑である。調整は7と同じである。把手はナデ，接合部は更に刷毛目をなす。粗砂粒を多く含み，橙褐色を呈す。焼成は良好。

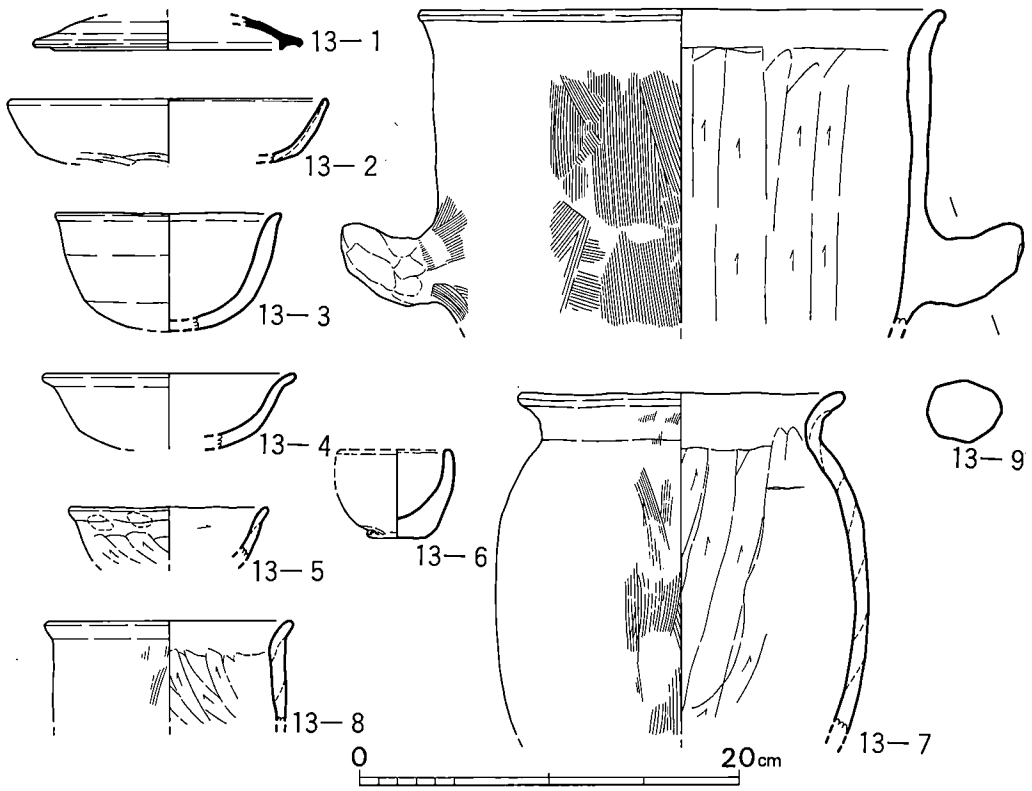


第29図　13号竪穴住居跡カマド対面土壙実測図(1/30)

本住居は7世紀中頃～後半に比定される。

14号住居跡　(図版19，第31図)

13号住居に大半以上切られ，15・16号住居にも南東部を切られる。しかし本住居の掘り込みは深くなされていたので，平面形態が隅円方形を呈す中型規模の住居跡であることが分かった。床面は僅かしか残存せず，一般的な硬化である。壁小溝は北東壁に認められたが，南西壁には略中央部で全長45cmの短い1条と杭状痕2穴を検出した。主柱穴は13号住居下方で検出したP$_1$～P$_4$が該当し，竪穴部と平行して配置されている。カマドは堀り込みの形状等から判断して北西辺に付設していたと思われる。床下層には最深部で15cmを測る掘り込みが在し，全周していた。中央土壙は在しなかった。



第30図　13号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)

出土遺物　(第32図)

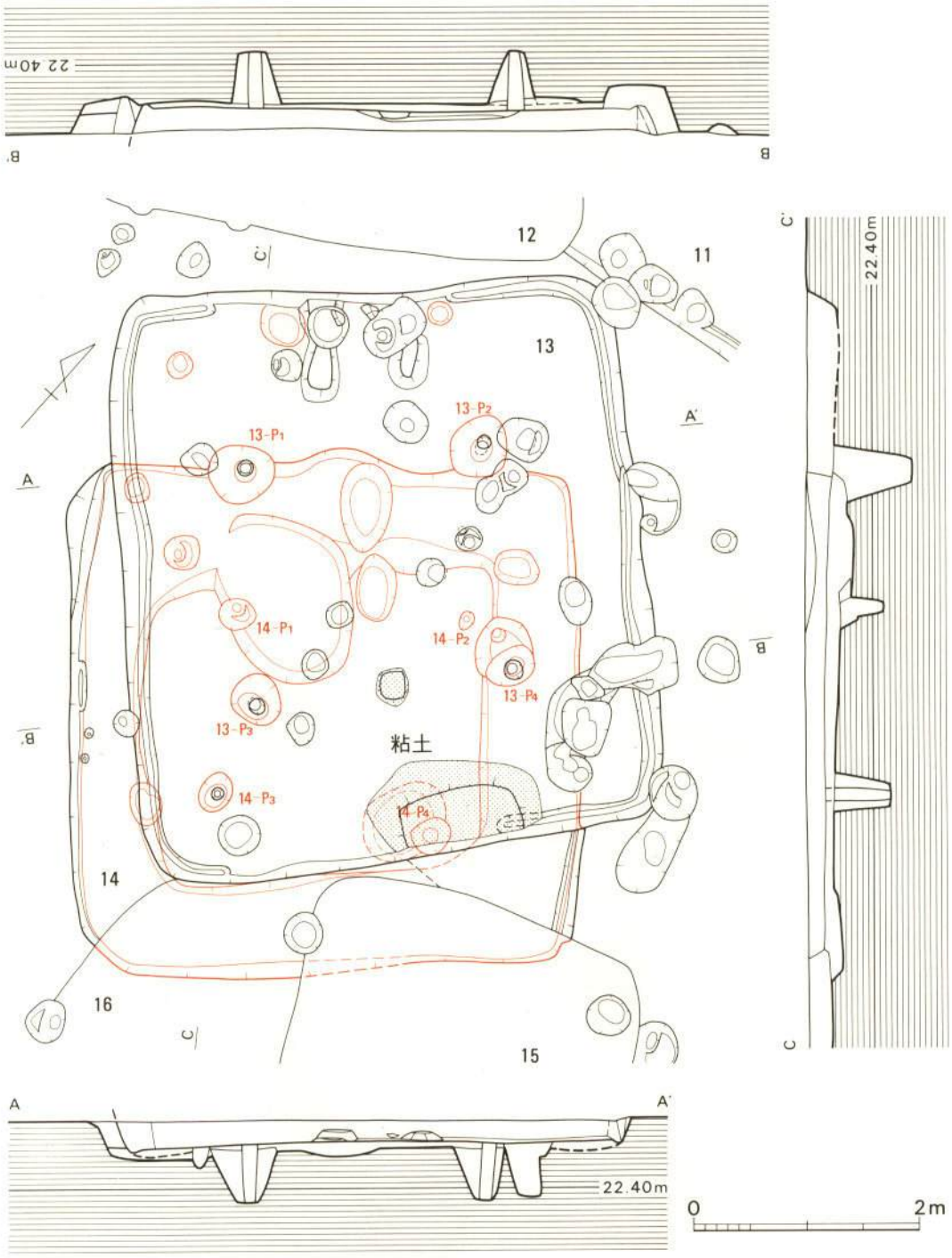
出土量は極めて少なく，本住居に伴う遺物も皆無と言えよう。図示の２点は埋土中品である。須恵器は坏蓋の天井部と思われる小片が１点出土した。

土師器（１・２）　１は粗雑な埦の小片である。調整はナデである。細砂粒を若干含み，淡赤褐色を呈す。焼成は普通である。２は甑口縁部片である。調整は一般的で，細砂粒を若干含む。内面が茶灰色，外面が赤褐色を呈す。焼成は良好である。

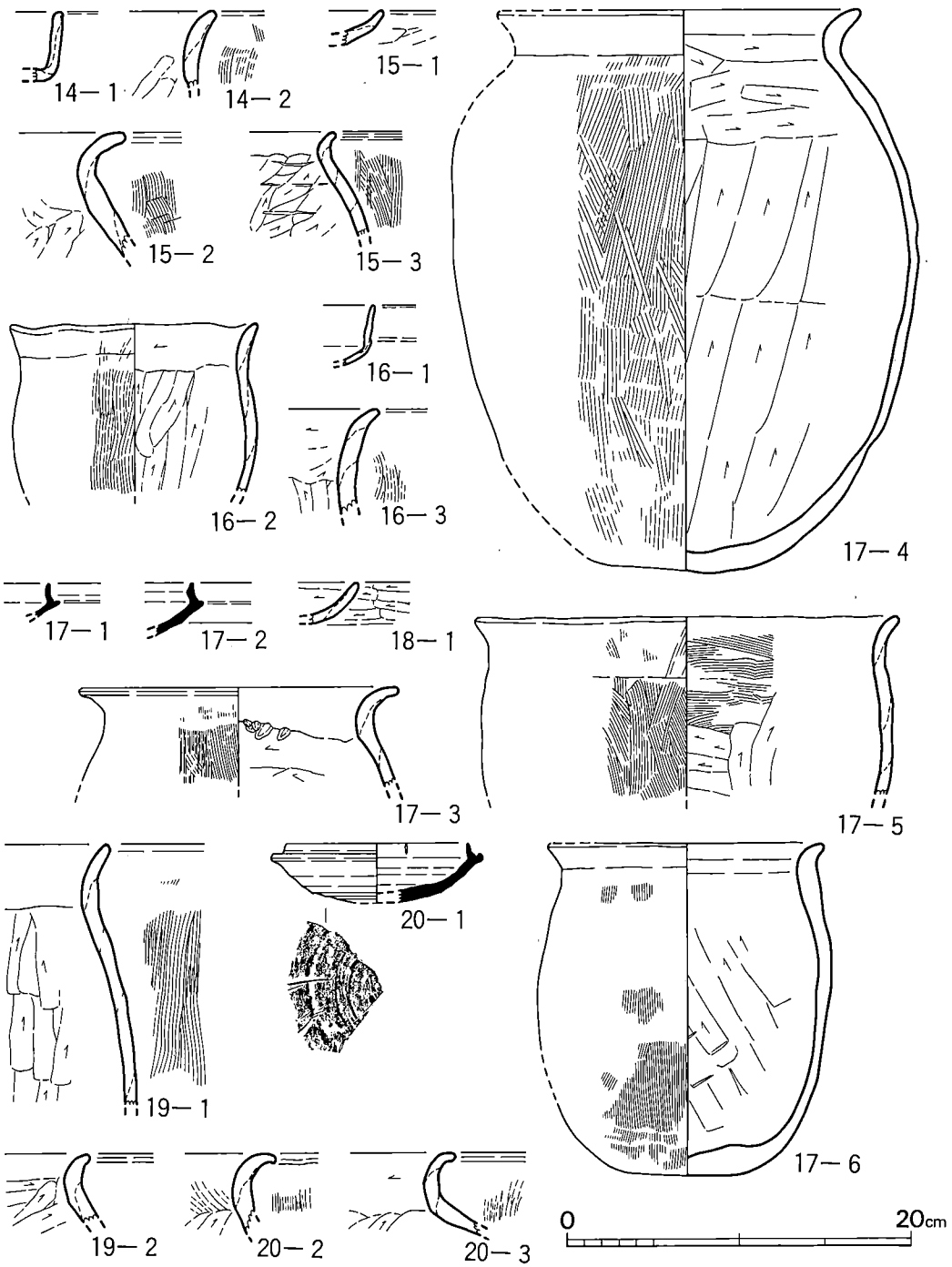
本住居は時期を明確に比定出来る資料を有しないが，概ね７世紀中頃か若干古い時期に比定されよう。

15号竪穴住居跡　(図版19，第33図)

13号住居とは検出面で５㎝離れて隣接し，14・16号住居と22号掘立柱建物跡を切っている。平面形態は隅円方形を呈し，床面積8.68㎡の小型規模に属す住居跡である。埋土は約10㎝で黒色土が充塡していた。床面は一般的であり，主柱間エリアが殊に硬化している。壁小溝は検出できなかった。主柱穴はP_1～P_4となり，床面上で柱痕を確認した。厚さ４～６㎝の貼床下



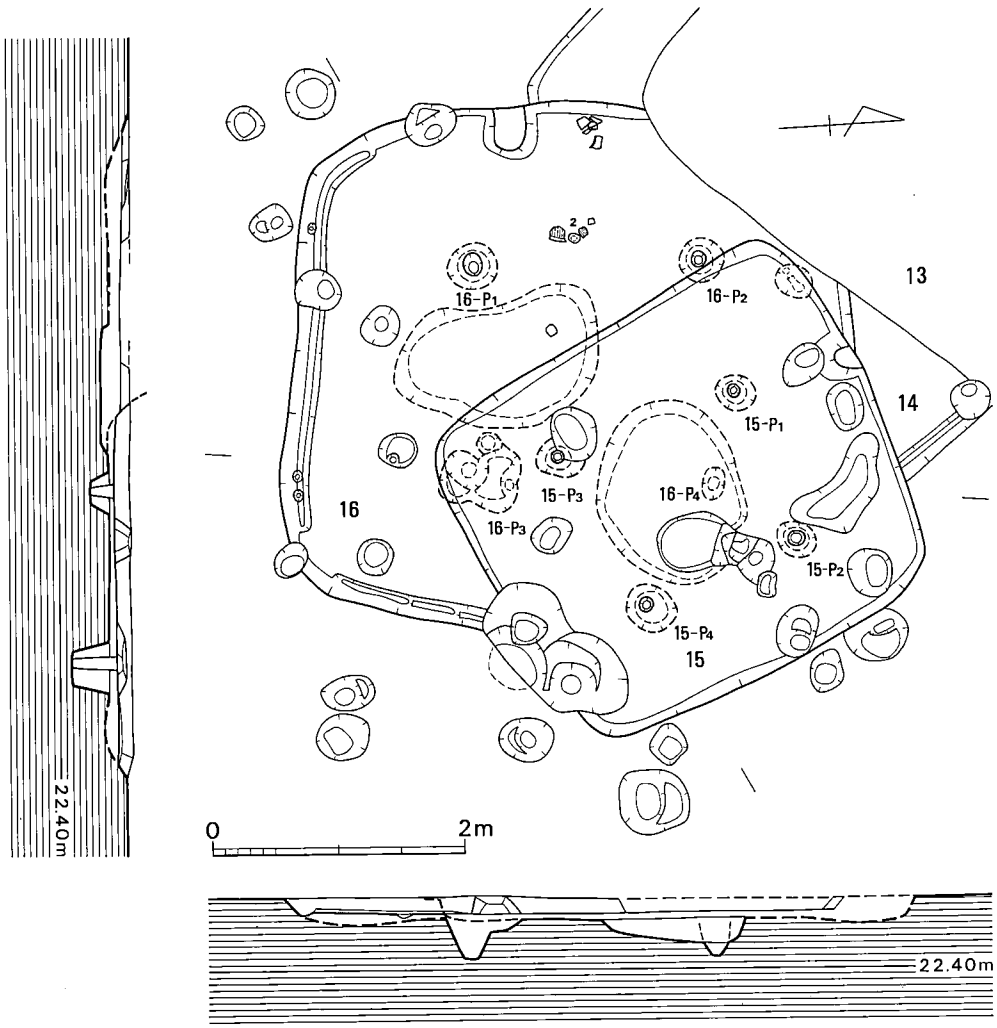
第31図　13・14号竪穴住居跡実測図(1/60)



第32図　14～20号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)

には中央土壙と掘り込みが在したが，掘り込みは図示していない。中央土壙は長軸1.46m・短軸1.15m・深さ21cmを測り，隋円形のプランとなる。8号住居と略同の埋土であった。

カマド　北西壁略中央に付設された造り付け型である。後世の柱穴などに大半壊され旧態を止めていない。カマド内と周辺部から特筆すべき遺物は出土していない。



第33図　15・16号竪穴住居跡実測図(1/60)

出土遺物　(第32図)

本住居の残在状況は良好な部類に属するが，出土量は僅少であった。1と2が埋土，3が床面下層より出土した。須恵器は全く出土しなかった。

土師器（1～3）　1は皿の小破片である。外面底部はヘラ削り，他はナデ・ヨコナデ調整である。胎土は細砂粒を少し含む。橙灰色を呈し，良好な焼成である。2は口縁部が大きく外反する甕片である。調整は内外の口縁部がヨコナデ，外面を刷毛目，内面が縦位・横位のヘラ削りを施す。胎土は粗砂粒を若干含む。橙灰色を呈し，良好な焼成である。3は2よりも口縁部が短くかつ，さほど外反しない甕である。調整は2と略同であるが，内面に粘土接合痕が明瞭に認められる。胎土は細砂粒を多く，雲母が若干含まれる。茶灰色を呈し，良好な焼成である。

本住居の時期を決定出来る出自明白な遺物はないが，13号住居と相前後する時期が一応考えられる。

16号竪穴住居跡　（図版19，第33図）

13・15号住居に切られ，14号住居を切っている住居跡である。北壁側は切削を受け殆ど不明であるが，主柱穴の配置より逆台形状になる平面形態が推定される。規模も小ぶりな中型となろう。埋土は15号住居と大差ない土質である。床面上ではP_1とP_2の柱痕を確認し，南壁と東壁に杭状痕が在し，段差をなす2条の壁小溝を検出した。床面の硬化は一般的である。5～8㎝の貼床下にはP_1とP_3間寄りの中央土壙と不明瞭な掘り込みが在した。中央土壙は長軸1.63m短軸0.95m・深さ約10㎝を測り，若干歪な長楕円形を呈す。

カマド　西壁中央部に付設された造り付け型である。右袖は基底部も残存していないが，火床面より住居の中軸線がカマド中央部を通る。左軸も0.4mしか残在せずかつ支脚に転用されたであろう甕片がカマド前方床面上に貼り付いていたことから，住居廃棄時に何らかの毀捐行為がなされたと考えられる。

出土遺物　（第32図）

総出土量は僅少で，須恵器は全く出土しなかった。2が前述したカマド前方床面上より出土し，他は埋土中品である。

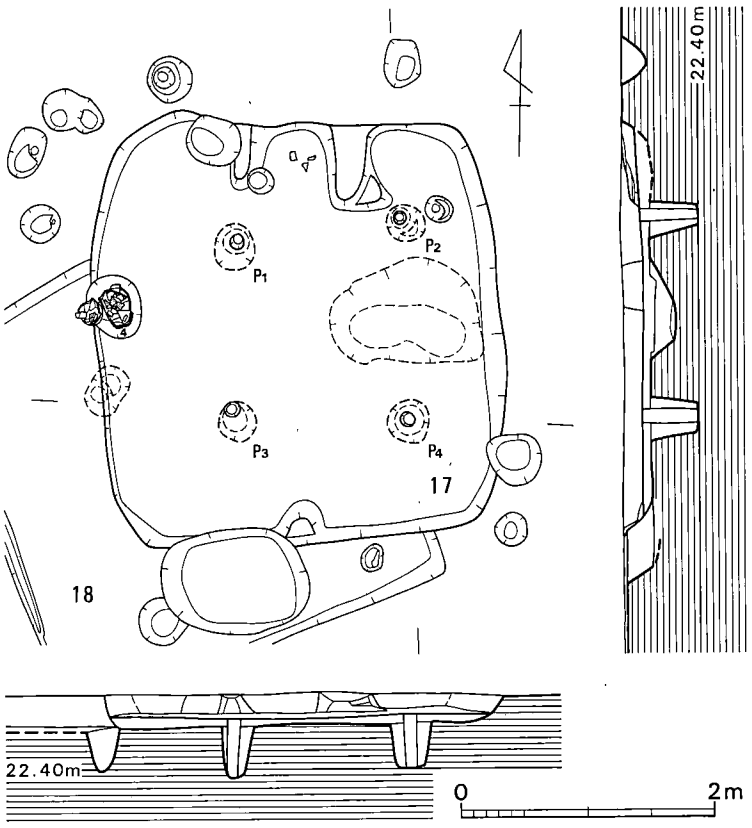
土師器（1～3）　1は精良な坏の小破片である。外面胴部より底部にかけてヘラ削りがなされているものの大半が磨滅している。内外口縁部はヨコナデ，内面はナデ調整である。雲母を少し含む精良な胎土で，赤橙色を呈す。焼成は普通である。2は口縁部が歪む甕で，二次加熱が顕著に認められるので支脚に転用されたのであろう。調整は中～小型甕と同じく一般的である。胎土は粗砂粒を多く含み，茶灰色を呈すが外面には赤変した箇所が多く認められる。3は甑の小破片である。調整は内外口縁部をヨコナデ，内面はヘラ削り，外面は刷毛目を施す。胎土は粗砂粒を多く含み，赤橙色を呈す。焼成は良好である。

本住居の時期を詳細に限定する資料が出土していないが，概ね7世紀代中頃に比定されよう。

17号竪穴住居跡　(図版19，第34図)

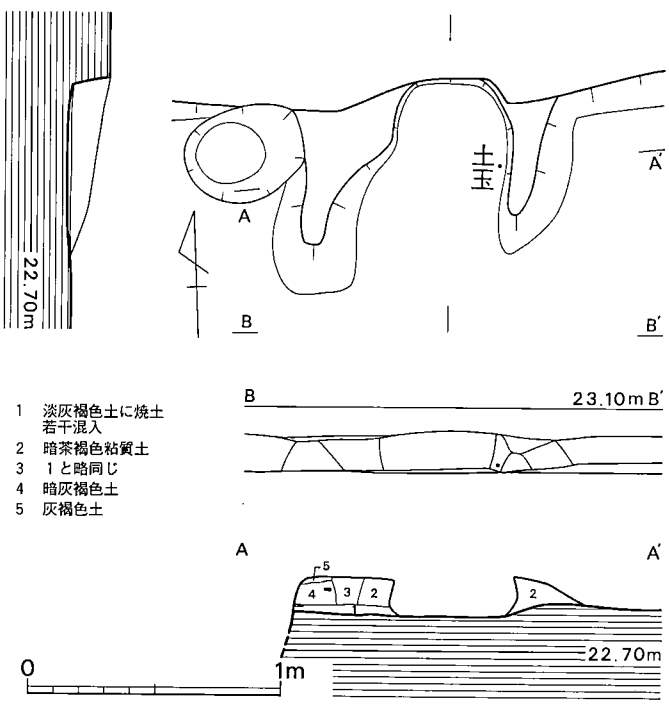
12号住居の西方３ｍに位置し，17～19号住居中最も新しい住居跡である。検出時はこれら住居群の埋土が略同の黒色土で大差なく，切り合い関係も判然としなかった。そこで用地境まで拡張して新旧関係を確認した。これら３軒の主軸方位は新しくなるに従って順次北方に振れるが，これは同一構成員等による建替えを行った可能性が窺える。又，竪穴部の規模も新しくなるに従って縮小されている。

本住居は平面形態隅円方形を呈し，小型の規模に属する。南西壁の一部は埋土と少し異なる黒色土が充填する浅い小土壙で切削を受けていた。床面は一般的様相を呈するが，再度掘り下げと掘り込みを行った後18号住居より若干高くなる床を貼っている。主柱穴の配置は竪穴部と比較して若干東寄りになる。壁小溝は全く見受けられない。床面下層は上記の如く掘り込みがなされている他に，東壁中央部から住居中央にかけて平面形態長楕円形の土壙を検出した。この状況は８号住居と同じ位置に掘られており，埋土も略同じである。上端で長軸1.17ｍ，短軸0.83ｍ，深さ21㎝を測る。



第34図　17号竪穴住居跡実測図(1/60)

カマド（図版20，第35図）　北壁中央部に付設され壁面より僅少突出した造り付け型である。築造法は造り付け型と全く同じ粘土の積み上げであったが，煙道口にも粘土を貼り付け，その一部が残存していた。当初右袖は若干伸展し，かつ基底部が幅広く残存していると思われたが，断面観察より内側が崩落しているのが判明した。この粘土中より有孔土玉17－８が出土した



第35図　17号竪穴住居跡カマド実測図(1/30)

が，カマド築造時に埋納された品と判断される。この他に17－7・9の土玉と不明土製品も壁体内より出土した。これらは築造時の祭祀具であり，祭祀行為の一型式となる。またカマド内には土師器の小破片が僅かに出土したのみで，支脚は在せずかつ壁体の残存状況の有様から判断して住居廃棄時にも何らかの行為が在したことが窺われる。

カマド対面粘土（第26図）　後世の小土壙に西側の一部を切削されているが，カマドの対面に位置して約8㎝程の高まりを有する。立野遺跡で一般的に見受けられた如く広範囲には散布していないが，最大幅45㎝を有する黄色系粘土の高まりである。近接する13号住居とは規模・形状及び有様を異にするが，これらカマド対面に在する粘土の性格を判断する資料となるので図示した。

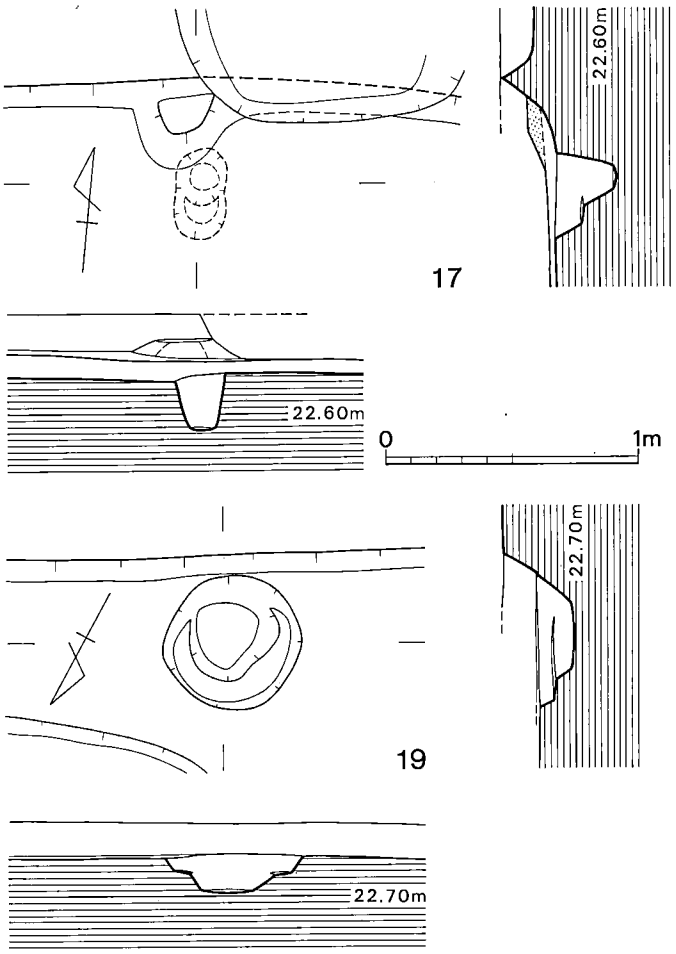
出土遺物　（図版34・39，第24，32図）

出土量はさ程多くなく，その大半以上が埋土中品である。出自明白なのは5がカマド周辺より出土し，7～10は前述した通りである。

須恵器（1，2）　2点しか出土せず，径も測れない坏身の小破片である。2に回転ヘラ削りが認められる。1は細砂粒を多く含む胎土で，青灰色を呈す。2は砂粒を殆ど含まぬ精良な胎土で，灰褐色を呈す。焼成は2点共良好である。

土師器（3～6）　4点共に中～大型の甕である。3は復原口径18.6㎝を測り，大きく外反する口縁部である。口縁部内外をヨコナデ，内面を横・斜位のヘラ削り，外面が刷毛目調整となる。頸部内面にヘラ状工具痕が認められた。細砂粒を多く含む胎土で，茶灰色を呈す。焼成は良好である。4は復原口径21.0㎝，器高32.7㎝を測る。口縁部は外反し，胴部も脹らむがさ程極端ではない。調整は3と略同であり内面の頸部より肩部は横・斜位のヘラ削りで，下方は縦位のヘラ削りをなす。細砂粒を多く含む胎土で，薄橙褐色を呈す。焼成は良好である。5は

復原口径24.5cmを測り，僅かに外反する口縁部で胴部も脹らまない。調整は3と略同であるが，口縁部内面に横位の刷毛目が認められる。粗砂粒を若干含む胎土で，茶灰色を呈す。焼成は良好である。6は復原口径16.1cm。器高19.3cmを測る中型品である。口縁部は僅かに外反し，胴部もさ程脹らまず平滑な底部である。調整は3と略同である。細砂粒・赤褐色粒を多く含む胎土で，薄橙褐色を呈す。焼成は良好。



第36図　17・19号竪穴住居跡カマド対面土壙実測図(1/30)

土　玉（7～9）　7は長軸0.8cm・短軸0.65cm・重さ0.43gを測る。表面はナデて平滑に仕上げ，中軸より端側に穿孔がなされる。砂粒を含まず，暗褐色を呈す。8は最大径0.55cmの若干歪む球体である。重さは0.16gを測る。7と同様に表面は平滑となり，その後略中央部に穿孔がなされている。精良な胎土であり，暗茶灰色を呈す。9も最大径0.8cmを測る僅かに歪む球体である。重さは0.39gを測る。表面は上記2点と同程度に仕上げている。精良な胎土で，淡黄灰色を呈す。焼成は3点共良好である。

不明土製品（10）　大半以上欠損するが，現存長は1.5cm・幅0.85cm・厚み0.2cmを測る。片面には植物繊維痕が付着するが，他面は平滑に仕上げている。砂粒を含まず，淡褐灰色を呈す。焼成は普通である。正確は断定する迄には至っていないが，類例は立野遺跡C地区で多数出土している。

出土品の大半は7世紀前半頃に比定出来るが，本住居に共伴するとは決めかねる。概ね7世紀前半か僅かに相前後する時期が妥当であろう。

18号竪穴住居跡　(図版19，第37図)

17号住居に北東側約半分が切られ，南東壁際は浅い小土壙が掘り込まれている。17号住居の床面下層より本住居の掘り込みを検出したので，本住居跡は平面形態が隅円方形で小型規模となるのが判明した。床面の大半は17号住居に切削されているが，検出分では特に硬化せず一般的であった。主柱穴が17号住居内の４本が該当する。壁込溝は西南壁下中央に深さ５cm程で全長1.55ｍに及ぶ１条のみ検出した。17号住居に切られている北西辺で焼土が若干認められたので，カマドは北西辺に付設していたのであろう。床面下層には不明瞭な掘り込みが在したが，中央土壙は在しなかった。

出土遺物　(第32図)

僅少の出土量であった。図示可能な品は１点のみであり，埋土よりの出土であった。

土師器（１）　精良な坏の小破片である。外面は口唇部まで横位のヘラ削り，内面はナデ調整をなす。微砂粒を僅かに含む胎土で，橙灰色を呈す。焼成は普通である。

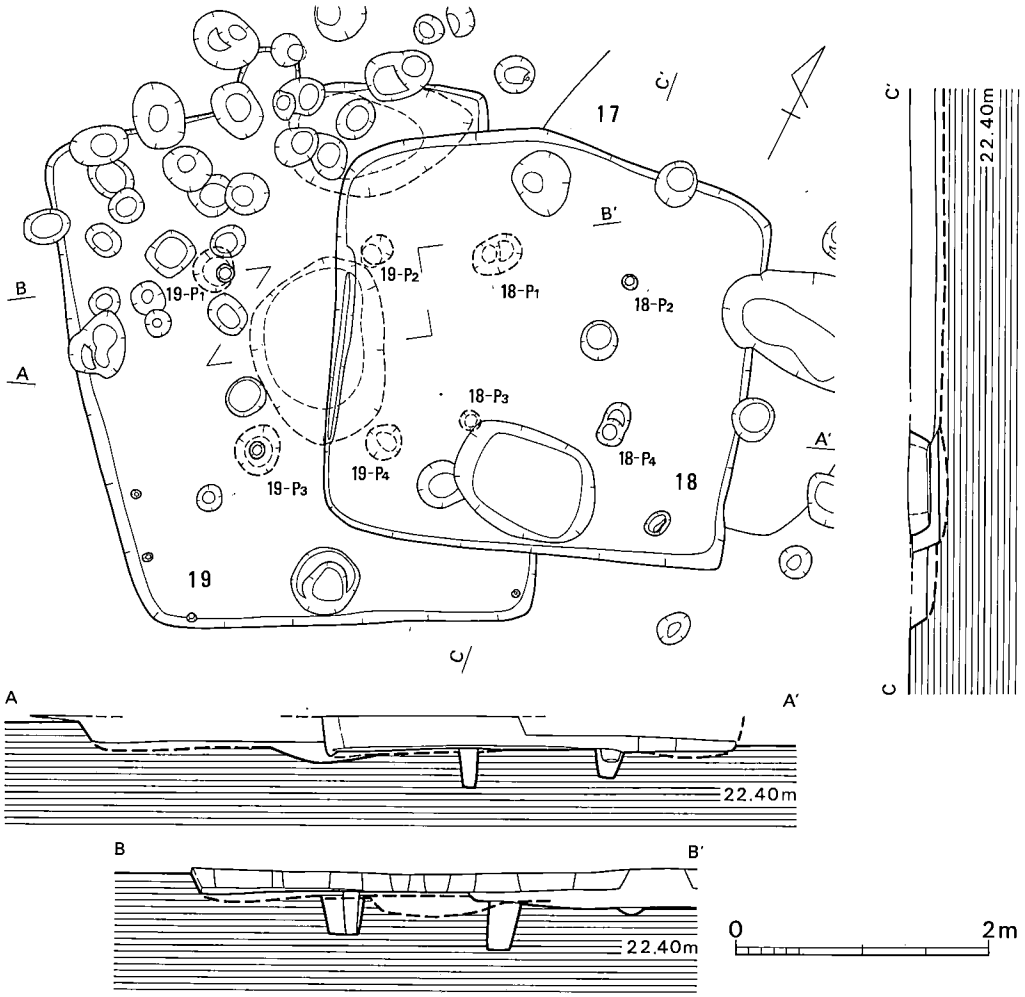
出土品より本住居の時期は決め難いが，17号住居より古くなるが僅かな時期差であろう。

19号竪穴住居跡　(図版19，第37図)

18号住居に北東壁際を切られ，３軒中最も古い住居跡である。住居内と壁際には後世の柱穴が多数堀り込まれている。平面形態は逆台形状を呈し，小型規模となる。主柱穴配置は平面形態が長方形を呈し，P_1とP_3には柱痕を確認した。床面は主柱間エリアが特に硬化していた。壁小溝は検出面には全く在しない。カマドは北西辺中央に在し，突出型である。後世の柱穴で殆ど切削されており，カマドの有様は不明である。床面下層には不明瞭な掘り込みが巡り，主柱間に若干歪な長楕円形の中央土壙が在した。北東壁下で土壙状を呈する窪みを検出したが，掘り込みの一部と解すべきであろう。中央土壙は上端で長軸が1.43m，短軸1.07ｍを測り，最深部が15cm程となる。埋土は８号住居と略同である。

カマド対面土壙（第36図）　南東辺略中央部で壁下に最大径55cmを測り，平面形態は略円形を呈す。二段掘りとなるが，最深部は15cm程である。土壙周辺部に粘土は全く認められず，土壙内及び周辺部に本土壙の性格を解明する資料も何ら出土していない。立野遺跡で見受けられた土壙の有様と異なることだけは判断されるが，本土壙の性格は全く不明と言わざるを得ない。埋土は住居と大差なかったことを付記しておく。

壁面下杭状痕（図版20）　本住居の壁面下端で４本の杭状痕を確認した。下端先端は若干丸味を有していたが，後日報告するA—Ⅱ・Ｄ区では先端が尖る事例も在する。壁小溝を含め杭状痕に関しては報告例が乏しく，かつ良好な資料は前述の遺構であり，その折に性格・構造等を論及する次第である。



第37図　18・19号竪穴住居跡実測図(1/60)

出土遺物　(第32図)

僅少な出土量であった。須恵器は全く出土せず，明確に本住居と共伴する遺物は皆無である。図示した2点は埋土中品である。

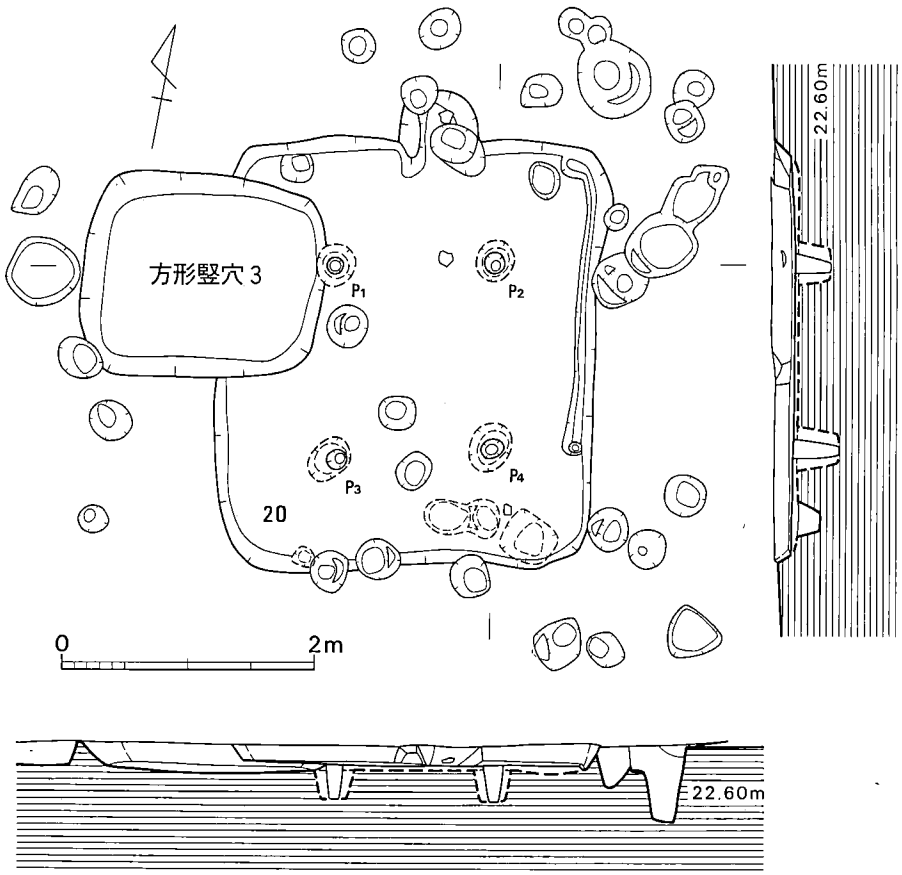
土師器（1，2）　2点とも小破片である。1は甑であり，若干胴部が脹らむタイプである。調整は一般的で，粗砂粒を若干含む胎土である。茶灰色を呈し，焼成はやや良好である。2はやや外反する甕口縁部片である。内面は斜・横位のヘラ削り，内外口縁部はナデ調整である。微砂粒・雲母を若干含み，赤橙色を呈す。良好な焼成である。

本住居は18号住居同様に7世紀前半代と考えられる。

20号住居跡　(図版19，第38図)

19号住居の南方1.5ｍに位置し，３号方形竪穴に北西壁を切られている住居跡である。竪穴部の平面形態は南北辺長が若干長い隅円方形を呈し，小型規模に属す。最深部は床面まで18cmを測り，埋土は黒色土が主体であった。床面は一般的な硬化をなしている。主柱穴の４本とも柱痕を検出したが，主柱穴配置は竪穴部と略相似形を呈す。壁小溝は東壁下に一条在したが，壁小溝の南端に杭状痕を確認した。床面下層には不明瞭な掘り込みを確認したが，中央土壙は在しなかった。

カマド　北辺略中央部に付設された突出型であり，左袖上を中軸線が通る。後世の柱穴２個に攪乱されているが，左袖は若干竪穴部内に伸展している。築造法は突出型の一般的タイプであり，掘り方に粘土を付着し積み上げていた。支脚は後世の柱穴で壊されたのか廃棄時に撤去したのか不明であるが，竪穴部掘り方の線上に位置していたと考えられる。火床面は僅かに窪み，焼土化しているものの詳細は不明である。カマド内より土師器片が出土しているが他に特



第38図　20号竪穴住居跡・３号方形竪穴実測図(1/60)

筆すべき遺物は出土していない。

出土遺物　(第32図)

残在状況は報告分において良好な部類に属するが，総出土量は少量であった。出土品の大半以上が埋土中品であり，本住居に伴う遺物は皆無に等しい。

須恵器（1）　6世紀末～7世紀前半頃の坏身であり，約¼程が残存し復原受部径12.3cmを測る。外面底体部を回転ヘラ削り，他はナデ調整をなす。胎土は精良で，暗紫灰色を呈す。焼成は良好である。底部外面にヘラ記号が，内面の立ち上り部にヘラ状痕が認められる。

土師器（2，3）　2点共に甕口縁部の小破片である。口縁部内外をヨコナデ，内面をヘラ削り，外面を刷毛目調整と一般的であるが，2の口縁部内面に僅かな刷毛目が認められた。胎土は細砂粒を若干含み，淡茶灰色を呈す。焼成も良好である。

本住居は須恵器1の時期が下限となるであろうが，埋土中品であることより必ずしも指針になるとは断定し難い。他の土器も考慮すると7世紀前半頃となろう。

21号竪穴住居跡　(図版20，第39図)

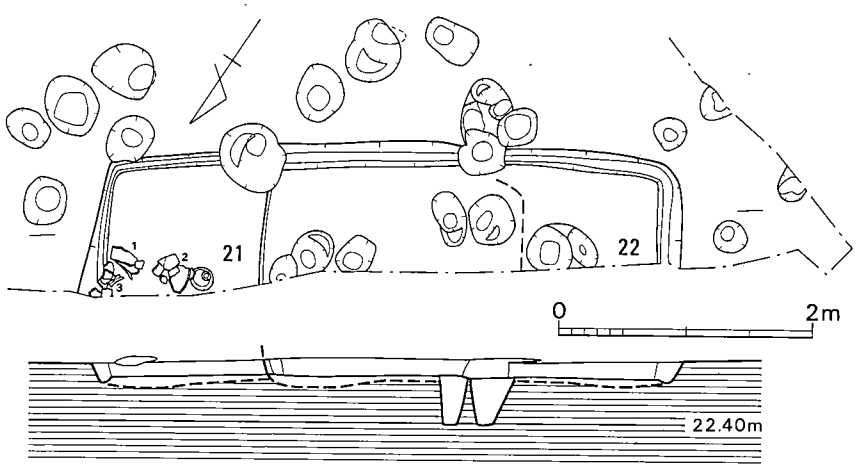
B地区西南隅に位置し，当初は1軒で大半以上が調査区外に伸展する住居跡と考えられた。埋土を4～5cm堀り下げた時点で，小砂礫混じりの黄色粘土が現れ，かつこの粘土が直線的に途切れることから住居が重複するのではなかろうかと考えた。堀り下げを行った面までは略同の黒色土で大差なかったが，壁面観察で22号住居が新しく築造していると判明した。この粘土層も数cmと薄く，下方は上層と大差ない黒色土が充填している。本住居の埋土は瞬時に埋められたのではなく，間断しつつ埋まったと考えるべきであろう。

本住居は平面形態が隅円方形と推定されるものの一隅しか調査していない。床面は一般的な硬化をなしていた。床面上より深さ18cmの柱穴を検出したが，主柱穴の可能性を有するものの断定するまでには至らなかった。壁小溝は22号住居より幅が狭くなるものの深さ4～5cmで巡っている。床面下層も判然としないが貼床をなしている。なお壁面観察時において1辺が3.3mと推定され，小型規模に属すると思われる。

出土遺物　(図版34，第40図)

床面上より僅かに浮いた状態で2個体の土師器甕が出土した。埋土状況や壁小溝の上方より出土していることを考慮すると住居廃棄後の流入品となろう。他には土師器の小片が僅かに出土した。

土師器（1～3）　1と2は同一個体となろう。復原口径19.0cmを測り，器高は30cm強と推定される。内外口縁部をヨコナデ，内面を斜・縦位のヘラ削り，外面を刷毛目調整である。外面に煤が付着するものの薄橙褐色を呈す。胎土は細砂粒を多く含み，焼成は良好である。3は口縁部が大きく外反し，胴部は張らないタイプである。復原口径34.6cmを測り，甑かもしれな



第39図　21・22号竪穴住居跡実測図(1/60)

い。調整は１と大差ない。胎土は細砂粒・赤褐色粒を若干含む。内面は黄茶色，外面は橙褐色を呈す。焼成は良好である。

出土品中の甕は23号住居カマド周辺より出土した甕と類似しているので，23号住居と略同年代に比定されよう。

22号竪穴住居跡　(図版20，第39図)

概略は21号住居で述べたが，平面形態が隅円方形を呈し小型規模に属す住居跡と推定される。床面は他の住居と大差ない。床面上で７個の柱穴を検出したが，本住居の主柱穴は不明である。壁小溝は北東隅部より南西壁まで巡り，深さは３～５㎝程である。床面は貼床であったが，床面下層は不明瞭な掘り込みがなされていた。焼土・粘土等は一切検出していないので，カマドは北東辺か北西辺に付設されていたと想定される。

出土遺物　(第40図)

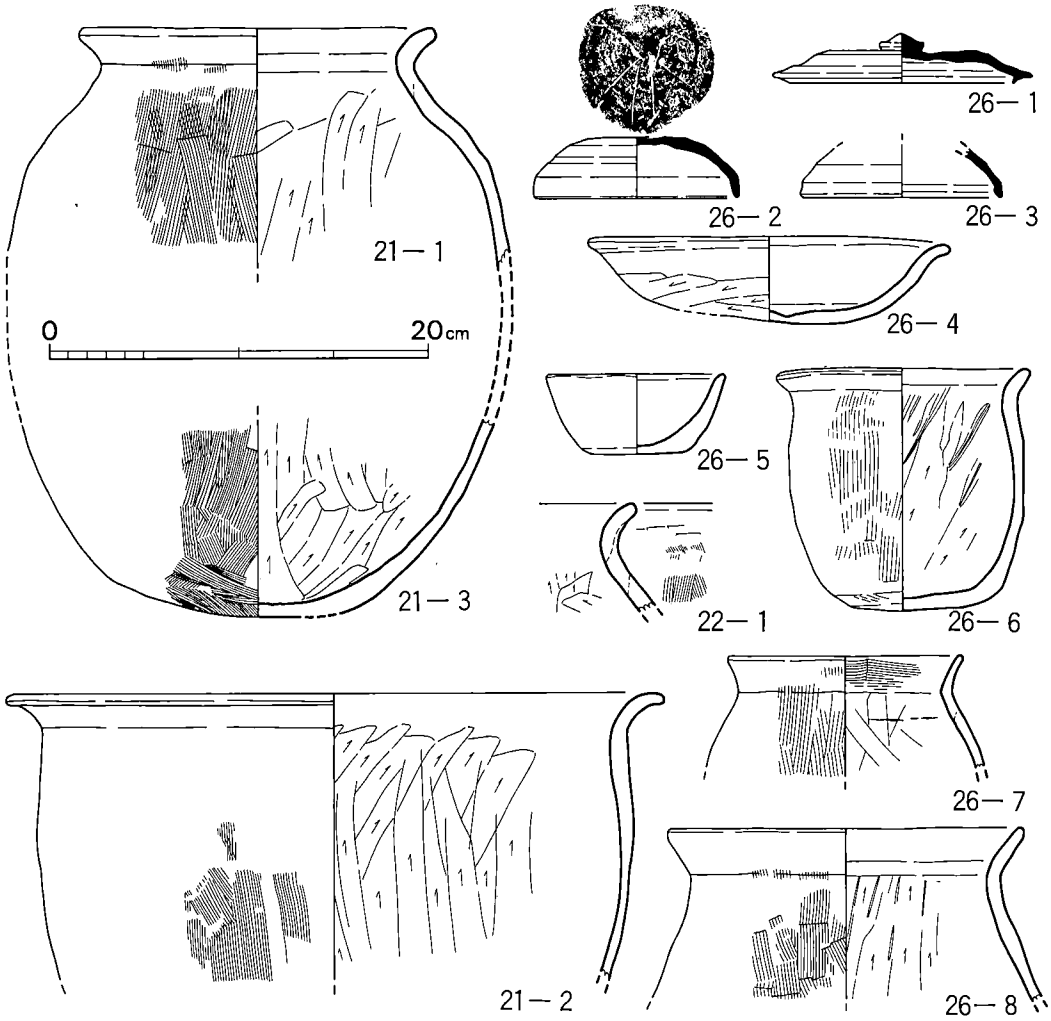
埋土中より土師器の小片が僅かに出土した。須恵器は全く出土していない。

土師器（１）　甕の小破片である。内外口縁部をヨコナデ，内面を縦・斜位のヘラ削り，外面を口縁部まで刷毛目調整をなす。粗砂粒を若干含み，淡茶灰色を呈す。焼成は良好である。

本住居の時期も比定し難いが，21号住居と同時期か僅かに後出する時期が考えられる。

23号竪穴住居跡　(図版21，第41図)

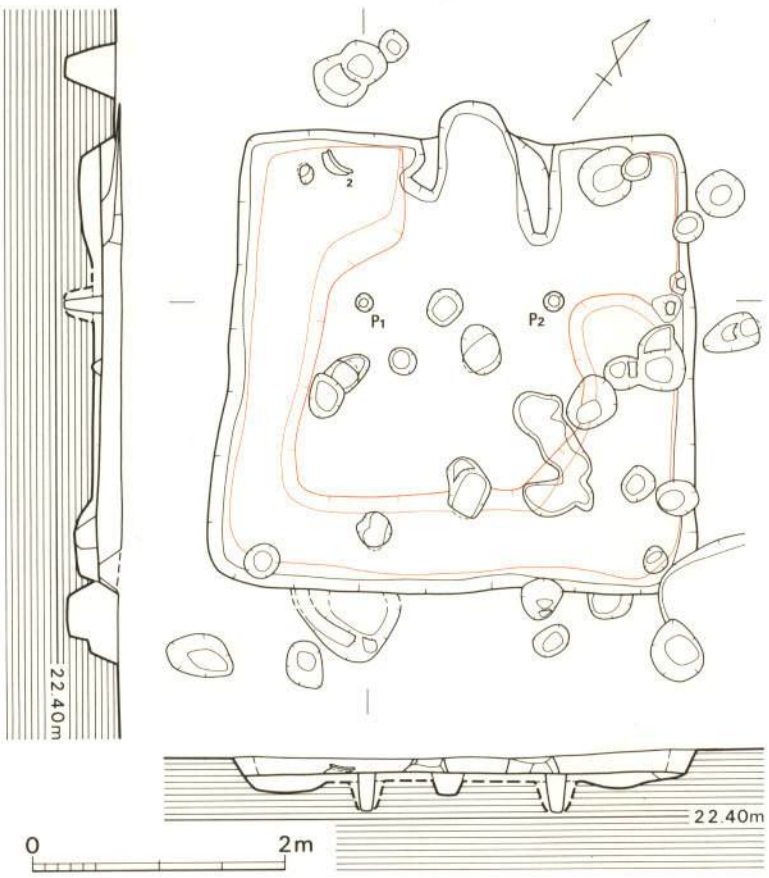
Ｂ地区の南側略中央部に位置し，25号住居と隣接し略同主軸方位をなしている。24号住居を切る21号掘立柱建物跡を更に切っている。平面形態は隅円方形を呈し，小型の規模に属す。埋土は15㎝程で，黒色土が充填していた。床面は主柱穴エリアと想定される範囲が特に硬化をな



第40図　21・22・26号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)

す。床面上にはP_1とP_2の柱痕を確認したが，P_3とP_4の主柱穴は認められなかった。この２本は当初より柱穴を掘らず，柱材の寸法不足を補足するため床面上に据えられたと解釈すべきであろう。宮原遺跡において１及至２本の柱穴が在しない例は数例認められている。主柱穴配置の問題に起因して柱穴を掘らないと考えるよりも，上記の理由が妥当ではなかろうか。この問題は竪穴住居の構造とも係るので，検討かつ資料を集め後日に期したい。上記の理由より貼床を剝ぎ下層を調査した。掘り込みは「L」字状を呈し，壁面下を全周しない。また中央土壙は在しなかった。

カマド　北西辺中央に付設していたが，壁面より30cm程突出するタイプである。右袖は79cm伸展し，両袖共に粘土を壁面に付着して積み上げる築造法である。造り付け型，突出型の中間



第41図　23号竪穴住居跡実測図(1/60)

的タイプを呈している。支脚は在しない。

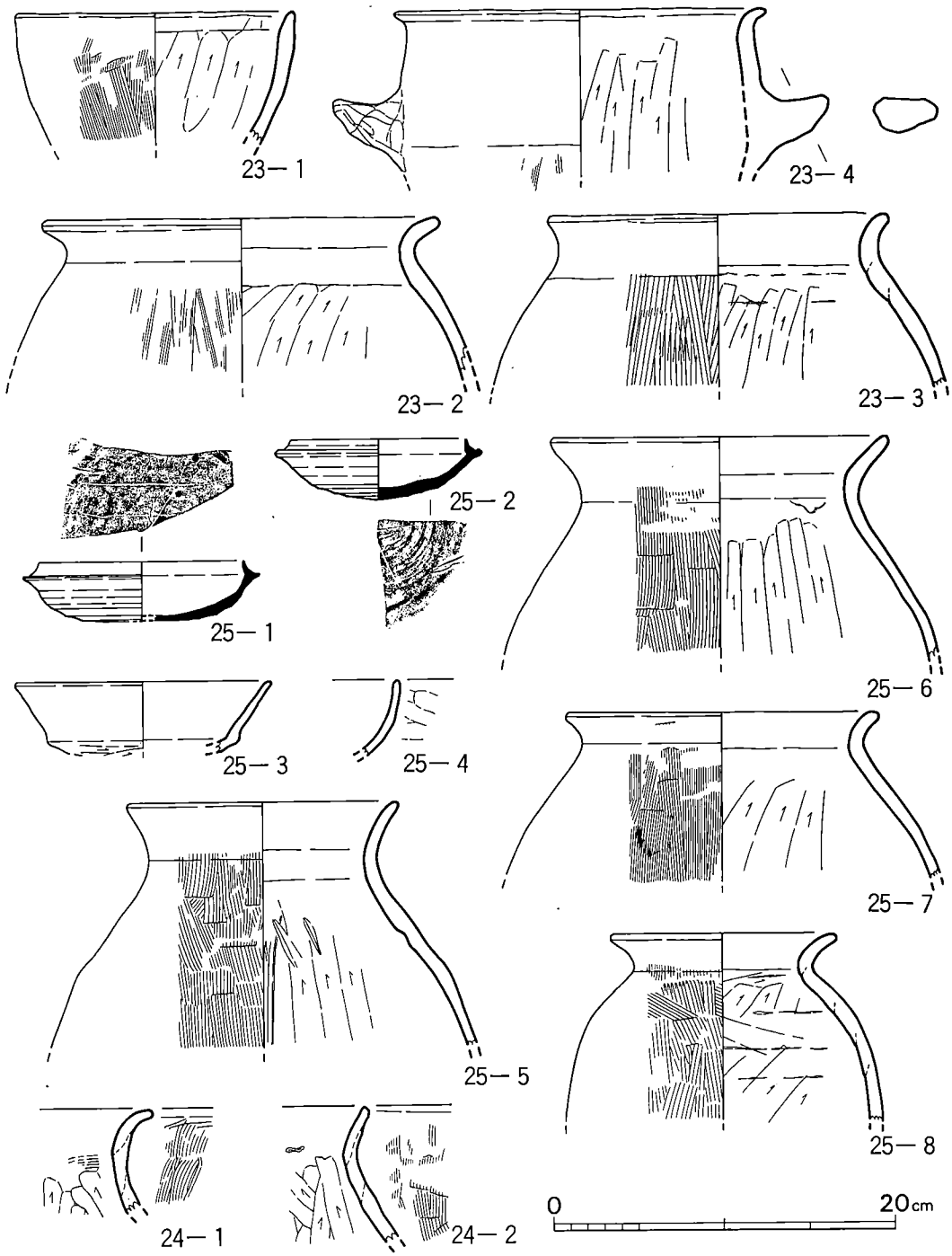
出土遺物　(図版34，第42図)

数量としては少量の部類に属する。図示した4点はカマド周辺より出土した品で，本住居に伴う土器と考えられる。須恵器は4個体分出土したが，図示出来る品は在しない。

土師器（1～4）

1はカマド右側より出土し，½程が残存し復原口径16.6cmを測る鉢である。口縁部内外をヨコナデ，内面をヘラ削り，外面が刷毛目調整である。細砂粒を多く含む胎土であるが精良品である。橙褐色を呈し，焼成は良好である。2はカマド左側より出土し，大きく外反する口縁部で胴部も張り，復原口径23.6cmを測る。3はカマド右側より出土し，あまり外反しない口縁部であり，胴部は張る。復原口径20.2cmを測る。2点共に口縁部内外をヨコナデ，内面をヘラ削り，外面が刷毛目調整である。3の肩部内面には接合痕が顕著に見られる。2は細砂粒を少し含むが，3は細砂粒を多く含む胎土である。2点共に橙褐色を呈し，焼成も良好である。4は復原口径22.0cmを測る甑である。把手はあまり，反上がらず略水平に付けられている。調整は把手部がナデで，把手部下方が刷毛目となる。胎土は細砂粒を多く含み，角閃石も認められた。内面は黒褐色を，外面は橙褐色を呈す。焼成は良好である。

出土品から本住居は7世紀前半の時期に比定される。

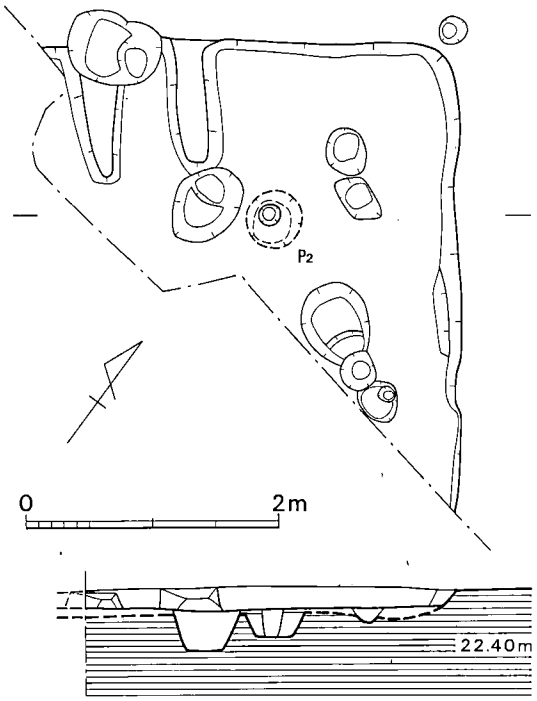


第42図　23～25号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)

24号竪穴住居跡　(図版21，第43図)

23号住居の南方２ｍに位置し，21号掘立柱建物にカマド等を切られる。カマド部と北東側の一部を調査しただけの住居跡である。平面形態は隅円方形の中型規模になると推定される。床面は一般的な硬化をなし，貼床がなされていた。主柱穴はＰ$_2$のみ検出したが，他は調査区外となる。壁面は緩やかな立ち上がりをなしているが，壁小溝は検出し得なかった。床面下層には不明瞭な掘り込みが在した。

カマド　北西壁に付設された造り付け型である。21号掘立柱建物に左袖を崩されているものの，袖の最大長は1.04ｍを測る。火床面は中央部で幅36cmを測り若干狭く造られている。支脚は残在していない。



第43図　24号竪穴住居跡実測図(1/60)

出土遺物　(第42図)

出土量は僅少であり，須恵器は全く出土していない。図示した２点はカマド周辺より出土。

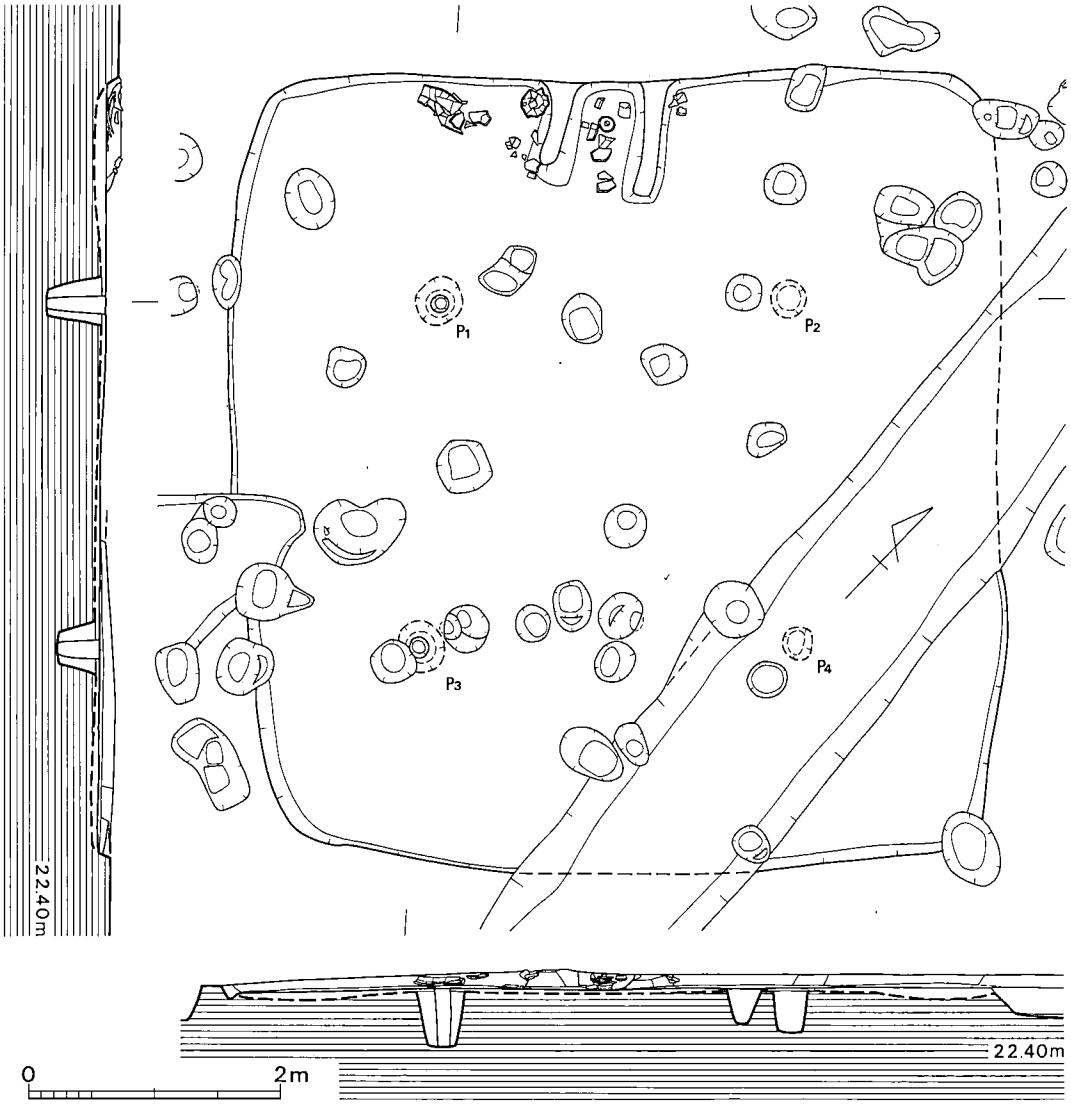
土師器（１，２）　２点とも甕の小片である。若干外反する口縁部で，肩部は丸味を持たず胴部へと続く。口縁部内外をヨコナデ，内面を縦位のヘラ削り，外面は刷毛目調整となる。１の内面頸部に刷毛目が認められる。粗砂粒を若干含む胎土である。１は茶褐色を，２は橙褐色を呈す。焼成は良好である。

２点の甕は25号住居の甕と同タイプであり，本住居の時期は25号住居と略同時期に比定されよう。

25号竪穴住居跡　(図版22，第44図)

23号住居の北東0.6ｍに位置し，略同の主軸方位をなす住居跡である。北東部Ｐ$_4$付近は南北に伸びる溝５に切られている。平面形態は隅円方形を呈し，今回報告分中で６世紀代以後の住居では最大規模となり一辺６ｍを超える。埋土は黒色土で，上端より10cm程で床面に達する。床面は貼床であり，主柱穴エリアが特に硬化していた。主柱穴配置も竪穴部と略平行をなしている。壁小溝は検出し得なかった。カマド対面は溝に切られているので不明である。床面下層には不明瞭な掘り込みが在した。

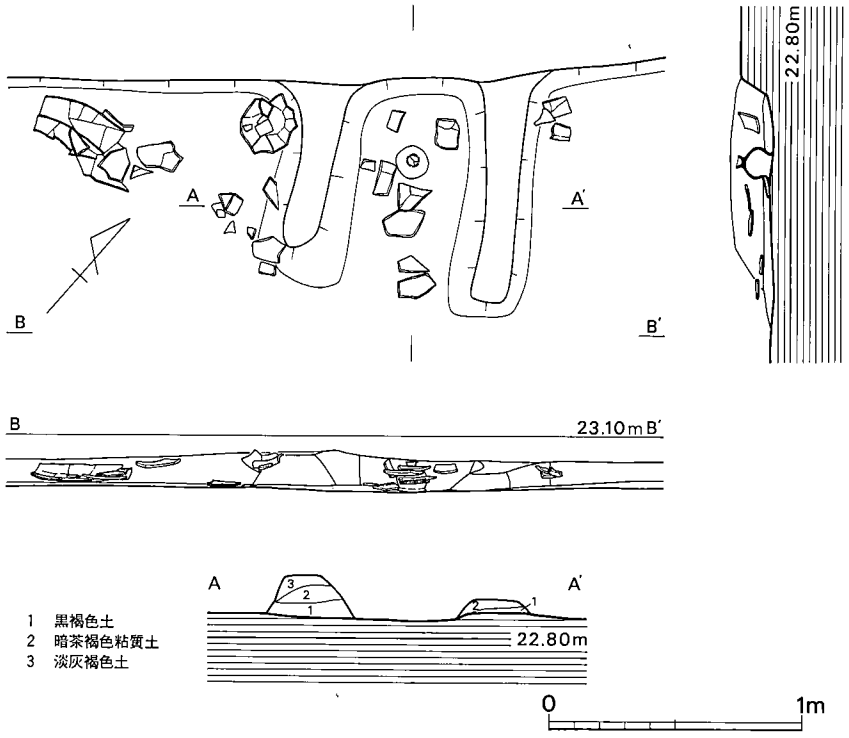
カマド（第45図）　北西辺中央に付設された造り付け型で，中軸線もカマド中央を通る。両



第44図　25号竪穴住居跡実測図(1/60)

袖共に粘土を積み上げているが，最大長94cmを測る。火床面は良く焼けており，支脚位置で幅43cmを測る。支脚は煙道口下端より25cmに位置し，台付甕を倒立して支脚としている。甕内に粘土と黒色土が充填していたが，掘り込みを行わず火床面に据えていた。カマド内や周辺部より多量の土器が出土したが，図の如く床面より若干上方からの出土品が大半以上である。またカマドの廃棄行為を明確にし得なかったし，図示した土器の出自不明確な品が多いことなどから本住居の時期を指標する最も良好な資料は支脚の甕となろう。

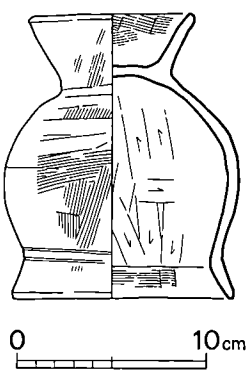
支　脚（図版35，第46図）　脚台付甕の転用である。口縁部は若干外反し，球状の胴部に続



第45図　25号竪穴住居跡カマド実測図(1/30)

く。脚は直線的に裾広がりとなる。口縁部内外をヨコナデし，その後内面に刷毛目調整をなす。底体部内面を縦位のヘラ削り，外面を縦・横位の刷毛目調整。脚部は口縁と同調整を行なう。細砂粒を多く含む胎土で，褐色を呈す。焼成は良好である。口径は12.0cm・器高15.0cm，復原裾部径9.0cmを測る。脚部はカマド使用時に欠損したか，廃棄時の所作であるかは不明である。

出土遺物　(図版35，第42図)



第46図　25号竪穴住居跡
カマド支脚実測図(1/4)

今回報告分中で最多の出土を見た。須恵器は3個体出土しているが，その内の図示した2点はカマド内と周辺部より出土した。支と高坏は埋土中品であるが，甕は前述の如く埋土中品かカマド周辺より出土したか不明である。

須恵器（1，2）　1は復原口径12.3cm・復原器高3.5cmを測る坏身である。外面体部下半より底部は回転ヘラ削りをなす。微砂粒を僅かに含むが精良な胎土である。褐灰色を呈し，焼成は良好である。内面にヘラ記号あり。2は復原口径10.3cm・器高3.6cmを測る坏身である。外面底部は回転ヘラ削りを施す。微砂粒を若干含み精良な胎土である。紫灰色を呈し，焼成は良好である。外面底体部にヘ

ラ記号を施し，口唇部に打ち欠きが認められる。

土師器（3～8）　3は復原口径15.1cmを測る坏で高坏となろう。屈折部より下方はヘラ削りで，他はナデ・ヨコナデ調整である。細砂粒を僅かに含み，赤橙色を呈す。焼成は普通である。精良品。4は埦の小破片である。内外口縁部をヨコナデ，内面をナデ，外面はヘラ削りを施す。胎土は粗砂粒を僅かに含む。淡赤橙色を呈し，焼成は良好である。5と6は肩部に丸味を持たない甕である。5は復原口径16.0cmを測る。内外口縁部をヨコナデ，内面を縦位のヘラ削り，外面は刷毛目調整となる。胎土は細砂粒を多く含む。褐色を呈し，焼成は良好である。6は復原口径20.0cmを測る。調整と胎土は5と略同である。橙褐色を呈し，焼成は良好である。7は肩部より胴部にかけて丸味を有し，復原口径18.5cmを測る甕である。調整は5と略同である。胎土は細砂粒を多く，赤褐色粒を若干含む。橙茶色を呈し，焼成は良好である。8は復原口径13.4cmを測り，中型の甕である。調整は5と略同であるが，内面は左右交互に斜位のヘラ削りを行なう。接合痕が明瞭に認められる。胎土・色調及び焼成は6と略同である。

本住居は支脚の甕が確実に伴う。この甕は立野遺跡C地区5号土壙内から出土した脚台付甕より若干新しい様相となる。他の遺物も考慮すると7世紀前半代か僅かに後続する時期に比定されよう。

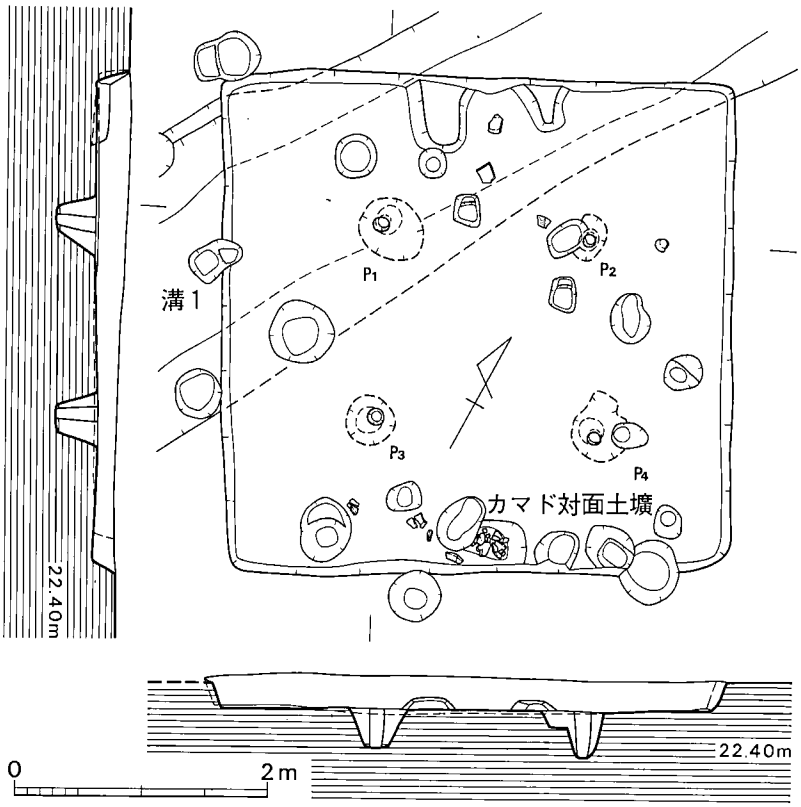
26号竪穴住居跡　（図版22，第47図）

25号住居の北東9mに位置し，溝1を切って営まれた住居跡である。平面形態は略隅円正方形を呈し，規模は中型でも小さな部類となる。埋土は黒色土あり，溝と大差なく北東隅部を掘り過ぎた。上端より最深部が24cmで床面となる。床面は主柱間エリアが特に硬化している。主柱穴は4本とも柱痕を検出したが，柱配置は竪穴部と略平行をなしている。壁小溝は検出し得なかった。床面下層には不明瞭な掘り込みが在したが，中央土壙は在しない。

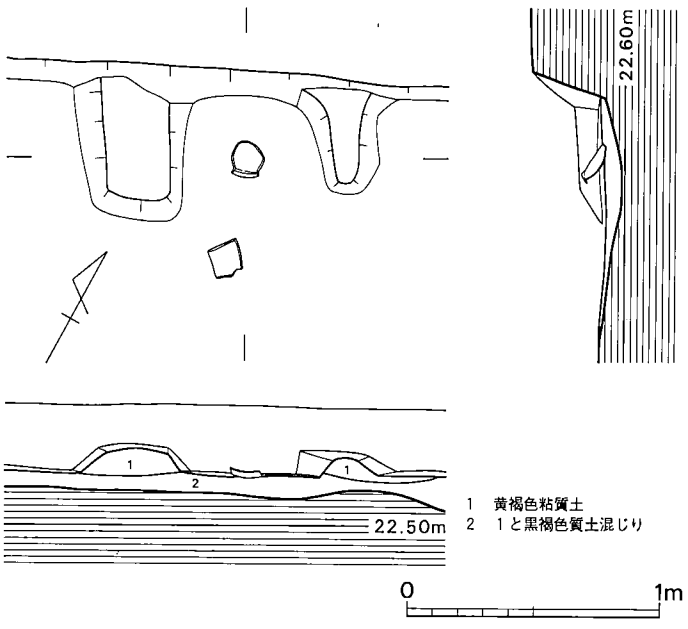
カマド（図版23，第48図）　北西辺中央に付設している造り付け型であり，中軸線もカマド中央を通る。両袖共に焚口部が崩落していると考えられ，最も残存する処で58cmを計測する。火床面は最大幅56cmを測るが，内壁が剝落したとも考えられる。支脚は甕を転用したと考えられ，半截されて横転した状態で検出した。廃棄時に何らかの行為が在したと推定される。

支　脚（第49図）　大きく外反する口縁部で胴部が若干張る。復原口径13.0cm・推定器高15.3cmを測り，約½強が残存する。内外口縁部をヨコナデ，内面を縦位のヘラ削り，外面は刷毛目調整である。細砂粒をやや多く含む胎土で，内面が橙褐色で外面が茶灰色を呈す。二次加熱が認められる。

カマド対面土壙（図版23）　南西辺中央の壁下に在し，後世の柱穴に切られるものの旧態を止めている。上端で長軸約50cm・短軸35cmを測り，平面形態は隅円長方形を呈す。最深部で8cmと浅いが，略水平な底面である。埋土は住居内と大差ない黒色土である。壙内より略完形の土



第47図　26号竪穴住居跡実測図(1/60)



第48図　26号竪穴住居跡カマド実測図(1/30)

師器坏と甕片が底面より僅か上方より出土した。壙内の甕と周辺床面出土の甕は同一個体と思われる。これらの土器は廃絶時に投棄された可能性大である。何らかの祭祀行為がなされたのかもしれない。しかしこの土壙が生活時に開口していたかは不明である。

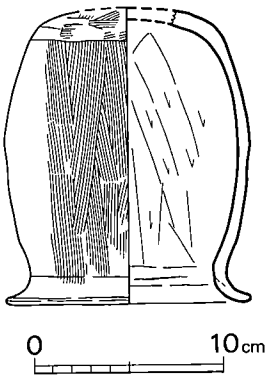
出土遺物

(図版35，第40図)

出土量はやや多い部類に属す。出自明確な土器も多く，2と5が床面上より，3がカマド内より，4がカマド対面土壙内より出土した。他は埋土中品であるが，6は溝1との切り合う地点より出土し本住居に伴うと考えられる。

須恵器（1～3）　1は復原基

部径13.8cmを測る坏蓋である。擬宝珠つまみを有し，内面かえりは下方へはり出す。天井部の上方約½が回転ヘラ削り，他はナデ調整となる。胎土は細砂粒を若干含む。内面は紫灰色を，外面は青灰色を呈す。良好な焼成である。2と3は坏蓋の小破片である。2は復原口径10.7cm・器高3.2cmを測る。調整はナデとなり，口縁部はヨコナデを施す。胎土は細砂粒を多く含む。暗灰色を呈し，焼成は良好である。外面にヘラ記号が在す。3は復原口径10.5cmを測る。調整は2と略同であった。粗砂粒を若干含む胎土で，紫灰色を呈す。焼成は良好である。



第49図　26号竪穴住居跡
カマド支脚実測図(1/4)

土師器（4～8）　4は口径19.2cm・器高4.65cmを測る精良な坏である。外面体部中程から底部はヘラ削り，他はナデ・ヨコナデ調整を施す。細砂粒を多く，赤褐色粒を若干含む。橙褐色を呈し，焼成は良好である。5は復原口径9.7cm・器高4.2cmを測るやや粗雑な坏である。内外共に磨滅して調整は不明である。淡茶灰色を呈し，焼成は普通である。6は口径13.5cm・器高12.7cmを測る。内外口縁部をヨコナデ，内面を縦位のヘラ削り，外面は粗い刷毛目調整をなす。細砂粒を多く含む胎土で，肌色を呈す。焼成は良好である。7は復原口径12.4cmを測る。調整は6と略同じであるが，口縁部内面に刷毛目が認められる。細砂粒を少し含む胎土で，橙褐色を呈す。焼成は良好である。8は肩部に丸味を有しない甕で，復原口径19.0cmを測る。調整・胎土共に6と略同じである。内面が黒褐色・外面が橙褐色を呈す。焼成は良好である。

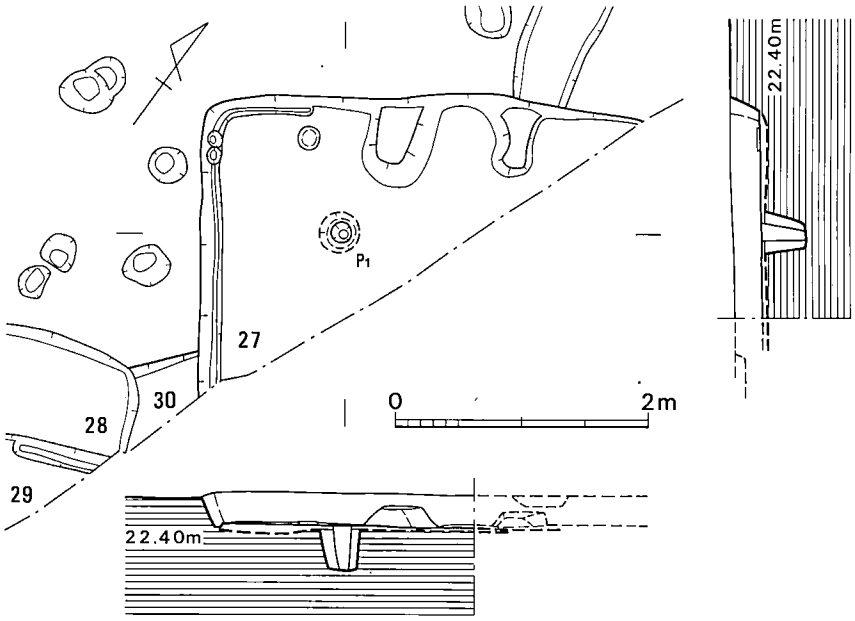
出土品に若干の時期差を有するが，2・3と5が本住居の時期を指標する。1は柱穴等の混入品と考えられるので，7世紀前半代に一応比定されよう。

27号竪穴住居跡　（図版23・24，第8，50図）

26号住居南方6mに位置し，溝4と30号住居を切るが大半以上は農道側に伸展する住居跡である。平面形態が隅円方形で中型規模になると推定される。埋土は黒色土で，上端から床面まで27cmを測る。床面は硬化しており，貼床がなされていた。主柱穴はP_1のみ検出し，床面上で柱痕が認められた。壁小溝は西壁よりカマド手前50cmまで巡る。隅部付近の溝内に杭状痕2個を検出した。カマドは北西辺に付設された造り付け型である。焚口部の両袖共崩落したと思われ，袖の残存長は62cmを測る。火床面に支脚は在せず，最大幅48cmを測る。カマド左側床面上に底部を欠損する土師器坏が据えられていた。

出土遺物　（図版39，第51図）

出土量は僅少であった。2がカマド周辺床面より，3個の不明土製品がカマド周辺より出土した。3はカマド内，他は埋土中より出土した。

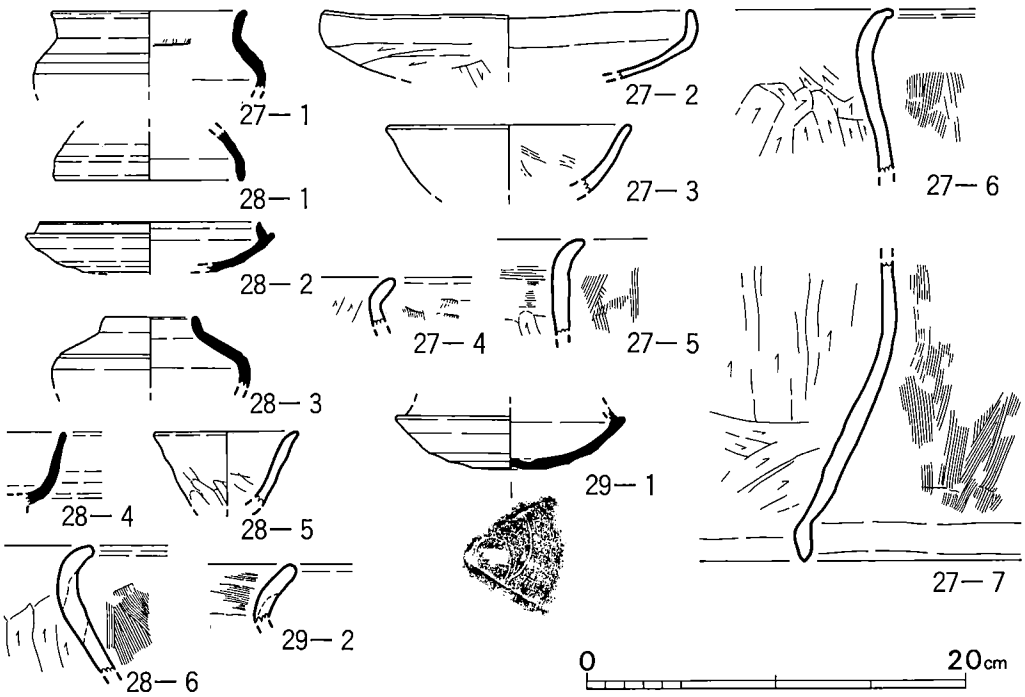


第50図　27・30号竪穴住居跡実測図(1/60)

須恵器（1）　短頸壺の上半部である。復原口径10.25cmを測り，頸部は僅かに外反する。外面肩部より下方は回転ヘラ削り，内面肩部下方は回転ナデ調整である。胎土は粗砂粒を僅かに含む。黒灰色を呈し，焼成は良好である。

土師器（2～7）　2は口径19.6cmを測り，口縁部が僅かに内彎する坏である。内外口縁部をヨコナデ，内面をナデ，外面の体部下方はヘラ削りを施す。内面が桃橙色，外面が黄橙色を呈す。精良な胎土で，焼成は軟質である。3はカマド内より出土した坏の小破片であり，復原口径13cmを測る。ナデ・ヨコナデ調整であるが，内面に刷毛目が僅かに認められる。粗砂粒を僅かに含む。暗茶褐色を呈し，焼成は良好である。4は頸部が屈折する甕の小破片である。調整は前述した甕と大差ない。細砂粒を若干含み，茶灰色を呈す。焼成は良好である。5と6は甑の上半部，7は甑の下半部である。5は内外口縁部がヨコナデ，内面がヘラ削り，外面は刷毛目調整となる。口縁部内面に刷毛目がわずかに残る。細砂粒を若干，雲母を僅かに含む胎土である。内面が茶褐色，外面が黄茶色を呈す。焼成は良好である。6は丸味を有す口唇部である。調整・胎土と焼成は略同となる。暗茶褐色を呈す。7は6と類似し，同一個体と思われる。内外底部はヨコナデを施す。

不明土製品（第24図）　8は略完形品である。長軸4.4cm・短軸3.05cm・厚み0.7cmを測る。両面共ナデ調整で，植物繊維痕が認められる。砂粒をほとんど含まず，淡茶灰色を呈す。焼成は若干甘い。9は端部の一部が欠損している。調整・胎土と色調は8と略同である。焼成は8よりも良好である。2点共に指紋か掌紋が認められる。10は先端部が僅かに欠損する略完形品



第51図　27～30号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)

である。長軸2.7＋α cm・短軸２cm・厚み0.5cmを測る。調整・胎土・色調と焼成も９と略同である。

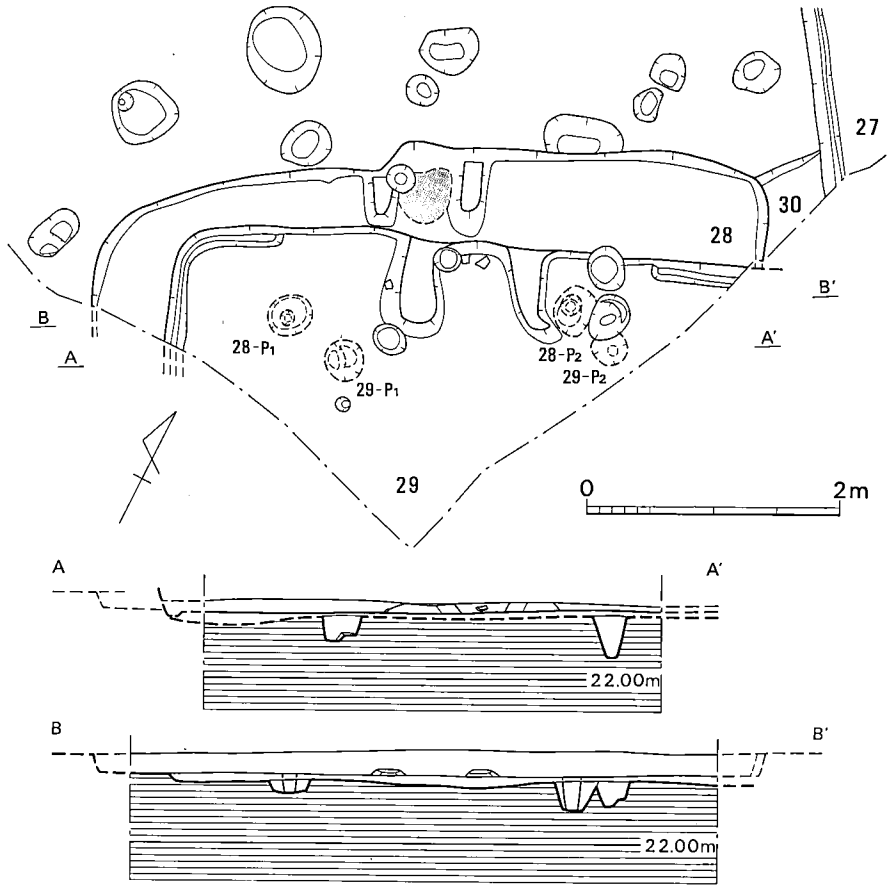
鉄　器（第８図）　７は鉄鏃の茎部であろう。残存長5.0cm・幅0.65cm・厚み0.4cmを測る。鏃芯の小さい一般的なものであろう。

本住居は出土品より７世紀中頃か若干相前後する時期に一応考えられる。

28号竪穴住居跡　（図版23・24，第52図）

27号住居の西方0.5ｍに位置し，30号住居を切るが29号住居に大半以上を切られた住居跡である。一辺が5.14ｍを測る大型規模と考えられ，平面形態も隅円方形と推定される。壁高は16～18cmを測り，床面は著しく硬化していない。主柱穴は29号住居下方より検出したＰ$_1$とＰ$_2$が考えられる。調査区内では壁小溝を検出していない。床は貼床をなしていたが，掘り込みは不明瞭で図化していない。

カマド　北西辺長略中央部に付設されている造り付け型である。両袖共に基底部しか残存せず，焚口部は29号住居で切られるが最大長58cmを測る。火床面は著しく赤変しており，最大幅42cmを測る。支脚は見受けられなかった。壁面が突出している処は煙道口の名残りであろう。



第52図　28・29号竪穴住居跡実測図(1/60)

出土遺物　(図版36, 第51図)

出土量は僅少である。本住居に明確に伴う遺物は全く出土せず，1・4・6が埋土中品で，他は床面下層より出土した。

須恵器（1～4）　1は復原口径9.9cmを測り，若干丸味をなす坏蓋であろうか。回転ナデ・ヨコナデ調整で，細砂粒を多く含む。紫灰色を呈し，焼成は良好である。2は復原口径11.8cmを測る坏身である。体部下半に回転ヘラ削りが認められる。胎土は微砂粒を若干含む。紫灰色を呈し，焼成は良好である。口唇部に打ち欠きが認められた。3は口縁部が僅かに内斜する短頸壺で，復原口径4.9cmを測る。ヨコナデ調整である。胎土は精良。内面が黄味の灰色，外面が灰褐色を呈す。焼成は良好である。4は高台が付く坏身であろうか。外面底体部は回転ヘラ削りが認められた。胎土は精良で，青灰色を呈す。焼成は良好である。

土師器（5・6）　5は復原口径7.6cmを測る小型の鉢であろうか。内外口縁部をヨコナデ・内面をナデ，外面はヘラ削りをなす。内面にヘラ状痕が認められる。胎土は精良であり，淡茶

灰色を呈す。焼成は普通である。6は甕の小破片である。内外口縁部がヨコナデ，内面が縦位のヘラ削り，外面は刷毛目調整となる。砂粒をあまり含まない胎土で，淡茶灰色を呈す。焼成は良好である。

出土品に時期差が認められるが，切り合い関係から4は柱穴等の混入品と考えられる。本住居は7世紀前半に一応比定されよう。

29号竪穴住居跡　（図版23・24，第52図）

28号住居を切るも，大半以上が調査区外に伸展する住居跡である。28号住居とは竪穴部・主柱穴及びカマドの位置などが略平行移動をなしていると思われる。平面形態が隅円方形で大型規模になると推定される。埋土は黒色土であり，当初1棟と考えたがカマドを検出して初めて切り合いを確認した。壁高は10cmを測るが，上記のことより更に高くなる。床面の硬化は一般的であった。主柱穴のP_1・P_2共に床面上で柱痕を検出していない。壁小溝はカマド部より80～90cm離れた位置より2条巡る。床面下層の掘り込みは不明瞭であった。

カマド　北壁中央部に付設されたと考えられ，造り付け型である。一部後世の柱穴に切られ，基底部しか残存していない。袖は最大長76cmを測る。支脚は残存せず，抜き跡も認められなかった。

出土遺物　（第51図）

出土量は僅少である。1は埋土より，2はカマド周辺より出土した。

須恵器（1）　復原受部径12.1cmを測り，たちあがりの上端が欠損する坏身である。外面体部中程より下方は回転ヘラ削り，他はナデ・ヨコナデを施す。胎土は微砂粒を若干含む。内面が紫灰色，外面が青灰色を呈す。焼成は良好である。

土師器（2）　甕の口縁部であろうか。内外ともヨコナデをなすが，内面に刷毛目が認められる。微砂粒を多く含み，茶灰色を呈す。焼成は良好である。

出土品と切り合い関係より，本住居は7世紀前半か僅かに後続する時期が比定されよう。

30号竪穴住居跡　（図版24，第50図）

27～29方住居に切られ，北西壁を50cm強検出したにすぎない住居跡である。壁高は7cm程を測るが，何ら特筆する遺構は在しない。遺物は土師器の小片が僅かに出土したのみである。切り合い関係から本住居は7世紀前半及び僅かに先行する時期に比定されよう。　（武田光正）

2　掘立建物跡

1～9号竪穴住居跡の存在する地区を除いて，B区で30棟を検出している。前記調査区はきわめて狭く，ピットを掘立柱建物跡の主柱穴として把握できなかったし，図上での復原もできなかった。B区の掘立柱建物跡は調査時点でそれと判断されていたのは27号掘立柱建物跡ただ1棟だけである。他の29棟は整理作業を行う過程で，図上で復原したものである。ただし，その際，原図をもとに復原した。が，幾分，建て方に無理な部分もあり，また，別の視野から見れば少しちがった結果が得られるかもしれないが，それは，報告者のひとつの判断と御了解頂くことにする。

さて，30棟の掘立柱建物跡は倉庫棟と思われるものとして，3，13，17，21，22，27号の6棟があり，18・25号があるいは倉庫棟になるかと推定され，それを含めて計8棟となる。他は居屋棟と思われる。主軸方位も画一性は見られず，時期幅も，竪穴住居跡との切りあい関係や出土遺物から，7世紀以降から中世までがみこまれる。以下，個別の説明を行う。

1号掘立柱建物跡　(第53図)

B区の北端に位置する建物で居屋棟と思われる。主軸をN－54°30′－Wに置き，面積23.22㎡を測る。無理を承知で一応，2×3間を考えている。

2号掘立柱建物跡　(第53図)

B区の北端に位置する建物で居屋棟と思われ，1号掘立柱建物跡と重複する。主軸をN－15°30′－Eに置き，面積39.2㎡を測る。2×4間の南北に細長い建物である。

3号掘立柱建物跡　(第53図)

溝1を切っている。1・2号掘立柱建物跡の西側にあり，主軸をN－26°－Eにおく。面積は8.77㎡を測る。倉庫棟と思われる。

4号掘立柱建物跡　(第53図)

2号堀立柱建物跡のすぐ東に存在する。2×3の建物を想定しているが，柱穴は揃わない。主軸はN－50°5′－Eを示し，面積は18.95㎡である。

5号掘立柱建物跡　(第54図)

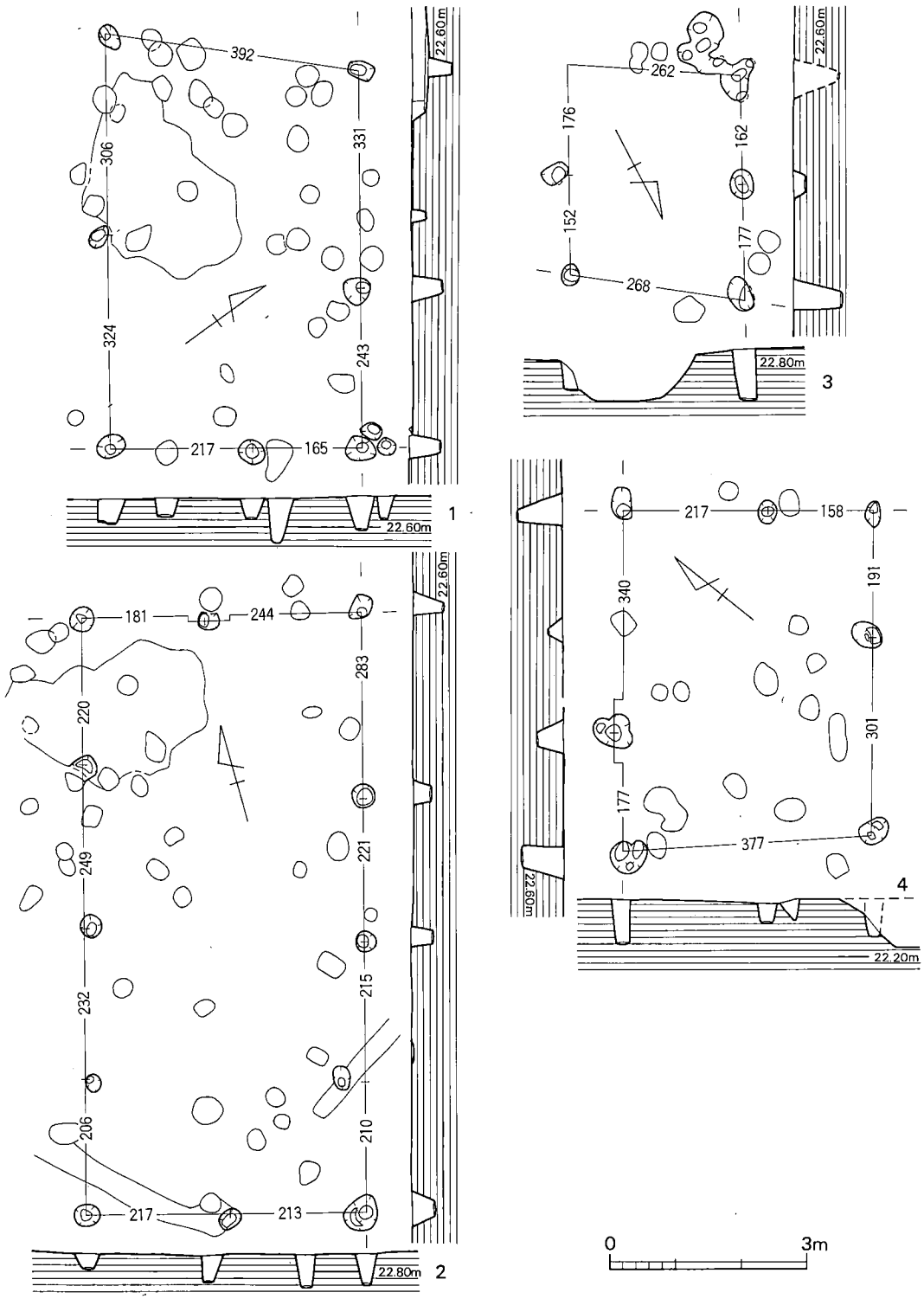
4号掘立柱建物跡のすぐ西にあり，主軸はN－55°－Eを示す。2×4間の細長い建物を考えているが，柱穴は揃わない。面積は32.25㎡を測る。

6号掘立柱建物跡　(第54図)

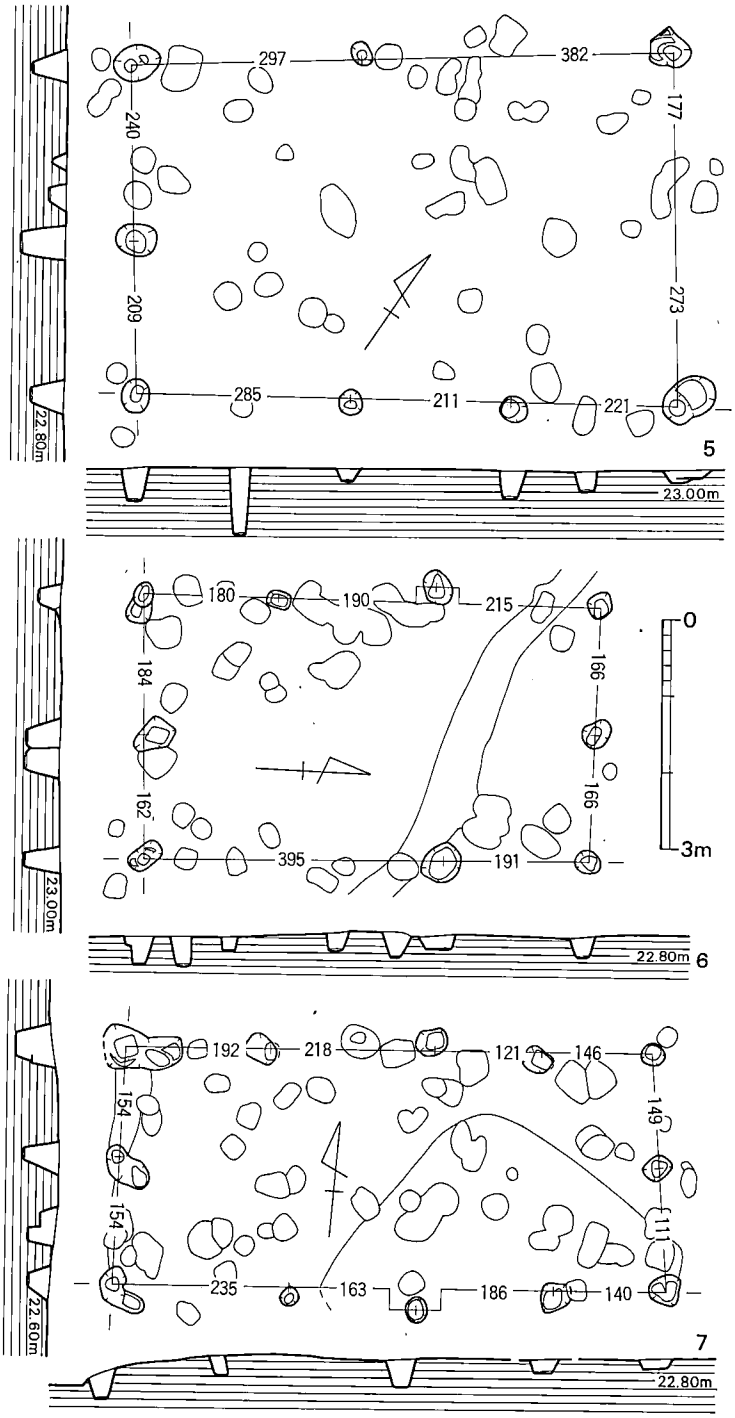
溝3に切られ，7号掘立柱建物跡と重複する。2×4間と想定する南北に長い建物で，主軸はN－3°30′－Wをとる。面積は20.23㎡である。

7号掘立柱建物跡　(第54図)

6・8号掘立柱建物跡及び10号竪穴住居跡と重複する。2×4間の東西に長い建物で主軸はきっちりと東西におき，面積は21.98㎡を測る。10号竪穴住居跡を切っており，7世紀後半以



第53図　1～4号掘立柱建物跡実測図(1/100)



第54図　5～7号掘立柱建物跡実測図(1/100)

降の所産であろう。

8号掘立柱建物跡　(第55図)

7号掘立柱建物跡と重複する。2×4間の南北に長い建物で北東隅は調査区外に延びる。近・現代の溝5に切られ，南柱列の中央の柱穴を欠く。主軸をN－15°－Eにおき，面積は31.01㎡を測る。

9号掘立柱建物跡　(第55図・付図2)

11～16号竪穴住居跡及び10・11号掘立柱建物跡と重複する。当初，3×5間の建物と考えたが，原図で検討した結果，北側の東西柱列（10号掘立柱建物跡のすぐ北側の東西柱列）は柱穴の形状・深さが著しく異なり，北側の東西柱列を除外して3×4間の建物と考えた。主軸をN－31°－Eにおき，面積は33.68㎡を測る。竪穴住居跡との切りあい関係より，11～16号竪穴住居跡のうち最も新しい13・15号竪穴住居跡の時期（7世紀後半）より古くなることはない。

10号掘立柱建物跡　(第55図)

9・11号掘立柱建物跡と重複し，北東に古銭を出土した土壙4がある。2×3間の建物で主軸をN－27°－Eにおく。面積は20.42㎡を測る。9号掘立柱建物跡との前後関係は不明だが，7世紀後半をさか上ることはなかろう。

11号掘立柱建物跡　(第56図)

9・10号掘立柱建物跡と重複する。東西に長い2×3間の建物で主軸をN－74°－Wにおく。面積は33.69㎡を測る。北柱列が先述の土壙4と重複する。

12号掘立柱建物跡　(第56図)

調査区のほぼ中央に位置する建物で近・現代の溝5に切られている。やや無理に建てた面もあるが，一応，2×3間の建物であろうと考えている。主軸はN－28°－Wで，面積は36.93㎡を測る。

13号掘立柱建物跡　(第56図)

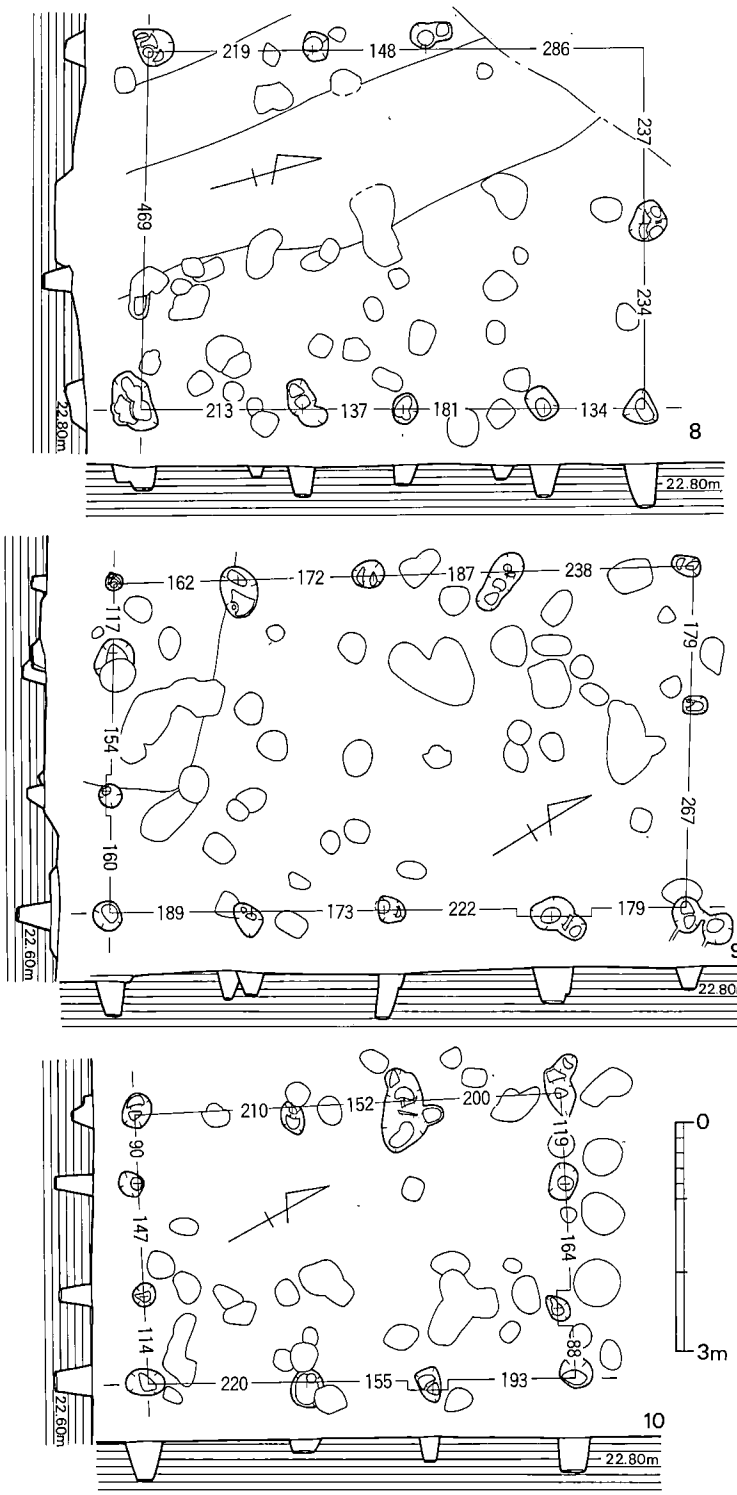
26号竪穴住居跡のすぐ東に位置し，溝1を切っている。大きな，しっかりとした掘り方をもつ1×2間の建物で倉庫棟だと考えている。主軸はN－58°30′－Eで面積は6.35㎡を測る。

14号掘立柱建物跡　(第56図)

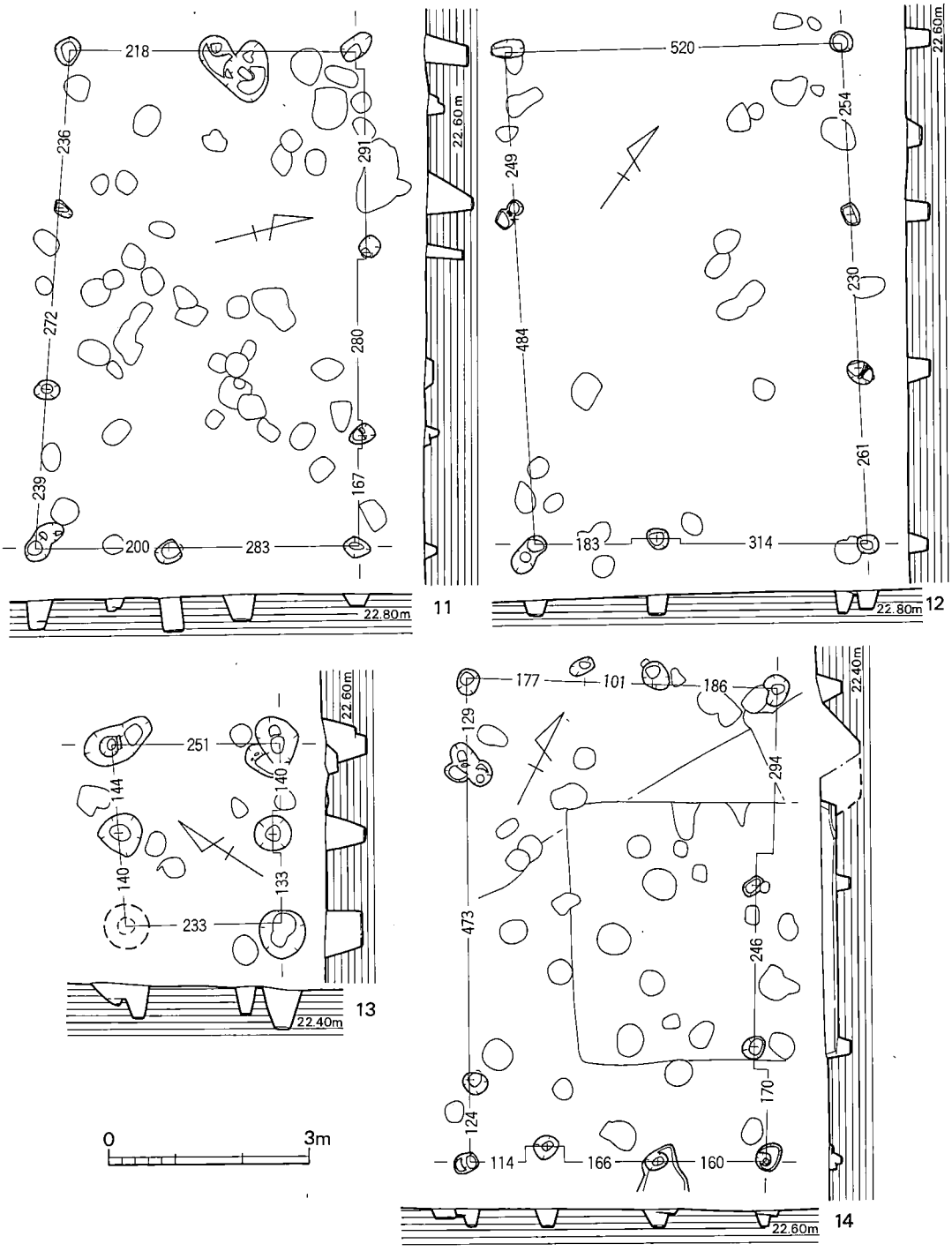
26号竪穴住居跡・溝1を切って建てられた，3×4間と推定する建物である。主軸をN－27°30′－Wにおき，面積は32.37㎡を測る。26号竪穴住居跡の時期（7世紀前半代）をさか上らない。

15号掘立柱建物跡　(第57図)

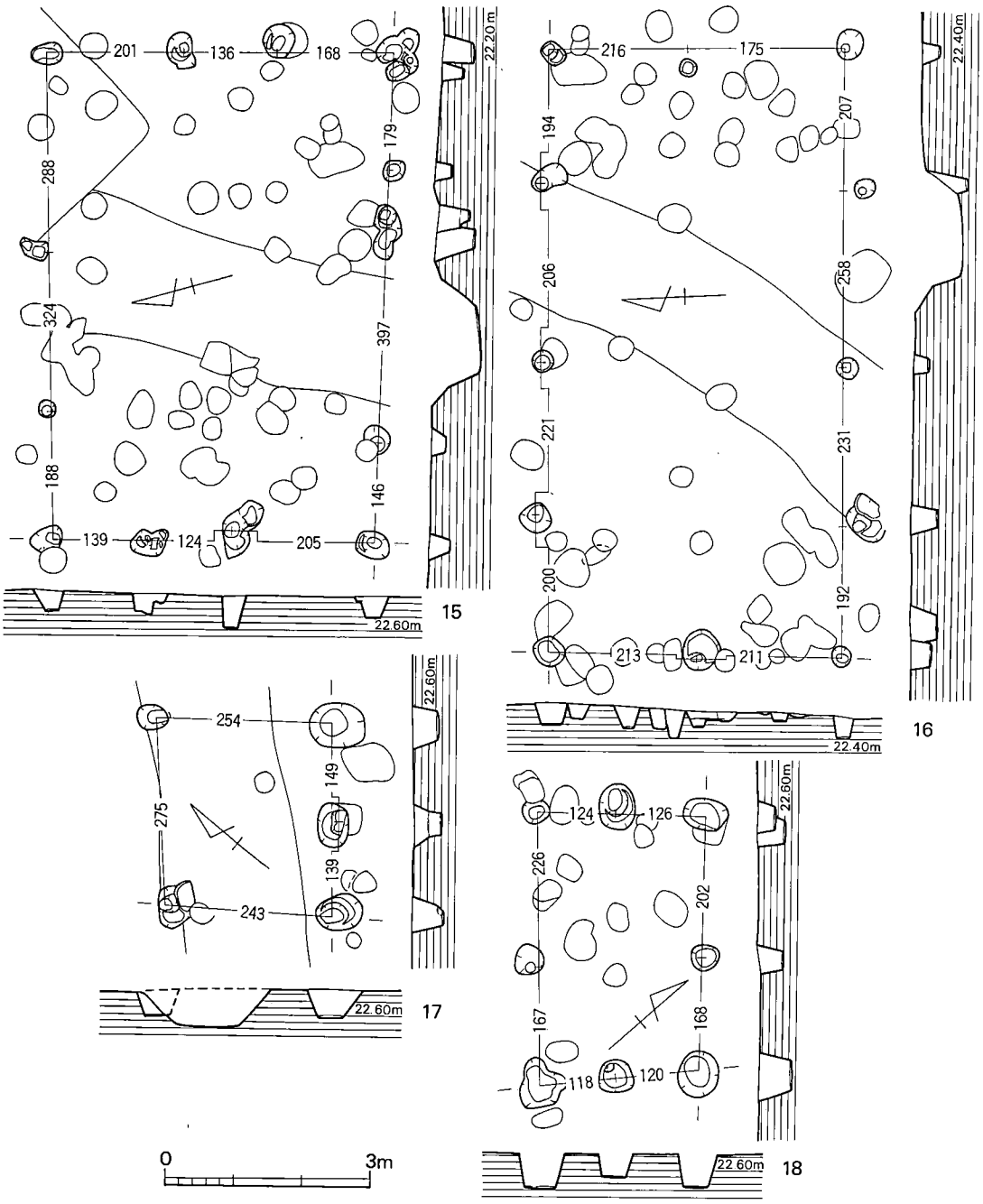
14号掘立柱建物跡と同様に26号竪穴住居跡・溝1を切って建てられた，3×4間と推定する建物である。主軸をN－76°－Wにおき，面積は34.81㎡を測る。時期は14号掘立柱建物跡と同様に考えている。



第55図　8～10号掘立柱建物跡実測図(1/100)



第56図　11～14号掘立柱建物跡実測図(1/100)



第57図　15～18号掘立柱建物跡実測図(1/100)

16号掘立柱建物跡　(第57図)

溝1を切り，15・17・19号掘立柱建物跡と重複する。建てるには少し無理な面もあるが，一応3×4間と推定する建物である。主軸をN－88°－Wにおき，面積は37.33㎡を測り，本調査区最大のものである。

17号掘立柱建物跡　(第57図)

溝1を切り，16・18号掘立柱建物跡と重複する。1×2間の倉庫棟と思われる。主軸をN－48°30′－Eに置き，面積は7㎡を測る。

18号掘立柱建物跡　(第57図)

17号掘立柱建物跡に接して存在する。2×2間の建物で主軸はN－48°－Wにおき，面積は9.15㎡を測る。

19号掘立柱建物跡　(第58図)

25号竪穴住居跡，16・20号掘立柱建物跡と重複する。2×4間と推定される建物で，主軸をN－71°－Wにおき，面積は22.97㎡を測る。この建物は25号竪穴住居跡を切っており，7世紀前半をさかのぼらない。

20号掘立柱建物跡　(第58図)

23・25号竪穴住居跡，19号掘立柱建物跡と重複する。妻に相当する部分に柱穴が検出されてないので，建物とするのにやや無理があるが，一応，1×3間と推定する。主軸はN－39°－Wにおき，面積は32.73㎡を測る。2軒の竪穴住居跡を切っており，それらの年代観より19号掘立柱建物跡と同様に7世紀前半をさかのぼらない。

21号掘立柱建物跡　(第58図)

23号竪穴住居跡に切られ，24号竪穴住居跡を切っている。南側柱列は24号竪穴住居跡の貼床の下で柱穴が検出された。1×2間のしっかりした掘り方の倉庫である。主軸をN－70°－Wにおき，面積は7.91㎡を測る。竪穴住居跡との切りあい関係より，7世紀前半を降らない。

22号掘立柱建物跡　(第58図)

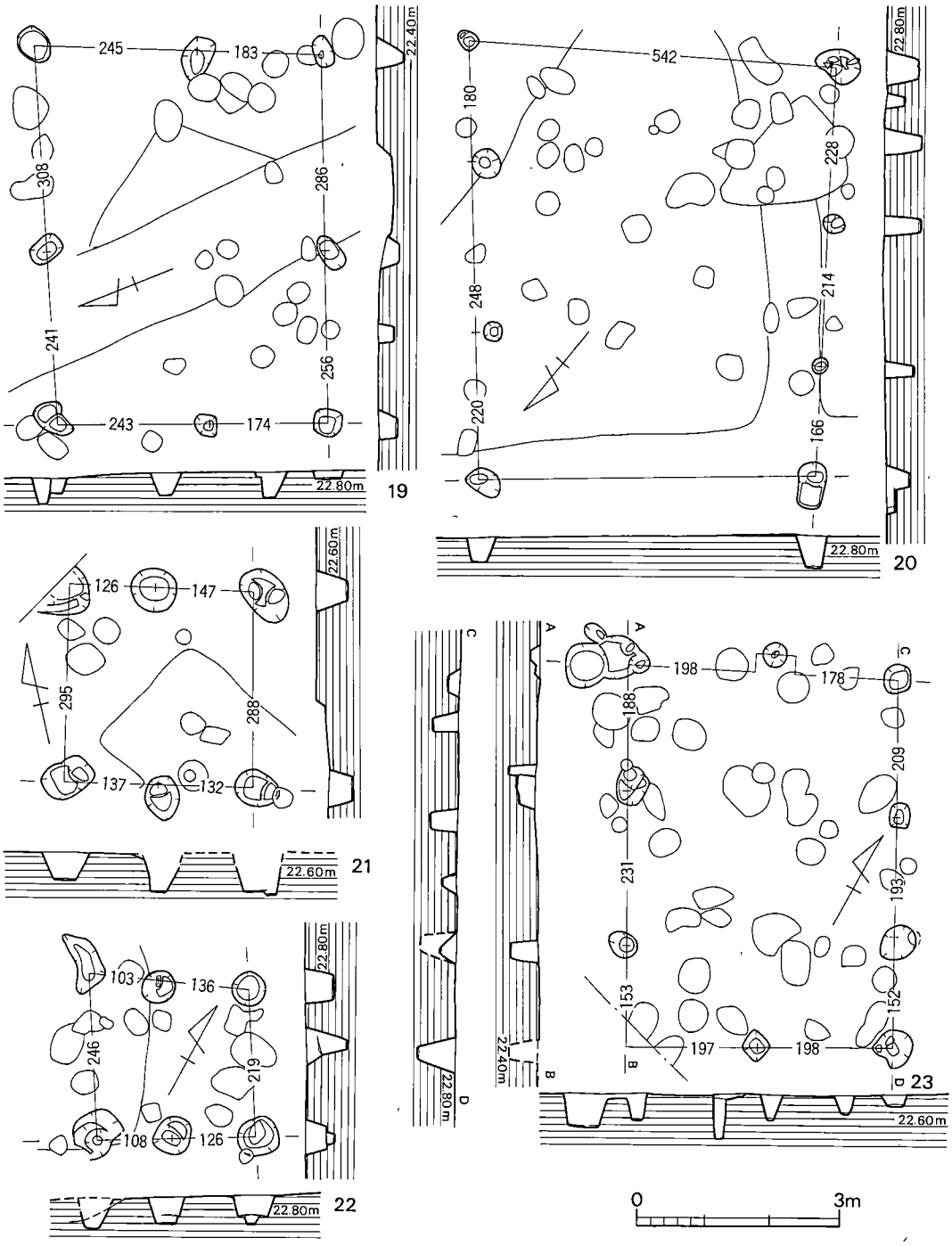
15号竪穴住居跡を切って建てられた，1×2間のしっかりした掘り方を持つ倉庫である。主軸をN－53°－Eにおき，面積は5.48㎡を測る。竪穴住居との切りあい関係より，7世紀中頃～後半をさかのぼらないと思われる。

23号掘立柱建物跡　(第58図)

24～26号掘立柱建物跡と切りあっている。2×3間と推定する建物で，主軸はN－29°－Wにおき，面積は21.78㎡を測る。

24号掘立柱建物跡　(第60図)

23・25・26号掘立柱建物跡と切りあっている。過半が調査区外に拡がるので，不明な部分を多く残すが，かなり大きな建物のようである。



第58図　19～23号掘立柱建物跡実測図(1/100)

25号掘立柱建物跡　(第60図)

23・24・26号の掘立柱建物跡と切りあっている。建物中央の土壙状の遺構に柱穴の存在を想定できれば，２×２間の倉庫棟とも考えられる。が，柱穴の小さいのがやや気懸かりである。主軸をＮ－51°30′－Ｅにおき，面積は24.81㎡を測る。

26号掘立柱建物跡　(第59・60図)

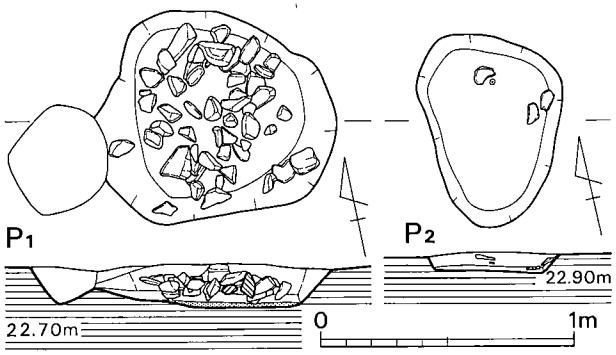
建物とするのにはかなりの無理があるが，Ｐ１・Ｐ２の底にコブシ大の川原石を敷いており，根石的なものではないかと考え、図上でＰ１・Ｐ２を使ってひとつの案として提示したものである。根石とする前提が崩れれば，Ｐ１・Ｐ２は当然別個の遺構と考えなければならない。一案として建てたこの「建物」は２×３間と推定し，面積は24.8㎡を測り，主軸はＮ－84°－Ｗを示す。

27号掘立柱建物跡　(第60図)

20号竪穴住居跡のすぐ北東に位置する。１×２間のしっかりした掘り方を持つ倉庫である。主軸をＮ－26°30′－Ｗにおき，面積は5.38㎡を測る。20号竪穴住居跡と接近しており，同時併存は考えられず，同竪穴住居跡の営まれた７世紀前半の時期をはずして考える必要がある。

28号掘立柱建物跡　(第60図)

17～19号竪穴住居跡を切って建てられている。西端部は調査区外に延びるが，２×４間の建物と思われる。主軸はＮ－69°－Ｗにおき，面積は35㎡程度と思われる。前記３軒の竪穴住居跡のなかで最も新しい17号竪穴住居跡は７世紀前半頃の時期のものと考えられ，この建物はそれより古くなることはない。



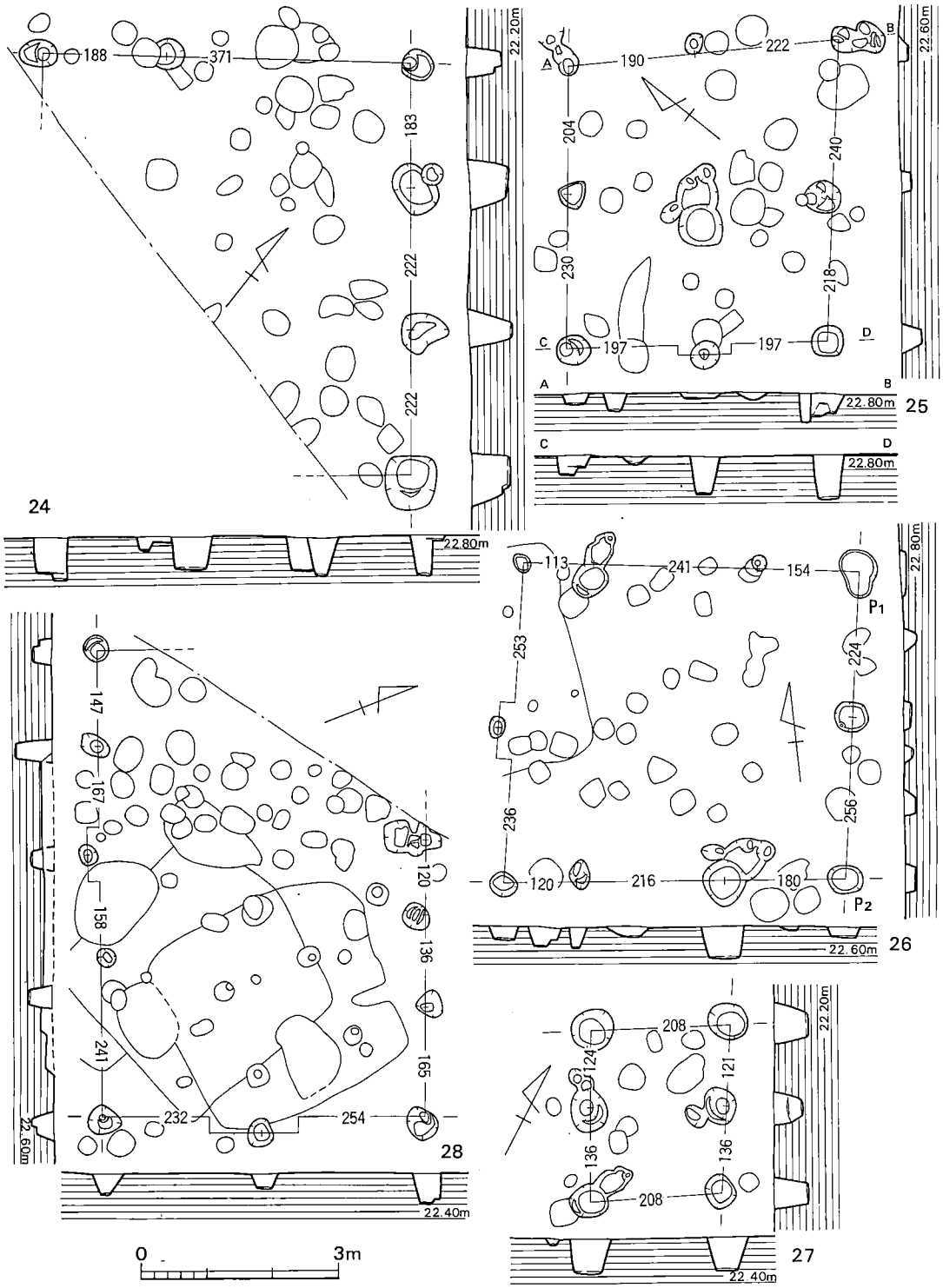
第59図　26号掘立柱建物柱穴実測図(1/30)

29号掘立柱建物跡　(第61図)

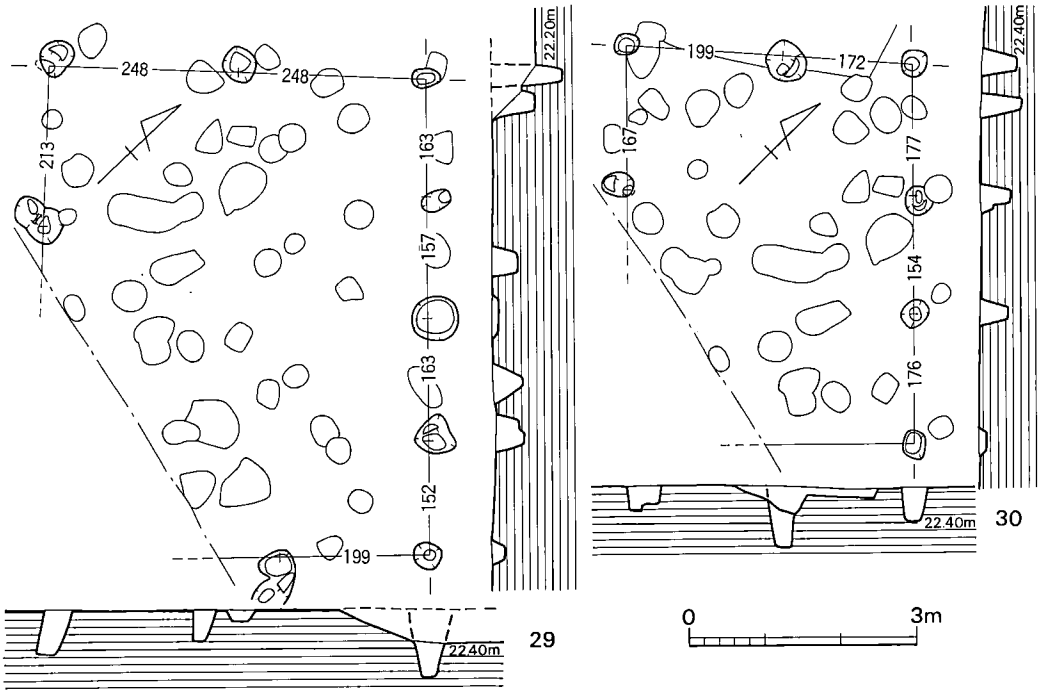
５号土壙，30号掘立柱建物跡と重複するが，５号土壙との新旧関係は確認されていない。２×４間の建物であろう。主軸Ｎ－44°－Ｗにおき，面積は33㎡程度と思われる。

30号掘立柱建物跡　(第61図)

調査区西端に位置し，21・22号竪穴住居跡を切る。２×３間の建物と思われるが，南端部が調査区外に延びるため，不明な部分を残している。竪穴住居跡との関係より，７世紀前半をさかのぼらない。　(児玉)



第60図　24～28号掘立柱建物跡実測図(1/100)



第61図　29・30号掘立柱建物跡実測図(1/100)

3　方形竪穴

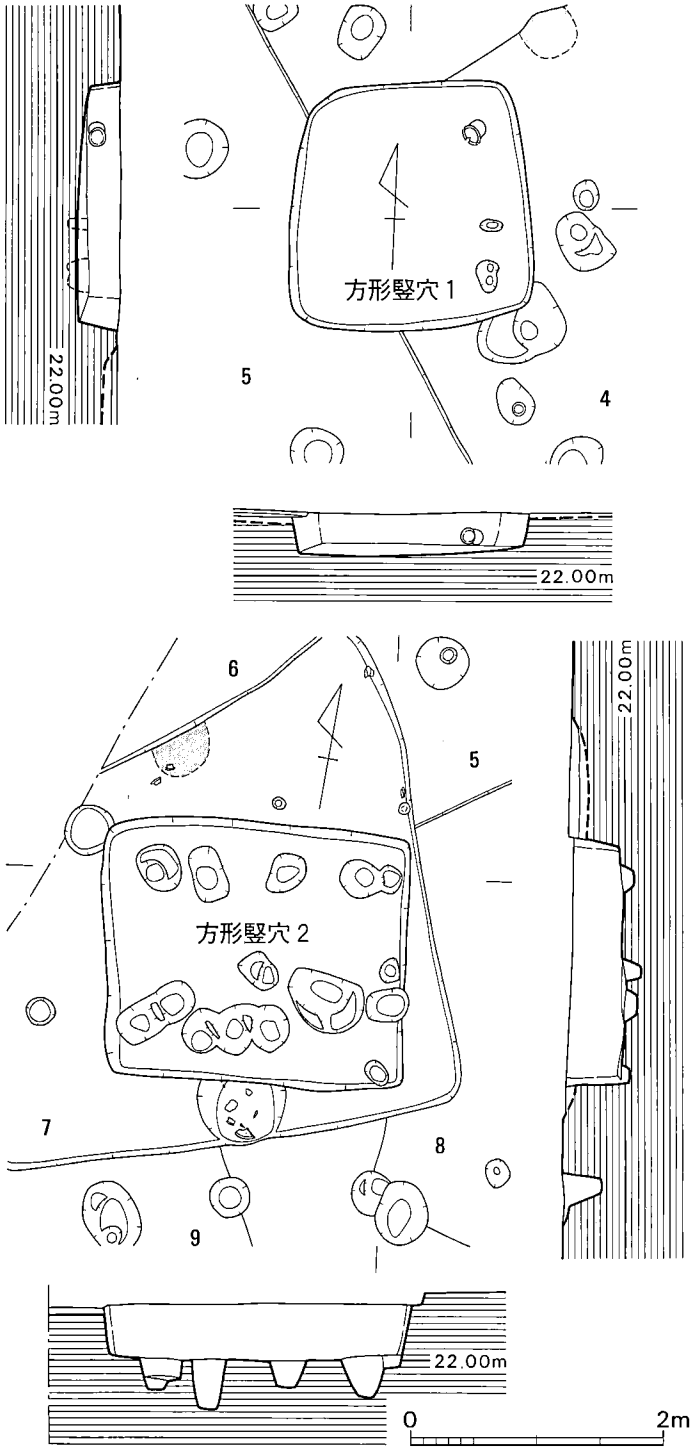
1号方形竪穴　(図版18・25，第62図)

C地区の4・5住居跡を切って営まれた方形竪穴遺構である。平面形態は隅円の台形状を呈す。下端で南北辺長1.85m，東西辺長は南側で1.83m，北側で1.55mを測る。埋土は他の住居と略同じ黒色土である。壁面は垂直に近い立ち上がりをなし，最大壁高32cmを測る。床面は地山（黄褐色粘土）であり，貼床及び硬化面等は見受けられない。また生活関連遺構も何ら在しない。床面上で柱穴を3個検出したが，伴うか否か不明である。床面直上に中～小型甕形品が出土した。この甕は整理中に宮原遺跡の他の遺物内に混入したと思われる。宮原遺跡は順次報告する予定であり，発見され次第掲載したい。この他の出土遺物は土師器の小片が僅少出土した。

本遺構は5号住居よりも新しく，7世紀後半以後に比定される。

2号方形竪穴　(第62図)

1号方形竪穴の南側2.5mに位置し，7号住居を切って営まれている。平面形態は長方形を呈し，下端で長軸2.25m，短軸1.95mを測る。埋土は1号方形竪穴や周辺の住居と略同じ黒色土である。壁面は略垂直に近い立ち上がりをなし，最大壁高43cmを測る。床面の状況も1号方



第62図　１・２号方形竪穴実測図(1/60)

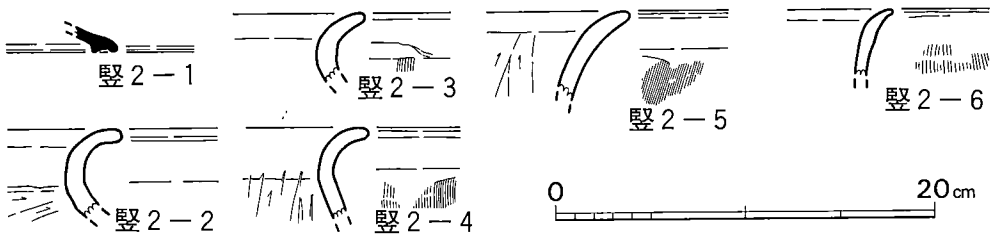
形竪穴と略同であるが，床面上に多数の柱穴を検出した。この柱穴は長軸壁下で直線上に配列した観を呈すが，これら柱穴が本遺構に伴うと断定する迄には至らなかった。その他の特徴も１号方形竪穴と略同じである。

出土遺物　(第63図)

全て埋土中より出土した。１号に比較するとやや多く出土したが，全て小片である。

須恵器（１）　坏蓋であろうか。内面のかえりは断面三角形を呈す。ヨコナデ調整である。胎土は細砂粒・雲母を多く，赤褐色粒を僅かに含む。橙褐色を呈し，焼成は甘い。

土師器（２～６）　２～４は甕で，５と６は甑である。調整は内外口縁部がヨコナデ，内面が縦・斜位のヘラ削り，外面が刷毛目と５点に共通する。２は細砂を多く，赤褐色粒を含む胎土で，橙色を呈す。３は細砂を多く含み，橙褐色を呈す。５と６は胎土・色調とも４と同じである。５点とも焼成は良好である。



第63図　2号方形竪穴出土土器実測図(1/4)

本遺構は7世紀末～8世紀初頭頃が出土品より一応比定されよう。

3号方形竪穴　(図版19，第38図)

20号住居跡の西壁を切って営まれているが，埋土は住居と僅かな差異が認められた。平面形態は隅円長方形を呈す。下端で長軸1.65m，短軸で1.29mを測る。壁面は前述の2基に比べ緩やかな立ち上がりをなす。最大壁高も18cmと浅い。床面の状況も前述の2基と同じで，床面上には何ら在しなかった。他の特徴についても同様であった。土師器の小片が僅かに出土した。

本遺構は20号住居より新しい時期となる。　(武田)

4　土　壙

1号土壙　(第64図)

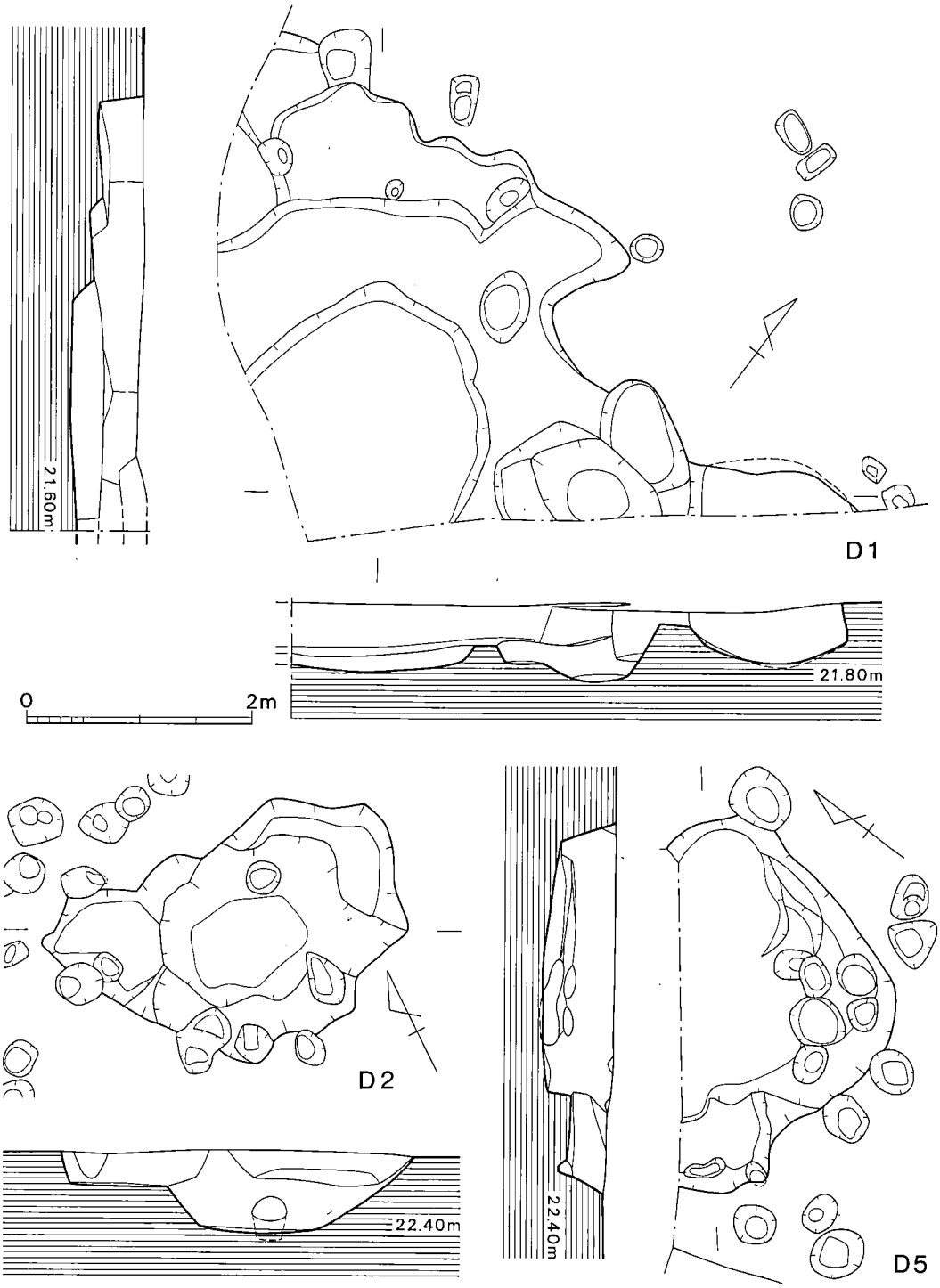
C地区南端に位置し，黒色土が充填した土壙である。南側が三段のテラス状を呈し，北側が3個のピット状を呈す不整形な平面形態となる。検出面において数基の土壙が切り合うと思われたが，断面観察では認められなかった。最深部は南側より57cm・63cm・47cm・50cmを測る。上記より掘り方の形状が南北2つで大きく差異を呈し，埋土は切り合いを有さないことより，別個に掘られたとしても同時期に埋没したと考えられる。これらから埋めることを目的にして掘られたのではなく，掘ることが目的の例えば採土場的性格を有すると考えられよう。

出土遺物　(図版，第24・65図)

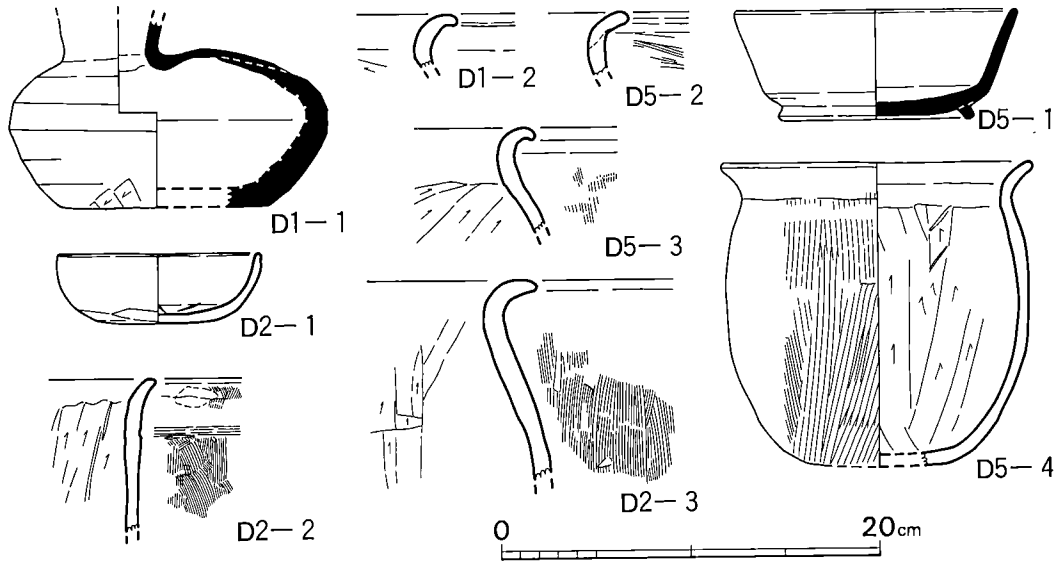
全て埋土中品であるが，1は南側より，2と3は北側より出土した。

須恵器（1）　頸部中程より上方と底部の一部を欠損する平瓶である。体部全体に丸みをなし，体部最大径16.95cm・底部径11.0cmを測る。内面はナデ・ヨコナデで，外面は底部が静止ヘラ削りで，底部より体部中半までが回転ヘラ削り，体部中半より上方がヨコナデ調整である細砂を多く含み，灰色を呈す。焼成は良好で堅固である。

土師器（2，3）　2は甕口縁部片である。ヨコナデ調整で，内面に斜位のヘラ削りが認められる。細砂を多く含み，橙褐色を呈す。焼成は良好である。3は口径3cm・器高2.2cmを測る手捏ねの坏である。全てナデ調整で，内面に指圧痕が認められる。微砂・赤褐色粒を若干含



第64図　1・2・5号土壙実測図(1/60)



第65図　1・2・5号土壙出土土器実測図(1/4)

み，薄橙褐色を呈す。焼成は良好である。

出土品より本遺構は7世紀中頃か若干相前後する時期に比定出来る。

2号土壙　(第64図)

B地区の北端に位置する。平面形態は不整形な長楕円形を呈す。長軸の両側に上端より10～16cmでテラス状をなし、中央部は更に20cm程深くなる。上端で長軸3.24m・短軸1.75mを測り，中央部は下端で長軸1.03m・短軸0.79mを測る。埋土は1号と同様の黒色土である。壙内より炭化物や灰などは認められなかった。本土壙の性格は不明である。

出土遺物　(図版39，第24・64図)

出土量はあまり多くなく，全て埋土中品であった。

土師器（1～3）　1は復原口径10.9cm・器高3.7cmの埦であろう。内面と外面口縁部がヨコナデ，外面体部がナデ，外面底部がヘラ削り調整である。内面底部に板圧痕が付く。微砂粒・赤褐色粒をやや多く含み，一部薄黄褐色となる薄橙褐色を呈す。焼成は良好である。2は甑の小破片である。外面頸部に一条の凹線が巡る。内外口縁部がヨコナデ，内面が縦位のヘラ削り，外面が刷毛目調整となる。外面口唇部下に指頭痕が付く。細砂粒を若干含み，内面が暗茶色で外面が黄茶色を呈す。焼成は良好である。3は甕の小破片である。2と略同じ調整・胎土・焼成である。茶褐色を呈す。

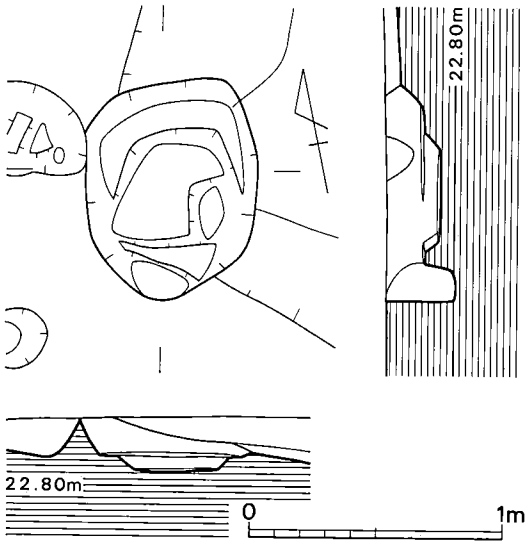
不明土製品（4）　約半分以上を欠損する大型品である。長軸4.2cm，短軸4.15cm・厚み0.9cmが残存する。両面共ナデ調整であるが，植物繊維痕も認められる。微砂粒を若干含み，茶色味

ある灰白色を呈す。焼成は普通である。

本土壙は出土品より1号土壙と大差ない時期に比定されよう。

3号土壙　(図版25，第66図)

10号住居の西方5mに位置し，上端の一部が溝5に切られている。埋土は黒色土であったが，当初はやや大きめの柱穴と考えていた。上端より12～14cm掘り下げると，長軸側の両端が焼土化したテラスを検出した。テラスより床面まで5cmの埋土は上層と大差なく，炭化物等は混入していなかった。テラス部より下方の壁面と床面も明瞭に焼土化をなしていた。南側のテラス部は一部が後世の柱穴で切削されている。平面形態は上端が楕円形を呈し，床面は上端と略同じとなる。床面は南東部が僅かな窪みとなるが略水平をなしている。遺物は土師器の小片が僅かに出土しただけである。本土壙の性格を判断出来る出土品や埋土物はなく，壁面や床面に加熱が認められたにすぎない。上記より性格は不詳で，時期も比定出来ない。　(武田)



第66図　3号土壙実測図(1/60)

第4号土壙　(図版26・27，第67図)

プランは北西から南東に長軸をとる不整長方形で，壙底のほぼ中央に1個の鉢が据えられており，この内外から銅銭・土師器・礫が発見されている。

規模は，現存上端長83cm，同最大幅42cmと，小型。現状での深さは10cm足らずで，北西側が僅かに高い。底面での長さは73cmで，同部幅は32cm。

鉢13は，•印を付す3石によって安定保持されているが，北側が少しばかり高い。僅かに低くなる南側の底部には，6×10cm大の孔があいている。破片が見当たらぬことから推して，事前に穿たれたものであろう。鉢内部から出土した2枚の小皿9・10のうちの1枚（10）は、もともとはこの孔を覆っていたもの，とみてよかろう。

長さ約10cmの一連の銅銭は，鉢の外，北側の壙底から，僅かに弧を描くようにしてほぼ一塊りとなって出土した。鉢をはさんだ南側からは，8枚の小皿と2枚の杯とが，器種毎に重ねられた状態で出土したが，礫群と同様に，いずれもが壙底とは間層をはさんでいる。鉢内部の皿9と礫群もまた，器壁とは密着せずに浮いた状態で出土している。

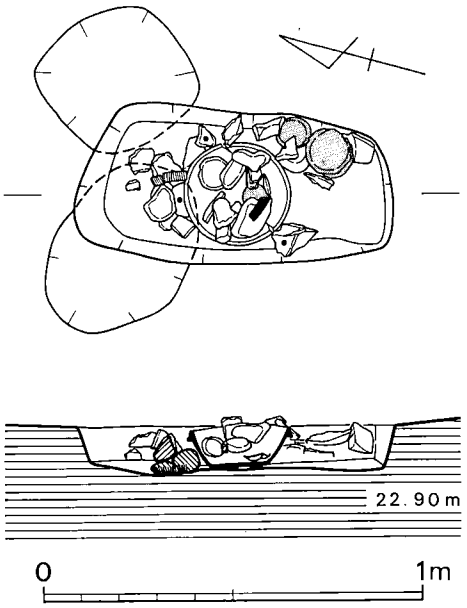
従って，これらの土器や礫は，当初は土壙の上方にあったものが自然に落下したもの，とみなされよう。

出土遺物　(図版36・37，第68図)

小　皿（1～10）　10枚出土しており，いずれも，糸切りで，かつ，底面に板圧痕をとどめている。底部の厚さが目立つ工類（1～8）と，薄手のⅡ類（9・10）とがある。Ⅰ類は，径8.3～8.8cm，高さ1.2cm～1.5cm，Ⅱ類は，高さは1.2～1.3cmと前者と大差ないが，径は9.6～9.7cmとひとまわり大きい。

杯（11・12）　2枚とも，小皿と全く同様，底面に糸切痕と板圧痕とをとどめている。11は，口径13cm，器高2.8cm。12は，口径13.3cm，器高3.2cmで，底は分厚い。

鉢（13）　口径26.9cm，器高11.2cm，底径13.4cm。既述のように，恐らくは壙底に据え置く直前に，底の一部を意識的に打ち欠いている。胎土は精良で，稍歪みはあるものの，成形・調整は丁寧。内面は縦方向の，体部器表は斜め方向に，各々篦磨き。底面には，板目圧痕をとどめる。全体の色調は暗黄褐色であるが，底部内面のみ黒色。煤が器表のほぼ全面に付着しているが，口唇内側には達していない。五徳にかけられ放しだったらしく，底部から体部下半にかけて，煤が付着せず，かつ，熱変の度合いが周囲とは異なる。ドーナツ状の部分がある。



第67図　4号土壙実測図(1/30)

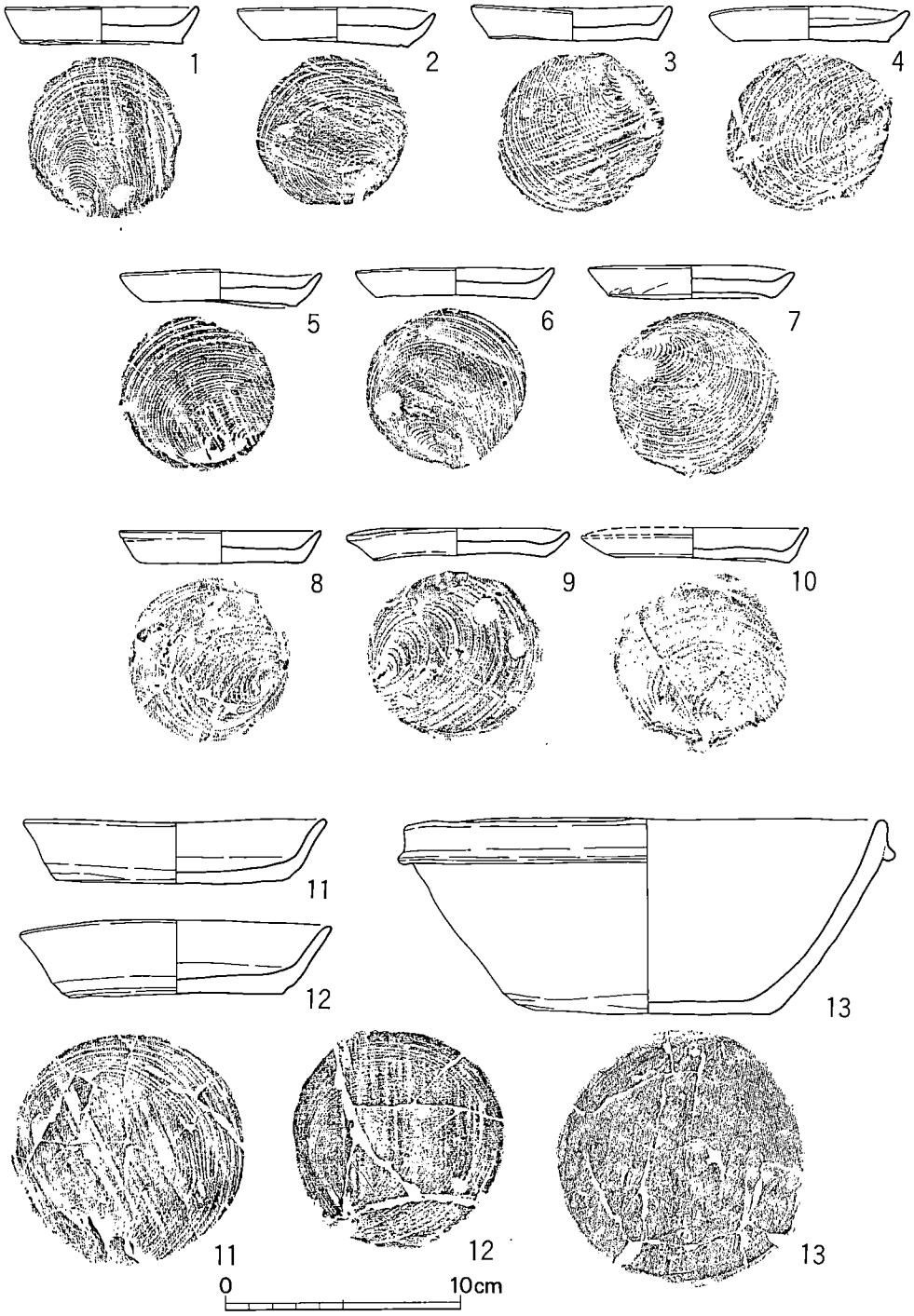
銅　銭　計76枚が，紐で一連とされている。2条を撚り合わせた紐は，糸ではなく，ワラよりも繊維質の多い材料が使われている。銅銭自体は，鋳上りが劣悪な私鋳銭で，文字も判読し難い。重量は，76枚の総重量が計206ｇで，平均38ｇ。径は23㎜強～25㎜強，厚みは1.1～1.85㎜。

小皿・杯のいずれの底部切り離しも糸切りのみであることから，これらの土器は12世紀中葉以降の所産とみてよかろう。

一連の銅銭は，備蓄銭とは考えられない。全体として，何人かを，恐らくは幼児を供養しようとする心情の発露のように思われる。　(石山勲)

5号土壙　(図版19，第64図)

19号住居と21号住居の中間に位置し、約半分を調査した土壙である。平面形態は不整形を呈し，最大長3.36ｍ・深さ0.62ｍを測る。埋土は黒色土が略均一に充填していた。形状及び埋土状況は1号土壙と略同じであるが，下方には若干土器が混入していた。本土壙の性格は1号土壙に類似すると思われるが断定するまでには至らない。



第68図　4号竪穴住居跡土壙出土土器実測図(1/3・13は1/4)

出土遺物　(第65図)

床面より若干上方で多く出土した。埋没時に投棄されたのであろう。

須恵器（1）　¼強残在する坏身であり，復原口径15.0cm・器高5.7cm・復原底径10.4cmを測る。ゆるやかに外反する底体部・口縁部で，八の字形の高台が付く。調整はナデ・ヨコナデをなす。胎土は微砂粒を多く含み，褐色を呈す。焼成は良好である。

土師器（2～4）　4は½弱残在する中型甕で，復原口径16.6cm・器高15.9cmを測る。やや大きく外反する口縁部で，胴部は丸味を有すがあまり張り出ない。内外口縁部がヨコナデ，内面が縦位のヘラ削り，外面はやや粗い刷毛目調整である。細砂を多く，赤褐色粒を少し含む胎土である。明橙褐色を呈し，焼成は良好である。2と3は大型となろう甕の小片である。調整等は4と略同じである。

出土品より本土壙は7世紀後半かそれ以後が考えられる。　(武田)

5　溝

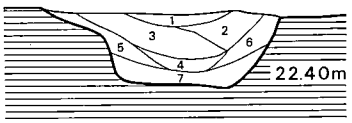
溝　1　(付図1，第69図)

B区の東端を南北に走る溝で，26号竪穴住居跡，3・13・～17号掘立柱建物跡に切られる。幅2m前後，深さ50～60cm程である。この溝はさらに北，南に延び，北は1号竪穴住居跡の東側を通り，さらに北へ延びる。南はA区で検出され，さらにD区の東側の末調査区にはいっていく。A区においても溝1を切る遺構はB区と同様であり，すくなくとも，この溝は7世紀代には完全に埋没していたと思われる。溝への土砂の流入は西側（第69図の左側）からが強いが上層においては東からの流入も見られる。土器は4～6層以上で多く検出され，上層では7世紀以降のものが多い。

出土土器　(図版38，第70図)

須恵器・土師器とも出土している。図示できるのは土師器だけである。

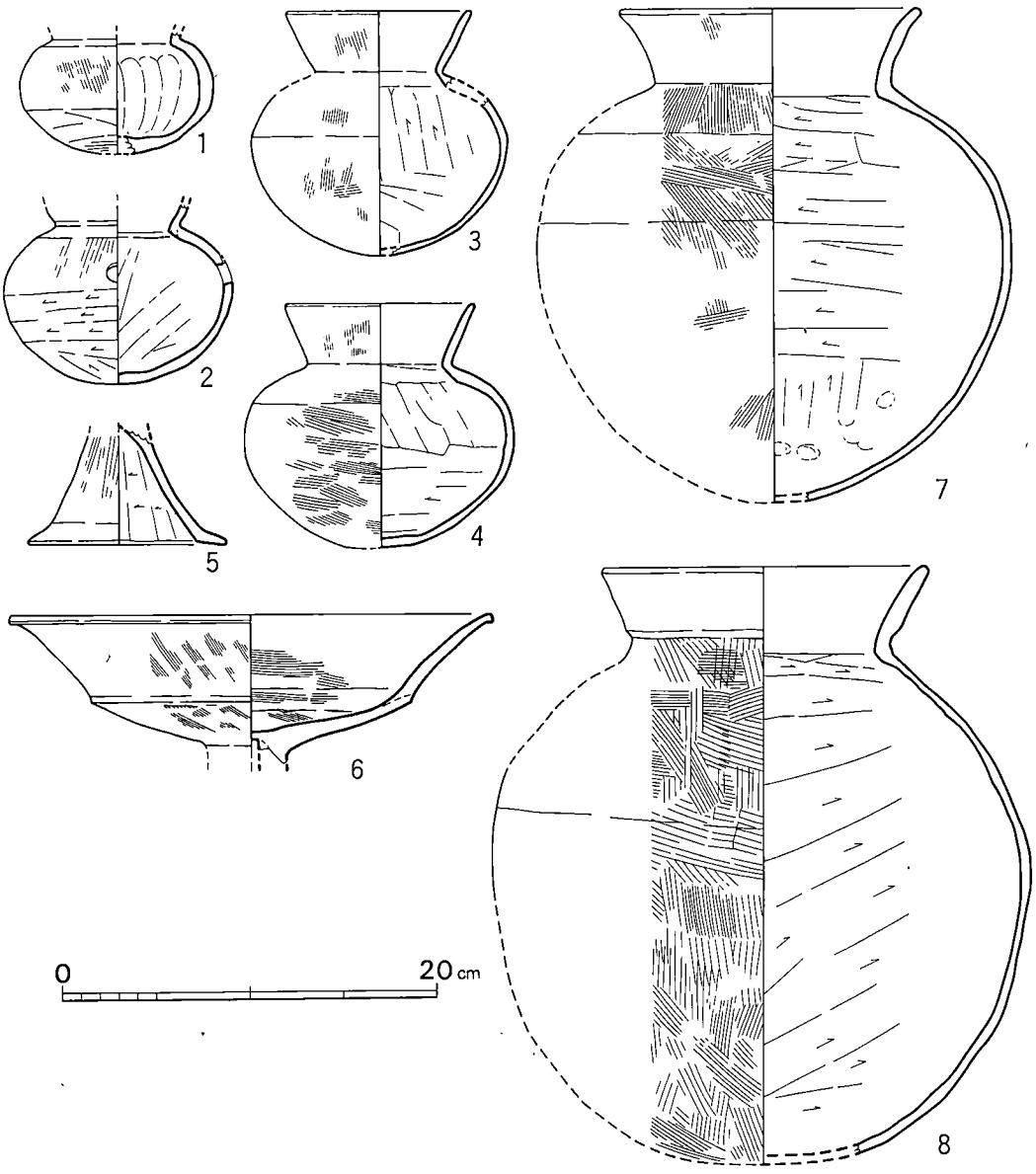
土師器（1～8）　1～4は坩である。遺憾ながら出土した層位は不明である。1は小破片で反転図である。口縁部と底部を欠く。底部外面はヘラ削りを行い，その上半はハケ目調整を行う。2は須恵器の瓶をまねたもので，口縁部を欠く。調整は1と同様である。3は反転復原図で口径10cm，器高13cm程である。外面はハケ目調整の上をナデており，胴部内面はヘラ削りを行い，口縁部はヨコナデを行う。4は略完形品で口径10cm，器高13cmを測る。4個体とも細砂粒を含み，焼成は良好で，1は灰褐色，他は明茶褐色を呈す。5・6は高杯である。5は脚部外面にハケ目を残すが脚部内面のヘラ削りの手法や



1　淡黒灰褐色土（土器・礫を含む）
2　淡黒灰色・暗横褐土（砂を含む）
3　淡黒灰褐色土
4　暗茶褐色粘質土
5　黒灰褐色土
6　淡黒灰褐色土（砂を含む）
7　淡黒灰褐色土（礫を含む）

第69図　溝1土層図(1/60)

胎土等から6世紀末～7世紀代のものと思われる。6は弥生時代終末期頃の古いもので，あるいは土師器に含まれるかと思われる。小破片の反転復原図で口径26cmを測る。金雲母・角閃石の破片を含み，焼成良好で暗褐色を呈する。7・8とも図上で完形に復原される甕である。7



第70図　溝1出土土器実測図(1/4)

は口径16.2cm，器高26.2cmを測る。細砂粒を多く含み，焼成は良好で黒斑があり，ススが付着している。8は口径17.4cm，器高32cm程である。外面は粗いタッチのハケ目を施している。細砂粒を多く含み，焼成は良好で明褐色を呈する。

溝　2

1号竪穴住居跡の南にあり，浅い。時期は不明である。

溝　3

溝2と同様の溝で，現在はつながらないが，本来はひとつの溝と思われる。

溝　4

14号掘立柱建物跡の南東にある。27号竪穴住居跡に切られている。

溝　5

掘立柱建物跡・竪穴住居跡を切る最近の溝である。　（児玉）

6　その他の出土遺物

ピット出土の土器　（第71図）

1～5・10は2・3号竪穴住居跡に新しく掘り込まれたピットから出土した。11・12は7号掘立柱建物跡の柱穴から，他は建物としてまとまらないピットから出土した。

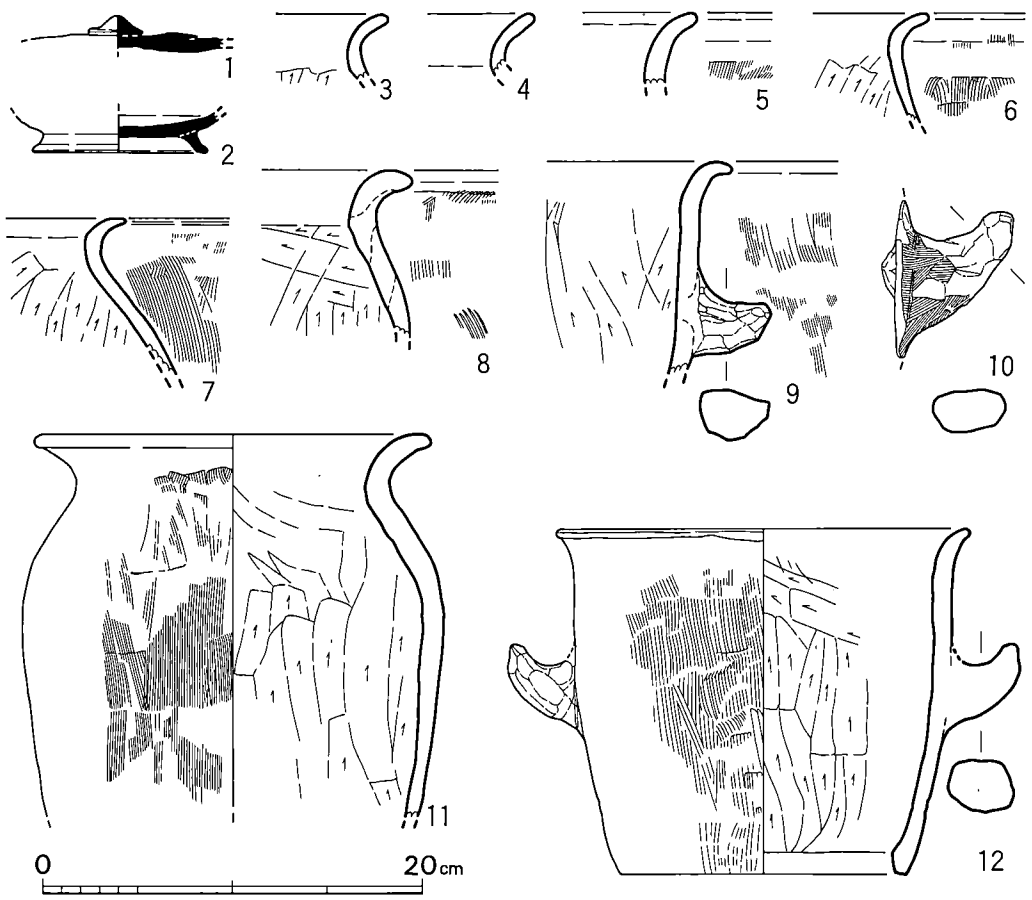
須恵器（1・2）　1は坏蓋の破片で宝珠形のつまみは丁寧に作るが，天井部は荒いヘラ削りを行い，内面はナデている。細砂粒を多く含み，焼成は良好で褐色気味の灰褐色を呈する。2は坏身の破片で高台は開き，踏んばっている。細砂粒を多く含み，焼成は良好で灰褐色を呈する。7世紀後半のものである。

土師器（3～12）　3・4・6～8は甕の口縁部である。砂粒を含み，焼成は良好で茶褐色～黄褐色を呈する。11は7号掘立柱建物跡の柱穴（第54図－P1）から出土した。肩の張った厚手の甕である。口縁部付近はヨコナデ，体部は内面をヘラ削り，外面はハケ目調整を行う。口径，現在高とも20cmを測る。胎土に石英・雲母を含み，焼成良好で明褐色を呈する。5は甑の口縁部であろう。9・10・12は甑である。12は口径18cm，器高22cmである。胎土に石英粒を多く含み，焼成良好で明褐色を呈し，外面に黒斑がある。

その他の出土土器　（第72図）

出土地点の不明な土器である。おそらく，溝1あるいは1号竪穴住居跡から出土したものと思われる。

1～3は坩である。1・2は小型品で1は口径6.6cm，器高8.5cmに復原される。2もほぼ同大のものだろう。胴部から底部にかけて粗いハケ目調整を行い，他はナデている。胎土は精良で焼成良好にして明褐色を呈する。3は大型品で口径12cm，器高17cm程に復原される。胴部内面はヘラ削りを行い，他の部分は丁寧なハケ目調整の後ナデている。細砂粒を多く含み，焼



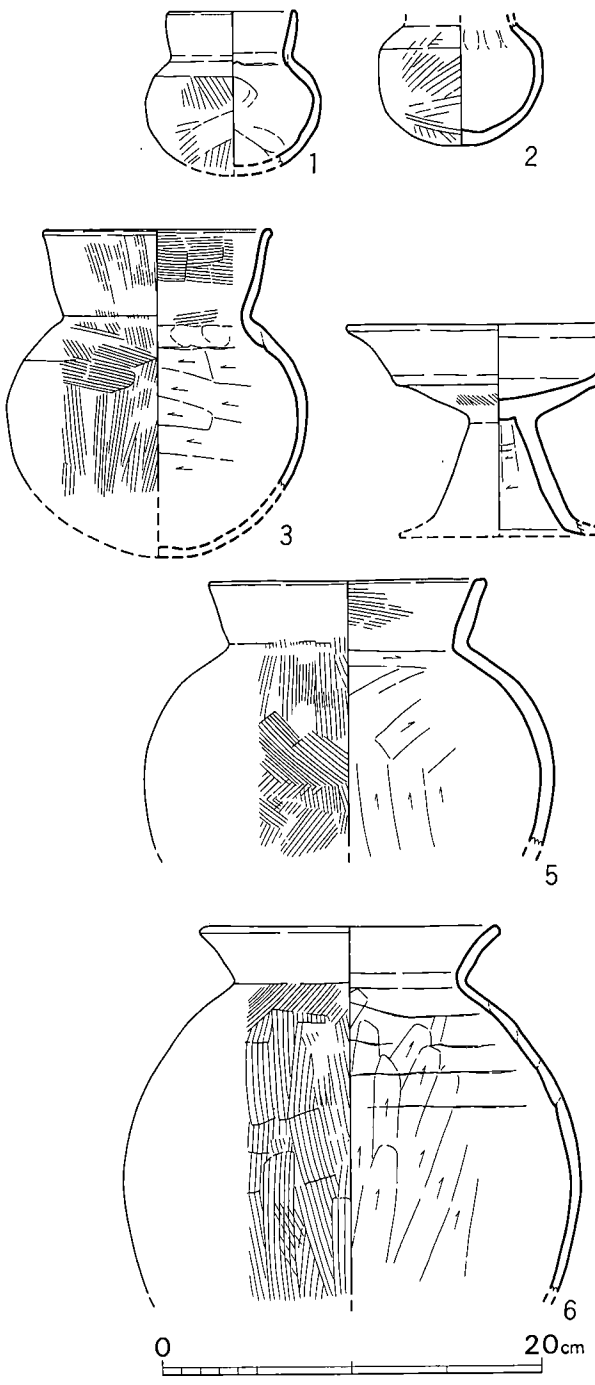
第71図　ピット出土土器実測図(1/4)

成は良好で褐色を呈する。5・6は甕である。5は球胴に短い口縁部がつき，口縁端部がくぼむ。6は5と比べてやや長胴で，内面のヘラ削りにより器壁が薄くなっている。ともに細砂粒を多く含み，焼成は良好で明褐色を呈する。（児玉）

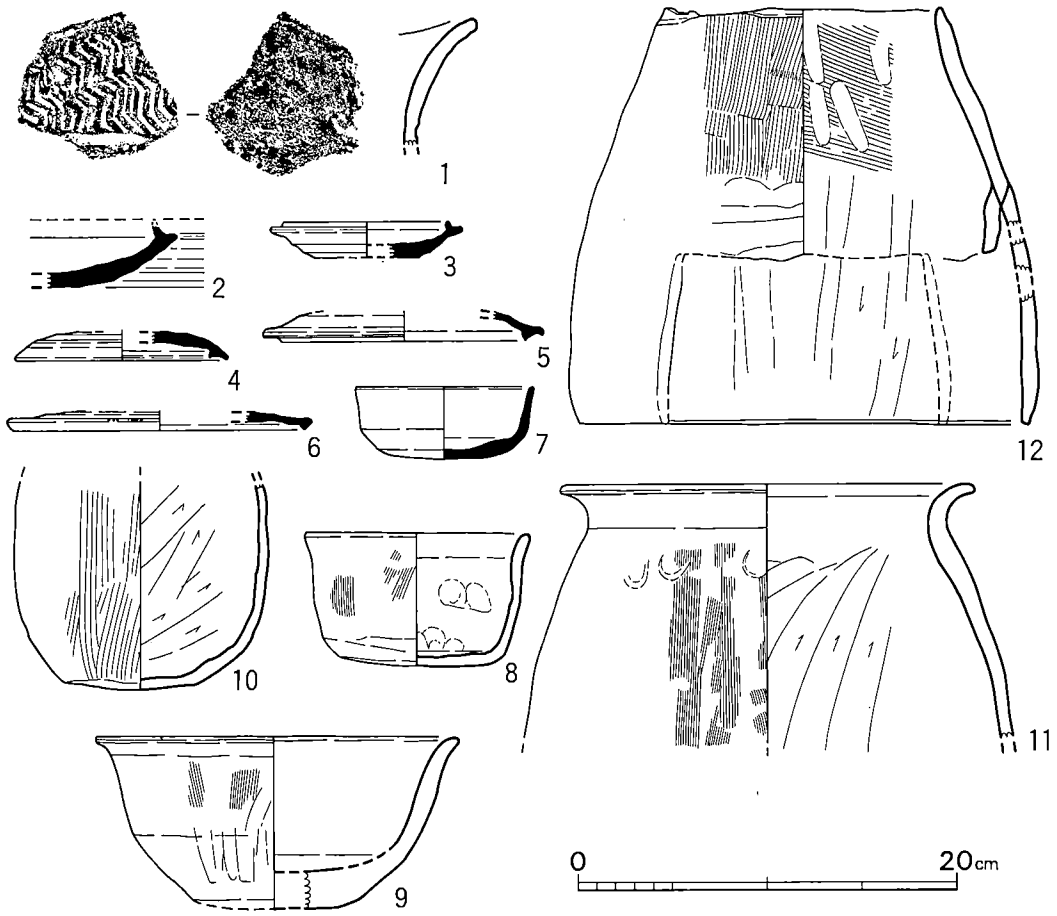
表採土器　（図版38，第73図）

1は山形文を施文した押型文土器の口縁部片であり，波状口縁となろう。外面に縦位の山形を施文し，肩部に1条の凹線を巡らす。内面はナデ調整となる。石英・雲母を多く含む。外面が淡赤褐色・内面が茶灰色を帯びる。焼成は普通である。縄文時代早期の手向山式である。2と3は須恵器坏身で，4～6が須恵器坏蓋である。2は立ち上りの一部を欠損する。外面底体部中程より下方が回転ヘラ削りで，他はナデ・ヨコナデ調整となる。粗砂粒を若干含み，淡青灰色を呈す。焼成はやや軟質である。外面底部にヘラ記号が僅かに認められる。3は立ち上がりが受部より僅か上方になる。調整は2と略同じで，微砂粒を多く含む。黒っぽいねずみ色を

呈し，焼成は良好である。口径8.7cmを測る。4は復原基部径14.7cmを測る。ナデ・ヨコナデ調整である。細砂粒を多く含み，ねずみ色を呈す。焼成は良好である。5は復原基部径11.2cmを測る。天井部に回転ヘラ削りが認められる。胎土・焼成は4と同じ。内面が暗紫灰色，外面が暗褐色を呈す。6は天井部が平らとなり，復原基部径15.4cmを測る。胎土・焼成は4と同じとなる。内面が褐灰色，外面が暗紫灰色を呈す。外面端部に刻み目が認められる。7は焼成の甘い須恵器杯身である。復原口径9.5cm・器高3.8cmを測る。ナデ・ヨコナデ調整である。細砂を多く含む。内面が暗灰色を，外面が褐色を呈す。8～12は土師器である。8は復原口径12.0cm・器高7cmを測る鉢であろうか。ナデ・ヨコナデ調整である。外面に刷毛目が僅かに，内面に指頭痕が認められる。細砂をやや多く含み，明橙褐色粒を呈す。焼成は良好である。9は復原口径19.25cm・器高9.05cm・



第72図　その他の出土土器実測図(1/4)



第73図　表採土器実測図(1/4)

復原底径8.9cmを測り，口縁部が僅かに外反する鉢である。ナデ・ヨコナデが主となる。外面体部上方は刷毛目，その下方はヘラ削りを施す。細砂粒を多く，赤褐色粒を若干含む。橙色を呈し，焼成は良好。10は中～小型甕の下半部で，胴部は若干丸味を有す。内面が斜位のヘラ削り，外面がやや粗い刷毛目調整となる。細砂粒をやや多く含み，橙褐色を呈す。焼成は良好。11は大きく外反する口縁部で胴部が張る甕である。復原口径22.0cmを測る。口縁部はヨコナデで，他は10と略同じ。外面肩部に指頭痕が付いている。胎土・色調・焼成も10と略同じとなる。12は復原口径14.5cm・器高21.8cm・復原底径23.7cmを測る移動式カマドである。残存は僅少であるが，庇部が剝離するものの上端より下端までつらなる。器形は一般的なものより一回り以上小さくなるが，焚口部は若干凹凸を有し，庇部の剝離が明瞭に認められる。内面上半部が斜位の刷毛目で一部指圧痕が在し，下半部は縦位のヘラ削りを施す。庇部より上方には煤が付着する。外面は縦位の刷毛目調整となる。焚口部の端部はヘラ状工具のナデとヨコナデ調整であ

る。上・下端部はナデで仕上げている。胎土・色調は10と略同じで，焼成は堅固で二次加熱が認められる。竪穴住居に伴なった可能性もあり、何らかの祭祀に用いられたと思われる。宮原A地区にも出土しているので，移動式カマドに関してはその折に検討を加わえたい。

10がC地区より出土し，他はB地区の出土品である。2～5・7～9と12は竪穴住居に伴う可能性を有し，遺構検出時に採り上げた品であろうか。11は溝1より出土したが，溝とは時期差を有するので柱穴等よりの出土品となろう。6の時期の竪穴住居跡は在しないので，土壙・柱穴等の出土品であろうか。1の縄文土器に関連する遺構は全く在しない。13号竪穴住居跡内より時期不詳の弥生土器小片が1点出土している。

末尾であるが縄文土器に関して，木下修氏と木村幾多郎氏より御教示を頂き，記して感謝いたします。

（武田）

第4章　おわりに

(1)　方形竪穴について－1－

1　はじめに

報告した3基の方形竪穴は7C後半以後の所産と考えられるが，明確な時期を決定するまでには至らなかった。今報告分には同時共在可能な住居跡を明確化することは出来なかったが，A・D地区において8C代と推定される住居跡を検出しており最終的な結論は両地区が報告され次第再検討してみたい。なぜなら，この種の遺構は集落の縁辺部に位置する場合が多く見受けられるからである。今回はC地区の2基を主に形態上の問題点等について考えてみたい。なお，この種の遺構の性格は明確化されていないのが現状である。

2　形態上の諸問題

方形竪穴遺構は明白に土壙等と形態上差異を示す。先ずC地区の2基に共通する事項を列記する。

①　床面積は3～4㎡の小規模である。壁面は略垂直に掘られ，しかも壁高は30～40cm程と深い掘り方となる。平面形態は略隅円方形を呈す。

②　床面は柔軟であり，竪穴住居の如く硬化をなした貼床ではない。

③　壙内には生活関連遺構が全く存しない。また明確に伴うと断定される柱穴も在しない。

特徴として列記した①～③より土壙等とは形態上大きな差異を呈しており，より鮮明に施行者の意図が汲み取れるが，生活遺構と断定するまでには至っていない。生活遺構と想定した場合に②と③は否定材料となるが，ここで小郡市大板井遺跡Ⅳの1号竪穴（註1）を検討してみる。竪穴遺構は12世紀前半を前後する時期と報告されているものの若干溯るかもしれない。東西辺1.54m。南北辺1.37m・深さ0.48mを測り，方形プランを呈し急勾配の壁面となる。出上品の土器底面にワラ状の炭化物がびっしり貼り付いており，床面にワラを敷きつめていたと想定されている。本遺跡の方形竪穴と規模・形状等は類似しており，床面の状況も同様となるのかもしれない。②の問題点で床面上に敷物が存したと仮定しても，常時営まれていた場合床面は相当踏み固まり硬化した状況を呈するであろう。これより常時使用していないことが前提となろう。次に③の問題点を整理してみる。

近年調査例も増えつつあるカマドを付設した超小型無主柱穴住居（註2）とはカマドが存するか否かで大きな差異が生じる。規模や形状及び主柱穴が認められないなど殆ど類似するが，カマドの有無で形式上食生活の差異を示す。超小型無主柱穴住居には強固に踏み固まった床面が生じ，常時カマドを使用して煮沸していた生活痕が認められる。一方の方形竪穴に常時営みがなされた状況ではなく，食生活においても屋外炉等も考えられなくはないが，食物の差し入

れを受ける事も考えねばなるまい。この問題に関しても遺構の性格で左右されるし，逆に遺構の性格についての範疇を狭めることにもなろう。ここでは方形竪穴と超小型無主柱穴住居との違いを述べるのに止め，性格に関しては後章で検討したい。

3　集落内における位置について

宮原遺跡の全貌は大半以上が整理中であり，共存する住居との関係は現時点では不明である。前述した如くこの種の遺構の性格を考える上で集落内での営まれた位置が大きな比重を占めると思われるので，他の遺跡ではあるが報告されている２例を検討してみたい。

先ず小郡市の大崎小園遺跡（註３）である。道路建設による発掘調査である為，集落を横断した如き観を呈す調査となる。６世紀中頃の集落で10棟の住居跡・４条の溝・４基の竪穴と２基の土壙を検出している。竪穴遺構は約５～９㎡の規模となり，２基が方形で他は不整形を呈す。やや，本遺跡の方形竪穴よりも大きめとなるが形態上は大差ない。この遺跡の特徴は，１棟の住居跡を例外とすれば溝Ｄを境として平面上の住居群と竪穴群が明確に分離している事である。また，住居群・竪穴群が余りにも隣接して在した例もあり，６世紀中頃と判断されているものの２時期以上の集落跡とも考えられる。そして，集落の拡がりは住居群の南方側に伸展すると考えられる。これらより住居群と竪穴群は明らかに分離され，竪穴遺構は巨視的に観るならば集落の縁辺部に設営されていたと推定される。なお推測の城を出ないが，溝Ｄと竪穴群との間に住穴群が検出されており，柵列状の機能を有していたのであろうか。

もう１つは苅田町の黒添・赤木遺跡（註４）である。奈良時代の住居跡６棟と方形土壙２基が検出されている。この遺跡においても住居群と方形土壙とは明らかに距離を隔てて営まれている。方形土壙は規模・形状とも本遺跡の方形竪穴と概ね合致する。ここで，この遺跡について若干私見を述べる。集落は調査区の東側に伸展すると考えられ西端部が調査されたのではなかろうか。また住居群も余りにも隣接していることより２時期に及び営まれたと推定される。方形土壙はこの遺跡においても集落の縁辺部に位置していると考えられる。以上が大崎小園遺跡より類推したものである。

以上２遺跡より推定されることをまとめる。６世紀中頃と奈良時代と異なる時期であったものの，方形竪穴遺構は集落の縁辺部に設営されかつ溝等により集落から隔絶されたとも考えられる。この事は方形土壙の性格に起因すると思われる。

4　方形土壙の性格について

以上大雑把に形態上の問題と位置に関して述べてきたがここで性格について推し量ってみる。(2)の頃よりこの種の遺構は常時営まれたものではなく簡易的な小屋であった可能性が大であろう。そして(3)では集落より隔絶された場所に設営されていることから，集落外へ一時的に追いやられた人物が仮住まいしたと推定される。上記２点より方形竪穴遺構が特殊な性格を有する仮小屋の可能性が大となろう。しかし特殊な性格の仮小屋も時期と社会状況に左右され若

干異なる性格となるかもしれないが，この件に関して今回は性格について若干触れるに止め，宮原遺跡の全体像が明らかになった後に検討したい。前述した条件を満たすと考えられるこの種の性格は産屋（月籠りの部屋），仮盧と簡易の獄舎等が思い浮ぶ。これらは常時住まわずかつ隔絶する要因が在する。

先ず産屋（月籠りの部屋）は“浄・不浄”の背反する要因から起因し，“崇拝心”は“穢れ”え発展したと考えられ，特殊な棲み家を設定したのであろうか。必然的に集落外の場所え追い出されたと思われ，集落内の清浄を常に維持したものであろう。この件については宮原遺跡のあらゆる祭祀行為と民族学的事例などを考慮して後日再検討したい。仮盧と獄舎については、他村からの逃亡者を集落内には止めずかつ自村からの逃亡者を幽閉していたのかもしれない。単に自村から逃亡だけではなく自律的規範を犯した者も閉じ込めていたかもしれない。これは律令制の予盾に起因するものであろうが，他律的・自律的な厳しい規範を破ることえの戒めとしたのであろうか。この件に関しても７世紀～８世紀の集落が明白になり次第検討する。

５．おわりに

方形竪穴について形態と設営位置について述べたが，性格については資料不足や判断し難い要因を有しているのかもしれないが，ほとんど解決されず不充分に終わってしまった。今回提起したことをここでまとめてみる。

①　方形竪穴遺構は形態上の有様から特殊な性格を有する何らからの生活関連遺構と考えるのが妥当であろう。しかし常時営まれたものではなく，簡易的な性格を有するものと思われる。

②　方形竪穴遺構は集落の縁辺部かつ隔絶された場所に設営されたものと考えられる。集落内の一機能を果したものであるが，斯る条件より性格を逆規定出来“特殊な棲み家”となる。この２点は略間違いないと考えられるが，性格は単に“特殊な棲み家”で終始すべきものではないと考えるが，的確には把握出来なかった。なお性格等は再検討を後日行う。　　（武田）

(2)　**カマド祭祀**　－17号住居カマドより出土した土玉について－

１　はじめに

既に報告済みの立野遺跡（註２）のカマドには祭祀行為が顕著に認められ，廃棄時のカマド祭祀が主になされていた。今報告中の17号住居には立野遺跡の資料不足である築造時のカマド祭祀が認められた。立野遺跡は６世紀後半～７世紀前半期が主流となる集落であり，隣接する宮原遺跡は同時期か若干後続する集落となり，巨視的にみると同一集落と言えないまでも相互関係を有していたと推定されよう。これよりカマド祭祀行為に関して立野遺跡より連綿として受け継がれたと考えられる。立野遺跡のカマド祭祀行為は大別して築造時・日常生活時・廃棄時の３時期に執り行われ，かつ数種類以上の祭祀行為が認められた。祭祀具も多岐にわたるが，不明土製品や土製者溝円板など特異な品も用いられていた。ここで立野遺跡におけるカマド祭祀を補足する資料となるのが17号住居のカマドである。

2　17号住居カマドの有様

大略は説明済みであり省略する。カマド内に支脚は遺在せず「火落し」の行為がなされたのであろうか。また天井部と両袖の一部も破壊されたと考えられる。これらは廃棄時における一連の行為と解釈されよう。問題となる１つは，カマド壁体内及び崩落した粘土中より土玉３個と不明土製品が出土したことである。本カマドは改修した痕跡を止めておらず，これら祭祀具は築造時に埋納された品と判断される。斯かる行為が竪穴住居築造時にいかなる比重を占めるかは推測の域を出ないけれども，一連のカマド祭祀行為より判断して地鎮祭と略同じ比重を占める重要な行為であったろう。しかし重要な役割りを担う行為にもかかわらず，祭祀形態の変化に起因するのかもしれないが築造時の祭祀行為が認められる例は数少ない。

２つめは不明土製品の出土である。立野遺跡では600点弱も出土しているが，今報告では５点のみである。数量的に時期が下るに伴い減少傾向となるが，27号住居の３点もカマド内及び周辺より出土している。17号住居カマド壁体内より出土した事も考え合わすと，祖形及び性格は不明と言わねばなるまいが，より祭祀具の可能性が強くなる。

3　おわりに

宮原遺跡はＡ・Ｄ地区に300軒弱が未整理であり，今回16号住居カマドの有り様だけを問題としたが，立野遺跡にみられるカマド祭祀からの形態上の変化や，我々が目見え得るカマド祭祀行為の終焉等の諸問題が今後の課題となる

順次報告する宮原遺跡で特異なカマド祭祀が執り行われていればその都度検討を重ねていきたい。今回はこれで終わりとする。　（武田）

(3)　むすび

今回の報告では種々不備な部分があり，十分に認識している。それは立野・宮原遺跡の初期の調査の報告であり，竪穴住居跡の貼床面下の構造について調査員に共通の認識が欠如した段階のものである点を考慮しなければならない。それはカマドについても言えることである。最終年度の調査である立野Ｃ地区、宮原Ｄ地区では一定程度その点を考慮して発掘・図化を行った。不充分ながらも立野・宮原遺跡のはらむ問題点を総括的に認識しつつ調査を実施できたのは宮原Ｄ地区だけである。宮原Ｄ地区の報告はそのような意味で本遺跡の総括的な報告になるであろう。今回は先述されたように，７世紀後半代以降の方形竪穴・カマド祭祀ついて問題点と一定の認識が提示された。筆者も述べているように，宮原遺跡の報告はまだ諸についたばかりで，整理中のものが多々あり，断を下せない部分が多く，それは今後に期待すべきであろう。そのような面が５世紀代の遺構についても多々あり，以下，３号竪穴住居跡について簡単に触れるにとどめたい。

３号竪穴住居跡は出土土器の豊富さとともに，床面に検出した16条の間仕切溝の存在や屋内土壙のあり方と土器の出土状況は注目に価し，かつ，種々の問題点をはらんでいる。このすべ

てについて考察する余裕を持たないので問題点を提示して今後に備えたい。

① 間仕切溝がこれ程しっかりと16条も検出し得た例を福岡県内では知らないが，２号竪穴住居跡の屋内土壙の両側に溝状の遺構を検出した例は幾つか知られている。ただし，それは間仕切溝とはいささか異質の性格を有するものと考えられる。間仕切溝は壁面に沿った部分をおそらく板状のものでまさしく仕切っており，主柱穴間エリアの外側に区画された空間を作っている。仕切材の高さが問題となり，壁との関係が問題であるが，それは明らかにできない。また仕切られた部分の具体的な構造や性格については時期と地域の問題が残るが宮崎県堂地東遺跡（註５）の竪穴住居跡例や弥生時代後期～古墳時代初期のベッド状遺構が参考になろう。

② 屋内土壙は住居廃絶期以降に土器が落ち込んだ状況を呈し，それ以外の遺物は出土していない。これは１・２号竪穴住居跡のそれについても言えることでこの時期の「屋内土壙」の性格について検討する必要がある。

③ 石組遺構とミニチュア土器の存在は，その実態は不明ながらも住居内での「まつり」の行為が想定される。

④ 多量の土器が出土し，それは完形品あるいは床面出土であっても，必ずしも本住居に伴なうものではないが，それらに明確な時期差は認め難い。住居の廃棄とそれに伴なって廃棄された土器がどのように意識されたかを考えるのにひとつの視点を提供できる遺構である。

⑤ 図示できなかったが主柱穴に柱痕が残ったものがあり，焼土のあり方より本竪穴住居跡は火災に遭ったものではない。

⑥ 本竪穴住居跡に伴なう土器は，福岡県春日市小倉所在の今光遺跡（注６）溝２出土のものと器種相互に酷似しており，その所属年期は５世紀前半でも古い頃に求められよう。

以上が，３号竪穴住居跡についての簡単な問題点の指摘と年代観の提示である。①～④については，さらに前代の竪穴住居跡の検討を必要とし，また，その展開を追求しなければならないだろう。（児玉）

註１　小郡市教育委員会　『大板井遺跡Ⅳ』小郡市文化財調査報告書第22集　1984

註２　福岡県数育委員会『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告』　－８－　1986

註３　小郡市教育委員会　『大崎小園遺跡』小郡市文化財調査報告書第24集　1985

註４　苅田町教育委員会　『黒添・法正寺地区遺跡群』　福岡県苅田町文化財調査報告書　－第６集－　1987

註５　宮崎県教育委員会　『浦田遺跡・入料遺跡・堂地西遺跡・平畑遺跡・堂地東遺跡・熊野原遺跡』　宮崎学園都市遺跡発掘報告書　第２集　1985

註６　東急不動産株式会社　『今光遺跡・東急遺跡』　1980

第3表　宮原遺跡B・C地区竪穴住居跡・方形竪穴計測表

（単位はm，m²である）

No	主軸方位	総面積(S)	主柱間エリア(S_1)	S_1/S	タテ C	タテ D	ヨコ A	ヨコ B	a (P_1-P_2)	b (P_3-P_4)	c (P_1-P_3)	d (P_2-P_4)	P_1 c_1	P_1 a_1	P_2 d_1	P_2 a_2	P_3 c_2	P_3 b_1	P_4 d_2	P_4 b_2	カマド 位置	カマド 支脚	カマド 対面 粘土	カマド 対面 土壙	P_5	中央土壙	主軸	土器 須	土器 土	手捏	不明土製品	鉄器	石器	備考	旧No
1	N−75°−W	33.568	6.588	19.5	5.73	5.5	5.94	6.01	2.93	3.1	2.08	2.37	1.52	1.51	1.65	1.5	2.13	1.39	1.48	1.52									19(+)			2	1		21
2	N−43°30′−W	27.928	5.092	21.2	5.19	5.11	5.18	5.46	1.87	2.22	2.45	2.5	1.39	1.72	1.38	1.59	1.35	1.53	1.23	1.71														住3に切られる	
3	N−29°30′−E	63.384	13.2	20.8	7.8	7.92	8.1	7.98	3.58	3.6	3.73	3.69	1.98	2.3	2.16	2.22	2.09	2.34	2.07	2.04														住2を切る	2
4	N−23°30′−W	20.862	3.095	14.8	4.55	4.84	4.63	4.43	1.72	1.91	1.67	1.74	1.47	1.30	1.43	1.61	1.39	1.17	1.67	1.35	北西						カマド左袖？		3					竪1，住5より古 住8より新	5
5												2.53				0.88			1.10	0.95														竪1，住4より古 住6・7より新	8
6																													1					住5・7より新	7
7						3.8		3.63	1.49							1.0					北西			○			カマド中央？	2	14	2					竪2，住6より古 住8・9より新	4
8	N−20°30′−E	15.596	1.944	12.5	1.16	1.24	1.74	1.47	1.74	1.48	1.16	1.25		1.27	1.05	1.29	1.60		1.62	1.51	北					○	カマド左袖？								住4・7より古	6
9								3.88		1.95		1.86					1.15		1.12	1.14														住7より古	3
10	N−52°30′−W	12.178	2.401	19.7	3.50	3.61	3.43	3.70	1.48	1.45	1.65	1.55	0.9	0.95	1.03	1.02	0.96	1.10	1.04	1.16	北西								8						1
11															1.41	1.30					北東						カマド左袖？	1	4					住12より古	8
12								4.27																○？					6					住11より新	3
13	N−42°−W	21.324	4.458	20.9	5.06	4.70	4.37	4.41	2.09	2.31	2.06	2.0	1.46	1.05	1.35	1.17	1.5	0.98	1.37	1.11	北西		○	○		○	カマド中央	5	27					住14・16より新	2
14	N−35°−W	18.437	3.6	19.5	4.39	4.28	4.36	4.45	1.67	1.95	2.05	1.94	1.17	1.34	1.24	0.99	1.53	1.26	1.07	1.25								1	7					住13・15・16より古	4
15	N−18°30′−W	8.68	1.81	20.9	3.25	3.11	2.9	2.76	1.27	1.36	1.47	1.31	0.9	0.89	0.91	0.75	0.87	0.6	0.89	0.81	北西					○	カマド中央		14					住14・16より新	7
16	N−88°−W		3.09		3.94				1.77	1.92	1.6	1.76	1.19	1.23			1.10	1.34			西					○	カマド中央		8					住13・15より古 住14より新	6
17	N−0°30′−W	8.992	1.39	15.5	3.21	3.08	2.96	3.03	1.29	1.4	1.34	1.57	0.89	0.99	0.68	0.56	1.0	0.99	0.81	0.65	北		○			○	カマド右袖	2	15		1			土玉3個出土 住9・10より新	11
18	N−21°−W	9.58	1.424	14.9	3.14	2.96	3.30	3.18	1.14	1.10	1.32	1.20	0.87	1.16	0.82	1.0	0.95	1.11	0.93	0.97	北？								9					住17より古 住19より新	9
19	N−35°−W	13.084	1.596	12.2	3.35	3.18	3.97	4.12	1.17	1.04	1.41	1.47	1.21	1.21	1.28	0.96	1.35	1.13	1.35	1.0	北西			○		○	カマド中央		11					住17・18より古	10
20	N−11°−W	8.874	1.88	21.2	3.23	3.16	2.82	2.75	1.26	1.20	1.55	1.47	0.89	0.84	0.86	0.72	0.8	0.89	0.83	0.66	北						カマド左袖	2	15						12
21						3.31																							5					住22より古	22
22								3.11																					4					住21より新	23
23	N−37°−W	11.816			3.43	3.37	3.48	3.53	1.51				1.24	0.97	1.16	1.01					北西							4	17						14
24													1.27	1.36	1.27	1.36					北西								10					13
25	N−44°30′−W	35.63	7.816	21.9	6.04	6.09	6.1	5.83	2.79	2.96	2.73	2.72	1.71	1.64	1.74	1.65	1.61	1.26	1.64	1.61	北西	○						5	25						25
26	N−29°−W	14.613	17.8	1.78	3.76	3.74	3.90	3.89	1.63	1.72	1.53	1.57	1.09	1.21	1.15	1.05	1.14	1.17	1.03	1.0	北西	○		○				5	17					溝1より新	16
27									0.97	1.01											北西							2	19		3	1		住30より新	17
28							5.2		2.25				1.06	1.50	1.13	1.46					北西							8	6					住29より古 住30より新	18
29									2.20				0.98	1.26	0.65						北西							2	4					住28より新	24
30																																		住27〜29より古	25
竪1		3.075																											1					住4・5より新	
竪2		4.368																										1	9					住7・8より新	
竪3		2.004																																住20より新	

注　①1〜3号住居の主軸は，P_1-P_2の中点とP_3-P_4の中点を結んで主軸方位を出した。
②S_1/Sは百分率で示している。

図　　版

宮原遺跡
立野遺跡

図版 2

第11地点（立野・宮原遺跡）周辺航空写真（1961年国土地理院撮影　K U—61—1）

第11地点（立野・宮原遺跡）周辺航空写真（1981年国土地理院撮影　K U—81—1）

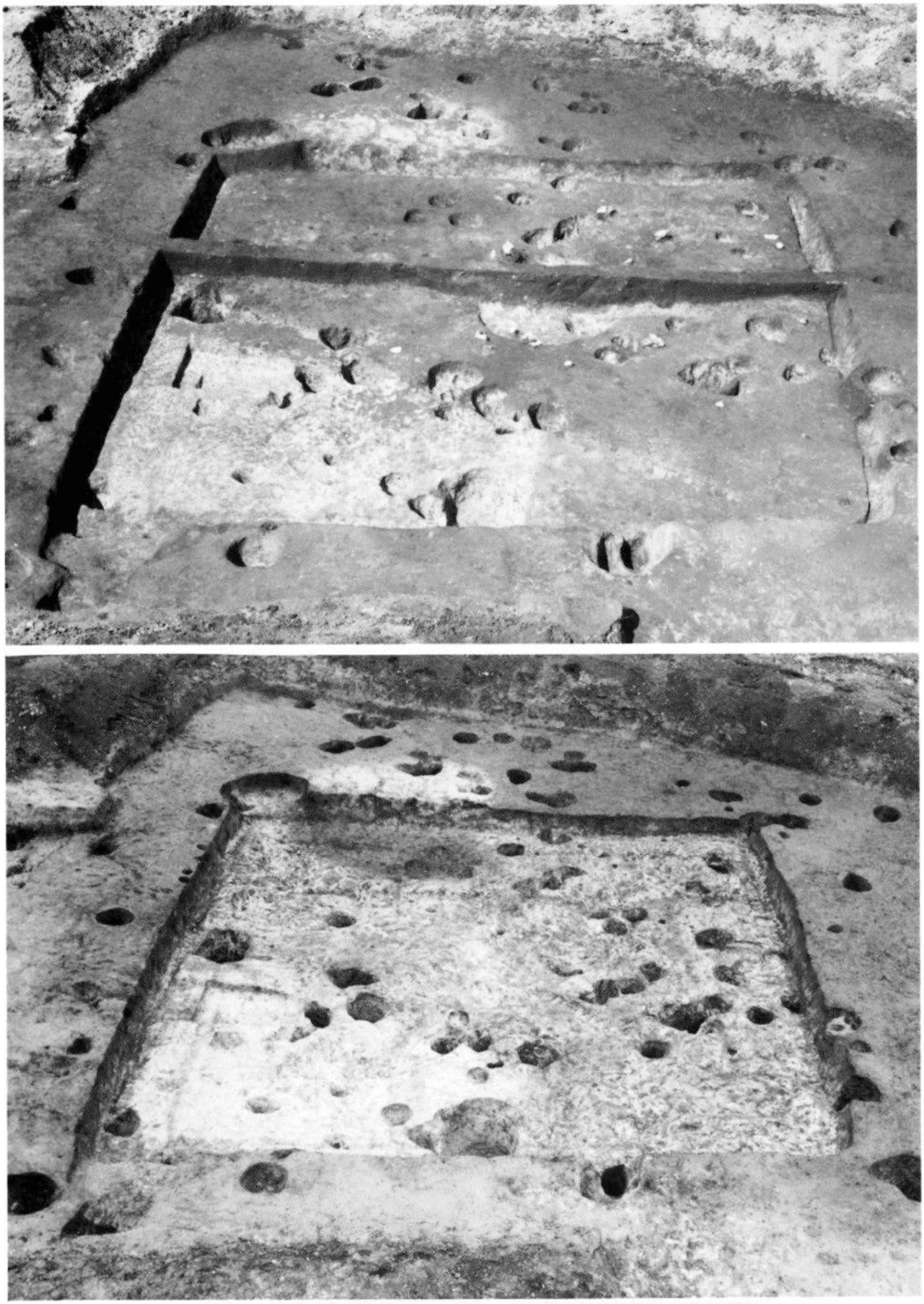
第11地点（立野・宮原遺跡）航空写真

B区
C区
A1区
A2区
D区

宮原遺跡B・C地区全景

宮原遺跡 B 地区西半部全景

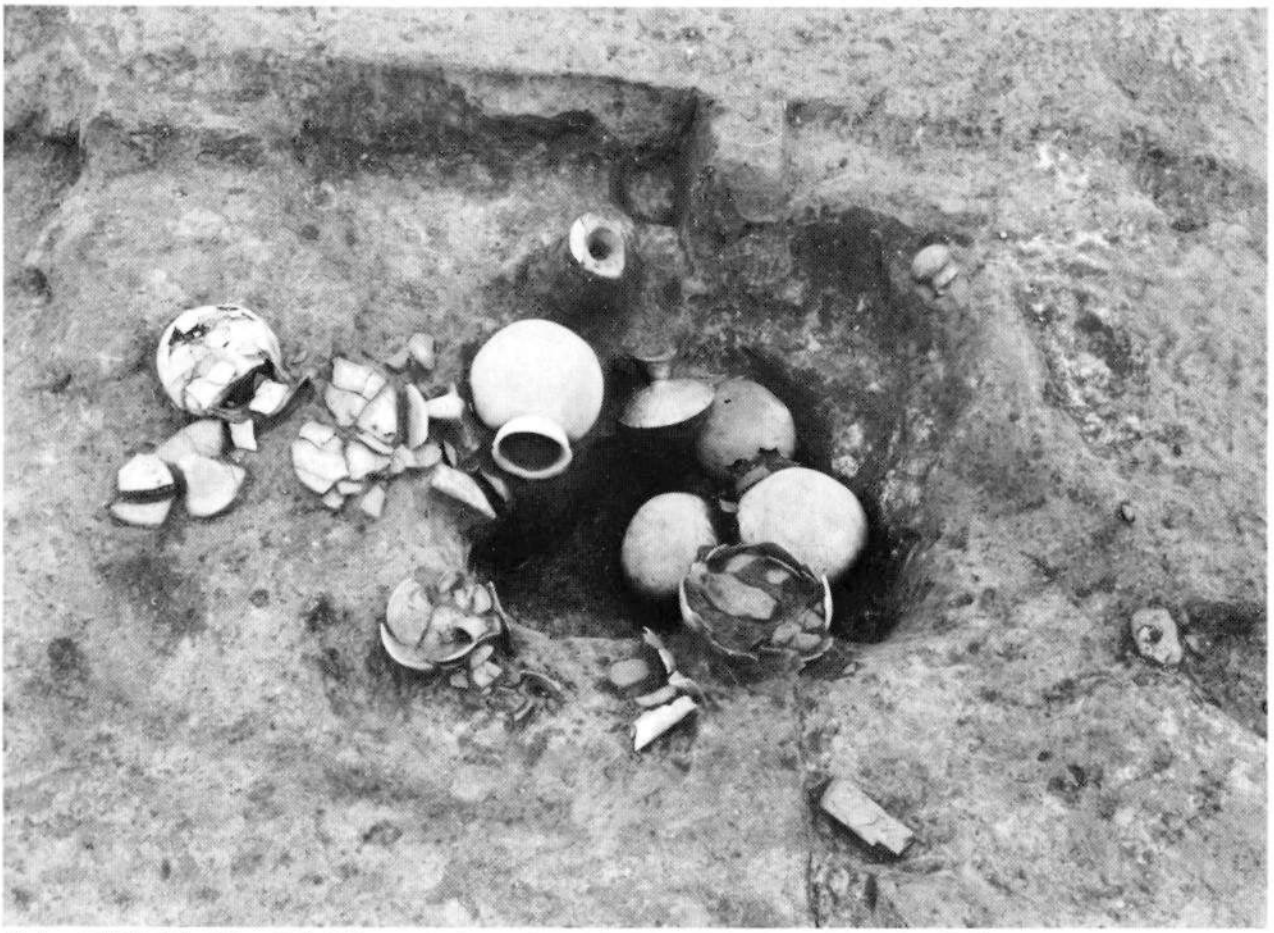
図版 8



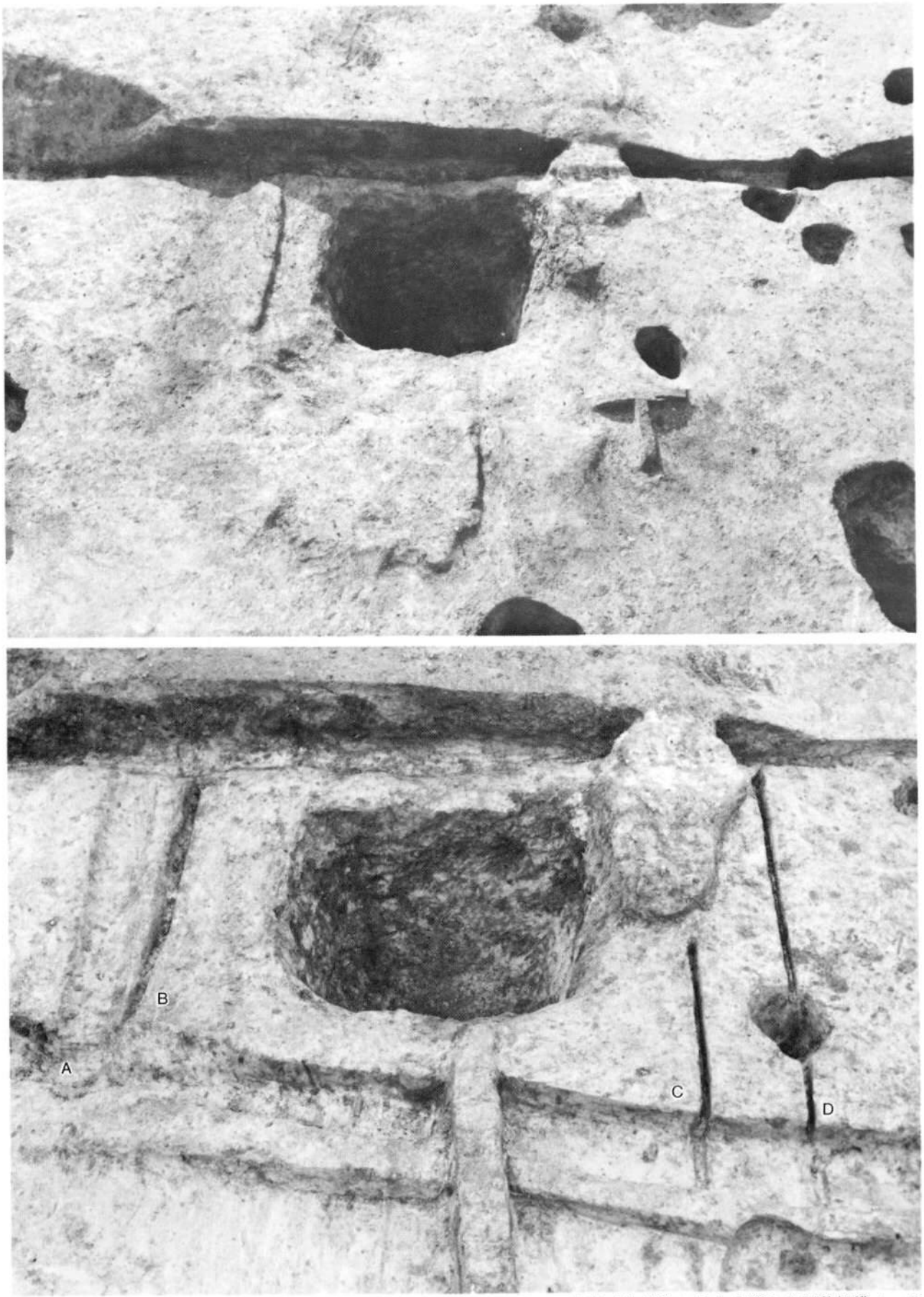
（上）　1 号竪穴住居跡全景　　（下）　1 号竪穴住居跡貼床下層の状況

（上）　1号竪穴住居跡床面の状況と土器出土状態　　（下）　1号竪穴住居跡貼床下の遺物出土状態

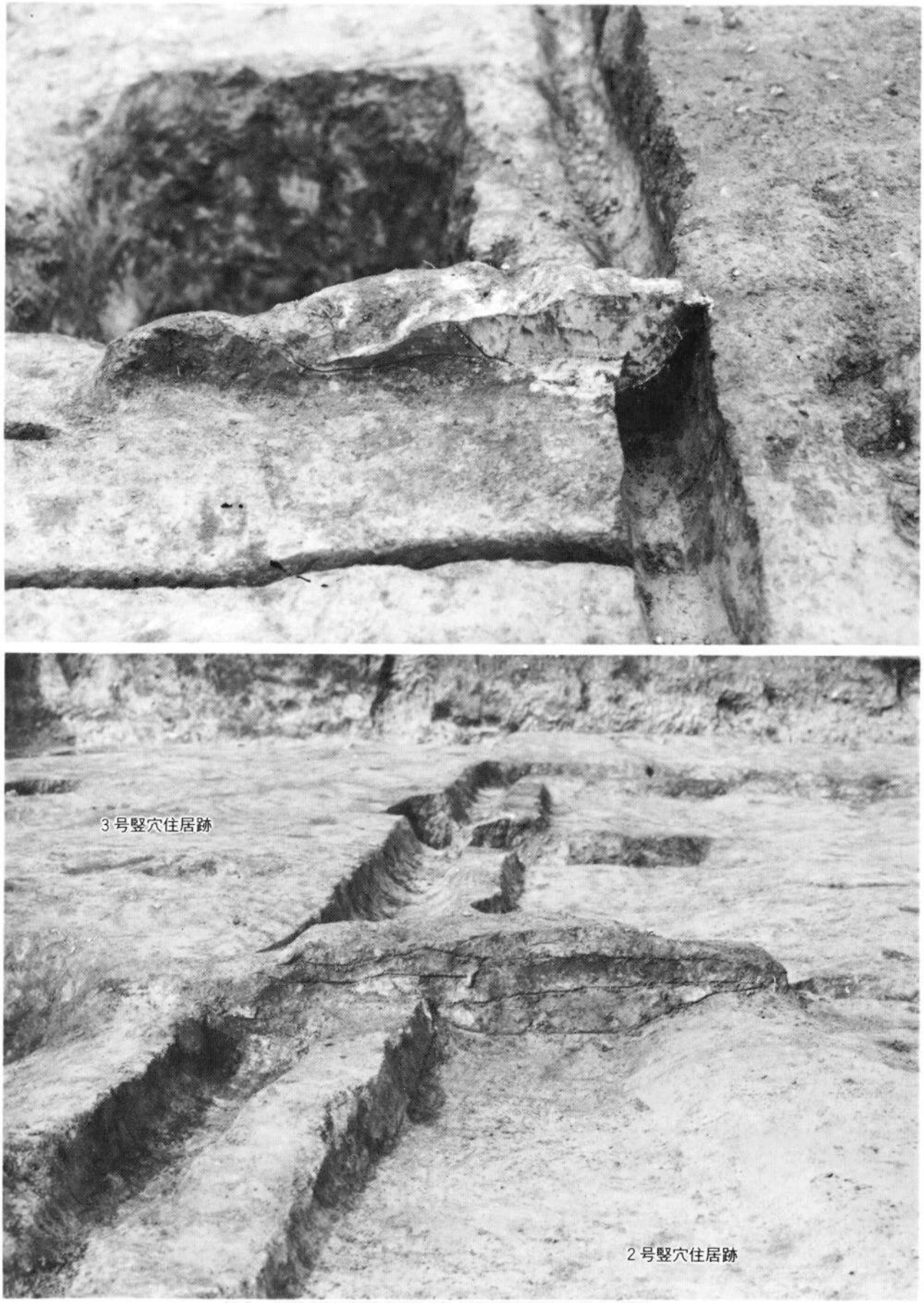
（上）　3号竪穴住居跡全景　　（中・下）　2・3号竪穴住居跡全景



（上）　2号竪穴住居跡の屋内土壙　　（下）　3号竪穴住居跡の屋内土壙Aと土器出土状態



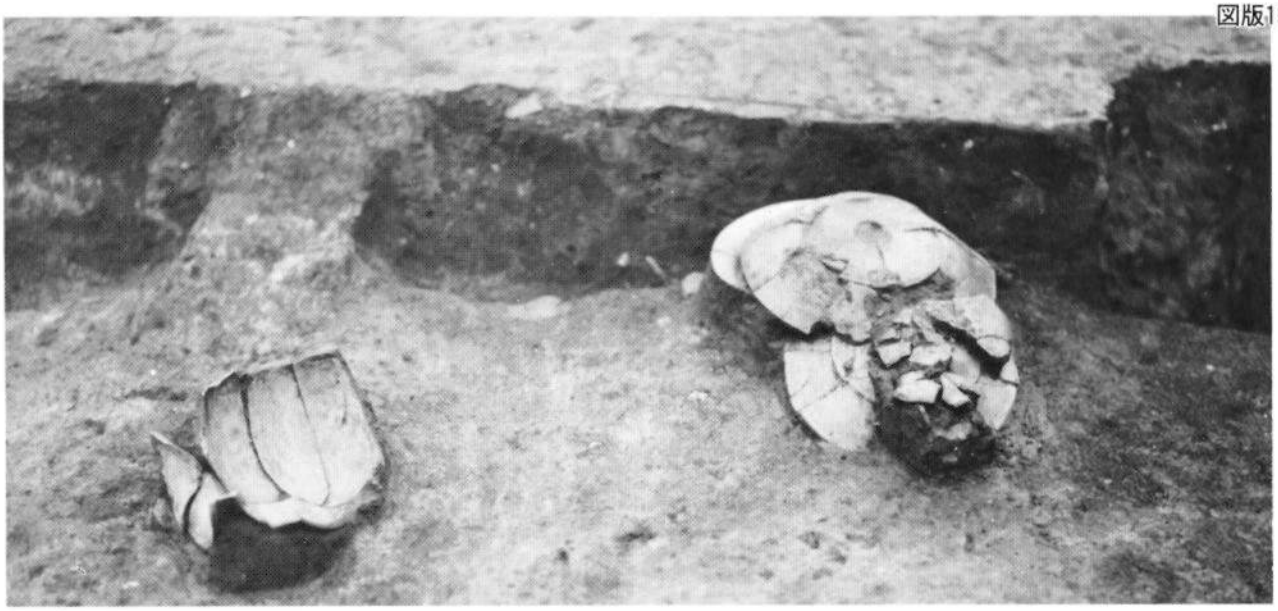
(上)　3号竪穴住居跡の屋内土壙A土器取り上げ後の状態　(下)　3号竪穴住居跡の屋内土壙Aと間仕切溝A～D

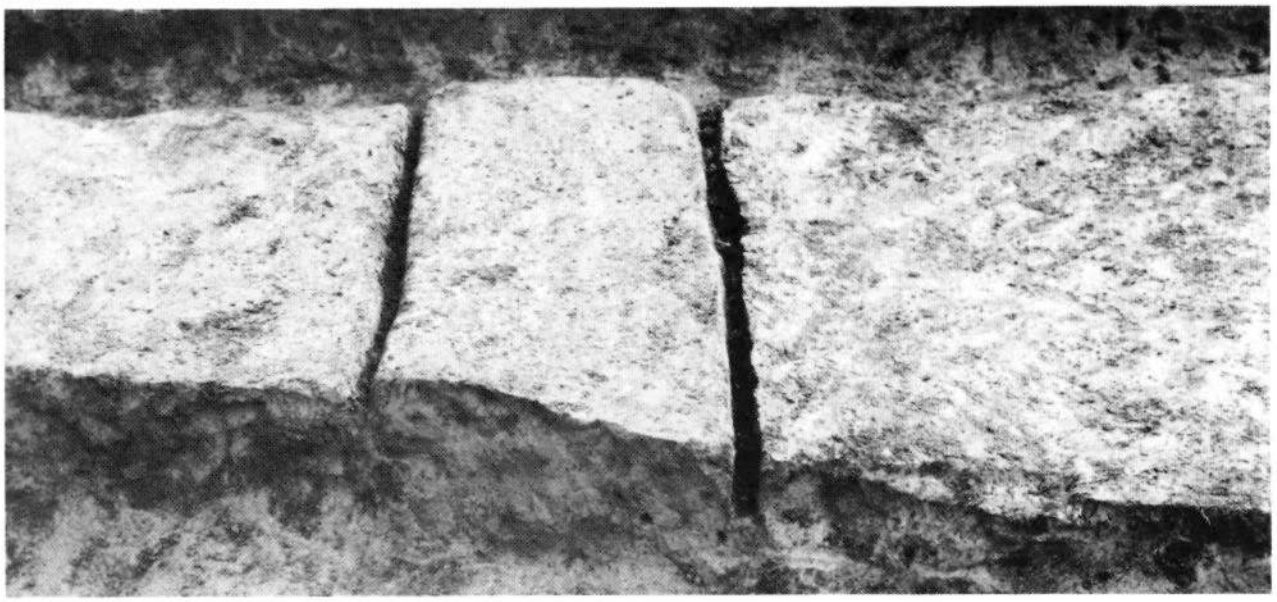


（上）　3号竪穴住居跡の屋内土壙A横の粘土流入状態

（上）　3号竪穴住居跡の石組状遺構と周辺の土器出土状態

（下）　3号竪穴住居跡の石組状遺構

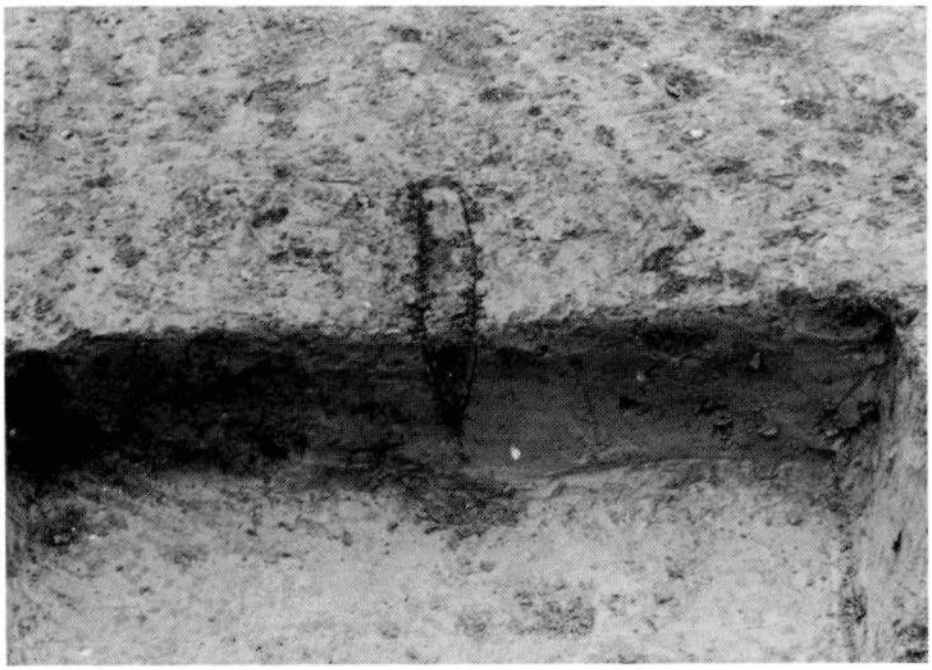


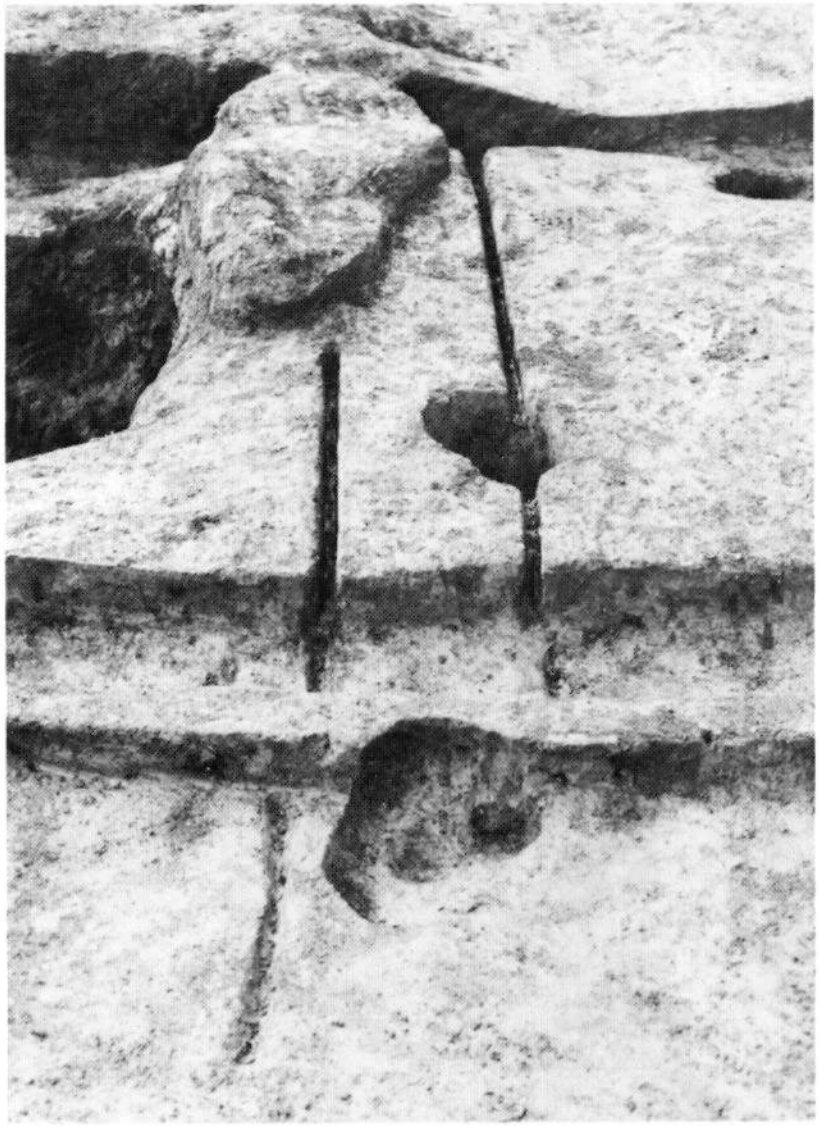


(上)　3号竪穴住居跡の屋内土壙B西側の土器出土状態

(中・下)　3号竪穴住居跡床面の間仕切溝

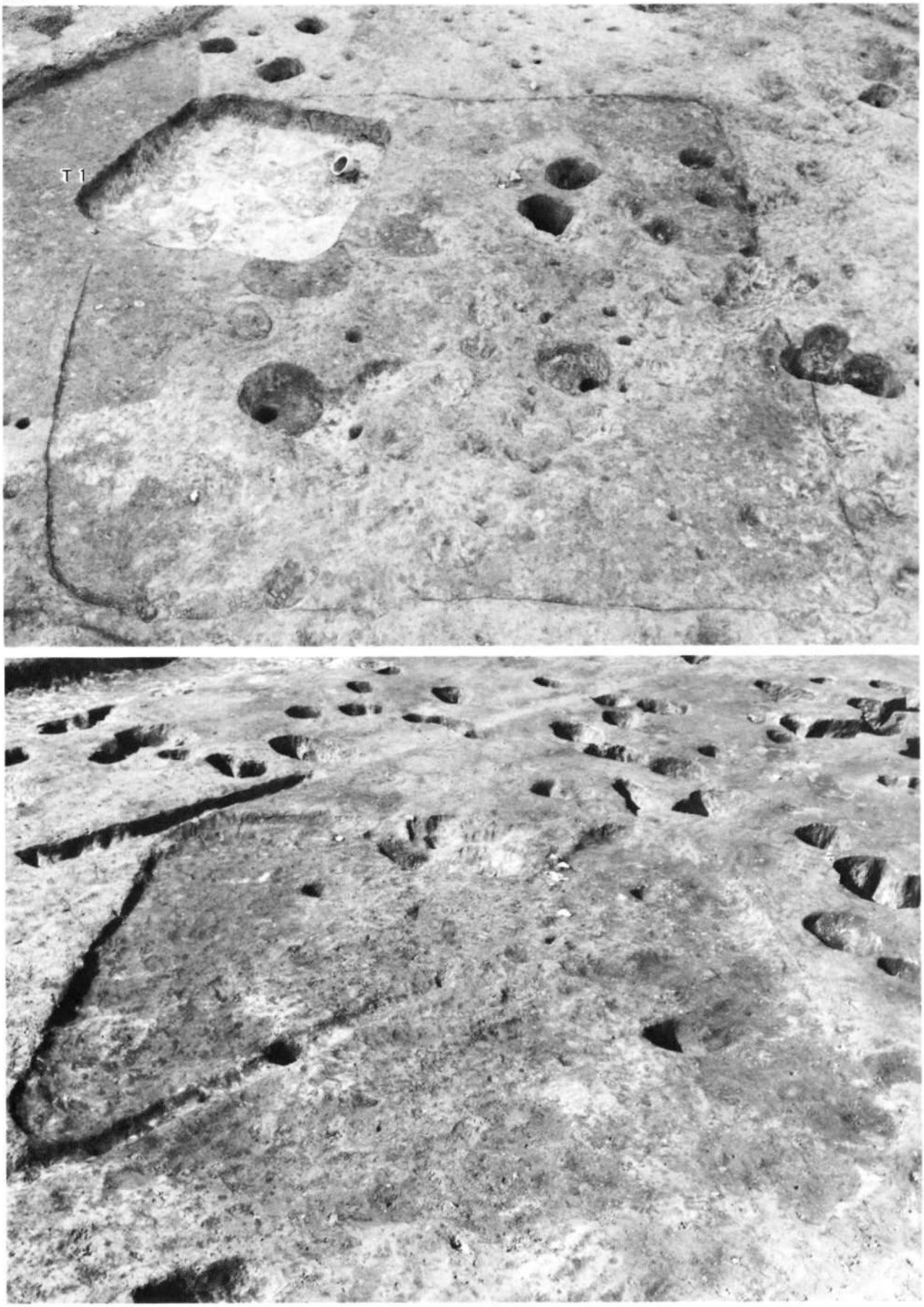
（右）　3号竪穴住居跡床面の間仕切溝と屋内土壙A
（左）　3号竪穴住居跡の間仕切溝と屋内土壙B



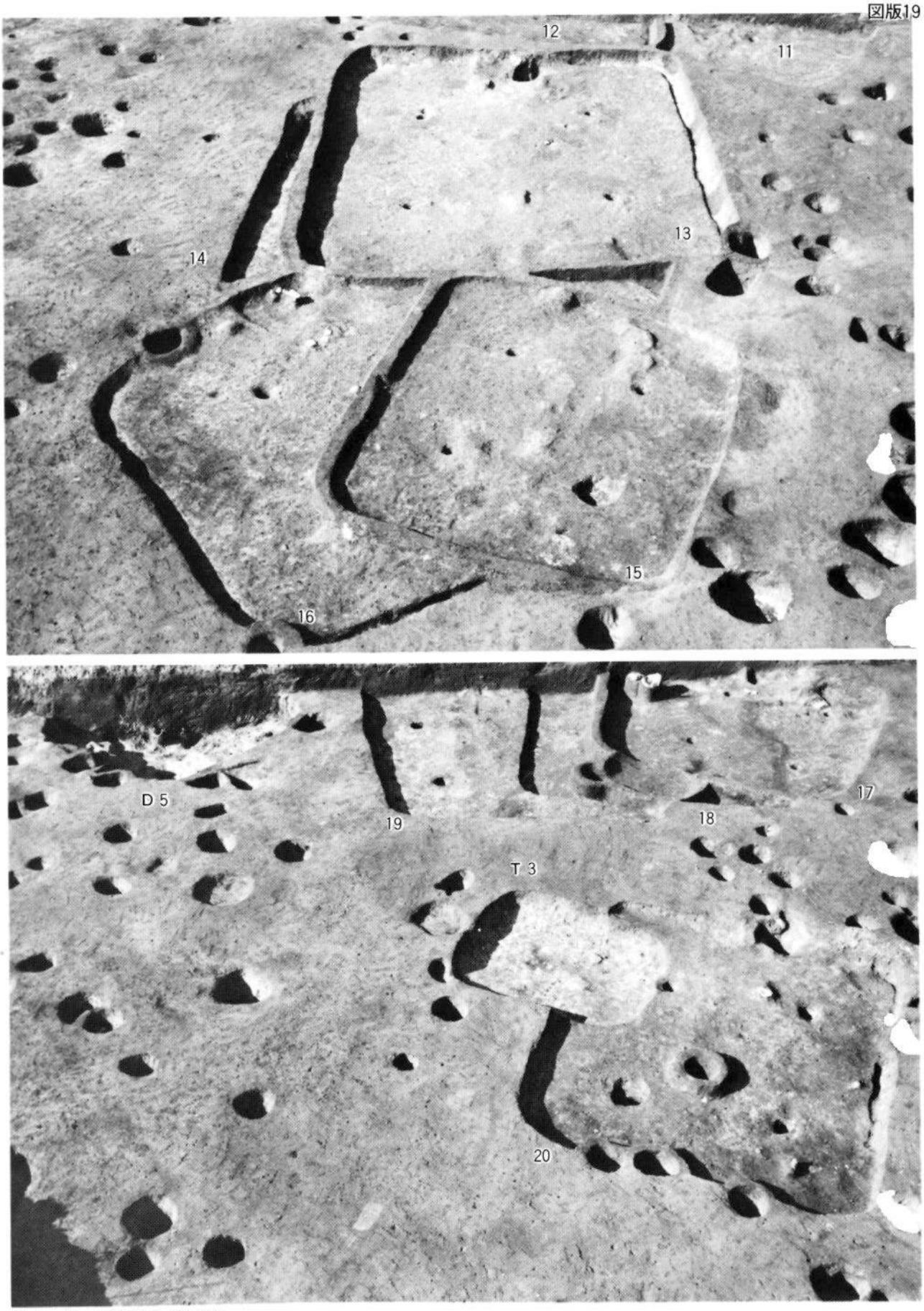


（上）3号竪穴住居跡間仕切溝Hの断面

（右）3号竪穴住居跡床面間仕切溝C・Dの状態



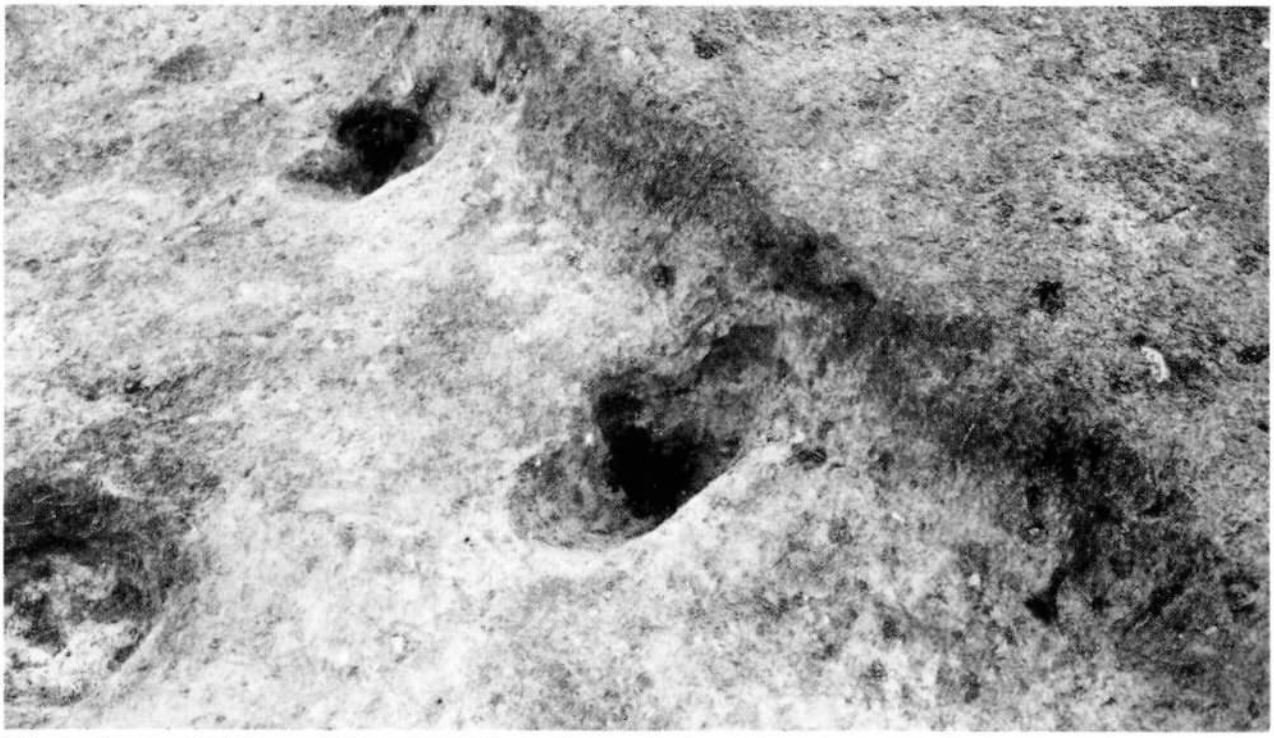
(上)　4 号竪穴住居跡と 1 号方形竪穴　　(下)　10号竪穴住居跡



(上)　11～16号竪穴住居跡

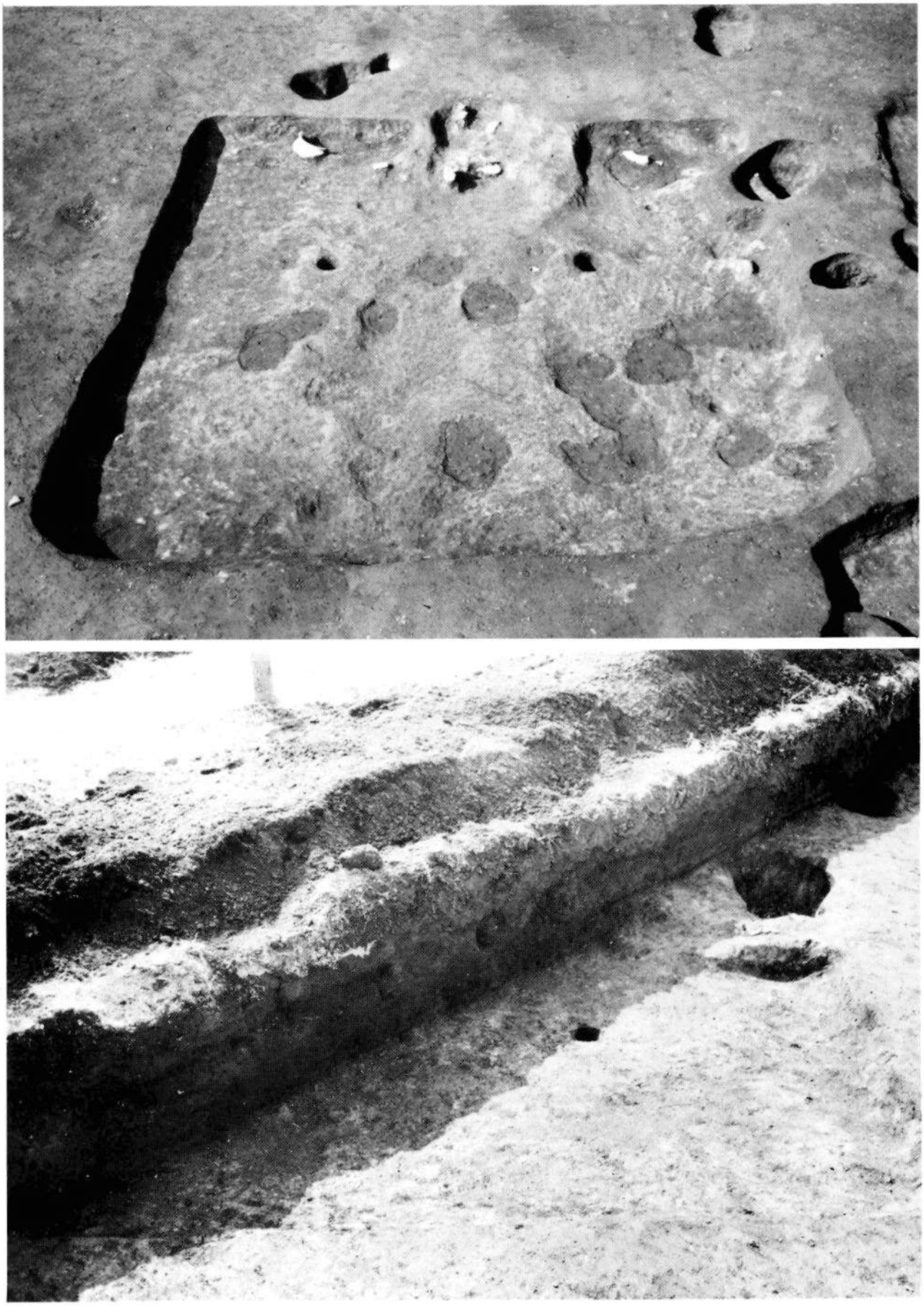
(下)　17～20号竪穴住居跡と3号方形竪穴・5号土壙

図版20



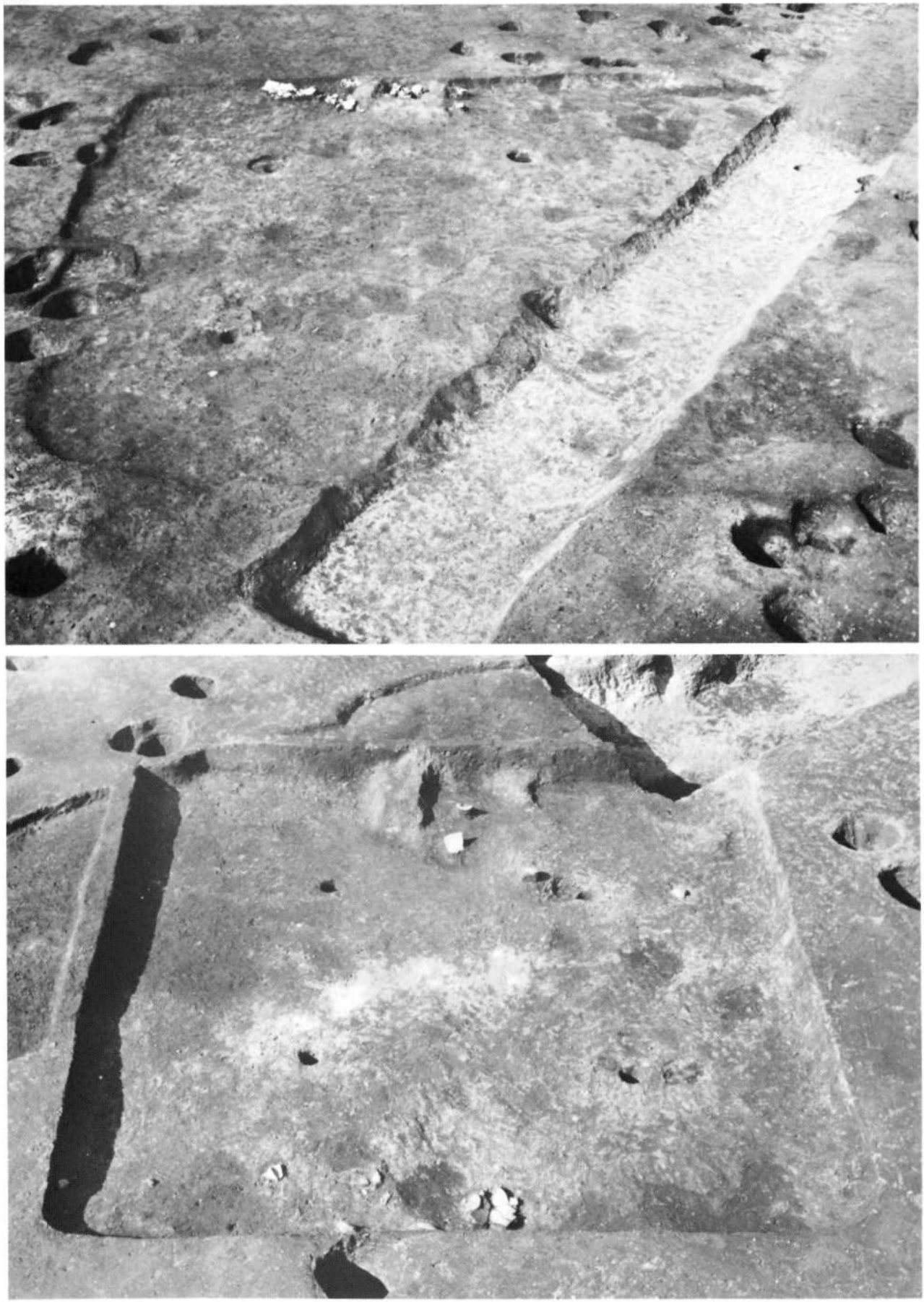
（上）　17号竪穴住居跡カマド　　（中）　19号竪穴住居跡壁面下杭状痕

（下）　21～22号竪穴住居跡

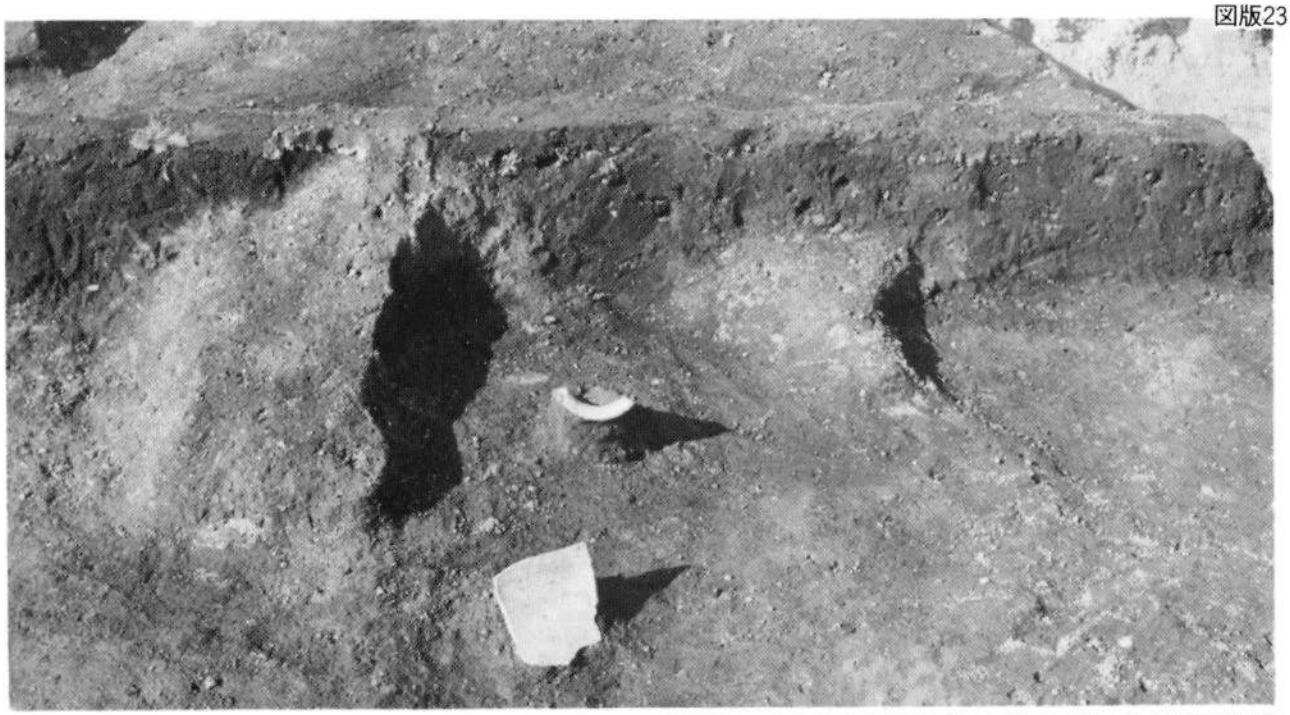


（上）　23号竪穴住居跡　　（下）　24号竪穴住居跡

図版22



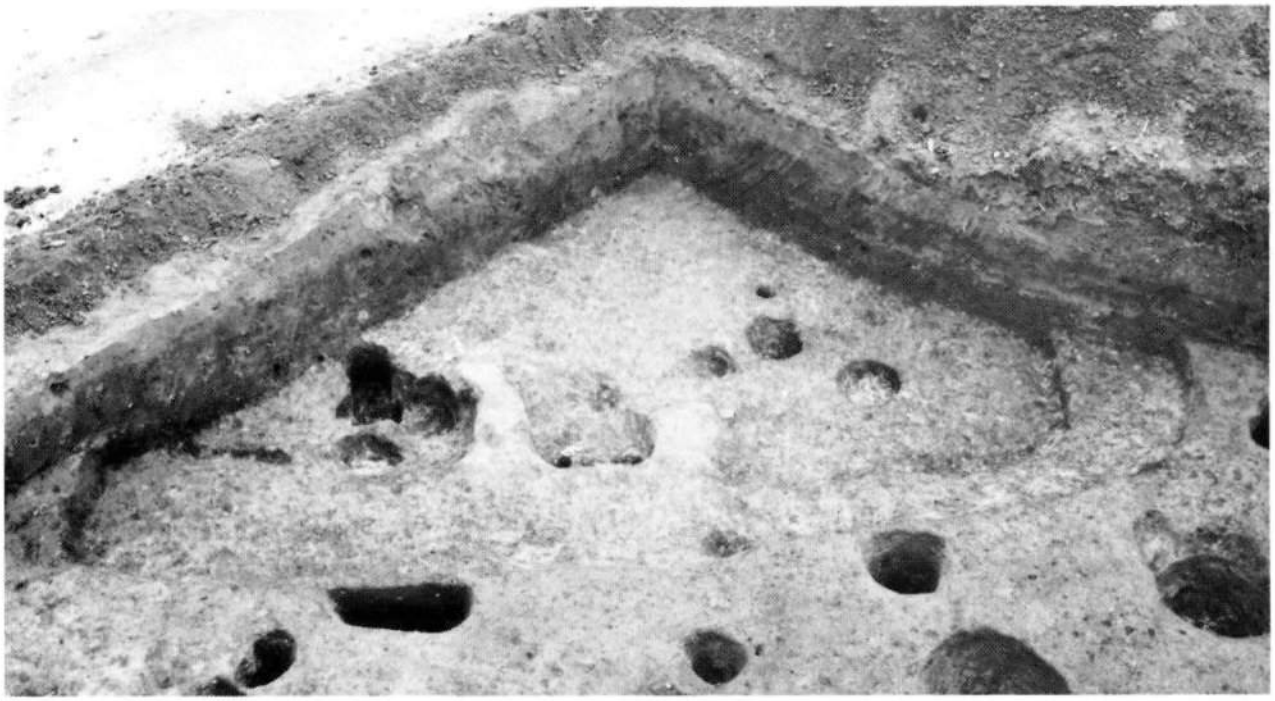
（上）　25号竪穴住居跡　　（下）　26号竪穴住居跡

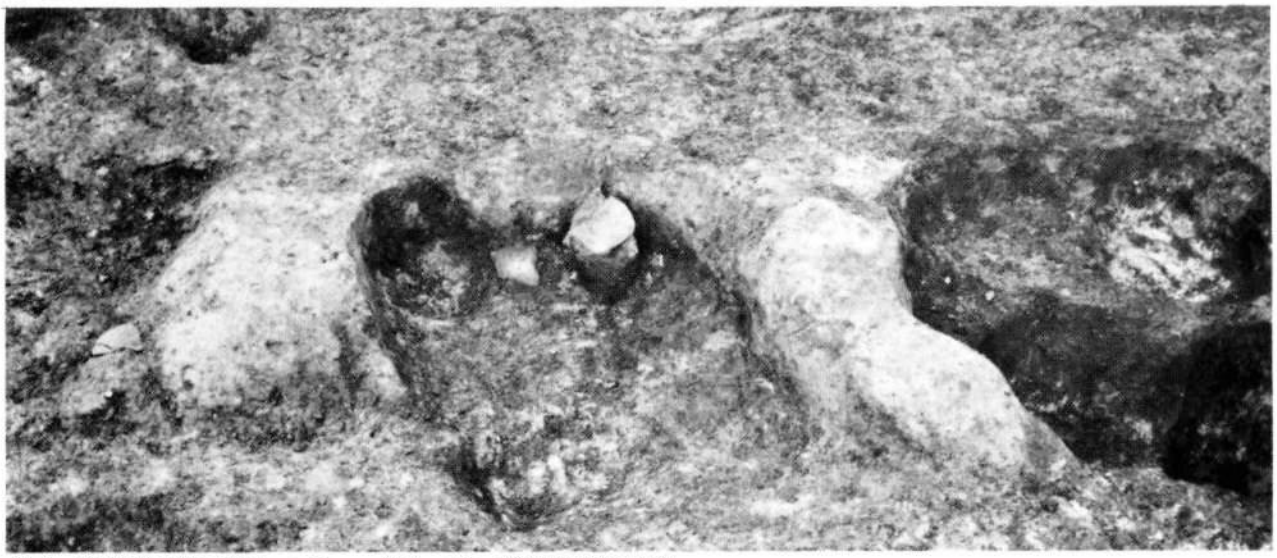


(上)　26号竪穴住居跡カマド　　(中)　26号竪穴住居跡カマド対面の土器

(下)　27～29号竪穴住居跡

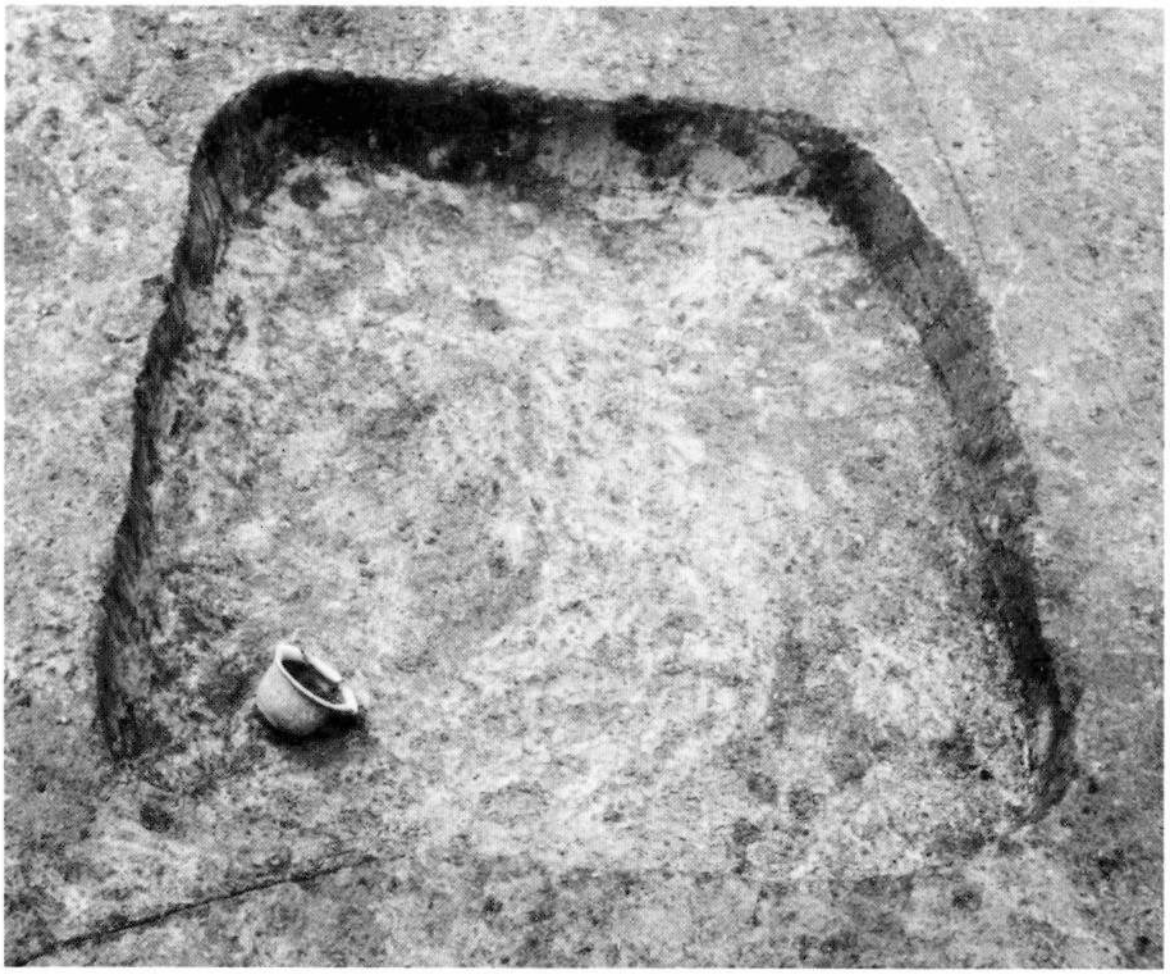
図版24



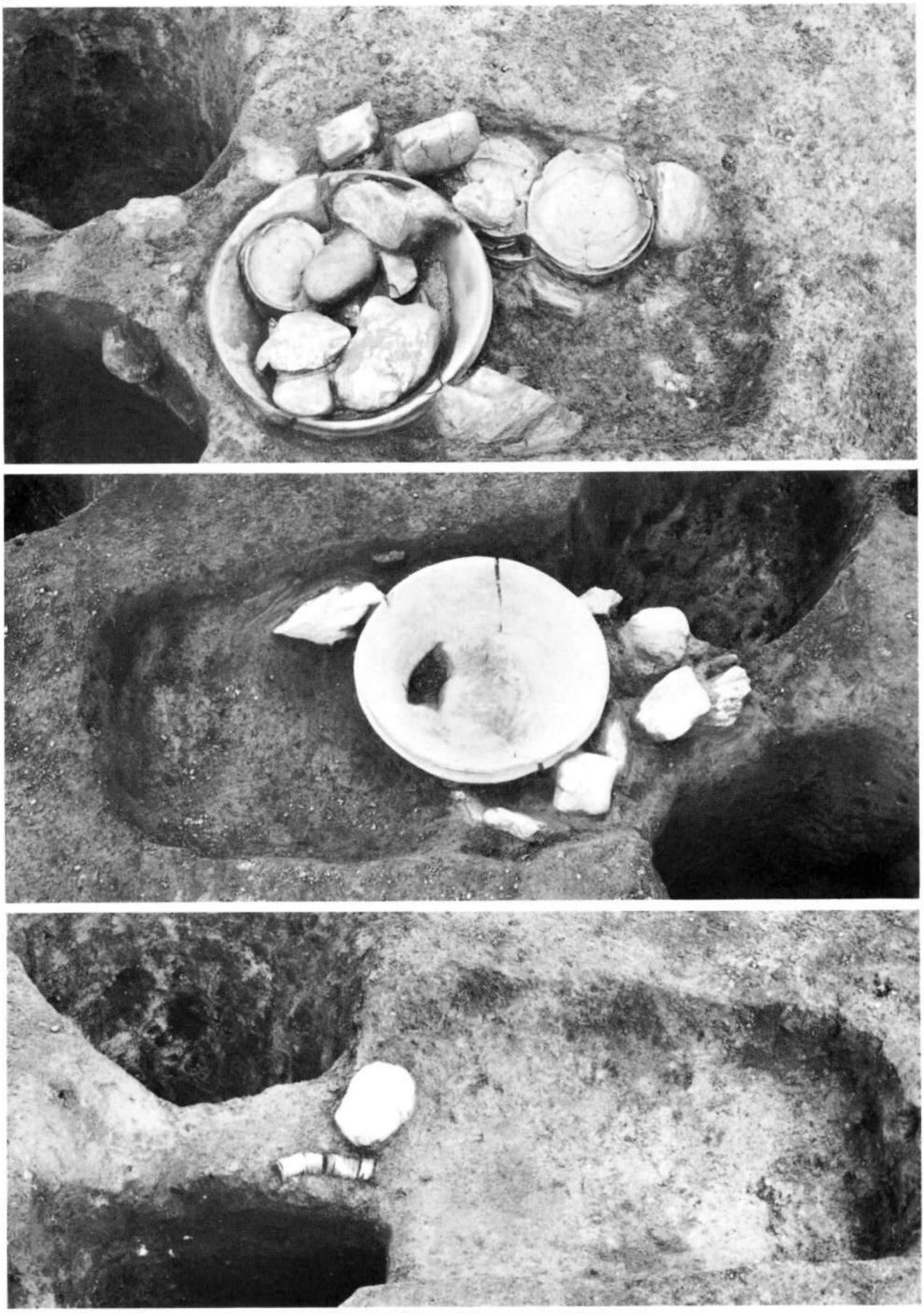


（上）　27号竪穴住居跡カマド　　（中）　28・29号竪穴住居跡

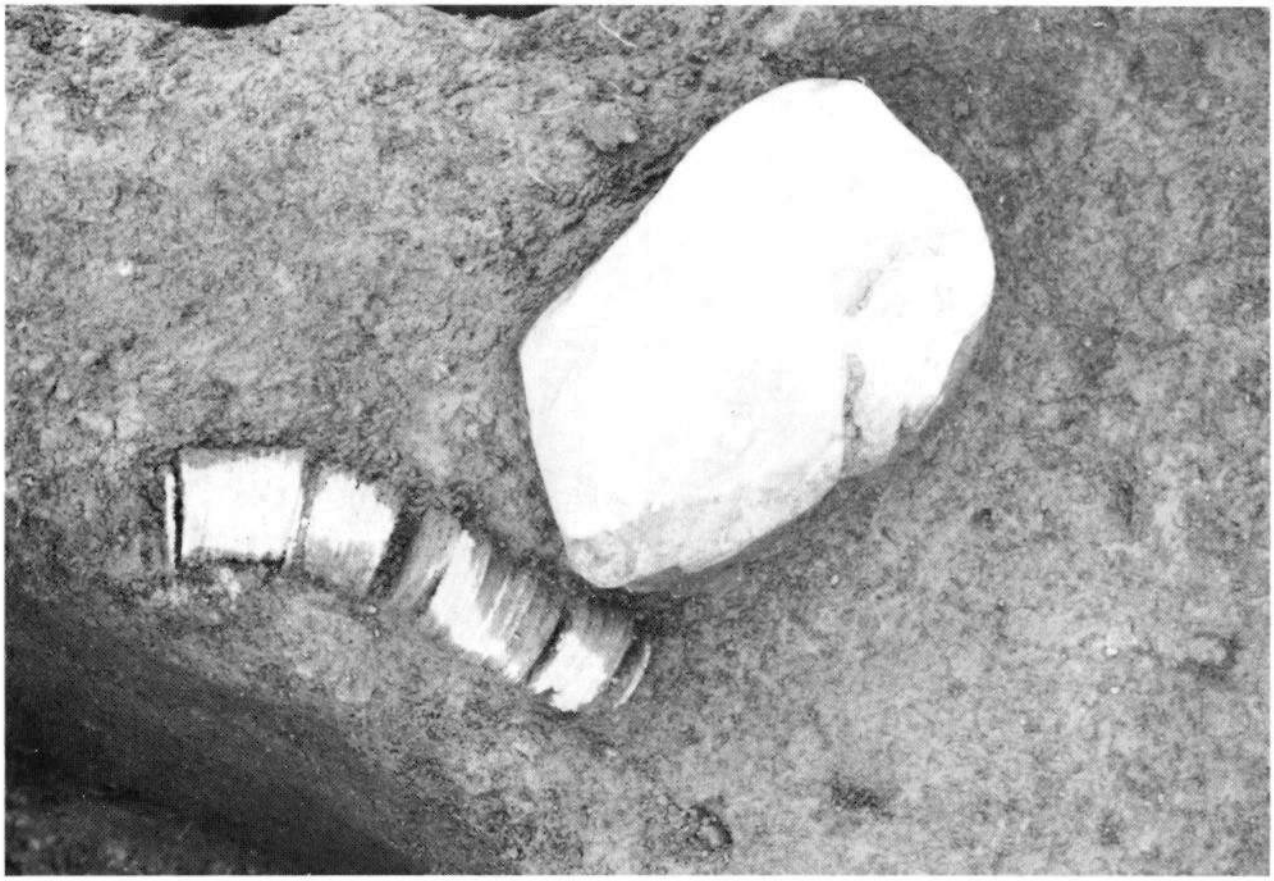
（下）　29号竪穴住居跡カマド

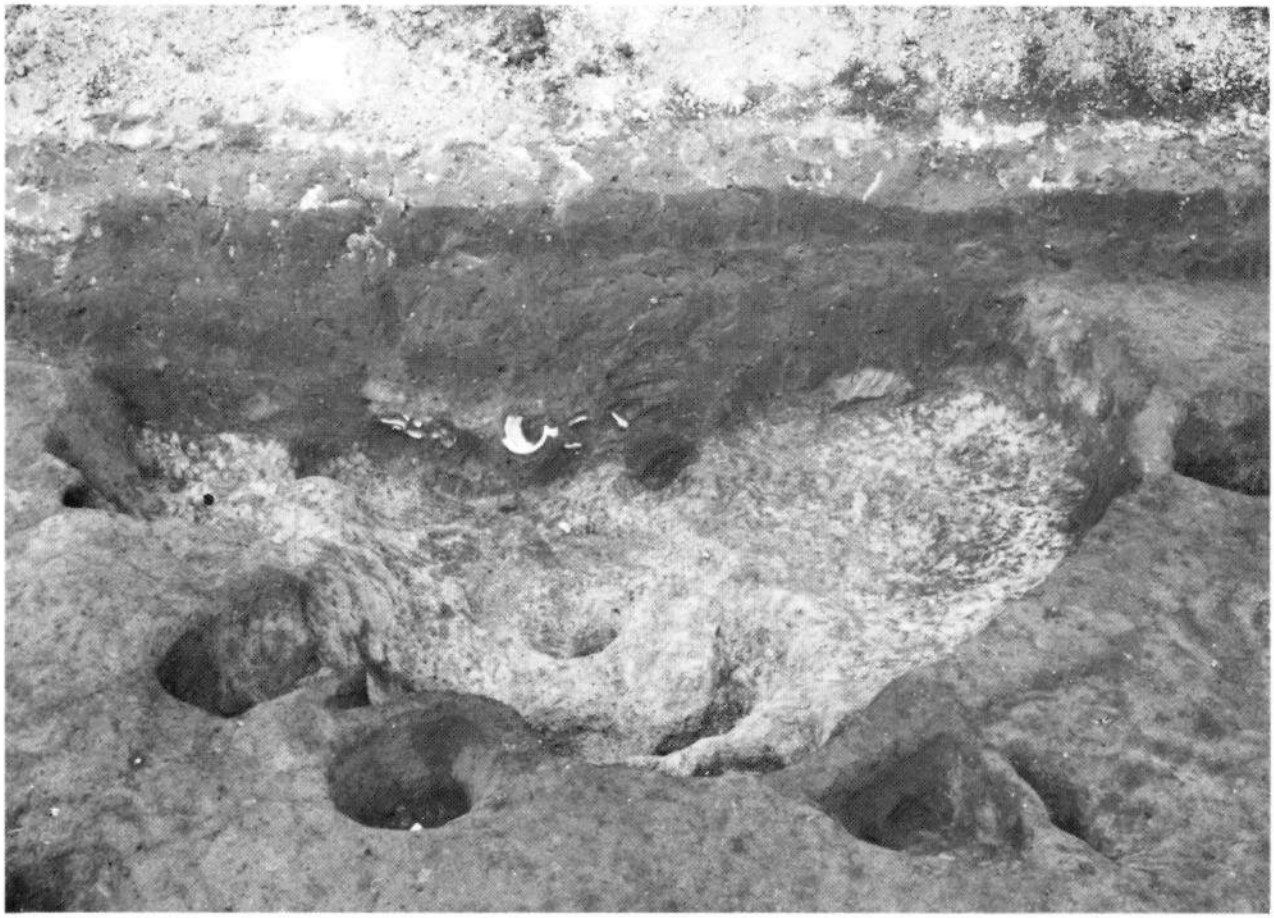


（右）3号土壙
（上）1号方形竪穴

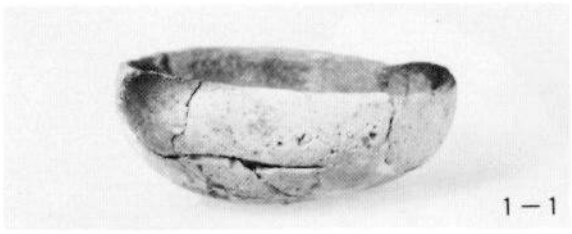


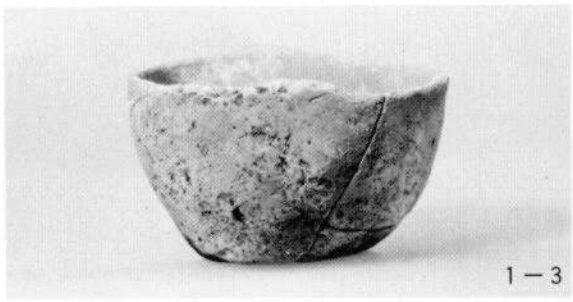
(上)　4号土壙全景　　(中)　4号土壙鉢出土状態　　(下)　4号土壙完掘全景

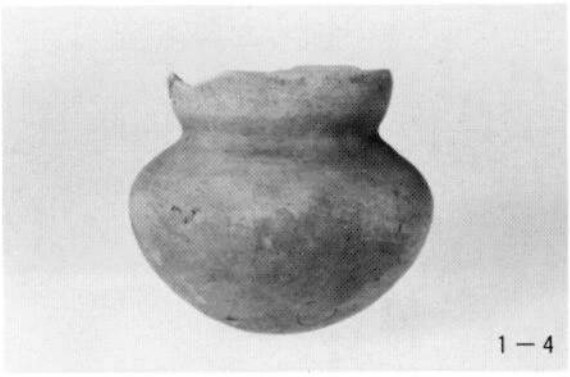


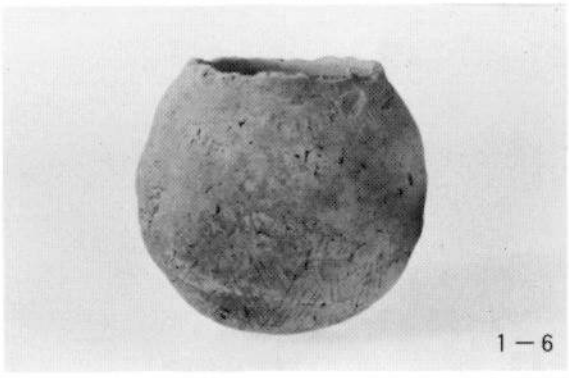


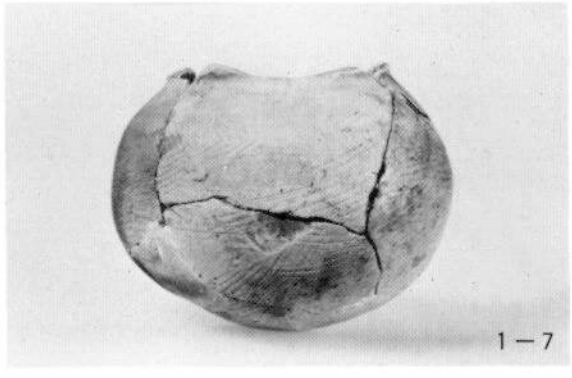
（上）　4 号土壙古銭出状態　　（下）　土壙 5

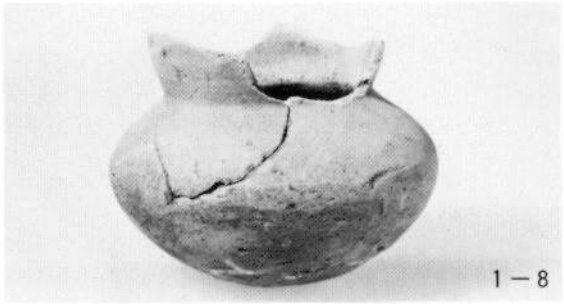

1－1

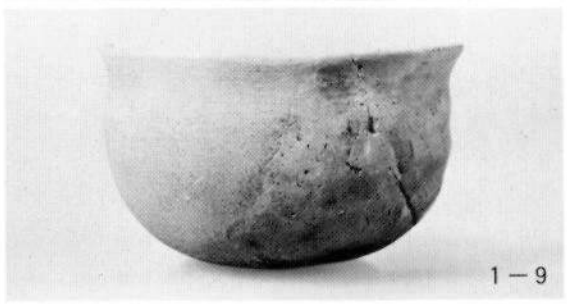

1－3

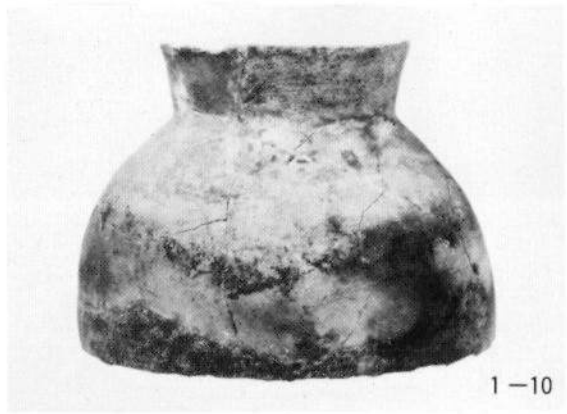

1－4

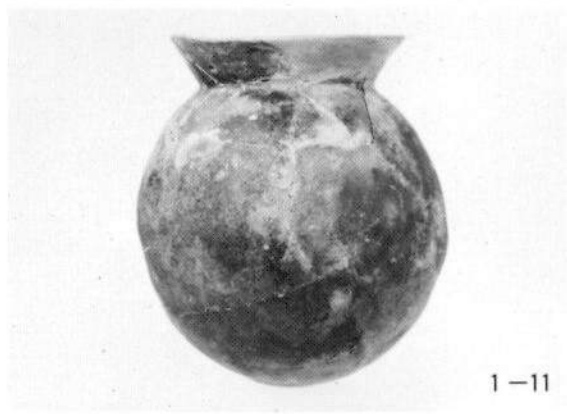

1－6

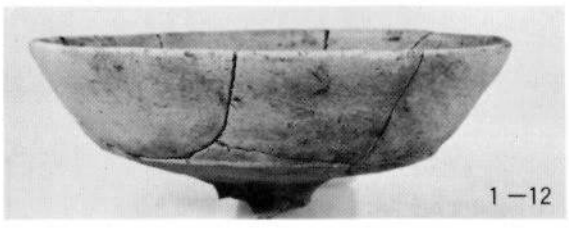

1－7


1－8


1－9


1－10


1－11


1－12

1号竪穴住居跡出土土器

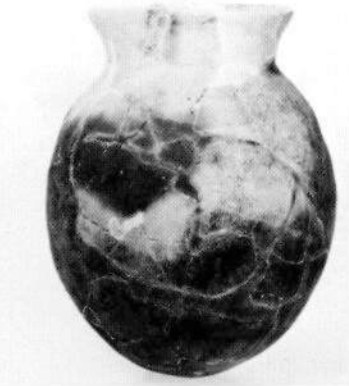
1－13

1－14

1－16

1－17

3－3


3－4

3－5

3－6

1・3号竪穴住居跡出土土器

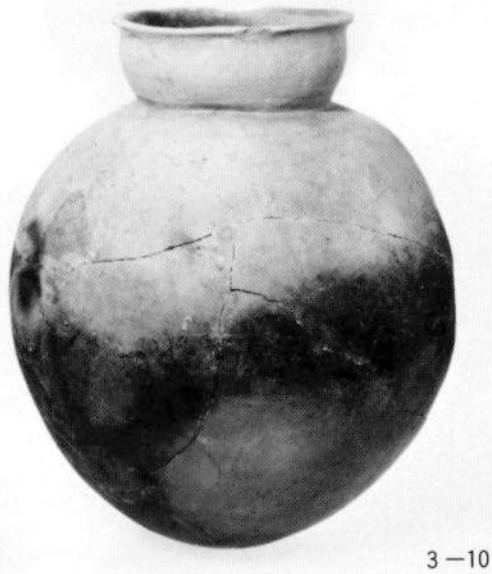
3－7

3－8

3－13

3－9

3－11


3－10

3－12

3号竪穴住居跡出土土器

3－14

3－16

3－17

3－18

3－20

3－21

3－22

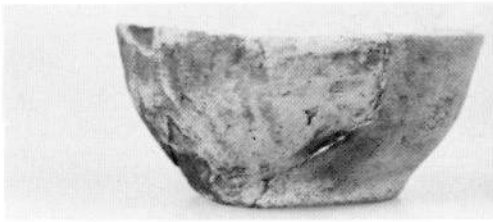
3－23

3－24

3号竪穴住居跡出土土器

3－25

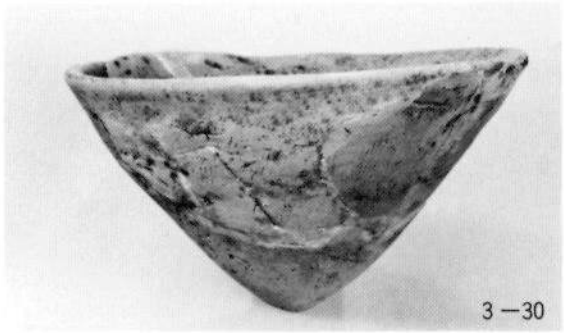
3－26

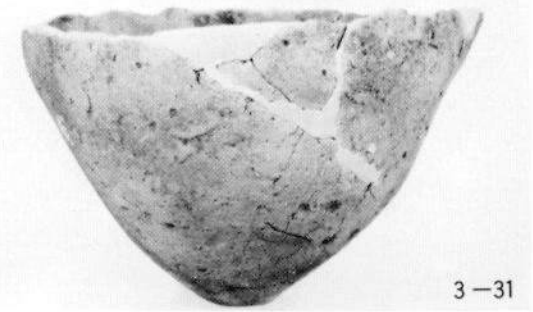

3－27

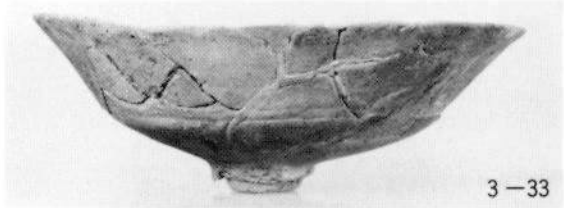
3－28

3－29

3－32


3－30


3－31


3－33

3－34

3－35

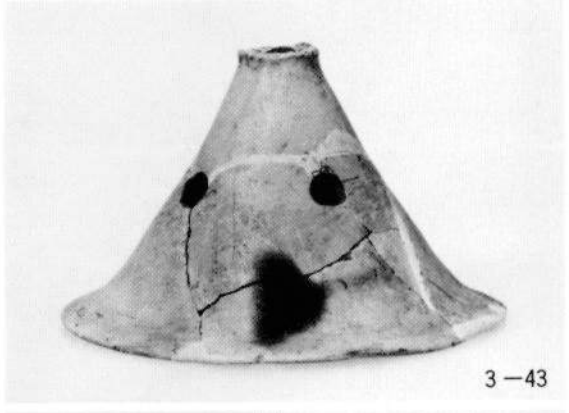
3－36

3号竪穴住居跡出土土器

3－37

3－41

3－38


3－43

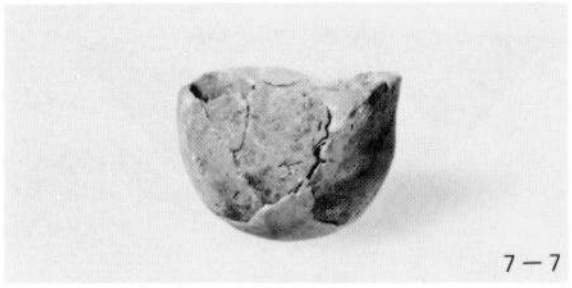
3－39

3—44

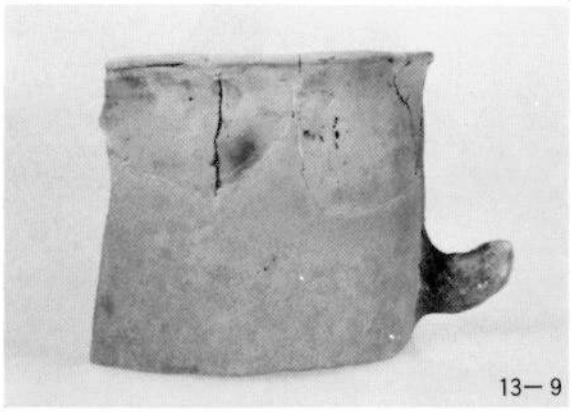
3－40

7－3

3・7号竪穴住居跡出土土器

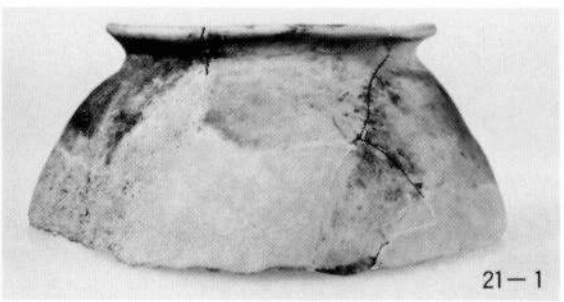

7－7

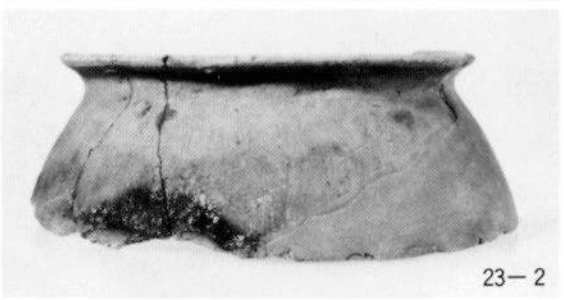
13－6

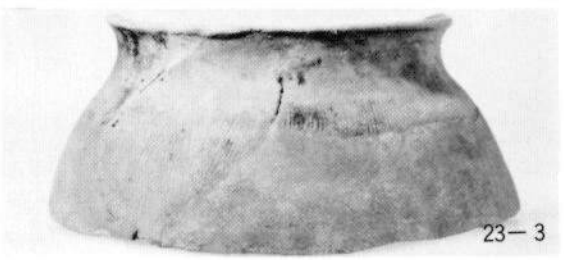

13－9

17－4

17－6


21－1


23－2

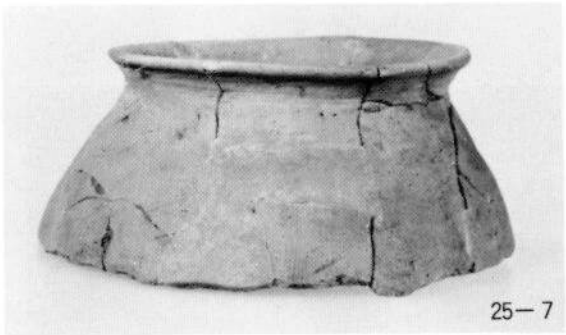

23－3

23－4

7・13・17・21・23号竪穴住居跡出土土器

25－5

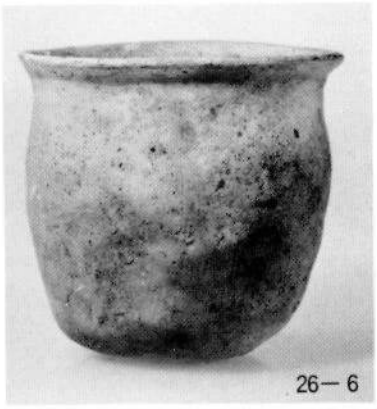
25－6

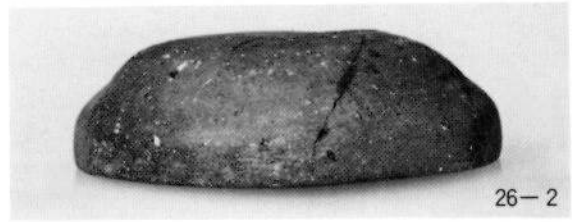

25－7

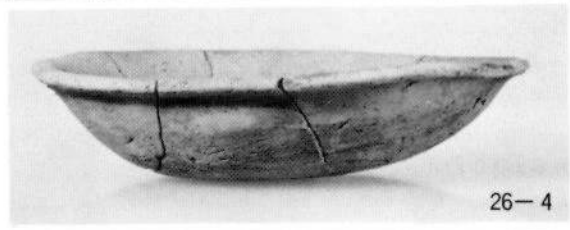
25－8

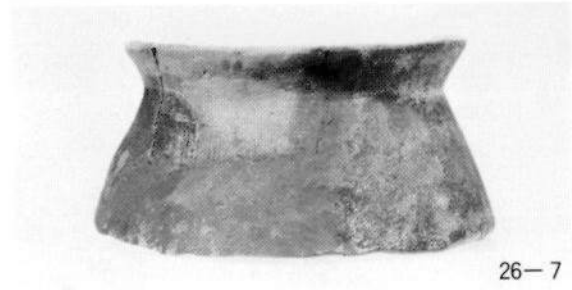
25－支脚

26－支肢


26－6


26－2


26－4

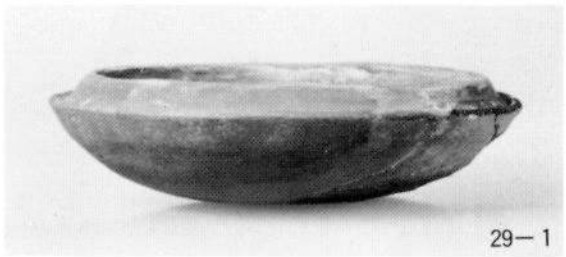

26－7

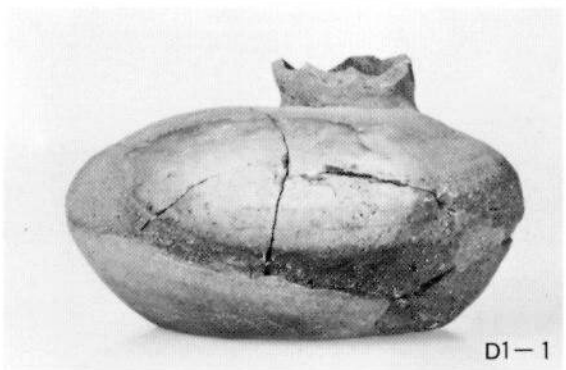
26－8

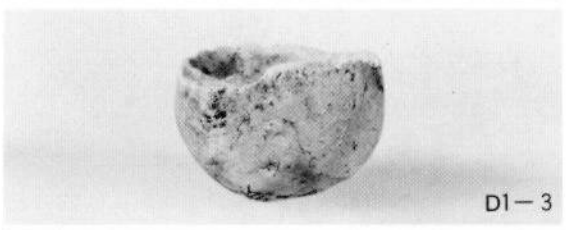
25・26号竪穴住居跡出土土器

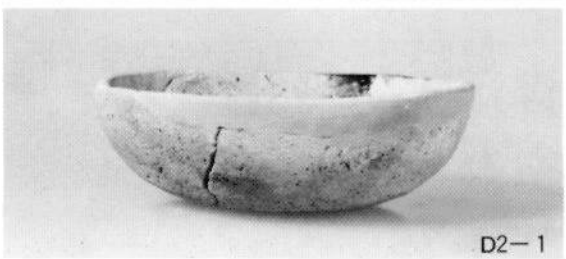
26－5

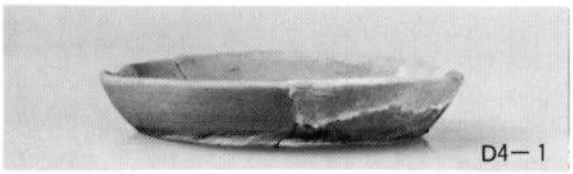
28－3

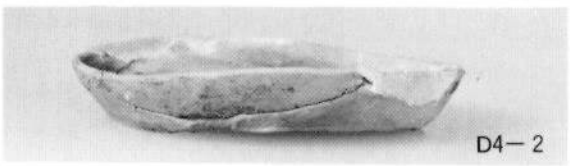

29－1

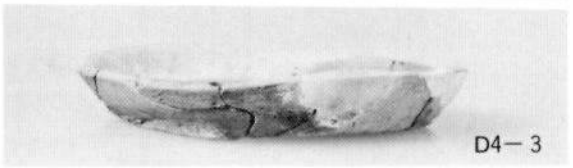

D1－1

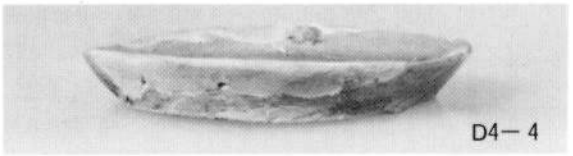

D1－3

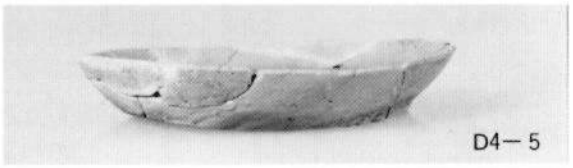

D2－1

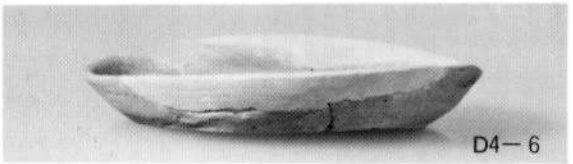

D4－1

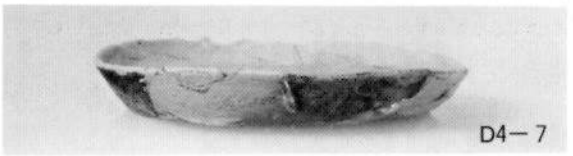

D4－2

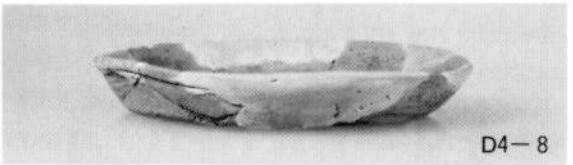

D4－3

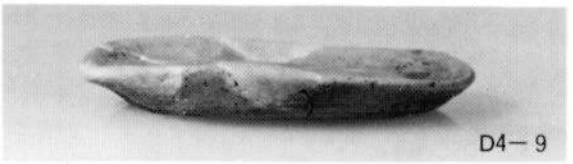

D4－4

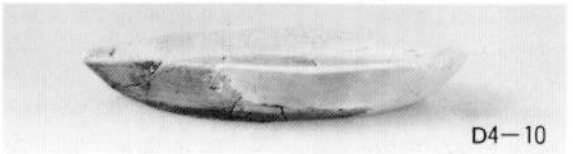

D4－5


D4－6

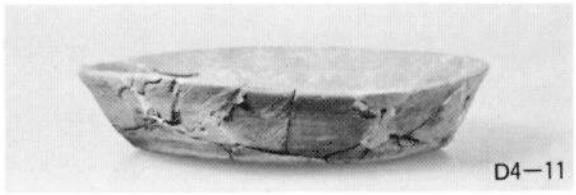

D4－7


D4－8


D4－9


D4－10

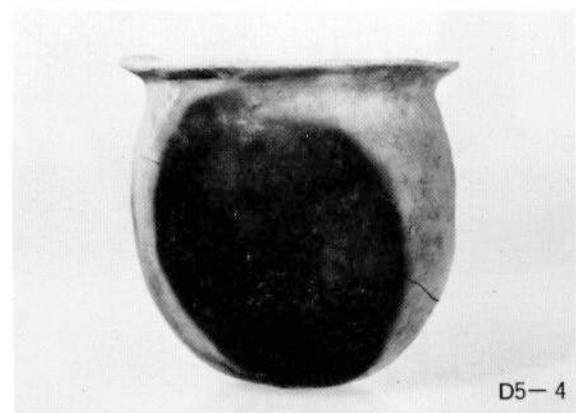
26・29号竪穴住居跡、４号土壙出土土器

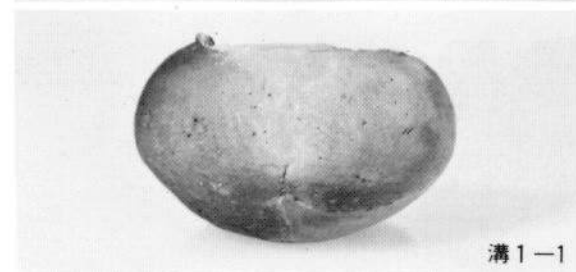

D4−11

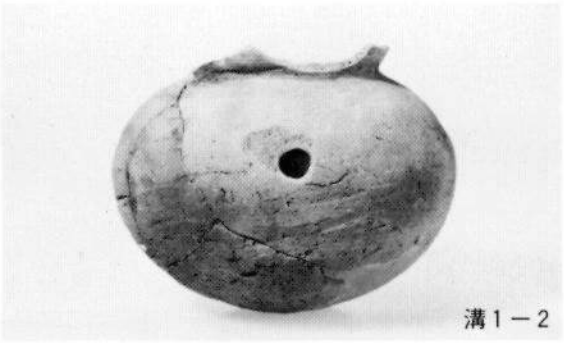
D4−12

D4−13

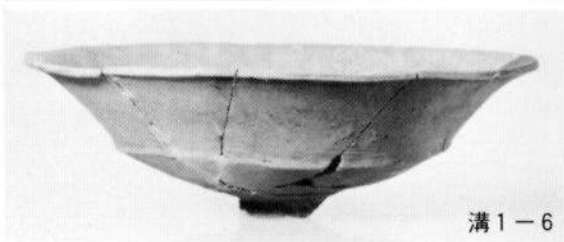
D5− 1


D5− 4


溝 1 −1

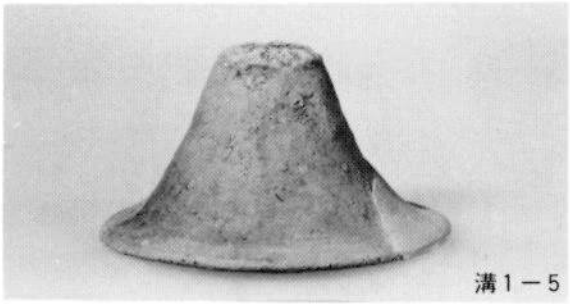

溝 1 − 2

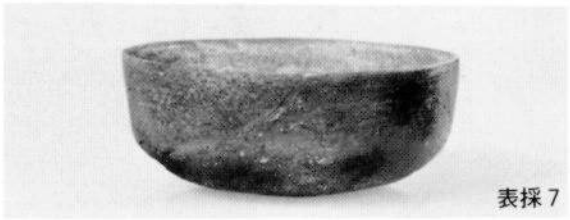
溝 1 − 4

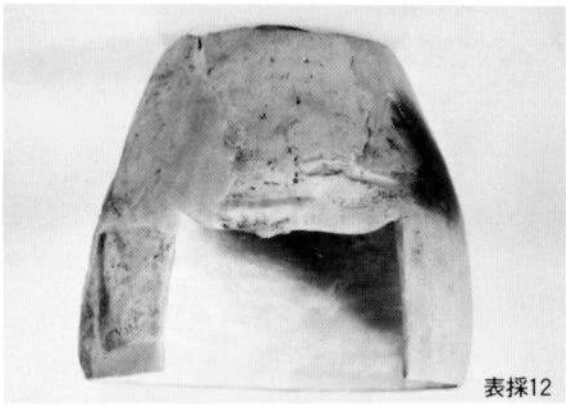

溝 1 − 6

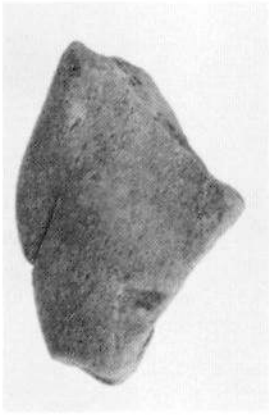
溝 1 − 8

26・29号竪穴住居跡、4号土壙・溝1出土土器

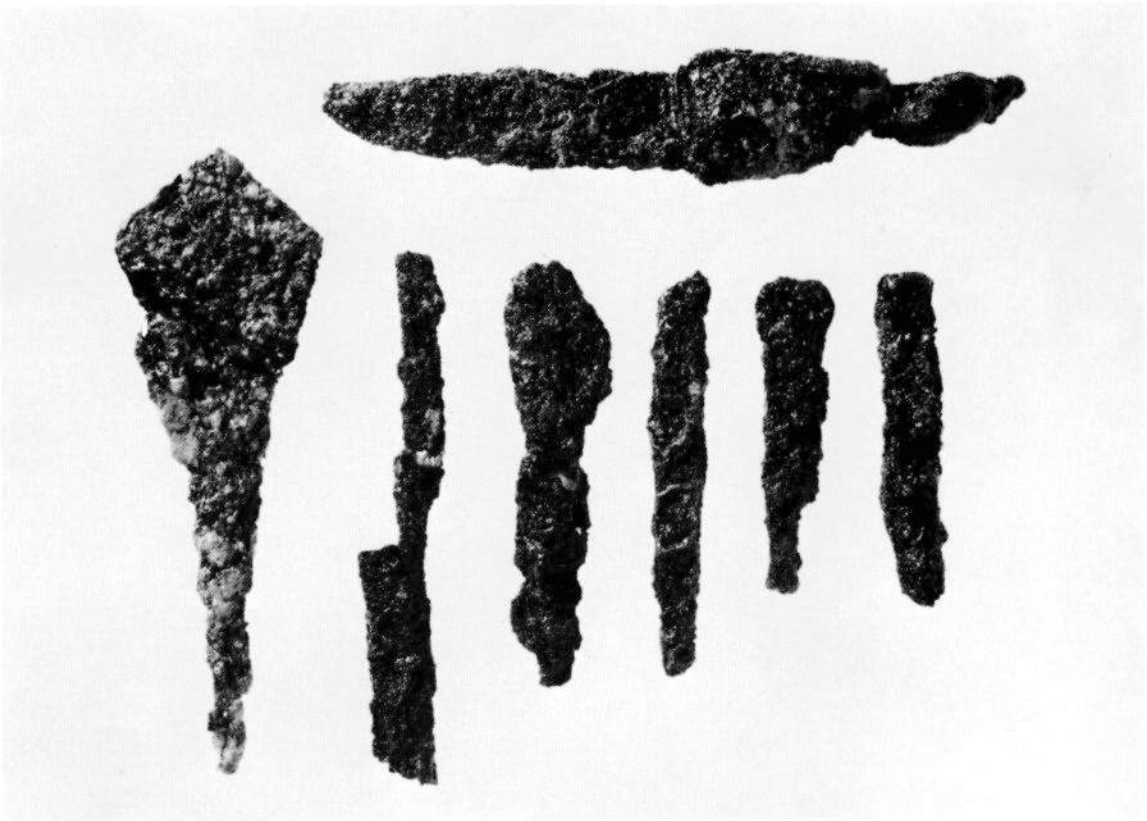


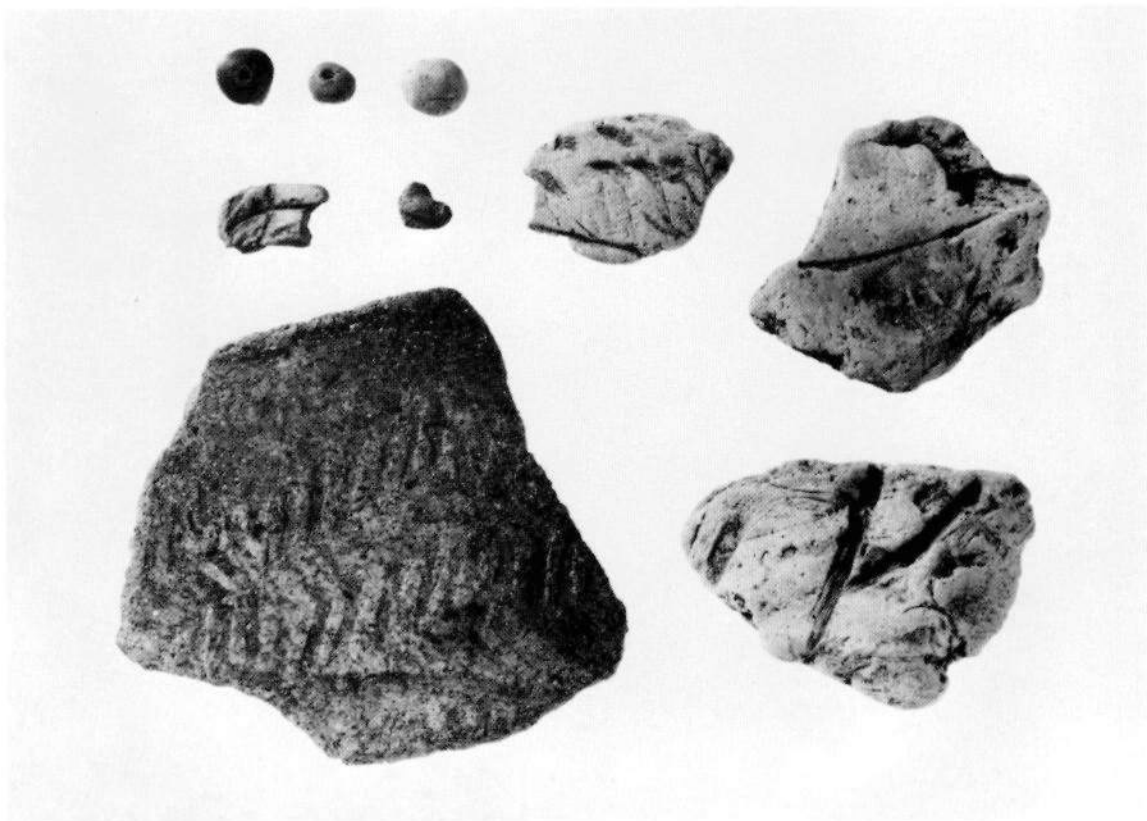






１・３号竪穴住居跡出土土器・石器、溝１・表採土器





宮原遺跡Ｂ・Ｃ地区出土鉄製品・土製品

九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告—14—

昭和63年3月31日

発行　福岡県教育委員会

福岡市博多区東公園7番7号

印刷　正光印刷株式会社

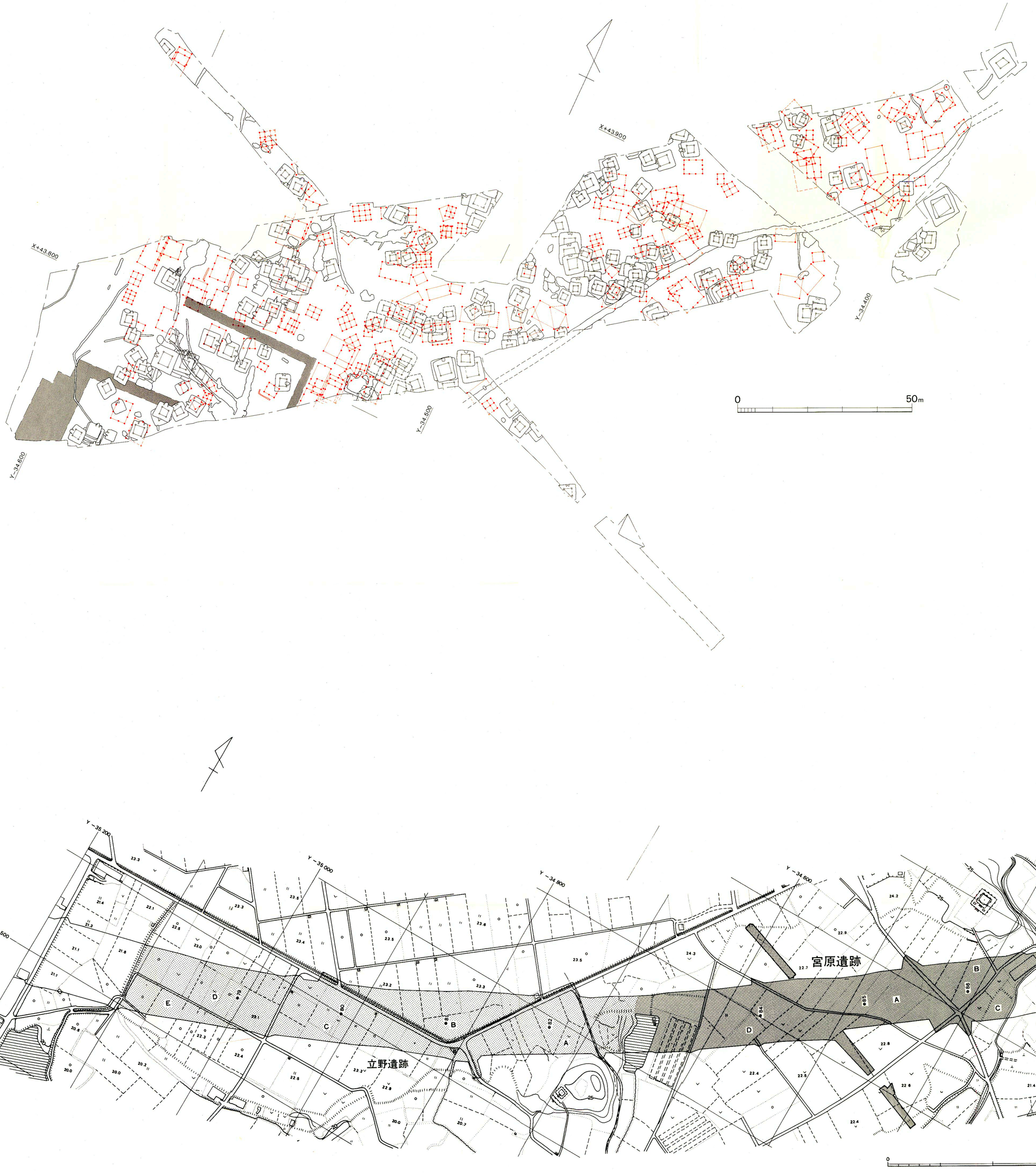
福岡市西区徳永877-1

九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告 — 14 —

付図１　宮原遺跡遺構配置図，立野・宮原遺跡路線図
（上-1/600，下-1/2,000）

付図２　宮原Ｂ・Ｃ地区全体図(1/200)

付図３　宮原Ｂ・Ｃ地区遺構配置図(1/200)



付図1　宮原遺跡遺構配置図，立野・宮原遺跡路線図（上-1／600，下-1／2,000）

付図2　宮原Ｂ・Ｃ地区全体図(1/200)

付図3　宮原Ｂ・Ｃ地区遺構配置図(1/200)